

新書太閤記

第四分冊

吉川英治

青空文庫

露のひぬ間

九死に一生を得、殿軍しんがりの任を果して帰った将士が、京都に帰りついた第一夜の望みは、「とにかく寝たい!」

それだけだった。

君前に報告を終って、退さがつて来る途中からも藤吉郎は、

「寝るのだ寝るのだ」

と、居眠りながら歩いていった。

それが、四月三十日の宵であった。翌る朝、ちよつと眼がさめたが、また寝てしまった。午ひるごろ揺り起されて、粥かゆを喰べたが、その味もまだ美味うまいと感じるだけで夢うつだった。

「また、お寝みですか」

側の者も、呆あきれ顔した。しかし、さすがに二晩目は、宵のうちに眼がさめて、大欠伸おおあくびを一つすると、それから体をもて余してしまった。

「おい、幾日か、きょうは？」

そんなことを訊いたりした。

次の間の詰侍が、

「二日でございます」

と、答えると、

「えッ、では明日は三日か」

と、驚いた顔した。

「二日か。ではもう御主君にも、お疲れは癒えたらう。……いや、心の疲れはどうかかな？」
独り言をもらしながら起ち上がって、持て余した体を室外へ運んで行った。

皇居を造営し、將軍の新館も信長が建築したものであるが、まだ信長自身は、洛中に館やかたを持つていない。上洛のたびに寺院住居である。そして幕下の諸將は、境内の末院を宿舎としていた。

藤吉郎は、その一院を出て、久しぶりこの世の美しい星を仰いだ。もう五月になるかと思ふ。

「生きているな。この体」

と、ぴちぴち意識する。何だか非常にうれしいのである。

夜中だが、信長に眼通りを願った。待つていたようである。すぐ会った。

「藤吉郎、何がうれしいのだ。非常にそちは爽やかそうに、にこにこしておるではないか」
「これが欣うれしくなくて何といたしましょう」——と、彼は答えた。

「日頃は、この生命など、有るとも持つているとも、ありがたくは覚えませんが、死中から拾ってみると、なんとも、愛いとしくて、歡よろこばしくて、生命いのちのほか、何物も要いらない気がいたします。——こうして、燭しょくの明りを見られるのも、殿のお顔を仰あがれるのも、生きていればこそと、勿体なく、ただありがたく思われまして」

「ううム……そうよのう」

「殿の御心懷は」

「残念でならぬ……」

「まだ、遠征の惨敗を、苦くるにしておられますか」

「信長、初めて、敗戦はじの辱はじと苦い味を知った」

「道理で、すこし茫然とお見うけ申されます。それがしのように、お考えなされませ。どこに、敗北の苦味くみを嘗なめないで、大事をなした者がありません。一町人の経営といえども、そんな甘やかされた生涯があるものではありません」

「そうか。そちの眼にも、信長の面おもてがそう見えたか。馬腹、一鞭むち当てねばならんな。――
藤吉郎、身仕度せい」

「えッ、身仕度して？」

「岐阜ぎふへ帰るのだ」

自分の考えは、信長を超えていると、密ひそかに誇っていると、信長の思慮はまた、自分の思慮の先へ出てくる。

急遽、岐阜の本城へ帰る必要はある。いろいろな意味で、それは急を要する。

（――が、どう帰るか？）

その方法を疑っていたが、信長は、空想家であるかと思うと、強力な意志の実行家でもある。

その晩のうちに、藤吉郎その他、わずか三百にも足らぬ小勢をひきつれ、夜どおしかけて京都から脱出してしまった。

疾風の迅はやさだ。そんな迅速な行動すら、もう誰からともなく洩洩れていた。

一行が、大津越えにかかる頃である。まだ短夜みじかよも明けない逢坂山おうさかやまの木立の上に、鉄砲を構えて、信長のすがたを待っている怪僧があつた。

不意に、駒が狂い出した。

暁ぎょうあん 闇をつんぎいて、鉄砲の音がどこかで響いたのである。

「——あッ？」

駈けつづく家臣達は、すぐ信長の身を氣遣きづかった。同時に、眼を四方に馳せて、

「曲くせもの者さがを探し出せ」

と、騒ぎ立てた。

信長は、鉄砲の音にも気づかなかつたのだらうか、もう半町も先へ駈け越している。

彼方かなたから大声で、家臣たちを振り向きながら呼んでいた。

「捨ておけ、捨ておけ」

主君の一騎のみ遙かに先へ立つてしまったので、ぜひなく下手人を打捨てて、人々の馬

群れはまた急ぎだした。

池田勝三郎、蜂屋兵庫はちやひょうこ、木下藤吉郎などが追いついて、

「殿、殿、どこもお怪我けがは？」

訊たずね合うと、信長はやや駒を緩ゆるめながら、片手の袖を高く翳かぎして示しながら、

「命めいは天にある——」

と、いった。

小さい弾痕の穴がその袖を貫いていた。

後に判明したことであるが、その折、大樹の梢から信長を狙撃した下手人は、伊勢朝熊山の円通寺の法師で、百発百中といわれる鉄砲の名手だったという。

——命は天にある！

しかし信長は、その言葉を消極的には持たない。命を天に待って安閑としてはいない。信長は知っている。——いかに今、自分の身が、天下の群雄から、嫉視され羨望されているかをである。

尾張二郡の小城から、尾濃二州へ羽翼をのばしたくらいでは、まだ世間は、多分に多寡をくくつていたであろう。

だが、中原に出て、令を京都から発したとなると、俄然、天下の諸豪は、心穏やかでないにきまつている。

なんら彼とは、宿怨も関わりもない九州の大友、島津、中国の毛利、四国の長曾我部。——遠くは北辺の上杉、伊達などに至るまでが、挙つて、反感か、邪視か、冷嘲か、いずれにしても、好意は示していない。

いや、そこらの動搖は、まだ当然といえよう。危ないのはむしろ近くの親戚などだ。甲斐の武田信玄など、もう姻戚の誼みなどは顧みていられないように、頻りと策動の気は見える。北条家も油断ならない存在である。

平時の姻戚外交などが、いかに弱い絆であるかは、江州小谷の浅井長政がもう立証している。——先ごろ北征の日、ふいに旗を立てて、朝倉義景とむすび、信長の退路を脅かした最大な敵は、北江州の浅井だった。その浅井長政には、信長の妹が嫁いでいるのである。——が、女の髪の毛で、男児の雄鬘は左右できない。

三好、松永の残党は依然として、うるさい暗闇の伏敵だし、本願寺門徒は、その宗教上の組織と宣伝力を用いて、各地に、反信長の烽火を準備している。

敵。敵。敵。

天下は挙げて信長の敵と化したかの観がある。信長が、突然、岐阜をさして帰ったのは、賢明だった。

——命は天にある。

この言葉を穿きちがえて、もし彼がもう半月も、京都に安閑としていたら、すでに帰る郷土も家もなかったかも知れない。

が、彼は無事に、岐阜城へ帰った。それから約一月余りを経た六月の半ばだった。

「宿直とのいツ。宿直の者ツ」

まだ、短夜も明けていないのに、彼の寢所から、呼び立てる声があった。稲葉山から長ながら良川がわの空をかけて、頻りと、時ほしとぎす鳥の啼く四更しこうの頃であった。

夜半よなかでも、不意に、むつくと寢床のうえに起き直つて、思いもよらぬ命令を下すことがままある。

信長の宿直衆このいしゆうたる者は、それに馴れていたが、時には油断へ水をかけられて、うろたえた態ていを殿に見られる場合がないでもない。

「はッ、——何ぞお召し？」

と、今は早かった。

「軍議をひらく。今からだ。即刻集まるように、信盛のふもりに計らえと申せ」

信長は、もう寢所を出てゆく。あわただしく、小姓や近習きんじゆの足音が追う。

夜半か、明け方か、眠たげな近習の頭にはよく分らない。まだ暗いことは確かで、外には星あきが鮮あきらかだ。

「ただ今、燭あかりともを灯します。お待ちください」

近習は、狼狽していう。が信長はもう裸体になって、湯殿にはいつていた。そして旺さかんに水を浴び、体を拭きこすつている。

ここよりは、表方の狼狽はもつとひどい。城内には、佐久間信盛、坂井右近、木下藤吉郎などいたが、その他の諸将は多く城下を固めていた。それへ、召しの使いを飛ばす。一方、広間を浄きよめ、燭を配らせる。——いや、そう指図する自身がまだ顔も洗わずにいたのに気づいたりする。

諸将は、出揃つた。

信長の爽やかな面おもてに、白い燭が映はえて見える。彼は、一同を見わたしながら唇くちを開いた。黎明れいめいと共に、自分が出馬する決心である。目標は、小谷の浅井長政を討つにある。——この席は軍議の席であるが、その根本の目的に、異論や諫かんし止はゆるさぬ。ただ、その作戦上の範囲内で、何か、献策があらば聞こう。

こう信長が決心のほどを闡せんめい明すると、諸将はみな、何か心を強く搏うたれたようにしんとしてしまった。

小谷の浅井長政には、信長の妹のお市いちの方が嫁とついでいる。そればかりでなく、信長は、妹婿むこの長政を、隣邦の抑えとする政策以上に、心から眼をかけていた。日頃、長政をよく

愛している信長の真情を、諸将はみな知っていた。

京都へも、よく長政を招いて、見物させ、また、

(これは、小谷の妹^{むすこ}智でござる)

と、將軍家の周囲を始め、会う人ごとに紹介^{ひきあわ}せたりして、長政も、自分と共に引き上げていた。

信長の近習が、信長の世話ばかりやいていると、

(妹^{むすこ}智も、見てやつてくれよ)

と、いう程であった。

朝倉攻めの遠征の際、信長が、その妹^{むすこ}智の小谷城へは、何の沙汰もせず立ったのは、由来、浅井と朝倉の両家は、織田家と結ぶ以前から、不侵略国として親密な関係にあるので、妹^{むすこ}智の立場を思い、むしろ好意的に、中立国としてその位置を保たせてやるためであった。

ところが。

敵国深くへはいった信長の、征^{せい}旅^{りょ}の苦境を知ると、果然その妹^{むすこ}智は、鉾^{ほこ}を逆^{さか}しまにして、信長の背後を脅^{おび}かし、織田軍をして、あの退敗を余儀なくさせたのである。

先頃、京都から帰った信長の胸には、その妹智の処置が考えられていたに違いない。

折も折、ゆうべ深更に、信長の手へ密報がはいった。鯰江なますえの六角承禎じょうていが、観音寺城の残党や門徒僧を用いて、土民一揆の火の手を諸所に挙げ、その混乱に乗じて、小谷の浅井勢と呼応して一挙に信長を屈伏させてみせると、露骨に活動しだしているという知らせなのであった。

その軍議が終ると、信長は、諸將をつれて本丸の庭へ出た。そして実証を指さして見せた。

遠い闇に、一揆いっきの火は、旺さかんに空を赤くしていた。それは、単なる土民の一揆でないことを、信長は、諸將に説き明かして、

「いぎ、立とう！」
と、促うながした。

空はようやく明けかけていた。

それが、十九日のことだった。

次の日には。

信長以下、岐阜を発した兵馬は、近江おうみに侵入していた。

いたる所の門徒一揆を破りながら、佐々木六角と浅井長政との連環を、次々に、踏みつぶしていた。そして、二十一日にはもう、浅井の本城小谷へ迫っていた。小谷の出城、横山城を囲んでいたのである。

疾風電撃。

——信長勢が。

と、敵が耳に眼に知る時は、もう潰乱かいらんされていた。備える間などないし、崩れて、次陣を布くし違いとまもなかった。

大雨の雨脚あまあしが、雲と共に、野を掃いてゆくようだった。

けれど、その席卷せっけんぶりにも、限りがあった。横山城に当たると、ここは越前と江北の要路で、敵には、重要な地点だった。さすがに、頑として、手ごたえがある。

おおのぎとさのかみ
大野木土佐守は、朝倉家のうちでも名だたる驍将ぎやうしょうだ。その大野木勢に、野村肥後の精銳たすが扶けて、

「陥おとせるものなら陥してみよ」

と、その堅壘けんるいを誇っていた。

時は、六月の大暑。

転戦また転戦をかさねて来た寄手の勢は、眼鼻もわからぬほど黒くなっていた。すると、二十二日の頃、

「大挙、越前の朝倉勢が、山越えして、小谷の救援にやってくる！」
との報がはいった。

次の、詳報に依ると、

——越前の援軍は、総勢一万余騎、朝倉孫三郎景健かげたけを主将として、魚住左衛門、小林端周軒はしゅうけん、黒坂備中守などの錚々そうそうたる将僚をそろえ、その兵卒らは声を合わせて、

こんど大寄越ゆるなら

故郷のみやげになに持とか

近江ざらしよ

あの君に。

否とよ

われの持つものは

鑓やりの穂先に織田が首

織田信長が茶筌首ちやせんくび。

と、誰が陣中で作ったか、俗歌の節をつけて謡いながら、旗鼓堂々、大寄山をこえ、野村、三田村方面をさして来るとのことだった。

横山城は、所詮、急激に陥ちそうもない。——退路を遮断されたら、ふたたび越前の木目峠の死地に立つ。

「龍ヶ鼻まで退け」

信長は、急に退いて、ここで対策を練り直した。

ちようどその日だった。

信長が、心のうちに、待ちかねた徳川家康が、五千の兵を率いて来援に着いたのは。

よほど欣しかったとみえ、信長はその時陣頭で、黒の薄い陣羽織に、塗りの大笠をい
ただき、左に扇を持ち、右手に杖を持って、何か指揮していたが、

「おおッ」

と、家康のすがたへ、遠くからその扇を振って迎えた。

この気強い味方を迎えると、信長は自身、案内に立って、眼前の戦場の地形、敵の布陣、越前の援軍の情勢などを説明して、

「これに処す御意見は」

と、たずねた。

家康は、言下に、

「姉川を挟んで、野戦に勝敗を決するしかありませんまい」

と、答えた。

信長の思うところもそれだった。家康は、自身、先陣を承ろうと進んで希望した。信長は謝して、

「それにしては、お手勢だけでは少ない。わが直属の兵を割さいて、参加させよう」と、いった。

「いや、大兵は要りません。……左様、然らば御意にあまえて、稲葉一鉄いなばいつてつの一隊を拝借しましょうか」

家康は、そう答えた。

家康の眼に選ばれた稲葉一鉄は、武門の誉れと、手兵一千をさげて、三河勢に合体した。信長はまた、家康に、

「これは、源氏にゆかりのある一槍やです。源家の末裔まつえいたるあなたに贈ろう」と、「為朝ためとも」という銘のある鎧やを彼に与えた。

織田軍には、徳川家の援軍が来て加わった。

浅井方にもまた、朝倉勢の加勢がそこまで来ていた。

藤吉郎は、横山攻めには遅れて、後から参陣した。

彼は、浅井方のかりやすじよう苅安城、たけくらべ長比（じよう長競）城、ふわごおり不破郡松尾山のちようていけん長亭軒の城

など、味方にとって、最も怖るべき後方の諸城を陥し、前線と岐阜との通路と、その安全を確保するために、遅れたのであった。

それらの厄介な敵は、多くがごうしゆう江州と美濃の境にばんきよ蟠踞していた。

苅安城は、坂田郡上平寺、たけくらべ長比の城も同郡のちようきゆうじ長久寺村、ちようていけん長亭軒の城は、不

破郡松尾山にあった。

信長の目的地とは、かけ離れた後方だし、ちようじよう山岳重疊な横道である。

そんなものを、一城一城、気にかけて相手にしていたら、目的の小谷城へかか懸るには、半年の余も費やしてしまうであろう。

で、大野木山の関門や、そこらのじようさい城砦には、藤吉郎の手勢を残して、信長の本軍は、しや遮二無二、敵方の本城地へ肉薄して来たものだった。

だから信長は、

「本軍が、小谷を陥すまでは、小勢なりとも、あの男のこと、後方は固く抑えているだろう」

と、安心していた。

ところが、その藤吉郎の木下勢は、信長が龍ヶ鼻へ退陣してから程なく、長浜を立つて、これへ参加し、すぐ信長を営中に訪ねて、

「願わくば、次の決戦には、木下勢に先鋒の第一陣を仰せつけられますように」

と、願い出たので、信長は驚くよりも、後方の敵を、どう処置して来たか、疑った。

藤吉郎は、それについては、

「苅安、長比、長亭軒の城など——一括げに、はや落去いたし、敵將樋口三郎兵衛以下、一名も余さず、お味方に降し、それがしが手勢のうちに従えて参りましたれば、

はや後には御懸念なく」

と、答え、

「つぶさなことは、御陣のお暇をみて、徒然のおなぐさみにでも、いずれお話し申し上げましょう」

と、のみで、その折には、語らなかつた。

徳川家康をはじめ、諸将老臣が居合わせていたし、それを語れば、自然、自分の手功てがらばなしとなるので、わざと、避けたものと見て、信長も深くは訊かなかつた。

ただ彼の、これから先の大決戦に第一陣をといて願ねがいに対しては、

「すでに、その第一陣は、徳川殿に囁しやくしてある。そちは、第四番につけ」

と、信長はいった。

藤吉郎は、家康の倅しあわせを羨望せんぼうしたが、素直すがに退つて、自分の人数を、総軍第四番手に備え立てた。

陣営の前を、きれいな河が流れていた。姉川の支流である。一夜、営内で快眠した藤吉郎は、まだ兵も眠っているうちに、一人その河べりへ来て、顔を洗っていた。

「殿。お早いことですな」

後ろで、誰かいう。

「お……。竹中半兵衛か。そちも早いなあ。寝たか、ゆうべは」

「よく寝ました」

「体よは快よいかな」

「ありがたいぞんじます。さてさて、戦いくさは病人によく効きく名薬と思おもいました」

「はて。異なことを」

「されば、平常は病を宥いたわられて、季節変り、朝夕の寒暑にも、立ちどころに咳せきを増し、よく熱など出す弱体が、この炎暑に、粗食をつづけ、兵や軍馬と共に歩み、夜は露草の上に臥しながら……どうでしょう、かえって、この通りな健康でござる。半兵衛を病人あつかいになさるるは、戦場では、この後御無用にねがいまする」

「なるほど。ムム、なるほど」

藤吉郎は、一茎けいの螢ほたる草ぐさを摘つんで、指先に弄もてあそんでいた。花に寄せて、誰しを偲しのんでいるのだらうか。母か、寧ね子ねか。——彼の多感多情は、彼の軍師竹中半兵衛が、誰よりもよく知っていた。

きんせん
琴線

半兵衛の眼に気づかれては、見ツともない気でもしたのだらうか、藤吉郎は、弄もんでいた螢草を、指頭からぼんと捨てて、

「大戦が迫ったな」

「迫りました」

しばらく、視野を敵地へ向けたまま佇たたずんでいたが、また何を思い出したか、

「於おゆうは、もう岐阜ぎふへ着いたろうか」

と、呟つぶやいた。

「長浜からでは、まだまだ岐阜へは帰り着きません」

「途中、無事であればよい。——女子おなごの旅、わけて戦乱の中だ、気にかかるの」

半兵衛は、答えなかつた。

於おゆうは、自分の妹であるばかりでなく、大戦を前にして、殿ぼんのうの煩惱ぼんのうにも困つたもの

だと、苦にが々にがしく思えたからであろう。

その於おゆうは、長浜から帰したとある。知らぬ者が聞けば、陣中へ女子とみなを伴ともなつたと誹そしら

れるにちがいない。

——が、そんな事情ではなかつたのである。さもなければ半兵衛が許すはずはない。

許していながらも、半兵衛の苦々しく思うのは、主君が、彼女の帰り途まで、気にかけているからだつた。

まだ、その報告は、藤吉郎から信長の耳にも入れてないが、陣中へ愛人を呼んだ理由を

釈明するためにも——追っつけ審つぶさに語らなければならぬであろう。

で、話は少し後にもどるが、彼が佳麗かれいな愛人のゆう女を、陣中へ召し寄せた——彼らしくもない、また、彼らしくもある事情をここで明らさまにしておこう。

不破ふわの関せきは、関所がなくても、地形そのものが、すでに天然の関門をなしている。

従つて、ここを占めれば、湖南一帯から美濃の平野を扼やくし、京都や北国路や東海道への交通を抑えることになるので、討つても掃はらつても、敵たる者は、当然、すぐこの地方に充血してくる。

刈安かりやすじょう城。

長比たけくらべじょう城。

鎌刃かまはじょう城。

松尾山の城。

みな敵の牙きばだ。ひとつひとつ孤立したものでない。齒のごとく連環れんかんしている。

伊吹いぶきの麓ふもとに、藤吉郎の手勢は陣取つていた。まだ一将校にすぎない彼に、大兵を預けられるわけもない。微々たる兵数だ。

それをもつて、この地方一円の敵を抑え、小谷へ進撃している味方の本軍に、後ろの憂いのないようにしていなければならぬ。

それだけでも重任であるのに、藤吉郎は、それだけで甘んじていられなかった。

「半兵衛、もう一度、行ってみてくれい」

「だめです。彼も侍です。たとえそれがしが、百夜通つても、節義を変える武士ではありません」

「そちは、敵に惚れ過ぎている」

「いや、長年の友ですから、彼の心を知っています」

「心の友なら、心をもつて、説き伏せられぬこともあるまい」

「が、城門を固く閉じ、何度訪れても、会わないからだめです」

「では、絶望か」

「まず、あの男ばかりは」

「待て待て。およそ絶望ということとは、きょうまでおれの生きて来た道にはなかつた」

藤吉郎と、その軍師竹中半兵衛とが、帷幕の裡で、こんな密談を交わしていたことがあつてから、数日の後であつた。

半兵衛の弟竹中久作が、ひとりの旅姿の美人を、馬の背から抱き降ろして、陣中へ導いて来た。

折からその日、垂井たるいの附近で、敵の一小隊と衝突して帰って来た兵たちが、黒い汗を拭いながら、兵糧を頬ばったり、手傷を縛ったりしている中を、時ならぬ花の香りをこぼして、美しい女性が通って行ったので、彼らは大きな眼をして見送った。——もしそれが、半兵衛の妹であり、主君の想い人でなければ、わあアツと、囃はやし立てて、せめてその袂たもとでも触れて騒いだかも知れなかった。

竹中久作は、兄の半兵衛重治しげはるが木下家に随身後、召し出されて、共に藤吉郎に仕えていた者である。

半兵衛より四つ年下の好青年で、兄は病弱だが、彼は健康そのものだった。

こんどの合戦にも、

(残念だなあ。なぜ木下軍は、お味方の後うしろまき詰などに廻されたのか。信長様に従ついて先鋒うけたまわを承っているならば、浅井家第一の豪傑といわれている敵の遠藤喜左衛門の首は、必ず俺の物なのに)

と、髀肉ひにくを嘆たんじて、兄にも人にも洩はらしているほど、武勇にかけても、人に負おれぬ自信

はあつた。

その久作が、数日前に、

（その方が参つて、火急、岐阜表から於ゆうを召し連れて来い）

と、主君に命じられたので、主君の命とはいいながら、

（何だつて、女などを、陣中まで！）

と、憤懣ふんまんにたえない顔して、渋々使いに赴おもむいたものである。——於ゆうは自分の妹で

あるが、いつのまにか主君の寵ちゆうをうけていることを知っているだけに、なおさら、腹立たしかつたし、戦友に間まが悪かつた。

——今。

その於ゆうをつれて、ようやく、炎天の旅から帰つて来た久作は、営中へかかると、兄上は？ と、居所を兵にたずねて、兄半兵衛の休息とまりしている幕の外とばりから、

「兄上、兄上ツ。ゆう殿を召し連れ、ただ今久作、岐阜表より立ち帰りました。君前へは、兄上よりよしなに！」

と、呶鳴り捨てたまま、妹の於ゆうを置き放して、立ち去ってしまった。

半兵衛は、幕の内から立ち出でて、さすがに、才才と、懐かしげな眼をした。於ゆうも、

病弱な兄のつつがない姿を見て、

「……お兄さま」

と、寄り添った。

「何のお召しでございましょうか、久作兄様にお訊ねしても、おら知らんと、顔を振るばかり……なにも分らずに参りましたが」

「驚いたも無理はない。ちと其女そなたに重い役目がいつつけられる御様子だ。——と、申しても、この兄も共に致すこと、そう案じるに及ばん」

と、慰なぐさめてから、

「何はともあれ、御挨拶に出たがよからう。——殿のお座所は、すぐ後ろの幕とばり——」
と、振り向いた。

藤吉郎のことを云い出されると、彼女は、にわかに顔を紅あからめた。——半兵衛は、主君としていつているのに——妹のそうした羞恥はじらいを見ると、場所がらのせいかな、何か淫みだりがましい気がして、もう優しいことばをかける気もしなくなった。

「ゆう殿、唯今、申し上げて参る程に、これにてお待ちなされ」

わざと、他人行儀にいつて、藤吉郎のいる巨おおきな松と松とに張り繞めぐらした陣幕のうちへ

はいつて行つたが、間もなく、戻つて来て、

「お待ちなされておらるる。——あれへお通りあるがよい」と、指さした。

兄も一緒に来てくれるのかと思つてしていると、雑兵を呼んで何かいいつけたりなどしてかまつてくれない。

彼女は、一人、怖々おすおすと陣幕の路地を通つて行つた。

すると、於ゆうが来たために、退けられた人々であろう。蜂須賀彦右衛門はちすかひこえもんや堀尾茂助ほりおもすけや、福島市松、加藤虎之助などの小姓たちまでが、相次いで、そこから四方へ出て行つた。

何かその人々へ、すまないような気もして、彼女はなお、幕の蔭たがずに佇たんでいた。——と、藤吉郎は幕を払つて、

「才才。於ゆうか。なぜ黙つて、そんな所に立つておる。さあ、はいれ、はいれ」

と、手を把とつて中へ抱え入れた。

何の憚りはばかも屈託くつたくも彼にはない。藤吉郎は、彼女のやや小麦色に陽焦ひやけた顔をのぞきこんで、

「よう来たな。……道中、敵におそわれなかつたか。留守中は、淋しいことであろう。体

も、別条ないか」

と、まったく甘い。

用ありげな小姓の一人が、何気なく、ひよいと幕を上げてはいりかけたが、小姓でさえ、顔を赤くして、あわてて引退ひきさがってしまった。

「於ゆう。それへ休め」

「はい」

「半兵衛より仔細は聞いたであろうな」

「まだ何も聞いてはおりませぬ。すぐこれへ伺いましたので」

「久作からは」

「なおさら一言も……」

「では、わしから告げよう。この戦場へ、はるばる、そなたを呼び迎えたは、そなたに、敵方へ使いに立つてもらいたいたためじや。今——、不破郡松尾山の長亭軒の城に立て籠ふわごおりつておる浅井の臣、樋口三郎兵衛と、お許もとら兄きょうだい妹とは、幼少から親しい間がらと聞いたゆえに」

と、藤吉郎は、於ゆうが戦争の駆引などにはうとい女性であるだけに、分りよく噛みく

だいて話した。

この地方に、敵方の城は、要所要所に幾つもあるが、要するに、牙城がじょうは長亭軒の一城と見てよい。

その親齒さえ抜けば、後の齒はひとりでにぐらついて来る。

ところが、あれは陥おちない。この兵力の五倍をもって、二十日以上、多大な犠牲を払つても、陥おちるかどうか。

なぜならば、その干城かんじょうの大事を知つて、浅井長政も、逸いぢはやく、鎌刃城かまはじょうにいた樋口三郎兵衛を、長亭軒の城のほうへ移して守らせているからである。

三郎兵衛は、稀に見る智謀の将だ。武勇にかけても鳴っている。その人物は、以前から誼よしみの深い半兵衛重治しげはるが珍重している通りである。

だから、ここにあるただ一つの策は、友の半兵衛からよく利害を説いて、罅ちぬらずして彼を降伏させるしかない。しかし、彼もさる者、寄手の弱点は、充分見ぬいている。

先頃から、半兵衛を説客として、何度も使いに立ててみたが、それゆえに、樋口三郎兵衛は、頑がんとして会わない。

——たとえば日頃は親友であろうと、敵味方と戦場にわかれた以上、会う必要は毫ごうもない

!

そう城門の扉ごしにいわれるのみで、もう五、六遍も追い返された。

さて、そこである。

女には除外例がある。いかなる猛者もさも優しく扱う気になる。わけて殺伐な戦場ほどなお、効果は大きい。

「——ひとつ、某女そなたが兄半兵衛と共に参つて、その頑かたくなな敵の城門を叩いてみるのだ。よいかの。真心をこめて訪れるのだ。……そして、樋口三郎兵衛が、あわれと心をうごかして、城門をひらき、半兵衛を迎え入れてくれたら、もう事は半ば成就したようなもの。――

――後は半兵衛の胸三寸にまかせておけば足る」

こう話し終つて、藤吉郎は、

「どうじゃ、やさしい役目であろうが」

と、微笑んだ。

於ゆうは、謹んで、

「よく分かりました。一心になつて致して参りまする」

と、命をうけた。

「戦場の兵糧というものは、まだ喰べたことがあるまいが、馳走して遣わそう。——これ、これ、時刻はちと早いが、ゆうに夜食をつかわせ」

と、幕の外へ呶鳴った。

わずか一刻ほどしか、彼女は藤吉郎の側に休んでいなかった。

兄のいる床几場へ戻って、身躰みをつくろい、兄の半兵衛も、具足を脱つて、涼やかな平服に着かえるのを待ち——それから間もなく、ふたたび陣所を出て行った。

半兵衛と、ただ二人きりであった。

半兵衛も駒に跨がり、彼女も駒に乗って、水色の被衣をかぶっていた。戦場に行く旅人にしては、優雅な姿であり過ぎた。

垂井の宿場あたりで陽が暮れた。——それから伊吹山の裾野を、悠々と、駒を打たせて行った。——ちようど大きな夏の月が、関ヶ原の彼方からさし昇って、道は昼より明るく、伊吹風は、秋のように爽やかだった。

伊吹は東。松尾山は西。

不破の街道を挟んで、関ヶ村から山ふところへはいつてゆく。

ズドン！

と、鉄砲の音が訝しだました。

半兵衛は、駒をとめて、

「於ゆうは。驚いたであろ」

と、わざと、微笑した。

「いいえ」

於ゆうは、強がりではなく、そう愕おどろいた様子もない。——間もなく、人の蹠音が駈けてくる。

「止れツ」

二人の駒の前後に、四、五本の槍がキラキラ月影に並んだ。

半兵衛は、馬上のまま、

「それがし達兄きょうだい妹まいは、御城代樋口三郎兵衛どのへお会いしに参る者でござる。御苦労ながら御案内ねがいたい」

「御姓名は」

「木下藤吉郎の家中、竹中半兵衛重治、妹のゆう」

と、明晰めいせきにいった。

ここらを見張っていた一小隊の兵たちは、そう聞くと、顔を見合わせた。また、於ゆうの清麗な姿を見まもった。

若い女性を連れているし、平服である。仔細はあるまいと、一部の兵が先に立った。——もう長亭軒の城はすぐ近いのである。

祖父谷おじや、平井山、松尾の三山のふところになっている。城じょう 砦うさぎの規模は小さいが天てん嶮けんである。

城門をそこに見ると、

「御大儀」

と、送ってくれた兵たちに礼をいって、半兵衛は、まず先に城門をたたいた。

「——城内の方へ物申す。それがしどもは、御城代樋口殿と、年来親しい間あきらがらの者でござる。幾度となく、訪れ申せど、遂に、一度のお会いも得ず、諦あきらめかねて、こよいまた、余りの月のよさに、ついつい思わずまたこれまで、訪れてござる。——恐れ入るが、お取次ぎねがいたい」

大声でなければ届かない。頑丈な鉄扉てつびは、いくら呶鳴なげついても答えがないので、半兵衛は、長々とそういった。

それでも——

ややしばらくは、何の返辞もなかった。半兵衛はまた、同じような意味のことばを繰り返した。すると、城門越しに、矢倉の上から、敵の顔が見えて、覗き下ろしながら云った。

「御無用ツ。御無用。——何度参られても、御城代のお答えは、同じものでござる。お帰んなさい」

「あいや」

半兵衛は振り仰いで、

「いつもは、木下家の家臣としてでござったが、こよいは、一半兵衛重治として、妹のゆうと共に、月を賞でつつ、浮々と、お立ち寄り申したのでござる。——それがしの知る樋口三郎兵衛どのは、武勇の質であるばかりでなく、風雅も解し、あわれも知る優しい武士と承知しているが、さては早、木下勢に取り詰められ、月を見る心のゆとりも、友と語らう心情も、失われてしまわれたか。……さるにては是非もないが」

独り嘆くようにいつていと、

「だまれツ」

と、狭間はざまでべつな声がした。

「おお、三郎兵衛殿」

仰ぐと、上の顔は、

「やよ、半兵衛殿。いくら訪ねて来ても、むだであるぞ。会う要はない。帰れツ……」

「——おじ様ツ、おじ様。ゆうでございまする」

「ヤ、ゆう殿。女の身で、何しにこの戦場へ」

「余りに、兄の心の可憐しさに……。そして、おじ様も、いつお討死か知れぬと聞き、お別れに参りました」

ここは、半兵衛兄きょうだい妹いの生地、菩提山ぼだいざんの城からも程近い。——同じ不破郡の内である。

樋口三郎兵衛は、半兵衛兄妹を、幼い頃から知っていた。今、於ゆうから、小父さま——と、呼びかけられると、その幼い頃の彼女や半兵衛を思い出した。

「城門を開けて、二人を、本丸の書院に通せ」

遂に、彼も我がを折った。

三郎兵衛は、具足を解いて、平服となつてから書院へ出、兄妹ふたりを迎えた。

会うとすぐ、於ゆうに、

「大きゆうなられたな。木下家の奥に仕えていると聞いたが、早いものよ。わしが手に抱いて頼ずりすると、この髯ひげづら面を痛がつて、顔を搔いたりしたもののじゃが……」

と、沁しみ々しみいった。そして、

「半兵衛どのにも、度々のお訪ねに、無情つれなく門を閉じたまま、無礼を重ねたが、戦国のならい、お互い武門に生きる者の辛いところじゃ。……察しられよ」

と、やがて、小やかな膳さそを調べて、これが一生の別れとなるかも知れぬ。月つきを肴さかなに、一い献酌つこんくもうと、打ち寛うくつろいだ。

明らかに、三郎兵衛は、討死を覚悟しているものと見られた。彼には、主君の浅井が、到底、信長に抗しきれぬものとは考えていなかった。ここ半月や一月は支えても、やがて最期の日は近いと、観念くわんねんしているふうであった。

「いや、お互い武士ほど儂はかないものはありません。——が、その儂い中に、確かくと、生きて来ただけの足跡を残さねば、武士としても真まことの武士ならず、人間としてはなおさら口惜くちやくしい限りです。名はお互いに、汚けがしたくないものですね」

半兵衛は、杯をふくみながら云った。——それはまことに、三郎兵衛の現在の心境に打ッてつけた言葉であつたから、

「そうだ。……そうだとも」

三郎兵衛も、今は、以前の友と変わらず、すっかり胸襟きょうきんをひらいて、杯をかさねた。

「於ゆう。琴ことなど弾ひいて、興を添えぬか」

兄のすすめに、

「はい」

ゆうは、小侍を顧みて、一面の筑紫琴つくしごとをかりうけ、月明りの映さす月の間から、琴を弾だんじた。

「……………」

敵と味方。——二人の友は、耳をすまして聞いていた。

短檠たんけいの灯は、いつか風に消えていたが、三郎兵衛のさし俯向うつむいたままの面おもてに、白い月

影が、よけい白く映さしていた。

嫋じょうじょう々と、絃げんは鳴る。哀々と、彼女は歌う。

その八絃の音は、ここにある者の心ばかりでなく、城内七百の強者つわものばらの耳へも腸はらわたへも鳴って行つたとみえて、長亭軒の城、松尾山の松籟しょうらいは、一瞬、しいんと静寂しじまに冴えて、ただ琴の音と、琴の歌があるばかりだった。

「……………」

三郎兵衛の瘦せた頬に、数行の涙が、月に光つて見えた。

琴の音が休むと、

「時に、三郎兵衛どの、あなたがお護りしておられる御城主の二郎丸様は、当年、お幾歳になられますか」

と、半兵衛が訊ねた。

「お十二になられた。おいたわしや、父の殿、堀ほり遠江とおとうみ守のかみ様には、先年亡くなられ、今はまた、十二の御幼少で、この城に立たて籠こもられ、御運のほども……」

と、三郎兵衛は、遂に、懐紙を取り出して、落涙をつつんだ。

半兵衛は、屹ぎつと、坐り直して、

「あなたは不忠者だ！」

と、にわかに声を励ました。

「なに、拙者を、不忠者と」

「———そうです。いかに武将のお子でも、まだお十二の幼君では、世の中のどういふものか、戦いくさは何のためにしているものか、義も節も、お胸には分っておられまい。———それを、

飽くまで、この一城に拠つて、籠城討死を遂げようとなさるのは、臣下たるあなた方だけの意志で、自分の名のため、節義のために、何も知らぬ幼君をも、犠牲にしてしまおうという酷い我意だ。——半兵衛には、そういう自我のお心を、武士道とは、お見上げ申されぬ。むしろ穿きちがえたる武士道と嘆かれる。……三郎兵衛どの、それでも御身は、忠義のつもりでおられるのか」

あねがわ
姉川

理には負けないと思う。

理論に対する理論ならいくらでもいい立てられる。

けれど、理と共に、心情を打って来る言葉には、樋口三郎兵衛も抗し得ない気がした。

——半兵衛重治の友情から溢れ出る理に対して、彼は小賢しく云い返す言葉を知らなかつた。

「弱年のそれがしが、貴殿にこう申すなど、釈迦へ説法にも等しゅうござるが……」

半兵衛は、三郎兵衛が、首うな垂れたまま聞いているので、むしろこう一步、謙遜し

ないではすまない気がした。

「——義もあまり過ぎたるは邪義とか、誰かの書に見えました。昔から主君のためわが子を殺した例しは幾多ありますが、わが義を固執するために、主君を亡い主家を滅亡させた例しは聞きません。——貴殿の忠義は、いわば過ぎたるものといえましょう。また、あなたの炯眼をもつて、この小城に、わずか七百の兵を擁し、織田家の二万五千の大軍に対し、最後まで守りきれぬなどとお考えにはならないでしょう。なおまた、今の混沌たる時代の帰趨が、何人によつて、処理され、統一され、やがて泰平が建て直されるか——そうした時の潮の行く先も、お見えになつていない理はあるまいとも存ぜられません。——そうしてみれば、この際、主家を保ち、幼君の一生を託し、七百の生命を救うには、いかにいたしたらよいか、あなたのお胸一つで、キツぱりと、御方針はすぐつくことかと思いますが」

「いや、忝い。……仰せはお道理、この三郎兵衛とても、幾夜、考えぬことではござらぬ。——しかし、巷間の伝えるところでは、信長殿というお方は、御氣質峻烈、敵といえ、捕虜降参人と対しても、仮借はあらで、打首、本領追ひ払いなど、随分おきびしいとのことである。——万一、城を開いてから、主家も立たず、幼君の御先途も覚束な

いとあつては、三郎兵衛の名や一身などさておいて、武門の嗤われ草、悔いても嘆いても、及ぶことではありませんまい」

「その儀なれば、お心やすく思し召されい。重治が一命にかけ、主人藤吉郎秀吉様から、きつと、堀家の安泰と、二郎丸君の御助命は、誓紙をいただいて進ぜまする」

「……………」

半兵衛の眉宇を見つめたまま、樋口三郎兵衛はややしばし黙然としていたが、静かに、その眼を閉じると、はふり落つる涙と共に手をつかえて、

「おねがい申す。……卑怯とお蔑みもあれ。ただ、御友情に」

と、いった。

その翌々日。

樋口三郎兵衛は、長亭軒の城を開き、幼主二郎丸の手をひいて、藤吉郎の軍門へ、降人として訪れた。

藤吉郎はまた、その孤君、その義臣を、篤く迎えて、

「安んぜられよ」

と、将来までを保証した。

三郎兵衛の降伏を知ると、苅安かりやすの城も、長比たけくらべ城も、みな血を見ずに落城した。

——藤吉郎はそこで長浜まで軍をすすめ、於ゆうはそこから岐阜へ帰して、兵馬の装備を革あらためると、主君の信長のいる前線の地、姉川へ、

「この大戦に洩れては」

と、急ぎに急いで、昨日、ここに着陣、望みどおり信長の本軍と合したわけだった。

姉川の水は三尺、その広い河幅も、脛すねをもつて涉わたることができるが、その清冽せいれつは、夏なお身を切るように冷たくて、水源の東浅井の谿けい谷こくを思わせる。

元亀げんき元年、六月二十八日、まだ夜の明けないうちであつた。

信長の総軍二万三千。

それに徳川勢の約六千。

龍ヶ鼻から進んで、姉川の岸に備え立てた。

前夜。——夜半よなか頃から。

敵の浅井、朝倉の聯合軍一万八千の兵も、徐々と、大寄山おおよせやまから行動を起して、姉川の左岸に当る野村、三田村あたりの民家を楯たてに、戦機うかがを窺うかがっていた。

瀬の水音ばかり、夜はまだ明けない。

「康政」

榎原康政は、暗い水際から、

「はッ」

と、主君家康のすがたを暁闇の岸にふりかえった。

「ひしひしと、敵は、対岸のすぐ水際まで襲せているな」

「霧で——よう分りませぬが、馬のいななきが、微かに」

「下流は」

「とんと心配がわかりませぬ」

「天運、いずれに幸いするか。きよう半日がわかれ目だな」

「半日。そうかかりましょうか」

「悔れぬぞ」

家康の影は、河原の畔の林へかくれた。そこが織田軍の先鋒一番隊の——彼の手勢がヒ

ソと鳴りをしずめていた陣だった。

そこへ入ると、もう蕭殺の気が肌に沁む。草むらに、灌木の中に、兵は銃列を布

いて、身を屈している。槍隊は槍をにぎって、まだ何も見えない姉川のいっすい水すいをにらんでいる。

——今日が生死の？

兵の眼は、ぎらぎらしていた。死も生も意識のない裡うちに、きようの血戦がどう終るか、無言の中にみな描いている。——この空を、今夜もきつと見られると信じている顔はひとつもない。

康政をつれて、家康は、その中をガサ、ガサ、と静かに通った。鉄砲の火繩のほかに、火の気も見ない。

誰か、大きな嚏くしゃみをした者がある。風邪かぜをひいた兵が、火繩の臭気においに鼻をつかれて思わず放ったのであろうが、そんな味方の中の声一つでも、

——はッ？

と、したように光る眼が辺りへうごく。

睨みつめていても何時いつの間まにというけじめも分らぬまに、ほのかに姉川の水面が白みかけたと思うと、林の梢こずえを透すいて、一ひとすじ条の紅い雲が、伊吹山の肩のあたりに見出された。

「——あッ、敵がッ」

誰か、兵の中で、どなりかけると直ぐ、林と河原の境に出て佇たたずんでいた家康を中心とする幕僚たちが、

「撃つな！」

と、銃隊へ手を振った。

「撃つてはならんぞ」

他の将が、つづいていう。

対岸の正面よりやや下流しもて手の岸から、一隊の敵が、騎馬かち徒歩をまぜておよそ千二、三百、一陣になつて、河を斜めに、駈わたけ渉りだした。

足もとから立つしぶきに、真白な疾風はやてが涉わたつてゆくようだった。——恐るべきその浅井方の先鋒は、織田方の先鋒も、第二陣も三陣も無視して、一挙に、信長の中軍を衝つこうとする意思らしく思われた。

「あッ、磯野いそのたんば丹波」

「丹波守が手勢」

家康のまわりで、家康の旗はたもと下たちは、唾つばをのみながら云い合つた。浅井長政の下に、浅井家が誇りとする磯野丹波守という好敵手のあることは、夙つとに武將の間に聞えていた。

——その旗じるしを今、颯々さつさつと、水けむりの中に見たからである。

ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ

敵の掩護えんごか、味方の銃隊か。いや両岸から同時に撃ち出したとっていい。水に飮くだまして、耳も聾ろうするばかりだった。

雲は裂け、六月の青空は、肌をあらわした。——と、見るうちに、織田軍の二番、坂井右近の人数、三番備えの池田勝三郎信輝の手勢が、

「その敵、一步も味方の岸を踏ますなッ。一人も、敵の岸へ返すなッ」と、どつと、流れの中へ突撃して来た。

坂井隊は、敵の横へ。

池田の将士は、敵の突角とっかくへ向つて、ぶつかって行ったのである。

接戦は、一瞬に起つた。

槍と槍、太刀と太刀。——また、組む者、馬上から落ちる者、姉川の水は、血か、映じる朝陽か、鮮紅せんこう燦々さんさんと揺れに揺れた。

磯野丹波守を先頭に、率先して突きこんで来た浅井勢は、浅井方のうちでも選より抜きの精兵だったにちがいない。

織田方の二番備え、坂井右近の隊は、完膚なきまで、叩きつけられた。隊長右近の子、坂井久蔵は、

「むッ、無念だッ」

と、その戦の中で、敵味方中へ聞え渡るほどの絶叫をあげて討死を遂げた。精兵、百余人が、つづいて河中に戦死した。

当るべからざる勢いで磯野丹波の兵は、三番備えの池田勝三郎の隊を突破して行った。勝三郎の麾下が、

「くッ、くそ」

「やるなッ」

と、槍をそろえて、その突角へ遮りに向ったが、まるで寄せつけなかった。四番備え。

木下藤吉郎の陣だった。

藤吉郎も、

「こんな凄まじい敵を見たことがあるか」

と、半兵衛を顧みてつぶやいたほどだった。

さしもの半兵衛にも、施す策がなかった。なぜならば、木下隊には、先頃、長亭軒の城や荊安城——その他、諸所で収容した降参人がたくさん混じっているからである。

それらの降人も、今は皆、麾下の一兵として、藤吉郎の手に加わってはいるが、いずれもつい先頃までは、浅井家や朝倉家の禄を喰んでいた者であるから、当然、敵へ駈け向わしても、その銚ほこぎ先は弱いにきまつている。むしろ味方の足手纏まといとなろう。

木下隊には、そんな弱点があつたし、五番、六番の備えも、瞬またたくまに蹴ちらされて、織田陣十三段の備え立てが、遂に、十一段まで潰かいらん乱されてしまった。

その頃。

上流の徳川勢は、一気に、姉川を渡つて、対岸の敵を席卷しながら、徐々に、下流へ移つていたが、顧みみると、すでに信長の本陣近くまで、磯野丹波の死に物狂いな兵が迫っているのだ、

「あの側面を突け」

と、河中へ躍り返した。

磯野丹波の兵は、自分たちの味方がいる西岸から河へはいつて来た人数なので、近づくまで、

「味方の加勢——」

と、思っていたものらしい。

榊原康政を初めとして、三河武士の名だたる武者が、

「くわッ！」

と、息弾いきばずませて、いきなり磯野丹波の隊伍へ、斬りこんで来た。

「しまった」

磯野丹波が、徳川勢と気づいて、しゃ嗶がれ声こゑをふりしぼりながら、返せッ——と叫びかけた時、何者か、彼の横あいから、びゅツと水に濡れた一槍を繰り出した者がある。

——ばしやッ

水けむりの中に丹波は坐った。脾腹ひばらへはいつた槍のケラ首をつかんで起とうとする——起たせまいとする——瞬間、また、頭上にチカツと燦きらめいた、何人かの太刀が、がつんと、丹波の鉄兜てつかぶとへ打ちおろした。

刀は、幾つかに折れて飛んだ。丹波は起った。血しおに等しい川波が真っ赤に立つ。

「くそッ」

「ちいッ」

三、四人、いちどに丹波の前後から組みついて、脾腹、首すじ、籠手、深股、滅茶滅茶に突いたり、斬ったりしてしまった。

すわ！ 敵が。

と、見たので、信長の旗下は、信長の幕営を出て、みな川岸へ、槍を揃えていた。竹中久作は、木下隊だが、乱軍となつては、もう所属などにこだわつてはいられない。猛敵浅井隊を追いかけて、信長の本陣の近くへ駆け上がっていた。

「……や。ここはもう？」

ふと見ると、何者か。

その信長の幕営の裏から——幔幕をかなぐり上げて、今し、そつと這いこんで行こうとする男がある。

具足、太刀の鎧など、雑兵とは見えなかった。また、味方にしては、幕の裾をあげて、窺っている容子がおかしい。

「待てッ」

久作は、飛びかかつて、敵の鎖と筋金で固めてある片足をつかんで引ツ張った。——も

し、味方だったら、同士討ちになると、大事を取ったからである。

竹中久作に、足を引ツ張られた男は、驚きもせず、振り向いた。

それは浅井方の一将とみたので久作が、

「敵だな！」

と、確かめると、

「当然ッ」

と、喚わめきながら、相手は、やにわに槍をしごいて、突いて来た。

「何者ッ。名乗る程の名は持たぬ奴か」

「浅井の臣、前まえなみしん波新八郎ろうッ。織田殿にこそ、この槍を見参にと参つたるに、邪魔だてす

る小面こづらにく憎い童わっぼめ。何なに奴だ」

「木下藤吉郎の家来、竹中久作とはわがことよ。——信長様に近づかんなど、身の程知ら

ず。いで、久作が」

「さては、半兵衛が弟よな」

「そうだッ」

「いや否、搦んでいた敵の槍を手たぐ繰つて、敵のふところへ跳びこんだ。

槍の穂が虚空へ刎ねる。

久作が太刀のつかへ手をかける寸前に、新八郎は、組みついて来た。——だと、仰向けざまに、同体に倒れる。久作、下になる。蹴離す。——また下にねじ伏せられる。敵の指に噛みつく。新八郎やや弛む。——問！——揉む。解れる。久作、起きかえる。咄嗟久作の手、鎧貫しを引き抜いて、新八郎の喉へ目がけて突く。鎧貫しの切っ先、外れる！——そして、新八郎がうわ唇から鼻を削いで、眼孔へ突っこんだ。

「戦友の敵ッ」

後ろで、声がした。

首を搔く間もない。

刎ね跳んで、久作は直ちに、その敵と渡りあつた。——この附近、すでに浅井方の決死隊が、何十人となく入りこんでいるらしく思えたが、敵は背後を見せて駈け出した。追いかげざま、刀で、膝を撲つた。——倒れた上へ乗しかかつて、久作が、

「名ある者か。何ぞ一言、ないか、あるか」

炎のような呼吸でいう。

「小林端周軒なり。ほかに、何らいうことはない。ただ、信長に近づかぬ間に、汝ごと

き小侍の手にかかったが残念だ」

「浅井の家中なら知つていよう。浅井随一の豪の者、遠藤喜左衛門はどこにおる」

「知らぬ」

「いえ、吐かせ」

「知らぬ」

「ええ、面倒」

久作は、端周軒の首を挙げて、また血眼ちまなこに駈け出した。

——今度の合戦には、浅井の遠藤喜左衛門の首は、他人の手には渡さぬ。

久作は、戦の前から、こう広言していたのである。是が非でも、喜左衛門の首を、討つてみせなければならなかつた。

河原のほうへ駈け降りる。——と、その雑草や石ころの辺りに、賽さいの河原を見るように、無数の死体が横たわっていた。

——と、その中に。

乱髪を顔にかぶせて、血どろのまま仰向いていた一個の死骸があつた。駈け下りて来た久作の足もとから、わつと、銀蠅ぎんばえの群れが唸うなつて舞つた。

「——やツ？」

何気なく、久作が振り向いた。髪の毛で、顔を隠していた死骸の足を踏んだ気がしたのである。それはいいが、変な触感がしたので怪しみながら振り向くと、とたんに、その死骸は、脱兎の如く、信長の陣所の前へ向って駈け出して行った。

「御留意あれツ。——それへ敵がツ」

久作は、後ろから呶鳴った。

信長の姿を見かけて、低い堤を、駈け上がろうとした敵は、草鞋わらじの緒を踏み切つて、堤の途中ですべにつた。

「うぬツ」

圧おしかぶさつて、久作が手捕りにした。そして、信長の前へ曳いてゆくと、

「はや、首を打てツ。すぐ打てツ。武士に恥を与えるな」

と、その者は怒号しつづけた。

信長の陣中へ、捕虜となつて縛くられて来た浅井方の一人安養寺三郎右衛門は、怒号しているその味方を一眼見ると、突然声をあげて泣き出した。

「オツ、喜左衛門どのか。おぬしまで生擒いけどられて来たか」

それで判明した。久作が縛めた偽死人の豪傑こそ、彼が求めていた浅井の猛将遠藤喜左衛門だったのである。

大勢は初め織田軍の総崩れに見えたが、敵の猛烈な先鋒隊の側面を突いた家康の三河勢によつて、辛くも信長の陣前に、その鋭角を喰いとめた形であつた。

しかし、敵にも二陣あり三陣ありである。押しつ返しつ、姉川の水を揉んで、敵味方、鏑を割り、槍を砕き、その勝敗は混沌とわからなかつた。

「わき見すな。ただ信長の本陣を突け！」

と、初めからの目標としていた浅井の二陣高宮三河守、三陣赤田信濃守、四陣大野木大和守まどのかみなどの兵は、余り突き出し過ぎて、かえつて織田軍の後ろへ出てしまった。

家康の三河勢も、榭原さかきばら康政、大久保忠世ただよ、本多平八郎、石川数正かずまさなど、

「織田衆におくるるな」

と、忽ち対岸を突破して、越前勢の朝倉景健かげたけの幕営へ突き進んで行つたが、ようやく味方と遠ざかつて、後ろも敵、前も敵、甚だしい苦戦に陥つた。

まったくの乱軍だ。魚に河が見えないように、こうなつては誰一人、全体の大勢というものとは分つていない。

身辺の必死のみである。ひとりの敵を突き伏せるとすぐまた一つの敵の顔を見るだけだった。

——が、これを高い所から俯瞰ふかんすれば、姉川の一水を挟はさんで、両軍はちようど卍まんじけい形に入りみだれていた。信長はさすがに冷静な眼でそう見ていた。藤吉郎もまた、そう大観していた。そして、

「この一瞬だな」

と、直感した。

勝ち。——負け。

そのわかれ目は微妙な一瞬だ。信長は、携たずえていた杖で大地を叩きながら叱咤たさした。

「三河殿の人数が遠く突き入った。あの一点を、孤立さすなッ。——誰ぞ、三河殿の苦戦を救いに向えッ」

だが、左右の備えに、もうその余力は残していない。信長の声も、いたずらに噎かれるばかりだった。

すると、北岸の一叢むらの林から、真つ白な水煙を蹴立って、乱軍の中をわき目もふらず直線に対岸へ上がって行つた一隊がある。——信長の号令が届いたのではなく、信長と同じ

大所へ眼をつけた藤吉郎の木下隊であった。その旗じるしと金瓢きんびょうの行くのを見て、

「あッ。よしッ！ ……。藤吉郎が駈けおつた」

信長は、眼に流れ入る汗を、籠手こてで横にこすりながら、傍らの小姓たちへ、

「かかる折は、またとない。そちたちも、河中へ行って思いのまま働いてみい」

と、許した。

もりらんまる

森蘭丸その他、まだ年少な者たちまで、皆、われおくれじと敵を目がけて駈け出した。

深入りした徳川勢は、たしかに、危険は危険な行き方であったが、炯眼けいがんな家康が、み
ずから全局の急所に打つた一石だった。

「この一石を見ごろしにするような織田殿ではあるまい」

と、家康も信じていたろうし、信長もたしかにそれは認めていた。

木下隊と前後して、稲葉一鉄の隊も後続した。池田勝三郎の隊も殺到した。

がせん
俄然。

戦局はそこから一転して織田軍の優勢となった。朝倉景健かげたけの本陣は、五十余町も後退し、浅井長政も退いて、小谷城へ総くずれに駈け出した。

それからは、追撃戦であった。

浅井、朝倉勢の討たれるもの数知れぬ程だった。名ある将校だけでも、細江左馬介、浅井齋、狩野次郎左衛門兄弟、弓削六郎左衛門、浅井雅樂助、今村掃部、黒崎備中、等々々、戦後の織田方の首帳に、豪華な亡命者の名をならべた。

追撃は急だったが、朝倉勢を大寄山に追い上げ、浅井長政を小谷へ封じこめると、信長は、戦後の処理を二日間にすべて終つて、三日目にはもう岐阜へさして帰陣していた。——その迅さは、まだ死屍累々と渚に洗われている姉川を、夜々翔けわたる時、鳥にも似ていた。

両面將軍

英雄も英雄の質それだけでは、英雄となり得ない。

環境が彼を英雄にしてゆく。

その環境とは、間断なく彼の素質を責め苦しめるようにばかり動いてくる、四圍の悪い条件である。眼に見える敵、見えない敵、あらゆる存在が、挙つて、彼ひとり^{こそ}を苦しめ抜くために、この世に在るかのような形を取つた時、彼は初めて、

——英雄たるか否か。

の試煉しれんに出遭であつていたのであつた。

姉川の合戦の直後、余りな信長の帰還の速さに、各隊の部将たちは、

「なにか、岐阜表に、事変でも起つたのではないか」

と、怪しんだほどだつた。

帷幕いばくの高等軍略は、もとより下には分らないが、洩れ聞えたうわさによれば、

「——あの折、一挙に浅井の本城小谷を奪取だつしゆしてしまふべきだと、木下殿が切に献言けんげん

なされたそうだが、お用いもなく、その翌日、敵の出城でしろ、横山城だけを落して、木下殿を

そこへ詰め置かれたまま、早速にも、お引揚げになつてしまつたのだとある……。いかな

る御意図か、どうも、われわれ末輩には、分らんなあ」

分らないのは、兵ばかりではない。丹羽にわ、柴田、前田、佐久間などの側臣さえ、信長の

真意は分つていなかつたであろう。——薄々さと覺つていたかと思われるのは、家康だけであ

つた。

家康の眼はいつも公平に信長を観ている。近すぎず、遠すぎず、熱しすぎず、冷淡過ぎ

ず、信長を客観し得られる立場にある。

信長が引揚げると、即日、家康も浜松へ向つて歸つた。

その途中、家康は、

「見よ、織田殿には、血具足ちくそくを解かれると、すぐまた、都扮装みやこいでたちに粧よそおいかえて、あの鞭むちを、京都へさして急がるるにちがいない。……さても、心の駒の忙しさよ」

と、譜代ふだいの石川、本多、榊原さかきばらなどを顧みていったが、果たして、その通りだった。

家康が、浜松に着いた頃、信長はもう、岐阜を去つて、京都に出ていた。

といったところで、都には今、形に現われた事件も起つてはいないのである。けれど信長が恐れているのは、形に現われたものよりは、形を見せない「まぼろしの敵」であった。いつだったか。

信長はその悩みを、藤吉郎に、こう洩らしたことがある。

(余が最も恐れているものは何か。そちらなら分るであろう。……分らぬか)

藤吉郎は、首を傾かしげて、

(左様ですな。……常に背後を窺うかがっている甲斐かいの武田。足もとの浅井、朝倉。こんなものではありません。浜松の徳川殿は、恐るべきではありませんが、叡智えいちの人ですから、馬鹿ほど恐れるにも当らないでしょう。松永、三好、これは蠅はえです。蠅のたかりやすい腐れ物は

いくらも存在していますが、所詮しよせん、亡んでゆく性質のもの。ただ始末の悪いのは、本願寺門徒の諸山の僧侶ですが、これとてもまだわが君を恐れさせるほどのものではございませぬ。……と、すればただ一つ、怖いものが残っておりますな)

(何だ。いうてみい)

(敵でもなし、味方でもなし、尊敬はしなければならぬし、尊敬してのみいれば立ち所に陥し入れられる——両面の化け物殿——いや失言いたしました。將軍家ではございませぬか)

(ウむ。いなよ、誰にも)

信長の悩みは、実にその敵でもない味方でもない人であった。彼が上洛した日にも、辻には、その幻の敵の為す業わざらしいものを見た。それは暗に彼の悪政を歌った落首らくしゆの立て札であった。

蠅はえのように三好の残党がする悪戯いたずらの一つにちがいない。

落首の立て札にはこんなことが書いてあった。

ながらへば

また信長や惣しのばれん

憂^うしと三好^{みよし}ぞ

今は恋^{こひ}しき

卑屈な落首の作者は、暗に信長の革新政治を弥次^{やじ}つてているが、それは彼らの不平だけで、民衆の心を代表してはいなかった。

その証拠には、立て札に足を止める往来の人々も、一応は面白半分に見ているが、笛吹けど踊らずで、苦笑しながら通つてしまう。——何か力んで、落首に同感をあらわしながら、庶民を焚^たきつけている者があれば、それはきまつて、三好党臭い牢人^{ろうにんもの}者か、さもなければ、一向^{いっこう}宗^{しゅう}の法師^{しゆう}だった。

それとて、大した者ではなく、彼らの卑屈を知っている町人たちが、擲^{から}揄^かい半分に、「来た来た」

と、嘘にでも、信長系の武将か見廻りの兵でも来たように呶鳴ると、蠅^{から}牢人^かも蠅法師も、「そらッ」

と、ばかり泡を喰つて、どこかへ隠れこんでしまうのだった。

勿論、京都在住の信長の部将は、見あたり次第に、落首の札などは取り捨てているが、彼らの粘^{ねば}りづよい攪^こ乱^{らん}戦術には、相当、手をやいているのである。

流言蜚語りゆうげんひごの出所も、皆そこからだし、放はなけ火び、強盗、橋はし杭ぐいの伐きり倒しなど、眼まなこに余るものがある。すべて信長の政治方針が招いた世相の悪化の如く見せかけるのが、彼らの狙いどころだった。

そうした反信長同盟の張本と巢窟そうくつは、いったい何処にあるかといえ、叡山えいざん、本願寺などの僧団と三好の残党の内にあるとは、誰もすぐ考えつくところだが、事實は、もつと奥深い深殿の裡にその本尊はかくれていた。

將軍義昭よしあきであった。

義昭は、かつて、信長の恩に感涙をながして、

(おん身を、父とも思うぞ)

とまで、いった人である。

その義昭が、なぜ？ どうして？ ——人の想像もつかない所に、いつも人の表裏ひそは潜ひそんでいゝ。

性格的にも、義昭と信長とは合わなかった。育ちも違う。信念も違う。

救われた当座こそ、義昭は恩人として、信長に接していたが、將軍家という席に温まる
と、何かにつけて、

「野人は困る」

と、信長を忌むようになった。うるさくなくなった。なければと厭う存在になった。——自分の勢威を凌駕する邪魔物と敵視するようになった。

けれど、それを表面化して、信長と争うほどの勇氣もない。彼の智謀は、極めて陰性であった。——信長の陽性に対して、義昭の陰性は、飽くまで執拗に、飽くまで秘密に策されていた。

「……そうか。顕如上人にも、お憤りとおあるか。さもあろうさもあろう。信長の人もなげな専横跋扈、いかに御門跡とて、お怒りは当然じゃ。——この義昭とても」
 今日も。

彼のいる二条殿の帳台奥深い辺りには、石山本願寺の使僧がさつきから密かに目通りを乞うて、何やら小声ではなしこんでいた。

「以上。……お耳へまで達したことは、極々、内密の儀にござりますれば、そのおつもりで。——同時に、甲州へのお使い、また、浅井家や朝倉家などへも、機を逸さぬように、御密書を送られますように」

「よし。わかった」

「おぬかりもございますまいが」

密使の僧は、こつそり退さがつて行つた。——その日、べつの殿中には、信長が、着京の挨拶のため伺候して、義昭の出座を待っていた。

義昭は、何喰わぬ体ていをつくらつて、信長の待つてゐる公式の間へ現われた。

「姉川の一戦は、大そうな勝かち軍いくさでお引揚げとやら、いつもながら御武勇なこと。いや、めでたい。祝着にぞんずる」

信長は、彼の世辞に、苦笑を禁じ得なかつたが、皮肉にも、

「いや、御威徳によつて、後事に憂いもなく、一途いちずに戦いくさえましたたために」
と、いった。

義昭は、女のように、すこし顔赤らめながら、

「安心するがよい。洛中は見らるる通り至極平穩。——が、戦後、怖ろしく迅はやい上洛、なんぞまた、異変でも聞かれたかの」

「いえいえ。禁裡御普請きんりごふしんの落成を拝し、その後、怠りがちの政務を視み、かたがた御機嫌をお伺いに」

「いや、そうか」

義昭は、すこし安心して、

「このとおり身も健固、また、政務も滞りなく運んでおれば、そう心に懸けて、度々の上洛には及ばぬ。——いや、それよりは、姉川より凱旋のこと、きようは曠れの祝い、奥で盛宴を張ろう。休息の上、後刻、うち寛いでお互いに」

「なかなか」

信長は、手を振って、

「まだ戦いの後、将士に犒いのことばもかけて遣っておりませぬ。信長ひとり、大宴の贅に飽いては、何やら心がすまぬ心地——おあずけしておきましょう。再度、出仕の折に」と、辞して退った。

宿所に帰ると、明智光秀が、

「大坂本願寺の門跡、顕如上人の使いらしき僧が、二条のお館を去って、何やらあわただしゆう立ち帰って行きました。——先頃から、僧徒と將軍家との往来に、怪訝しいものを感じまするが」

と、警備日誌をさし出した。

光秀は、藤吉郎の木下隊と交代して、その後、洛中守備軍として、京都に止まっていた

ので、室町將軍の目付役ともなつて、その人出入りや市中の出来事など、つぶさに書きとめておいたのであつた。

信長は、一覽して、

「大儀」

と、だけいった。

救い難い公方——と、思つてか苦々しげであつたが、むしろ、その義昭が、従順であるよりは、幸いのようにも思つた。

夜は、朝山日乗、島田弥右衛門など、禁裡の造宮に当たっている奉行たちを呼びよせ、その竣工の模様を聞きとつて、

「大儀、大儀」

と、機嫌が直つていた。

翌朝。

暁起に嗽水して、彼は、ほぼ落成した御所の外廻りをここかしこ見て歩いていて。そして、皇居を拝し、陽の出る頃は、もう宿所の寺院に帰つて、朝飯を喰つていた。

「戻るぞ」

上洛の折は、平服だったが、帰りは武装していた。——岐阜へ帰るのではなかったのである。

ふたたび姉川の戦場を一巡し、横山城に詰めている木下藤吉郎に会い、各所の押えとして残っている味方の部隊に令を飛ばし、佐和山の城を攻囲した。

佐和山には、浅井の家中磯野丹波守いそのたんばのかみの手勢がなお立籠たてこもっていたからである。

「これで一掃除すんだ」

岐阜城へさして信長が帰ったのはそれからであつたが、残暑の疲れを、彼も兵馬も、伸びのび々、ひと月と休んでいる違いとまもなかつた。

摂津せつの中之島の城にいる細川藤孝ふじたかから「火急」として飛状が来た。——同時に、京都にある明智光秀からも、

摂津野田、福島、中之島一円に亘わたり、阿波三好党一万余、壘を築き、浮浪の徒を糾きゆう

合ごう候て、一揆いっきに及び、門徒僧数千も加わり、本願寺門跡、これが背後の謀主たる由

にて、勢い猖獗しょうけつ、寸刻の猶予ゆうよもなりがたく覚えられ候に依而よつて、早々、おさしらず下

し賜たまわるよう……

との急状きゆうじょうが届いた。

摂津の石山本願寺の地は、後に、大坂城の本丸となつた難波なにわの杜もりの岡にある。

大坂御坊おおさかごぼうとも、石山御堂みとうともよばれていた。

蓮如れんによの法孫ほうそん、証如しょうによからの道場で、室町幕府の無統治、無秩序のなかに建立され

ただけに、社会の動乱にいつでも対抗できるだけの構造と武備を持っていた。濠ほりを深くし、

城橋を渡し、石垣を築き、輪奐りんかんは寺院であるが、全体は堂々たる城廓をなしていた。

もちろん、僧即兵そうそくへい。——ここにも南都、叡山えいざんに劣らない法師武者が充満しているの

ある。

——信長、何者ぞ。

旧ふるい法城に住む僧として今、信長に反意をもたない僧は、ひとりもなかったであろう。

——豎子何者ぞ！じゆし の語気のうちにすべての感情がこもっているといい。気に喰わ

ない理由の一つを挙げれば、

(——伝統を無視する仏敵だ)

と、いうにあらう。

なお、いわせれば、

(——文化の破壊者だ。野放図のほうずもない魔王が、獸群しそを使嘯しそして、社会を野原とまちがえて

出て来たものだ)

と、口を極めて罵るののしだろう。

もつとも石山の法城の大衆が、そう怒っているにも理わけはあることだった。——むしろ信長のほうが余りに意慾を急にしたため、よけいな大敵を——それでも多事多端なところ——みずから求めてしまった失策の一つとっていいかもしれないのである。

それは。

石山本願寺に向つて、その前に信長から、

(立ち退のいて、その地を明け渡せ)

と、交渉というよりは高圧的に移転を命じたことから端を発したものだ。

法城の誇りはたかい。彼らの擁している特権は古い。当然、

「何を、ばかなッ」

と、信長の命を一蹴した。

そして、西国方面や堺さかいなどから、鉄砲二千挺を購入したとか、一山の僧兵が、にわかにも殖ふえたとか、塹壕ざんこうを坑ほりぬいているとか、法城の武装化は、ちらちら聞えていたことでもあつた。

これが——海を隔てた阿波、四国の三好党と結びついたり、將軍義昭の弱点をうまく唆したり、近畿や堺の町人に悪宣伝をまいたり、一揆を焚きつけたり、いろいろやるな——ということは信長も予想していた。

で。京都や難波の味方から急報をうけ取っても、さして、意外とはしなかった。むしろ、「この機に」

と、新しい決意さえ持つて、すぐ自身、摂津へ出陣した。
途中、彼は、京都に寄つて、

「願わくば、あなたの御出陣をも仰ぎたい。將軍家が陣頭に立たれたと聞えるだけでも、士氣は奮い立ち、一揆も忽ち平定しましょう」

と、義昭に告げて、無理に陣中へ伴れて行つた。

義昭は、嫌々だったが、嫌といえなかつた。——役にも立たない厄介者を伴れたようであるが、信長に取つては、名分の楯になる。また反間の計にもなつた。

難波の神崎川、中津川のあたりは、まだ葭や葦や所々の耕地や、塩気のある水がじめじめしている池などの多い——渺茫たる平野だつた。

中島には、南中島と北中島とがある。——北の砦には、三好党が拠り、南の小城には、

細川藤孝ふじたかが拠つていた。

戦いは、この辺を中心として、九月の上旬から中旬まで猛烈に一勝一敗をくり返していた。——野戦であり、盛んに新式の小銃や大鉄砲が用いられた。

「——今だ！」

九月十四、五日から十六日にわたる頃である。

それまで、山深くに、また城を閉じて、敗戦の惨味さんみをかみしめていた浅井、朝倉の軍勢は、信長の虚を窺うかがうや、装備を革あらためて、琵琶湖を漕ぎわたり、大津、唐崎の浜に、陣を布しき、一部は、叡山えいざんへさして続々と登つて行つた。

宗門の上では、派別を称とえている僧團も、「反信長」の行動では、完全に、

——打倒だとう仏敵。

へ一致していた。

「彼は、叡山の山領を、恣ほしに削ますつた。——伝教大師でんぎょうだいしこのかた、不可侵境ふかしんきょうの山則を、またわれわれの体面を、辱はずかしめ踏みにじつた！」

叡山と浅井、朝倉の関係は、親密だった。この盟約も、当然、ものをいっている。

——信長の退路を断て！

三者の意見は、一致して、行動に移った。朝倉軍が、湖北の山からうごき出す。浅井軍が、大湖を渡つて上陸する。形勢はまさに大津の咽喉いんこうを扼やくし、京都に入り、淀川に待つて、大坂石山の本願寺、その他と呼応して、信長を一挙に、その間で屠ほぶり去つてしまおうとする作戦かに見られる——

一方。

難波なまなわの神崎川、中津川辺の湿地帯で、石山御坊の僧軍や、中島砦とりでの三好党の大兵などと対峙たいじして、連日、苦戦をつづけていた信長の耳に、

「後方に一大厄いちだいやくが出来しゅつたい」

と、その警報が聞えたのは、同月二十二日だった。

詳細はまだ分らない。

しかし——

信長の直感は、

「ちいッ」

何ものかを奥歯にかんだ。

「勝家ツ、勝家」

と、柴田勝家を呼びたて、和田惟政これまさと共に、ここに殿軍しんがりせよと命じ、自身は、「すぐさま、引つ返して、浅井、朝倉を初め、叡山をも、粉碎してくれん」と、はや用意に取りかかる。

陣中の動揺は争えなかつた。柴田勝家は、

「次の詳報が参るまで、もう一夜お待ちあつては」と、止めたが、

「一瞬に、世の相貌そうぼうも変わろうとする今、何で！」と、ばかり肯きく色いろもない。

和田惟政は、また、

「われわれども、死を賭として、殿軍しんがりは仕りますが、いかんせん、渡船、荷舟、田舟にいたるまで、船は戦いの前に、敵に攫さらわれ、また焼き捨てられて、この南中島から対むこう岸へお越え遊ばすには、筏いかだを組まねば相成りません。——せめて、夜半頃までお延ばしあつて、それをも、信長は退しりぞけて、

「徒歩かちの兵は、筏で渡れ。馬を持つ者はわれにすぐ続け。——オオ、幼年の頃、清洲の庄

内川に出て、水馬に遊び暮したことが、今ぞ、思いがけなく役に立った」

信長はやがて、馬上となると、中津川の流れへ、駒を乗り入れた。

が——彼一人ではなかつた。

彼は、もう一名の大將の駒の鞍つぼへ手をかけて、引き寄せ引き寄せ、水路を導いていた。

將軍家義昭よしあきである。

「あなたも」

と、信長は、共に彼を伴つれて引き上げの途についたのだった。義昭は、水馬の心得がないので、満々たる大河へ駒が泳ぎ出ると、

「あぶないッ」

思わず叫んだ。

そして、駒のたてがみに、しがみつこうとするので、

「馬の平首に縋すがりたもうな。鞍の上であがき給うな。馬を疲れさせぬよう、お樂にあれ。

——信長がついておれば、大船に乗られた気で」

と、教えたり、励ましたり、慰めたりしながら進んだ。

敵の塹壕ざんごうや、砦とりでの櫓ぐらに、

「信長だッ」

声が揚る。——忽ち撃つ。

ド、ド、ド、ドッ

と、小銃、大鉄砲、つるべ撃ちに、浴びせかけた。

水面は、雨のような、飛沫ひまつに白くなつた。義昭は気も萎なえてしまった。——しかし、その狙撃そげきはすぐ熄やんだ。信長を撃つために、義昭を撃つてしまう危険を敵方も恐れたからであつた。

信長は、義昭を楯たてとして、北岸の洲すへ、難なく躍りあがっていた。

信長、義昭につづいて。

夕陽の赤い中津川の流れを、十騎、二十騎——何十騎となく、泳ぎ渡つた。

日が暮れると、兵をのせた筏いかだも、続々と越えて行つた。

「敵は、退ひく。——総引揚げとみえた」

三好党の塹壕ざんごうからも、本願寺僧の戦線も、一斉に攻勢を展開し、ひろい闇の中には、ひっきりなし小銃の音がパチパチと鳴りひびいた。

こんど此処の合戦では、十四日の天満ノ森の衝突を除くほかは、ほとんど、鉄砲と鉄砲との撃ち合いが多かった。

従つて、塹壕戦術が、用兵の上に新しい進歩を示した。

足場櫓から撃ちこむ大鉄砲のうなりも、違った音響をもつて、相互の陣地をゆすぶつた。石山御坊には、信徒の献金による浄財が豊富である。それがみな弾丸となり銃器となつて、三好党を援けた。

ここ数年のうちに、鉄砲の発達とその普及力には、驚かれるものがある。織田方の銃器は、光秀の献策で、極く最近、新しい様式のをだいぶ入れたが、僧兵の銃隊は、すべての手に、新式のものが揃つていた。

射撃の技術も、ふしぎに僧兵は巧かつた。平常の修行が役に立って、すぐ精神を標的に集注できるせいだろうという者もある。——また、彼らには、

仏敵。

と、狙う敵に一倍の憎しみと、信仰の護符が頭上にあるので、その弾丸も、よくあたるのではないかと——織田方の雑兵などはすこし気味わるがつた程であつた。

白兵戦でも、ひどく強い。

てんま 天満ノ森の合戦などでも、織田方の前線は、七花八裂しちかはちれつの粉碎をうけた。その日、佐々成政さつさなりまさは、重傷を負い、野村越中守えつちゆうのかみは戦死し——辛くも前田犬千代が力戦して、わずかに味方の退口のきぐちを取ったので、全滅をまぬかれたくらいだった。

「坊主の強さよ！」

負けぎらいな信長も、この戦いでは、時には悲痛な苦笑いを、しばしば、嘔みしめたものである。

その石山との戦いを捨てて——一転、彼が馬を向け直した行く先も、また——叡山えいざんという昔から荒法師をもつて鳴る僧団を中心とする戦場だった。

幾たびか、鞭むちを折り、馬を代えて、彼が京都に着くと、

「おうツ、殿ツ」

「残念ですツ」

悲涙をたたえた幾つもの血相が、彼の馬前へむらがつて、こもごもに、事態の急を訴えた。

「何より先に、申しあげねばならぬ儀は、御舎弟の信治様のぶはる（織田九郎）——また、お附添の森三左衛門可成よしなりどの、共々に、宇佐山の城を枕に——まる二昼夜の御苦戦もむなし

く——討死あそばされたことにござりまする」

惨として、ひとりがあるのまま、声を嚙むと、べつの者が、また、声をふるわせて告げた。

「浅井、朝倉に山門の衆徒しゅうとも加わり、敵は何せい、二万をこえる大軍にござりますれば

——無念、力も及びませぬ。信治様、森三左衛門どのの御最期につづいて、青池駿河どの、あおちするが

どうけ道家清十郎どの、びとう尾藤源内どの、その他まだ……」

と、主なる味方の戦死者を思い出すだけでも、無念がこみあげ、涙が声をかすめて、将士はみな籠手こての肱ひじを曲げて、顔をおおってしまった。

——と、信長は、

「この期ごに臨んで、くどくどと、返らぬ者どもの戒かい名みょうを読み立てるな！ 聞きたいの

は、今の戦況だツ。敵は、どこまで来ておるか。どこが、血戦の中心か。……ええ、その

方どもでは大勢もわかるまい。光秀みつひではおらぬかツ。光秀、戦場なれば、急いで、これへ

呼びもどせ。——光秀を呼べツ」

叡山えいざん

三井寺は、その山門も坊舎も、聯合軍の旌旗につつまれていた。

ここを本陣として。

浅井、朝倉の主将たちは、きのうは信長の弟九郎信治の首を、大勢の眼で、実検した。

また、次々と。

青池駿河守、道家清十郎、森三左衛門可成、そのほか織田家の名ある士たちの首級を、飽き飽きするほど、検分した。

「姉川の敗北も、これで雪辱したというもの。幾らか、胸がはれた」

一名が、つぶやくと、

「いやまだ、信長の首を見ぬうちは！」

誰かが強く叫んだ。

すると、北国訛の濁み声で、

「あははは。見たも同じよ。その信長も、前には難波の石山、三好勢。うしろには、この大軍。どこへ逃げ得よう。——網の魚だわ」

半日も、無数の首級を検分して、誰もが血臭いにおいに付きまとわれてならなかったと

みえる。夜に入ると陣の幕舎には酒瓶さけがめが持ちこまれ、勝軍かちいくさの気を昂あげる心も手伝つて、兵に、酒を汲ませながら、

「京にはいるか。止まって、大津の咽喉いんこうを抑え、徐々、包围をちぢめて網の大魚を完全に捕るか」

と、飲みながら軍議に移っていた。

「もちろん、京師に兵を進め、淀川、河内かわちの野に、信長を殲滅せんめつすべきである」

と、いう者と、

「不利だ」

と、反対する者があつた。

浅井、朝倉の両家は、目的のため一体になつても、内輪の議論などになると、各が、体面を固執こしつしたり、無用な小智慧を述べたてるのに、時を費やしたり、夜半を過ぎてもまとまらなかつた。

「怖ろしく空が赤いなあ？」

評議やましなに倦うんで、外へ出て来た浅井方の将が、空へ手をかざしていると、

「山科やましなから醍醐だいご方面の民家へ、お味方が火を放つけたのでございます」

と、歩哨ほしやうの兵が答えた。

「なんだって、あんな方まで、焼き立てるのか。無益ではないか」

呟つぶやいていと、

「無益ではない。敵を牽制けんせいする必要がある。京都守備の明智光秀の隊が、死にもの狂いで暴れまわっておる。また、味方の猛威を示すためにも——」

と、それを指図した朝倉家の将たちが口を揃えて反駁はんぱくした。

とこうする間に、夜が明けて来た。大津は街道の要衝ようしやうであるが、ひとりの旅人も荷駄だもない。

そこを一騎。——後からまた二、三騎。

伝令の兵である。ぱつと飛び下りて、駒もそのまま、のめるように山門へ駆けこむ。

「すぐ、蹴上けあげの辺りまで、信長が襲よせて来ましたッ。明智、朝山、島田、中川などの諸隊を先鋒せんぽうとし、死にもの狂いの勢いで」

伝令のことばに、諸将は、耳を疑って、

「信長自身ではあるまい。信長がそう簡単に、難波の戦場から引っ返せるわけはない」

口々にいつていたが、

「山科やましなの辺りで、味方の勢は、はや二、三百名も討死をとげました。なにしても、敵は勢いが烈しくて、例の如く、信長が、死ねや死ねやと、声をからして指揮にあたり、信長自身も、まるで夜叉やしやか鬼神のように馬を駆つて、これへ来る様子です」

浅井長政も、朝倉景健かげたけも、そう聞くと、顔いろを変えた。

わけて長政にとつては、妻の於市おいちの兄にあたる信長である。かつては、義弟おとうとの自分に優しい人であつただけに、信長の真に怒つた形相ぎようそうが、ふと、正直な本心を慄然りっぜんとさせた。

「退ひこうツ。叡山えいざんへ」

長政が、口走るような、急な語気でさけぶと、朝倉景健も、

「そうだツ、叡山えいざんへ寄れよ」

と、どなつて、同時に、騒ぎたつ本陣の将士へ、

「街道の民家へ、火をかける。——いや、先鋒の味方を、急いで、退ひかしてからだツ。——

火を放て、火を放て」

と、号令した。

熱風は、信長の眉を焦こがした。駒のたてがみや、鞍くらぶさ総すべにも火がついた。

「——死のうは一定^{じしよう}」

この一語は、彼の心の護符^{ごふ}だった。生死の境に立つと、われ知らず、念仏^{ねんぶつ}のように、また、謡^{うたい}の文句のように、唇^{くち}から衝^ついて出た。

屍^{かばね}、屍、屍。

敵味方の無数の死骸も、踏みこえ、躍りこえ、突撃してゆく彼の眼には、一掬^{きく}の涙もなかった。

死のうは一定——生身^{いきみ}の我も、路傍の死者も、彼は差別を思わないのである。

山科^{やましな}から大津へ。

途々^{みちみち}、乱離^{らんり}として、往來に焼け倒れている民家の火の梁^{はり}も、焰のうずも、彼の行くを妨^{さまた}げることはできなかつた。

彼の身そのものが、すでに一炬^{いつきよ}の炎であつた。

駈^かけつづく彼の幕下も一団の火となつて、

「信治様の弔^{とむら}い合戦」

「森、青池、道家殿などの怨みを雪^{そそ}がずに措^おこうか」

と、猛進してきた。

が、三井寺にも唐崎にも——来てみればもう敵は一兵も見えなかった。すべて叡山へ逃げ上ってしまつたのである。

「おお。逃げ足の迅さよ」

——仰ぐと。

鈴ヶ峰、青山岳、坪笠谷のあたりまで、敵の二万余に、一山の僧兵を加えた大軍が、(逃げたのではない。この陣容がものをいうのはこれからだ)と、誇示するかのように、旗差物をひるがえしていた。

信長は、屹と見て、

「ここだ。この山の天嶮に非ず、この山の特権こそ、信長の敵である」

と、心に宣言した。

彼は、革めて思った。——源平のむかしから今にいたるまで、歴代の朝廷におかれても、心ある為政者も、革新を図る英雄も、無数の民も、どれほどこの山の伝統と特権に苦しめられ煩わされて来たことか——と。

「この山のどこに、真の御仏の微光でもあるか。国家の鎮護たる大本があるか！」

信長は、満腔の怒りを、心に抑えつけながら心で叫んだ。

唐の天台山をここに移して、開山伝教大師が、

阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいの仏たち

わが立つそま杣そまに冥みよう加かあらせ給え

と、五台四明ごたいしゆめいの峰のりに法の灯ひをともしたのは、神輿みこしをかついで朝廷へ嗾訴ごうそするためだったか。政治ようかいに容喙ようかいして特権たくまを逞たくましゆうするためだったか。武力とむすび権門しそくを使嗾しそくし、世を紊みだすためだったか。——峰谷ほうたに々に、法体ほつたいへ甲かちちゆう 冑くわいをつけた化け物を蓄たくわえて、槍、鉄砲、旗さし物を、全山に並べるためだったか。

「……………」

信長の眼には、憤りから滲にじみわく涙なみだが沸たぎった。

思え。外道げどう。

叡山は、国家鎮護の霊場として、初めて、その特権も伝統もあるのである。

その本来のものは今、叡山のどこにあるか。

根本こんぽん中堂ちゆうどうをはじめ山王七社も東塔とうとう西塔さいとうの伽藍がらんも三千の坊舎ぼうしやも、法衣ほふえに武装した

化け物ばものどものすみか以外の何ものでもない。陰謀、策動の巢ね以外に、現在の世のなかへの何の役割やくわいをしているか。国家の鎮護ちんごとなっているか。民衆の心の光ひかりとなっているか。

「よしッ！」

唇に喰い入ったまま彼の齒は赤いものに染まっていた。

「——この信長を、仏法破壊の魔王と称ばばよべ、妖婦の虚飾にひとしい一山の輪奐りんかんの美も、お道化者どけものにひとしい甲冑の坊主どもも、一戦の火に葬り去って、その焼け址あとに、真まことの青人草あおひとくさを生ぜしめ、真みだの弥陀を招来して見せてくりよう！」

即日。

彼は、全山の包围を命じた。

もちろん彼の立つ所に、彼の擁ようする全勢力の兵馬は、湖を渡り山をこえ野路をいそぎ、続々として数日のうちに集まった。

一度攻め取りながら、また敵が捨て去った宇佐山の焼け址あとを、信長は、本陣とした。

「まだそこらには、討死した信のぶはる治よしなりや森可どうけ成よしなりや道家清十郎などの血も乾いておるまい。

——瞑めいせよ、忠烈なる亡魂ども、そちたちの鮮血を、あだにはせぬぞ。末法魔界の仏灯に代つて、昭々と、世を照らす燈明に、そち達の血は甦よみがえって燃ゆるであらう」

宇佐山の土を踏んだ時、信長は土に向つて合掌した。

瑜伽三密ゆがさんみつの靈場叡山を敵として、今、自己の全武力をあげて包围にかかりながら、一塊かい

の土には、掌てを合わせて哭なく信長であった。

「……………」

ふと、側を見ると、自分と同じように合掌して泣いている小姓がある。——父、森三左衛門よしなり可成うしなをここに亡うしなつた蘭丸らんまるであった。

「蘭丸」

「はい」

「泣いておるのか」

「ごめんくださいまし」

「今だけはゆるす。もう泣くなよ。そちの亡父ちちが笑うぞ」

——が、信長の眼こそ熱くなりかけていた。彼は、床几しょうぎを移させて、包圍陣の配置を、

高い所から一望した。

叡山えいざんの麓ふもとは、見わたす限り、味方の兵馬と旗だった。

叡山の峰々は、雲のかからぬ所、雲のかかっている所、すべて敵軍だった。

まず、麓の布陣を見ると。

穴田村方面には、佐々さっさ、進藤、村井、明智、佐久間の諸隊。

田中の塁には、柴田隊が拠つて、氏家、稲葉、安藤の諸隊が凸字形に、日吉神社の参道まで突出している。

香取屋敷の方面は、丹羽、丸毛、不破などの兵で埋まり、唐崎の附城には、織田大隅守——そして叡山の裏——京都に向つている方の麓口には、足利義昭、その他、在京の兵が八瀬、小原をめぐるつて、ずっと取り巻いている形にあつた。

「義昭將軍こそ、痛し痒し、さだめし物憂い顔しておろう」

信長は、その顔つきを想像して、何か、おかしくなつた。

「や。あれへ来る兵船は、何者か」

湖水をふり向いて信長が訊ねていると、やがて、

「木下藤吉郎殿、横山城の御人数のうち、七百を割いて、湖を押し渡つて、御加勢に馳せつけられました」

と、注進があつた。

間もなく、藤吉郎は、船から上がるとすぐ、陣地へ登つて来た。留守は、竹中重治一人あれば足るといふ。信長は、よく来たともいわなかつたが、不機嫌ではなかつた。

十月にはいつた。

十月の半ばもすぎた。

いつもの信長の戦法とちがつて包囲陣は、動かなかつた。——山上に籠こもつた浅井、朝倉、僧兵の聯合勢は、やつと気がついた。

「しまった！ 敵は根気よく糧道を断つて、われわれを乾干ひぼしにする作戦だ」

もう間に合わなかつた。山上の穀倉は二万余の大兵で食うのでまたたく間に空からになつた。木の皮まで喰いはじめた。

十一月となる——

山上の寒気に、またべつな苦痛が襲つて来た。藤吉郎は、かねての献策を、信長へ促うながして、

「もうよい頃でしょう」と、囁ささいた。

稲葉一鉄が呼ばれて来た。信長の旨をうけて、彼は従卒四、五人を連れただけで叡山へ、そして、僧兵の本陣である根本中堂で、西塔さいとうの尊林坊そんりんぼうと会見した。

尊林坊と一鉄とは、旧交のある仲だつた。その誼よしみとして、降伏をすすめに来たのである。

「何かと存ずれば、友人として冗じょうだん戯ごも程になされい。——降伏を乞いに来たのかと思
うたゆえ、会見をゆるしたのじや。われわれに降伏して出るとは、なにをばかな！ かく
の如く気の立つておる中でござるぞ。たわ言も、首と相談で申されたがいい。あはははは」
尊林坊が、肩をゆすぶつて、哄笑すると、他の法師武者たちは、殺気を眼に燃やして、
一鉄の唇くちもとをねめつけていた。

先方に、いわせるだけをいわせておいてから、一鉄は、徐おもむろに口を開いた。

「大師でんぎよう傳でん教ぎようが当山をひらかれたのは、王城の鎮護、国土安泰のためと承知いたすが、
かつちゆう

甲か 冑ちゆうをまとい、劍槍を羅列られつし、政争かかに関わり、武略もてあそを弄び、朝命そむに反く兇兵くみに与して、

王土の民を苦しめよとは、よも天台の立願りゆうがんではあるまい。とはいえ、一山の大衆もま
た、われわれ武臣も、いずれか皇土の臣でないものはない。かくの如き争乱は、みな宸しんき
襟んを悩まし奉るものである。——大悟せられよ、僧は僧きみに帰命きみようせられよ。速やかに、
浅井、朝倉などの徒を、山より追い下し、各各には武器をすてて本来の仏弟子に返られい」
腹からの声である。

この間、山法師たちには、一語をさし挿はさむ隙も与えなかつた。

「——もしまた、命に従わねば、信長様にも、これまでとあつて、根本中堂、山王七社、

三千の坊舎、峰谷々をも焼きつくし、一山の輩、麤殺しになさるべしとの御決意である。

——我意なく、冷静に、お考えありたい。——当山をして、地獄と化すか、旧態の悪風を一掃して、霊地の一燈を保たるるか」

突然、法師側の間から、

「無用、無用ツ」

「詭弁だツ」

と、どなる者があつた。

「しずまれ」

尊林坊は、それを制しながら、苦笑をふくんで、

「非常に陳腐で退屈な御説教であつた。そこで、謹んでお答え申そう。叡山には叡山の権威があり、信条もある。要らざるおせっかいというほかない。一鉄どの、日が暮れる、はやはや下山されよ」

「尊林坊、おぬし一存でよろしいか。一山の碩学、長老をも会し、慎重に御僉議あつては如何だな」

「一山一心一体。尊林坊がことばは即ち全山の声でござる。さもなくて、何でこの山の嶮

に信長調伏の旗を立てようや」

「では、どうあつても」

「愚^ぐや。愚^ぐや。われわれは飽くまで、武力の侵略者と抗争する。血をもって、伝統の自由を守る。帰れッ」

「左様か」

一鉄は、起ちもせず、

「……浅ましや、なぜ、その血をもつて仏光の無限大なるものを護らんか。——おぬしらの護らんという自由とは何？ 伝統とは何？ それは皆、自己の榮華にだけ都合のよい偽^ぎ瞞^{まん}の護符^{ごふ}ではないか。もはやそんな護符が通用する世ではないぞ。時勢を直視なさい。眼をふさいで時の潮^{うしお}を邪^{よこしま}ける利己心の亡者どもは、春秋の落葉と共に焚^{ふん}殺^{さつ}さるるもぜひあるまい。——尊林坊、その他の法師衆、悔ゆるなよ。ではおさらば」

稲葉一鉄は、下山した。

冬は十二月となつた。凧^{こがらし}は、枯葉を吹いて、嶺^{みね}の空を翔^かけまわる。

朝夕は霜。——折々には、雪まじりの寒風が吹いて来た。

すると、この頃になつて、毎夜のように、山には出火が頻^{ひん}々と起つた。ゆうべは、横^よ

川の大乗院の薪倉から、おとといの夜は、飯室谷の滝見堂から、小火があつた。

こよいもまた、まだ宵なのに、中堂の坊舎から、火災が起り、さかんに鐘を鳴らしていた。附近には、大きな堂閣が多いので、法師武者は、消火に必死だった。

真つ赤な空の下に、闇の谷。——叡山の谷々は深い。闇は濃い。

「アハハハ、あの慌てざまは」

「毎夜のこととて、寝るまもあるまいて」

「笑止笑止」

猿の群れではない。異装な黒い人影である。風の梢にのぼって手を叩いていた。彼らは、木の実にあらぬ干飯の弁当を喰いながら、毎夜の火事を見物していた。

夜ごとの出火は、藤吉郎の献策で、その家中である蜂須賀覚が得意の仕業であるなども——近ごろようやく噂されて来た。

夜は怪し火の頻発に悩まされ、昼は防備につかれ、そして、喰う物は尽きるし、防寒の用意もない。

山は、霏々と、雪の吠える冬になった。——二万の兵と、数千の山法師も、今は、霜げた菜のように意気も失せてしまった。

十二月の中旬だった。

武装を解いて、ただの僧衣となった代表者一名が、法師武者四、五名連れて、

「織田殿に会い申したい」

と、陣門へ来た。

信長が会つてみると、それは先に稲葉一鉄と会見した尊林坊であつた。——一山の意見が變つて来たので、和議を進めたいという口上であつた。

「ならぬ」

信長は、一言に退け、

「先にわれより遣わした使者に何と申したか。恥をこそ知れ」

と、陣刀を抜いた。

尊林坊は、おどろ愕いて、

「あッ、御無法なッ」

よろ躊めき立つところを、いっせん一閃、か戛ツと横に払つて、

「法師ども、その首を拾うて帰れッ。信長の返事はそれだ！」

随員の法師たちは青くなつて、山へ逃げ帰った。——その日、大湖を渡ってくる雪みぞ

れは、信長の陣へも強く吹いていた。

信長は、鉄の意志を、叡山の使いへ示した。しかしその時、彼の胸にはまた、べつな大難に対する処理が考えられていたのであった。

前に見える敵は、多くの場合、壁に映っている火事の影にすぎない。

壁に水をかけていても火は消えない。そのまに、ほんとの焰は背へ燃えついてくる。

兵法に誡めてある常識だ。しかも信長の場合は、知りながら、その火元とは戦えなかつた。

——つい昨日。

岐阜表から急報がはいった。

甲斐の武田信玄が、兵を催して、留守を襲わんとしているというのである。

また。

本国尾張の長嶋ながしまに、数万の本願寺門徒が蜂起ほうきして信長の一族彦七郎信興のぶおきは殺され、

その居城は占領された。そして良民のあいだに、あらゆる反信長の悪声を放ち、甲斐の武田勢を誘導する工作にかかっている——ともあった。

信玄がそう出て来たのは、領うなずかれた。

「織田家とは姻戚の縁を断つた」

と、いうことを、彼は近頃、公然と声明していた。

一面、年来の呉越の敵、越後の上杉家とは休戦を調べて、専ら、志向を南方から西進へ転じて来ているのである。この傾向は、信長にとつて、実に、何ものよりも警戒を要するところだった。

また、そういう悪い条件は、いつでも、退つ引きならない場合を計つて、突然、鉾をあらわすものでもあった。

「藤吉郎。藤吉郎ッ」

「はッ。——御前に」

「光秀の陣地を訪れ、光秀と同道して、すぐ、この書面を携えて京都へ使いせい」

「これは、義昭將軍への」

「そうだ。將軍家に、和議の仲裁をいたすように、それとなく、書中認めてはあるが、そちの口からも……。よいか」

「心得ました。……しかし、つい今し方、叡山からの和睦の使者を、首にして、追い返されませんでしたか？」

「わからぬか！ ああせねば和議は纏まとまらん。たとえ成立しても、わが足下あしもとを見て、和議などはすぐ反古ほごとし、追い撃ちして来るは明らかである」

「御意。わかりました」

「いずれにせよ、どこの炎も、火元はひとつ、火悪戯ひいたずらのお好きな、あの両面の公方殿の仕業に相違ない。——その公方殿に、わざと和睦の仲裁をさせて、急に軍を退ひくのだ。秘かにだぞ。急いで行け」

和議は、成立した。

公方の義昭は、三井寺まで来て、信長を宥なだめ、和睦のとりなしに努めた。——が、それは表面のことで、そうさせたのは信長であるこというまでもない。「よい機しお」とばかり、浅井、朝倉の両軍は、即日、本領へ帰ってしまった。

ああ拙せつなる哉、浅井朝倉の徒と。この折、四国撰せつしう州などの同心へ申し合せ、山上に越年の覚悟もて、信長を引寄せおかんには、さしもの織田勢も、後方の憂ひはあり、四圍の情況すべて利非ず、遂には、大将まで危ふからんものを、和睦にたばかられ、早々陣をひき払ひ、嬉々ききとして故郷ふるさとへいそぎ帰る。今にみよ、ふたたびその故郷をも信長に討ち取られんと——その頃の人々、みな笑ひ合うてぞあたりける。

当時の世評は、その始末を、物の本にも誌しるしていた。

十二月十六日。信長の全軍も、陸路、勢多せたの舟橋を渡つて、岐阜ぎふへひきあげた。

翌日。——藤吉郎の木下隊七百人も、唐崎の浜から兵船で、対岸横山城へさして帰還した。

「ああ、久しく便りも怠なげっていた。……母上へも。寧子ねねへも」

その船中。藤吉郎は、囲いの内で、筆をとりながら、洲股すのまたの領地へ想いを馳せていた。——何とや書かん？ 母へも妻へも書きたいことが多すぎる。筆を持つと、ただ想いのみ乱れてくる。

——と。すぐ近くで、部下の将が、何か兵をどなりつけたような大声がした。それと共に、さぶん——と烈しい水音が聞え、彼の膝や、懐紙にまで、飛沫しぶきがかかったので、何事かと、胴どうの間まへ出てみた。見れば、この極寒、ひとりの若い士卒が、湖へ蹴落しされていた。今にも凍え死なんばかり、顔も紫いろになって、アプアプ波間にもがいていた。蹴落しした水夫頭かこがしらは、

「泳げ、泳げッ。船と一緒に横山城まで泳いで来いッ。死しに損そこなうのも一生の葉だ」
と、酷むごいことばを水面へ投げて、また大声で叱しっていた。

「どうしたのだ？」

藤吉郎が訊ねると、水夫頭かこがしらは、あわててひざまずいて、

「申しわけがございませぬ。大切な御士卒を、酷むじい目にあわせましたが、私事の怒りで仕し置おきはいたしませぬ」

「いや、咎とがめるのではない。あの兵が、どう軍紀をみだしたか訊くのだ」

「あの者は、帆綱番ほづなばんにございます。正しい進路をとるため、舵かじ把りへも、帆綱番へも、何番綱張れいとか、弛ゆるめるツとか——絶えず絶えず手前から号令をかけます。ところがあの兵は、何かぼんやりして、とかく、帆がたるみますゆえ、駈かけ寄って、一つ横顔を撲りつけ、なぜかと質ただしたところ、ちようど今、自分の生れた田舎あづちの安土村がついその岸に見えたので、母親のことを思い出していたと答えますゆえ、ばか者ツ、お引揚げでも、まだ陣中であるぞ、もう戦いくさがすんだ気になっておるのかツ——と、全軍の士気のため、またこの船の進路のため、心を鬼に持って、湖へ蹴落したわけがございます」

水夫頭かこがしらの眼には涙が見えた。この水夫頭も、もう人の子の親らしい年だった。

「よく、いたした。——が、もうよかろう、綱を投げてやれ。許してやれ」

藤吉郎は、困いへ戻ると、懐紙も筆も投げすてた。そして寒風のふく舳みよしへ出て、屹きつと鉄

の如く、立っていた。船は白波を嚙んで進む！ 正確に進んでいる！ 帆綱はみな張りつめていた。

「部下に恥かしい！……」

藤吉郎は、痛切に思った。一個の信長は、今や天下に無数の信長を作っていた。そう知る自分もまた、いつのまにか、信長の分身の一つとなつていることに気がついた。

東風吹く一隊

一月の半ばであつたが、江南の春はもう梅も綻ぶほどあたたかい。

道々、伊吹のすそや不破の山かけには、まだ雪も深かつたが、滋賀のさざなみに照り映える陽を横顔にうけて、湖畔をのたりのたり練つてくると、よいほどに汗ばんで、行列の兵卒たちも、歩きながら眠たげであつた。

「重治。お許も睡たかろ」

馬上、藤吉郎はふりむいて、左右に従う五、六騎のうちの一人へはなしかけた。

半兵衛重治は、うつむいたまま、駒にまかせて、主人のあとに従っていたが、面をあげ

るとニコとして答えた。

「湖南の東風、鞍上の揺られごち、何とも堪りません。——思わずうとうといたしました」

「やはり居眠っていたのか、さてきて、そちらしくもない」

「面目ない態をお眼にかけました」

「いや、それをいうのではないよ。御身は、われらのような武骨一片とちがい、わが麾下ではただ一人の風流子ではないか。風流を解すその方が、このたまたまな好日を、詩もなく歌もなく、黙々、俯向いてばかり行くのはどういうものか。——ひとつ吟懐でも聞かせんか」

「おそれ入りました。なおさらもって、面目ない次第ですが、歌もありません」

「ないか。……ハハハハ」

「ただ睡とうございます。おゆるしく下さい」

「居ねむりを許せとか。むりもなかるう。昨夜も旅舎で深更まで皆と話しこんでしもうたからな。実をいえば、この方も睡たいのだ。久々で洲股に立ち帰り、母上やら寧子やら弟どもにかこまれて、滞留二日のあいだ、ひと夜は語らい明かし、ひと夜は双六のお相

手でまたねむれず——すっかり寝不足がたまつてしもうた」

と、他の家臣たちをも見まわしながら、からからと笑い出して、

「いや、よい正月、よい正月。……どの顔もみな睡ねむそうな」

と、大声でいった。

騎馬のあとには二百人ほどの歩卒がつづいて来る。彼の大声にみな眼を揃えて前のほうを見た。

(——実に陽気な御主人だ。天下の春は御主人の顔から立ち昇っているようだ。戦場にあつても、こういう旅のあいだも、屈くつたく託らしいお顔はみたことがない)

一将の顔は万卒の顔である。藤吉郎が笑つたので、みな笑えみをおびる。彼の明るい放声にすべて眼がさめたように歩調もあらたまる。

ことしの正月は元龜げんき二年であつた。

永禄十三年とかぞえられるところ、去年四月、改元になつたので、何か一年とびこえたような気がすると誰もいう。

つい年暮くれの十二月、叡山えいざんの和議を容いれて総引上げとなるとすぐ正月であつた。藤吉郎は、姉川の合戦このかた、浅井、朝倉の抑えとして、もと浅井の驍ぎょうしやう将大野木土佐守が

こもつていた横山城にはいつていたので、当然、正月はそこに帰っていた。

だが明ける早々、年頭の賀をのべるため、彼は岐阜城におもむいて、信長に謁し、さらに数日のいとまを賜つたので、その足で洲股すのまたへと廻つたのである。そして久しぶり、妻の寧子ねねや母や兄弟たちの許でふた夜をたのしく泊つて来た帰り途であつた。

「重治しげはる。重治」

藤吉郎は、また何か、話しかけようとするらしく彼に向けたひとみであつたが、その眸ひとみを大きくみはつて、

「どうした？ 重治ツ。……これはいかん、重治を抱きおろせ」

と、あたりの者に命じながら、自分も鞍をとび下りてしまった。

——実は。

彼と駒をならべて来た人々はみな気がつかずにいたわけのことでもない。

半兵衛は、鞍の前輪にかがみこんだまま、手綱たづなを腹で抑えているように、駒のたてがみへうつ伏していた。

——が、今し方まで、主人の藤吉郎と、睡ねむとうてならないなどと、元気に話を交わしていたので、ほんとうに居眠つてしまったものと、怪しみもしなかつたのである。

「や。やツ？」

「どうなされた」

藤吉郎にいわれて初めて、同僚の人々も愕おどろいたのであった。——抱き下ろそうとして寄つて見た時は、呼吸いきもしていないかと思われるほど、竹中半兵衛重治の顔は、蒼白となつていて、眉はくるしげに二すじの針をよせていた。

「御発病だ」

「これは重い。火のようにお熱がある」

抱えおろす家臣たちの手へ、藤吉郎はそばから、

「そつとせい。……そつと、そつと」

自身の武者羽織を脱いで、草のうえに展ひろげ、その上へ共に手を添えて、静かに寝かした。半兵衛の病弱は、誰よりも藤吉郎自身がよく知っている。——思えば無理をさせた、と、今さら悔まれもする。

極寒十二月、坂本の陣から帰つてくると、すぐ正月、また旅路と、持病のある彼のからだには、こたえていたにちがいない。ゆうべも深更まで側において、興のつきないまま夜よ更ふかしをさせた。悪寒さむけがすると眩つふやいていたが、丈夫な自分にはつい思いやりが足らなかつた。

「あいにくだ。供のうちに医者はおらん」

「おりませぬ。葉は持参しておりますが、それも半兵衛どのの御持症に、合薬とは参りま
すまいし」

「飲ませぬよりはましではないかな。半兵衛の持病は、いつもこう熱が出る、咳せきこむ、そ
の後、食物が細る……といったようなふうだが」

「さあ、それよりも、附近の農家へでも一時あずけて、静かにお寝かし申したほうが」

「むむ、至極道理だ。……わしは少しあわてたとみえる。ここは今いまはま浜はまだな」

「左様にござります」

「今浜ならば、丹羽にわ殿の陣所があるわけ。まだそこへは遠いか」

「遠とほござるが、そつと、負うて参るぶんには」

「胸おをお圧おしては病やまいに悪わるかろう。……はてな」

こんなにも当惑そうに案じる、主人の顔というものを家臣たちも見たことがない。しか
し藤吉郎が、その竹中半兵衛重治ひとりを麾下きかに迎えるため、かつては栗原山の山中に七
日も通つて行き、慇懃いんぎんさんご三顧の礼をとつて、ようやく彼に出しゅつろ廬の決心をさせた、あの熱
意を思い合わせれば——さもあろうかと、家臣たちは、むしろ彼があわてる様をたのもし

くさえ見るのであった。

「殿さま。殿さまッ」

——時に、思いがけなく。

彼方かなたの湖の岸のほうから、そうさげびながら二人の童子が駈けて来た。

ふたりとも小姓姿である。そしてこの行列の中にいた者であったが、素迅すばしこく、いつのまにか湖岸へ駈けて、すぐ戻つて来たものとみえる。

「おお於市おいちに、於虎おとらか」

虎之助は十一歳。市松はそれより五つか六つ年上だった。共に、洲股すのまたの城に養われていたが、こんど藤吉郎が立ち寄つたしおに、はや年齢としも年齢、ぜひ前線の横山城ともなに伴つてくれと、当人も縁者どももせがむので、乞いにまかせて供のうちに加えて来たものだった。

「なんじや兩名」

「はい」

虎之助は眼ばかりうごかしてみせる。まだ十一歳だし、主君の前では、ものがいえないふうなのである。それから較べると、市松のほうはもうずっと大人おとなびている。

「すぐ、あそこの浜に、小屋もあります、医者もいるって云いました。近いから、そこへ

御病人を持ってゆくのが一番でしょ」

と、湖岸を指さした。

そこからも見える——

彼方かなたの湖岸には、仮小屋らしい長い棟が幾つも並んでいた。

それは藤吉郎も家臣の人々も知らないではなかったが、遠く、鑿のみや手斧ちようなの音がきこえてくるので、急病人をつれて行ったところで、手段はあるまいと考えていたのである。

大人は、智に訴えて智まじに惑い、少年は、機転をすぐ実行にうつす。

いつのまにか、そこの間を、一走りに往復して、あれまで行けば、立派に手段のあることを、二人の小姓は慥たしかめて来たものだった。

「でかした」

藤吉郎はまず褒めてやった。虎之助と市松は、満足して、顔の汗をこすりながら退ひきさがった。

「ともあれ、あれへ」

と、藤吉郎は自身、先に馬をすすめて、道を曲った。

病人を護つて、従者や卒の列もつづいてゆく。

畑道をうねる。低い並木堤をこえる。

すぐに湖畔である。見ると、土手の陰に沿って、街道からながめたよりは遥かに多くの建物が建ちならんでいた。

「ほ？ いつのまに」

藤吉郎は眼をみはった。

丹羽五郎左衛門長秀持場。

と、書いた杭が打つてある。ここでは今、十数艘の兵船が造られていた。新しい船底や肋骨を組みかけた巨船が渚に沿って並列している。耳もふさぐばかりな鑿、手斧のひびきは、それにたかつて蟻のごとく働いているたくさんな船大工の手から発するものだった。

ふと。

一艘の舳のへりに立って大工や人夫を督励していた奉行らしい男は、それへ来た藤吉郎の列に気づくと、

「何者だツ」

と、舳からとび降り、けんもほろろに、駈け寄って咎めた。

「横山城の木下藤吉郎」

彼は、馬を下つてまた、ていねいに訊ねた。

「丹羽殿はおいでか」

「おお木下様でしたか。主人長秀は、今し方まで、検分に見えておいででしたが、はや今浜の御陣所へ帰られました」

まぎれもないその人と分つたので、奉行はにわか態度をかえて、

「——何か御急用なれば、今浜の方へ、使いを走らせませんが」

「いや、それには及ばぬ。実は供の中に、急病人が生じたので、一棟の小屋と医者を拝借したいと思うて参つたが、医者はおろうか」

「おやすいこと。てまえの仮屋までお越しくだされば、如何ようにも」

「其許は」

「丹羽家の臣、島木筑後です。先頃よりは、ここの船造奉行を仰せつかっております」

「島木殿か。ともあれ、早速にたのむ」

「御病人は」

「あれにおる者だが」

ひとりの背に負われ、幾人かの同僚に勞いたわられながら、病人の半兵衛重治は、島木筑後の飯屋に導かれて行つた。

彼方の柵さくのうちに、船普請役所が見え、それに附属した役宅が幾棟がある。藤吉郎は後に佇たたずんだまま、

——これでまず安心。

と、いったような顔して見送つていた。

「お床しよぎ几を」

小姓の市松と虎之助が、うしろに控えてそれをすすめる。彼は黙念と腰をおろしたまま、またたきもせず、ここの造船作業を見ていた。

もちろんこれは信長の企画きかくである。叡山えいざんや京都や難波なにわの変に駈けつける日の備えであることもいうまでもない。

岐阜ぎふから陸路をいそぐ場合、いつも途中一向宗の僧徒や、各地の残敵にさまたげられて、意のごとく捌はかどれない恨みがある。

——で、邪さまたげのない湖上を押しわたつて、ふたたび叡山以西に出軍する日の遠からぬこ

とを、藤吉郎も今思いあわせた。そしていつもながら信長の先見と、その予見を確実に実行してゆく敏速に、敬服せずにはいられなかった。

やがて、そこへ。

先に病人につき添って行った家臣たちはもどつて来た。案じ顔して、床しょうぎ几に待つていた主君のまえに、堀尾茂助はひざまずいて、半兵衛重治の容態をこう復命した。

「もはや、ご心配はないかと思われます。島木殿の仮宅に落着かれ、さつそくお医者の手で薬をさしあげました。しかし少々お口より血を吐かれましたから、なお十数日は、絶対にうごいてはならぬとお医師のご注意でございました」

「なに、血を吐いたと」

藤吉郎は、眉をくもらせて、

「……では、重態だな」

「いえいえ、落着いて、薬を召しあがられると、竹中殿には、いつものように、すずやかなお気色で、血を吐くことは今日のみではないと……微笑しながらお医師に答えておいででした」

「その我慢がむりになるのだ。……そうか、血を吐くのは毎度といったか。平常、わしに

はかくしていたとみえる」

「わたくしどもへ向つて、幾度となく、御主君は、御主君は……と、頻りに気をつかつておられる様子なので、はや先へお立ちと申して、むりに押しなだめて戻りましたが」

「誰か、看護みどりにのこしおかねば、あの気性、じつと、寝てはおるまい。——又十郎」と、彦右衛門の甥おい、蜂須賀又十郎をふりむいて、

「おぬし、茂助と共に、あとに残つて、半兵衛の枕元に附添つておれ。——帰かえり途みち、丹羽殿にも会うて、よく頼んでおこう程に、充分、身を養つて、恢復いたすまでは、横山城へ歸つては相成らんと、藤吉郎がかたくいうたと半兵衛に申しつたえよ。よいか」

「かしこまりました」

「立とう」

彼の前に、馬が曳かれ、床几が畳まれた時である。

材木をかついだ人夫の群れが、そこから少し彼方かなたを通つていた。みな造船の用材らしく、巨材の後先に縄をかけて、肩もめいりこむばかり四天よてんに吊つて行くのだつた。

——と、その中に、色の小白い人夫がいた。こういう荒仕事にはまだ馴れないらしく、足もとも危うげに、顔をしかめながら、材木のはなを担かついでよたよた歩いていたが、ふと、

藤吉郎のほうを見ると、

「——あツ？」

驚いたはずみに、四天の棒を、肩から外してしまった。

ふいに、一方の者に肩を外されたので、相棒の人夫もよろめいた。のみならず材木のはなが、その人夫の足の甲にどんと落ちたので、

「あ痛ツ」

悲鳴をあげて、仰山に、ぶつ倒れた。

すぐほかの人夫が寄つて来て、材木の下から足を抜いてやった。人夫らしくない痩せがたの男は、自分の過失におののいて、

「ごめんなさい。どうかご勘弁をねがいます」

と、もう当然な折檻が降りかかるのを恐れてか、頭をかかえて、地に額をすりつけた。

「まつ、まぬけめツ」

ちんばを引きながら起ちあがった被害者は、まつ蒼な顔いろして、いきなり相手を撲りつけた。それでも、腹が癒えないとみえ、耳を引っぱりながらさげんだ。

「おいツ、みんな、手をかしてくれ。この野郎のどじときたら、一度や二度のことじゃあ

ねえ。力仕事に馴れねえなら、日傭ひやといなどに来なけれやいなんだ。賃銀泥棒だ、こいつあ。
——おいッ、くせになるから、ふくろ叩きにして、湖水へたたッこんでくれ」

「ア。ごめんなさいッ」

男は逃げまわった。

逃げたが却かえつて悪い。彼らの野性をよけいに駆りたてた。多勢の荒くれどもは、その襟えりがみをつかみ、蹴なぐる、撲なぐる——の存分を振舞いながら、渚なぎさのほうへ引きずって行つた。

「茂助、茂助ッ」

藤吉郎は、あわただしく、指を彼方にさして命じた。

「助けてやれ。そして、打ちやうちやく擲ちやくされているあの男、試みに、これへ連れて来い」

堀尾茂助は駈けて行つた。

——此方こつちで見ていると。

茂助は、大喝して、人夫たちを叱りとばしている。そして今にも湖水へ投げこまれるところだった男を、いきなり自分の肩へ奪かっつてひつ担かっぐと、無造作に駈けもどつて来た。

「連れて参りました」

肩から投げ出すように、その弱々しい人夫を、藤吉郎のまえにひきすえると、男は、

「おゆるし下さいまし。どうかおゆるしを」

と、まだ悲鳴に似た声ばかりつづけて、顔を地から離さなかった。

藤吉郎は、そのすがたを、いつまでも凝視していたが、やがて、

「おもて面をあげい」

と、穏やかにいった。

癡動てんどうしていた男も、ようやく落着いてきたらしいが、どうしても顔をあげようとはし

なかつた。

「これッ、面を上げんか！」

堀尾茂助も云い、家臣たちが、側から叱咤しつたしたが、それでもなお、彼は雑巾ぞうきんのように、

べたと、顔を伏せているきりだった。

「つんぽか！ きびきび汝は」

蜂須賀又十郎が、遂に癩癩かんしゃくをおこして、襟がみへ手をのぼしかけると、藤吉郎は、

「待て。つんぽではない。すこし仔細がある者だ。——手荒にするな」

と、制した。

そして、じつとそそいでいた眼を離すと、歩み寄って、土まみれな男のそばへ片膝を折

つた。

「於福おふく。……なぜ顔を上げないか。そちは尾張新川の茶わん屋捨次郎の息子、福太郎に相違あるまい」

「……いえ。いえ違います」

男は、胸に顔をうずめたまま、身をそむけて、全身でわなないていた。

「はははは」

藤吉郎は、わざとのように笑って、しかも親しげに、その肩を軽くたたいてやった。

「なぜそのように恐れるのだ。尾張新川は、わしの故郷中村ふるさとの隣村。それだに懐かしいものを、わけてわしと其方そちとは、七つ八つの腕白時代からよく遊んだ幼友達ではないか。……こら！ おたんこ茄子なすの於福おふく！ あはははは、何を泣くか。その年になつても、未だにそちは泣虫とみえる」

「……め、め、面目次第もございません」

「何、面目ないと。……ああそうか。そちの父、茶わん屋捨次郎は、あの近郷では手びろく商いしていた大家、その若主人が落ちぶれ果てたすがたで、面目ないと申すのか。——それともまた、その茶わん屋にわしが丁稚奉公てつちほうこうしていたあいだ、主人の息子であったそ

の方が、事ごとに、幼いわしを虐めたから、その仕返しを受けはせぬかと、それを恐れて顛わなないておるのか。……案じぬがよい、中村の日吉は、そんな小僧ではなかつたはず、そちも覚えてゐるだろうが」

「……はい、はい」

福太郎は、鼻をつまらせて、嗚咽おえつしだした。

藤吉郎がまだ日吉とよばれていた頃、たしか彼のほうが二ツか三ツ年上であつたから、ことし三十五歳の藤吉郎に対して、彼もすでに三十七、八になつてゐるはずである。

「供の中について来るがよい。帰城の後、身の上も聞いてやろう。——来いよ、悪いようにはせぬ」

そういつて藤吉郎は、鞍の上に身をうつした。家臣は、彼の命のまま福太郎を促うながして供のなかに歩ませた。

堀尾、蜂須賀のふたりは、後に残つて、

「では、わたくしどもは、竹中殿の御全快まで、これにおりまして」

「むむ、半兵衛の看護みとりを頼んだぞ。くれぐれ軽はずみをさすな、気を労つこうて帰城をいそぐなど、半兵衛にも伝えおけよ」

卒は槍を立て、騎馬の人々は、彼の前後に立つて縦隊を作った。於市と於虎も、その中に歩き出していた。

獅子ししの乳児あかご

ここここのの北国街道は、近江おうみから越前への唯一の通路だった。

鳥越山とりこえやま、高時山、横山岳などのふもとを縫って、道もようやく嶮けわしくなる頃、日は没

して、湖北の水は遠く左手のほうに暮れている。

浅井長政のおたに小谷の城も、その途中にあった。

「才。灯がともった」

なんの故か、藤吉郎は、小谷の城の燈火ともしびに、そうつぶやいて、殊さらに駒をとめた。

江北六郡に三十九万石を領有する浅井家の居城は、さすが難攻不落の地形にある。

(これを墜おとしすは容易でない)

そう嘆じている彼であろうか。

非ず。

彼の眼には、その要害のなかに安んじている曲輪曲輪の燭や狭間の灯が、儂いものとして見えたとである。

——いつまでのまたたきか。

と、浅井一族の上にやがて来る日を、あわれむが如く、笑うごとく、見ないでいられたかった。

それと。

彼が心ひそかに傷んで熄まないものは、その城中に嫁している主人信長の妹君にあたる人の境遇であつた。

お市の方。

こんど年賀の拝をなしに岐阜城へのぼつた折も、信長はいくたびとなく口に出して案じていた。

それはまた天麗の美質といつてよいほど美しいお方である。佳人薄命ということばは、そのまま今のお市の方の身の上にあてはまる。

兄信長の政略のために、その天麗をもつて浅井家に嫁がせられ、良人の長政と信長とのあいだが不和となつて、互いに敵国として呼びあう羽目になつた時には、もう三人の子を

なして、まだ二十歳を幾つもこえない若さで母とよばれる身になっていた。

去年の暮。

將軍義昭のとりなしで、叡山とも、浅井朝倉の両家とも、織田家としては、和解したことになるもの、決して永久なものでないことは、その後の諸国のうごきや、僧団の依然たる攪乱策が証明している。

浅井長政にしたところで、もちろんその底意に变りはあるまい。彼は信長の妹婿として、信長には誰よりも愛されていたことを知っている。——しかも信長とはどうしても心から提携できない性格だった。

若人ならばすべてが新時代を理解する若人であろうとはいえない。若い生命をもちながら、時の真髓をつかめない若者もある。長政などは、それだった。

信長の行動は、彼にはただ危険にしか見えなかった。あの行きかたで、時代をつらぬいて行けようとは信じられないのである。——ために、理性に富む彼は、越前の朝倉とむすび、叡山その他の僧団と款を通じ、旧態の將軍家をなお恋々と奉じている。

(——所詮は、ふたたび)

信長の思うところは、長政もふくむところに違いなかった。——そして藤吉郎の今の位

置は、この小谷の城から越前へ通ずる北国街道の途中にあつた。両家をつなぐ動脈の一道を、横山のふもとと横山城に遮断して、越前の朝倉と、江北の浅井家とを、両手に抑えて
 いるかたちだつた。

「急ごう。星が出た」

横山城まではもう一里余しかない。藤吉郎以下、行旅の列は黒々あるき出した。そして
 はや、各々が各の罅を眼にも思いうかべていた頃、

「やツ、火の手ではないか」

「おツ、御城門だ」

山陰の道を出たとたんである。人々は愕然とさげんで騒ぎ立つた。これから帰ろう
 とする砦のあたり、夕星の空をそめて、赤い火気がたちのぼっているではないか。

何の号令も聞かないうちに、二百の将士は、戦支度を一瞬にして、

「さては、敵が」

と、各々、総毛だつた顔してさげんだ。

「浅井か、朝倉か」

「御不在をうかがい知つて、留守へ襲いかけるとは、小癩な敵兵」

「御和睦ごわぼくの直後というのに、卑怯な策謀、蹴ちらして、眼にも見せねば」

眼に彼方かなたの炎をにらみ、齒に唇をかんで、藤吉郎の命令一下をまちかまえた。

「……なるほど」

駒の背から藤吉郎も火の手を見ていたが、やがて洩らした声は、至極悠長な——なるほど——であった。

「躁さわぐな」

まず、うしろへ向つていった。

「わが横山には、小城なりとはいえ、留守として、蜂須賀彦右衛門がおる。半兵衛の弟竹中久作もおる。多士たしせいせい濟々だ。やわか、あれしきの火の手に陥おちよう」

暗い山風のなかで、からからと笑い声が聞えた。

つづいて、天蔵天蔵と呼ぶ声がある。はつと、渡辺天蔵が列からぬけて、彼の馬前にひざまずく。

「物見して来い」

「はッ」

一個の影が飛んでゆくと、藤吉郎はまた、

「新七はおるか」

と、騎馬の中を見まわした。

「これに！」

青山新七が高く答える。

「そちも行け。そちは馬のままがいい」

「心得ました」

青山新七は、馬のしりに一鞭あてて駈けて行った。

次々に六、七名を放った。

それらの面々が、やがてすぐ物見から帰って来ての報告を総合すると、ほぼ敵方の実体と、火の手の程度がわかった。

人々の想像はちがわない。敵はやはり浅井家の一族だとある。

浅井七郎右衛門、同げんば玄蕃という者に、三田村右衛門大夫の兵が合体して、およそ八百人ばかりが、横山城の城戸きどへ枯柴かれしばの山をつんで、焼き立てているところという。

「攻口を取っている敵はそこだけか」

「からめて搦手は山、水の手も無事です。ただ西の城戸きどに、ときこえ関の声はしましたが、御城内の守り

がかたいとみえ、頑として、ただ餌こたまがするだけのようでした」

「よしッ、このまま、清水沢の鼻まで進め。忍びやかに！」

はじめて方向が示される。馬も兵もこれまで来た歩速と変りなくうごいて行く。そして清水沢の丘をうしろにひそと陣容を取った。炎を浴びている城門は近い。そこへ迫っている敵の影も蟻ありのように見える。時折、喊かんせい声をあげ、鉄砲をうちこみ、炎へ柴を投げこんで、火勢と共に、突き破ろうとしているのである。

藤吉郎は、鞭むちをあげて、

「行けッ。討て！」

ありつたけな声量で号令した。馬と兵は、黒い横波となって駈けだした。そして敵のすぐ背面に迫ると、その一人一人が、からだ中からふるい出して、うわーッと一度に武者声をあげた。

藤吉郎は前進しない。彼はわずか数名の者と共にあとに残っていた。寥々りょうりょうたる人数にすぎないが、彼のいる所、すでにそのまま総司令部である。

「於市、於虎」

「はいッ」

「床しょうぎ几を持って来い。そして二人ともこれへ上がって来い」

駒をすてた彼は、小高い丘へのぼっていた。そして床几に腰をすえると、前方の火の手に面おもてを赤々と焦こがしながら、しばし唇くちをへの字にむすんでいた。

微塵みじんに似た火の粉の柱が、新しい黒煙と共に高く噴いた。

城門の一角が燃え落ちたらしい。

寄手は、それツとばかり、一団になって、遮二無二、火と煙をくぐって、中へなだれ入ろうとしていた。

突然、うしろから思わぬ猛兵が突撃したのは、その時だった。

「裏切りかツ？」

寄手の将はうろたえて、そう呶鳴ったほどである。

何ぞ知らん、藤吉郎直属の城兵であろうとは。

血戦は、火雨ひさめを浴びながら展開された。

にわかに、後を向いて、ふいの敵を迎えた浅井軍が、戦鬪の当初からすでに乱れ立っていたことは当然だった。

城中の兵は、

「味方だツ」

と、告げ渡つて、

「殿がお帰りになつたらしいぞ。助けによつてこの城が保つたなどと、城外の味方に笑われるな」

どよめき立つて、西の城戸きどをひらき、また、火焰をついて躍り出る者もあつたりなどして、完全に、寄手の兵をふくろ包みにしてしまつた。

見るまに、無数の死体が、火焰の下に捨て去られた。敵は一たまりもなく潰走かいそうしたのである。逃ぐるを追つて、首をあげた者が、彼方此方の野や河原で、声いッぱい、名乗りをさけんでいる。

「追うな、長追いするな」

城中でしきりに呼ばわっているのは留守居の蜂須賀彦右衛門であろう。しかし勢いはとまらなかつた。逃げる敵の悲鳴か、追いまくる味方の声か、ごうごうと曠野こうやの闇をふく風のような震撼しんかんが、しばし何処ともなく揺るがしていた。

——床几しやうぎをすえて。

さつきから、ここ清水沢の丘で、戦いくさのもようを眺めていた藤吉郎は、

「よし、片づいたな」

焚火たきびの火でも踏み消させたぐらいな気やすさで、独りうなずいていた。

「於虎おしら。——於市おいち」

「……………」

ふたりの小姓をかえりみて呼んだ。ふたりはすぐ近くに立っていた。けれど、どっちも棒を呑んだように、彼に呼ばれても気づかないふうだった。

「そうもあるう」

藤吉郎は咎とがめなかつた。むしろ微笑をもつてその二人をながめた。

ふたりとも、戦いくさというものを、初めて見たにちがいない。眼をまろくして、魂も彼方へとぼしている容ようす子に見える。わけて十一歳の虎之助のほうなどは、眉をたて齒をかみあわせ、自分が血のなかで闘っているような顔をして見入っている。

「どうだった?」

床几を立て、藤吉郎は、両方の手でふたりの肩を抱きよせた。

「——戦こわは恐いか」

「う、う、ん」

虎之助は、首を振った。

市松は、あわてて下にひざまずいて、

「すこしも恐ろしいことなどございませぬ。どうか私にも、あれへ行つて、戦うことをおゆるし下さいまし」

と、願った。

「はははは。何をいうか。もう戦は終つてゐる。わからぬか、敵はくずれて八方へ逃げ出している」

すぐ丘の下あたりだった。

ぎ、ぎ、ぎツと枯草を鳴らして、二、三名の敵が逃げて来た。そして藤吉郎がいるのも知らず、この丘へ上つて来ようとする、きやツ——と、悲鳴をあげた者があつた。

敗走兵はおどろいて、横ツとびに道を変えて逃げ去つた。藤吉郎は、その悲鳴に思い出して、

「茶わん屋の於福おふくはいかがいたしたろう。途中から連れて来たあの意気地ない人夫だ。ふたりで探して来い」

と、市松と虎之助にいつけた。

「はいッ」

ふたりとも、勇躍して、丘を駆け下りて行つた。

この戦いくさなかに、戦の外うしろにいて、ただ傍観ぼうくわんしていたのは、実はつまらなかつたし、子ども心にも、すまない気がしていたのであろう。

こんな際には、用の端でも、何かしたい。人間はそういう善性を生れつき持っている。まして主君からそれを命じられたのである。役不足など考えているいとまはない。

「おういッ、於福おふくうッ」

「おーい。おたんこ茄子なす」

市松と虎之助は、かわるがわるに呼んでみた。そして真ツ暗な丘のすそを歩きまわつた。

「……いないや」

「どこへ行つちまつたんだろ」

「変なやつ」

「何だつて、御主君は、あんな男を、大事にお連れになつて来たのかしら？」

どん栗林くばやしの小道にはいった。右を見、左を見、呼んでみたり、藪やぶを叩いてゆく。

すると、星明りを、ガサガサと戦そよがせて、うごき出したものがある。虎之助が見つけて、

「いたよ、いたよ、ここに」

と、うしろの友へ告げた。

とたんにそこから跳び出した影は、豹ひょうの如く、虎之助をつきとばした。そして不用意に駈けて来る市松へ向つて、出あいがしらに、わつと、大きく口を開いた。

隠れていた敵兵のひとりだったのである。もとより雑ぞうひよう兵にはちがいない。市松も虎之助も、びつくりしたが、それ以上、敵兵のほうあがが逆上つていた。

「こん畜生」

いちど転んだ虎之助は、雑兵の足に抱きついて、芋いもの蔓つるみたいに離れなかった。

「於市どの、つかまえているから、斬れッ、斬れッ」

頻りとさけびぬいている。

だが、雑兵は、長い槍を持つていたので、市松には近づけない。その恐い顔といたら、市松も虎之助も、この世の人間の顔の中で初めて見たほどのものだった。

「木下家の小姓どもだな。邪魔すると、ぶち殺すぞ」

吠えるように雑兵ののしは罵る。それはただ逃げたがっている焦しょうそう躁そうにすぎないが、獅子ししの乳児あかこには敵の心を量はかることなどできなかつた。市松が石ころや土を投げつける一方、虎之

助も雑兵の脛へ必死に咬みついているくらいが精いッぱいであつた。

声を聞きつけて、数人の味方が駆けて来た。そして物もいわず、雑兵の背を槍でつき刺してしまつた。虎之助は頭から血をあびたまま、雑兵が仆れてもまだその脚に抱きついてた。苦悶してあばれるので、離れたら生き回るような気がするのだつた。

「もういい。こらッ、いつまで死骸と取つ組んでいるのだ」

襟がみを掴まれて、虎之助は道の端へ簡単に片づけられた。市松と並んで、夢中から醒めたように、茫然と立っていた。

——とところへ、また多勢の味方がひきあげて来た。ひとりの法師武者を捕虜とし、その縄じりを取つて引つたてて来たのである。

捕虜とは見えないほど、法師武者は尊大に反りかえつて、怖ろしく威張っていた。そして自分を取りかこむ人々を睥睨して、

「躁ぐな。持て余すほどの荷物なら、いつでも、この首、この胴を、べつべつにして持つて歩け。この期になつて、逃げかくれするような宮部善性坊ではない」

と、大言しながら、藤吉郎のいる丘の上へ追いあげられて行つた。

「於虎。……行こう」

「もう捜さないのかい。おいいつけの人を」

「於福なら、そこらにいたよ。みんなに尾いて、一緒に丘へのぼって行った」

市松と虎之助も、後から味方を追いかけた。丘では、追々とひきあげて来る人々が、各獲て来た敵の首級を、藤吉郎の床几の前にならべ合つて、血のさかもりにどよめいていた。

ひくつちや
卑屈茶わん

その夜、討ち取つた敵の首級は、八十幾つと数えられた。

横山の城内からは、

「お迎えに参りました」

と、蜂須賀彦右衛門、竹中久作、松原内匠、そのほか留守居の人々が、主人の帰城を迎えに出た。そして、

「お留守中、ふがいもなく、御城門の一部をば、敵に焼かれ、また、大切な御士卒をも、幾十人か討死させました。申しわけもございませぬ」

と、重なる者、打ちそろって、罪をわびた。

藤吉郎、言下に、

「なんの、なんの」

家臣らの自責をなくさめ、

「そんなこと、たれが罪として咎めよう。四方、味方との聯絡もないこの孤城を、そち達、寡兵の手にあずけて、悠々、半月あまりも、留守にしておいた藤吉郎こそ咎めらるべきだ。ようその間、持ち支えていてくれた。留守中の勤め、大儀大儀」

彼はすぐ、ほかの群れへ眼をやつて、

「生捕つた敵の一将、宮部善性坊とやらを、これへ曳け」

と、命じた。

法師武者の善性坊がそれへ直ると、藤吉郎は、黙つて人態をながめていた。

「……………」

善性坊も顔をあげたまま、藤吉郎をにらまえていた。

そのうちに、力負けしたように、ふと、善性坊がひとみを俯せると、とたんに、

「不届き者ツ」

と、藤吉郎は満身から声を出して呶鳴りつけた。

むくツと、善性坊が面おもてをあげて、何か、口を開こうとするとまた、

「不忠者めが！」

と、二の句をいわせなかつた。

善性坊は、面しゆに朱をそそいで、

「なんで、それがしが不忠者か、不とどき者か。よし捕われの身であらうと、いわれなき辱はずかしめをうけてはこのまま死ぬことわり。理を明らかにせい。せねばただは措おかんぞ」

躍りかかつて、咬かみつきそうな顔していった。

「あわれむべき男かな。——浅井長政の臣、宮部善性坊といえば、かねてうわさにも聞いていた英傑だが、聞くと見るとは大ちがいだつた。こういう人間が、得て、主家を亡ぼす害賊となるのだろうか」

面むかと対つている者を相手にもとらないで、あたりの人々へはなしかけるように藤吉郎はつぶやいた。

善性坊は、いよいよ躍起となつて、

「わけを申せ。やいッ、そこな猿面えんめんろう郎、理もなく、武士を誹そしる法やある。百姓そだちの

成上がり者、武士を遇する道を知らんかッ」

と、罵ののつた。

軽く笑いかえして、

「武士として遇せられたくば、なぜ武士らしい道をふまぬか。武将らしい戦いくをせぬか。――聞け、善性坊、汝をはじめ、同腹の浅井七郎右衛門、同じく玄蕃げんぱ、三田村右衛門大夫などの徒は、決して、主君浅井長政の命によつて、わしの留守城を襲撃したわけではあるまいが」

「ばッ、ばかなッ」

善性坊も、一笑を返して、

「主君の命なくして戦うものがあるうか、主人長政のおさしらずによつて戦つたのだ」

「いや、そうでない。――憚はばりもなく、左様な放言して怯ひるまぬ馬鹿者だから、わしは汝を、不届き者、不忠者ともうしたのだ」

「な！ なぜだ？」

「浅井、朝倉の両家は、叡えい山さんにおいて、かたく、信長様へ対して、和議を申し入れたばかりでないか。和を乞うて、すぐ誓紙を裏切るなど、武門の不信、これ以上な沙汰はない。

汝らは汝らの主君に、不信の汚名おめいをきせて、恥を天下につたえたいのか」

「……………」

「しかもふたたび、織田浅井の御両家が、矛ほこを交えとなれば、小谷おだにの城は、三日と持たぬぞ。越前の援けは遠し、叡山とは湖の隔てがあり、そして今浜にはわが織田家の丹羽にわ五郎左衛門あり、ここには木下藤吉郎がいるものを。……はははは、浅慮あさはかな人々ではある」
彼の説く理に抗しきれず、善性坊は、黙念とうなだれてしまった。

藤吉郎はさらに諭さとした。

「親の心子知らずというたとえがあるが、信長様と浅井家のあいだも、それに近い。信長様には、浅井家に嫁かたづいているお妹君を庇かばうお心があるのみでなく、真実、妹むこ賀の長政殿をも、愛しておられる。惜しんでおられるのだ。——然るにその二つが結ばれては、必然、大きな脅きよう威いをうける朝倉や叡山などが、たえず両家の不和を謀はかっている。汝ら家臣はいの輩はいも、それに躍おどつて、主家を滅亡へ導みちこうとするか」

「……………」

「横山城の留守を襲うたこよいのことなども、汝ら一部の浅井家家臣が、主人長政殿のさしずによらず、自分らの私謀ひめいでしたこととしておきたいのは——この藤吉郎とても御両家

の和睦わぼくをふたたび破りたくないからだ。主君信長様のおこころを傷いたませたくないからである」

「……わかった」

善性坊は、縄目のまま、がくと前へ体を曲げて、神妙にいった。

「いかにも、こよいの横山攻めは、われわれの私謀に相違なく、主君はあずかり知らぬことだった。この上は、善性坊の首を刎はねて、主人長政が和議の誓文をやぶったわけでない旨を、織田家へも明らかにお告げねがいたい」

「さすがは、よくお弁わきまえ下すった。其許そこもとの首は其許へ、しばらくおあずけしておこう。

——彦右衛門、彦右衛門」

「はッ」

「宮部善性坊が身は、おぬしに渡しておく。捕虜とりこだからといって、粗略にするな」

「承知いたしました」

蜂須賀彦右衛門が、縄じりを取って立ちかけると、藤吉郎は、至極簡単に、

「解いてやれ」

と、いった。

縄を解かれた捕虜の影は、すぐ多勢の影の中に没して行つた。

床しょうぎ几を払つて、藤吉郎も丘を降りた。そこから近い横山城の城門へ、やがて主従一兵ものこらずかくれた。

焼き払われた城門は、あくる日、もう新たに普請ふしんしていた。防禦は一日も怠れない現状にある。北境の雪でも解けはじめれば、重ちやうじやう疊じやうたる山岳をこえて、何が越えてくるか。鉄砲をみがき、槍ぬぐを拭ぬぐい、戦いくさのない時の戦の備えこそ、武士が同時に心をも養つている時だつた。

養い方もいろいろある。兵馬の訓練は将士一体のことだが、個々の小閑には、書を読むもあり、酒をたのしむもあり、禪をやるのもあろう。藤吉郎の場合は、たいがい砦とりでの奥のいちばん広い座敷を——がらんと空間あきまにさせておいて、広縁のはしへ褥しとねを運ばせ、それへあぐらをくんで、ぼつねんと陽なたぼっこをしているような折が多い。

或る時、家臣のひとり、

「殿には、なぜお座敷におられませぬか。よほどお縁側がお好きでございますな」
戯れに問うと、藤吉郎もおかしそうに、

「何も、板縁に坐るのが好きなわけではないが、春の草々が芽ぐみ出すと、無性むしやうに土が

こいしゆうなる。座敷よりは縁のほうが土に近いだろ。それだからこれにおるのだ」と、いった。

その答えは、家臣の者には、何だか半解のようだったが、彼のうしろに、彼の刀をささげて居眠っている二人の童子には、かえって分ったようだった。

市松も虎之助も、春めくとよけいに畳の上よりは土が恋しくなった。藤吉郎は、洲股すのまたにある母が、今頃はまた菜園に出て、菜なを作ったり豆を植えているであろうなどと、自分が多少立身しても、なお鋤くわを離さない母のすがたをぼんやり想像していた。

「きょうも、お座所ざしよは、そちらでございましたか」

そこへ蜂須賀彦右衛門が来て、笑顔をもちながら手をつかえた。

「オ。彦右衛門か」

「だいぶ、山々の木の芽も、色づきましたな」

「人間も同じだと思わないか」

「ははは。お戯れたわむを」

「戯れではない」

藤吉郎はまじめくさって、

「遠くにいる妻が恋しゆうなる」

あまり真顔なので、

「ここへお呼びなされてもよいでしょう。ならば洲股へ、お迎えをやりましようかと、いった。」

すると案に相違して、

「ばかを申せ」

と、頭から叱つた。

「ことしは大乱だ。合戦また合戦とならざるを得まい。さてさて、眼先の見えぬ……」

「殿も、おひとが悪い。彦右衛門にそういわせるように、お誘いをかけながら」

「せめて、口にでも、恋しいというて、我慢の鬱うげをはらしたまでよ。——時に、捕虜とりこの善

性坊はどうしておるな」

「なすこともなく、日々、経きようなど誦よんでおります」

「本心ではあるまい」

「わかりかねます」

「まあいずれでもよい。将棋でいえば持駒というようなものだ。大事に養っておけ」

「余事ばかり申しあげて、お取次を忘れしました」

彦右衛門は、手にしていた一通をそこへさし出した。今浜で静養中の竹中半兵衛からの便りであった。

藤吉郎は、黙読していたが、読み終ると当惑顔して、

「これは物騒だ」

と、つぶやいた。

「殿。何か、半兵衛殿の身に起りましたか」

「いや。……この手紙によると、半兵衛の病は日増しに快方にむかっておるらしいが、その後、今浜の丹羽五郎左衛門が、半兵衛を迎えとつて、医師薬餌の手当など、至れり尽せりの親切をしてくれているという」

「それが何で物騒なのでございますか」

「半兵衛には、はや帰りたい心もあるらしいが、丹羽殿にひきとめられて困っているとある。元来、半兵衛重治は、理には屈しぬが情には脆い。彼の博識と智勇はかねて丹羽殿もよく知って、わしの顔をみるたびに、よい者を家中に持ったと日頃から羨望しぬいておる。あまり恩をかけられると、半兵衛を、丹羽殿に取られてしまうおそれがある」

「ははは」

彦右衛門は思わず笑いだして、

「お見かけによらぬもの。殿にもそんな嫉妬しつとがおありでございましたか」

「あるとも。わしは、女人の愛には、そう嫉やかないつもりだが、良い家臣を他家へ取られたら、非常に嫉妬するだろう」

「丹羽殿がさようなことをなさるはずはありません」

「はずもないものを案じるがゆえに嫉妬ではないか」

「相違ごございません」

彦右衛門は、こころの裡うちで、ふと気づいた。——主君のことばは、そのままではない。半兵衛の変心を案じていつているのではなく、この彦右衛門に対してそれとなく誓わせているのである。

主従とはなつたものの、まだ年も浅く、それに、信長の命によって、藤吉郎の手に付けられた彼でもある。

城中の士さむらいも大半は、以前、蜂須賀村から連れて来た彦右衛門の手下であつたし、藤吉郎もまた、そのむかし少年の頃には、彼のやしきに飼われていた一雇いちやといにん人だつた。猿々と

のみよばれて、日吉ひよしという名すら、誰も呼ばなかつた寒々さむざむしい鼻たれ小僧こぞうだつた。
それが、今では。

——と、考えてくると、彦右衛門は自分を家臣として使おうとする人の難しさがよく察しられた。そして、そう心を勞つかわせてはすまないと思うのであつた。

陽なたの沈黙しんもくがつづく。

小姓おせいの於市おいちと於虎おこは、主君しゅきんのうしろで居眠いねむつている。

山鳩やま鳩が啼なく。気けだるい。べつにほかに用もないらしい主君しゅきんの顔つきなので、彦右衛門は退さがろうとしかけたが、ふと庭面にわもを見ると樹陰じゆいんから濃い煙けむりが這はつては薄うすれてゆく。

庭番ていばんの者が、朽葉くちはでも焚たいているのかと思つていたが、よくよく見ると、炭焼窯すみやきがまを小さくしたような土窯どがまがそこに築たかれてある。そして火口のまえに、ひとりの男おとこが火をのぞきながら屈かがみこんでいた。

彼の怪訝いぶかる容よう子すを見て、藤吉郎ふじきちろはわらいながら云つた。

「彦右衛門、あの者を、知つているか」

「見かけない御小人おこびと。いつお抱えになられましたか」

「先ごろ帰城きじやうの途中、今浜いまはまのあたりで拾ひろつてきた者だ。——多分たぶん、そちも知つてはるはず

だが」

「はて。面おもてを見たらどうかぞんじませぬが、ここからでは」

「思い出せぬか。わしの尾張中村にも、そちの郷土蜂須賀村にもちかい新川村の者、茶わん屋捨次郎の息子福太郎というのを」

「あれが、茶わん屋のせがれですか。新川の茶わん屋といえ、かなりな豪家でございますが、

「主あるじの歿後、家屋も廃すたれ、畑やしきも、みな失なくしてしもうたとかいいおる」

「では、落魄おちぶれ果はてて、今浜のあたりで、何か貧しい生なり業わいでもしておりましたか」

「人夫の群れにまじつて、馴なれぬ業わざをしておったをふと見かけて、旧縁を思い、供に加えて連れもどつたが、もともと虚きよ弱じやくな商家の息子、この城内においてみても、さて何をやらせたらよいか、思案もないでな」

「なるほど」

「当人に、何がそちの能かと、才能をきけば、茶わんを焼くことなら好きだという。それなら茶わんでも焼いておれと、望みにまかせて、やらせておるが」

「ははあ、ではあれは、それを焼く窯かまでございしましたか。しかし茶わんなど作って、どう

なさいますか」

「飯でも喰おう」

「ははは」

彦右衛門の高笑いに、彼方かなたに屈かがんでいた福太郎は、びつくりしたように窓かまの前から伸びあがって振り向いた。

が、いつも物に脅おびえているようなその眼は、遠く、藤吉郎のすがたを見ても、あわててまた窓の前に、卑屈ひくつな犬のように背を屈かがめてしまう。

「あの卑屈を、どうしたら除いてやれようか」

藤吉郎は、彼のひとみを見るたび、不憫ふびんをおぼえた。

何か、常に恐怖していた。優しく仕向けければ猶なほおどおど尻なびごみするといった風である。なぜかと、福太郎の心を察してみると、自分がまだ茶わん屋の若主人と立てられていた時代、家にいた日吉という小ましやくれた丁稚ていぢを憎んで、朝夕にいじめつけたことがある。それを今となつて、急につよく憶い出し、自責のあまり、人知れず恐怖したり苦悶したりしているらしいのであった。

日が経つと、彼の作つた茶わんが焼けた。

焼き上がるたび、福太郎は、幾つかの品を、黙って、藤吉郎の書院の縁先へならべておいた。

窯は小さいので、一窯に二個か三個ぐらいしかはいらぬ。その中には割れもできる。だから、日は経つても、そこに並ぶ茶碗が、目立って増えることもなかつた。

また、誰が持つて行くとなく、その中の幾つかが、いつのまにか減つてもいた。それを発見すると、福太郎は、

「お気に入つたのかな。あれで茶を召し上がつて下さるだろうか」

生きがいと仕事の張りあいを感じるらしく、ひとみにも安心と落着きが少しずつ見えて来たし、彼の手で焼く茶碗の形まで、卑屈なゆがみやいじけた線が見えなくなつて、だんだん暢気者らしい恰好に變つて来た。

四面楚歌

月の八日ごとに、市がたつ。そのため岐阜の城下は、馬や人や物資で溢れかえる。まだ信長が城主とならない以前の、斎藤氏時代からの慣わしであつた。

紙、漆、皮革、地がね、織もの、そのほか古着、食料など一切の物がかなり大規模に交易される。国々から雑多な人間がはいりこむので、治安や国防上には弊害も眼にあまるほどあるが、織田家にとつても経済上この循環を禁絶するわけにもゆかなかつた。

「阿呆ツ。どこ見てあるく。前を見てあるけツ」

夕方にせまった市の雑沓のなかで、博勞の気のあらい声がした。

仔馬と牝馬を曳いて人ごみの真ん中を通つて来たので、往來の人たちは市の両側へ避けだが、頭巾のうえに塗笠をかぶつて、眼もとばかり出して歩いて来た武家は、避けることを知らなかつた。

「あツ」

よろめいた時、博勞の手綱は、その武家の肩を打つたようであつた。

だが、あツといつたのは、よろめいた武家の声ではなく、もっと離れた所から、べつな人間の口をついて出たものである。

連れの者とみえ、すぐ、

「お怪我はありませんか」

駈け寄つて来て、脱ぎ捨てられた片方の草履をさがして、その人の足もとへおいた。

従者らしいが、ほとんど同じような身ごしらえをしている。笠、おもてがく面隠しまでが同じだった。

「乱暴なやつ、ひッ捕えて、奉行へわたしてくれましようか。武家にさえあの態てい、一般の者には、どんなか、思いやられる」

もう人ごみの遠くに馬の背しか見えないのを振り向いて、連れの武家が怒りをもらすと、
「止めよ。止めよ」

小声にいつて、ひとりはもう先へ行く。従者は、ふたたびまた、何かあつてはと、案じるように、こんどはすぐその人の背について、眼をくばつてゆく。

市を出端ではすれると、人もまばらに、空地があつて、その先は寺院らしい。醤油くさい煮売だみぎりりや濁酒のにおいのうえに、夕月が仰がれた。

「おくれたびれでございましょう」

「いや、おもしろかった」

「黄昏たそがれました。はやお帰りあそばしては」

「む、む」

見まわしていたが、

「あれは、何か」

と、急にまた足を向け出した。そして空地の一隅に黒々かたまっている多勢のうしろに佇んだ。たたず

見ると、ひとりの法師が、石のうえに立って、何か群集に演舌している。

ほかに三人の旅僧がいて、これは三方に分れ立ち、睨むように、まわりの人がきを見張っていた。

演者の法師は、熱弁をふるって群集にいう。

「物が高値たかくなるばかり、法令はひどくやかましい。働き手は、戦いのたびに、軍夫にかり出される。喰えない。やりきれない。これがおまえ方のほんとうな相すがただろう。もつともだ。この市いちにしたところで、齋藤道三様や龍興様の時代には、こんなものではなかった。もつと繁昌おしろいだった。白粉おしろいの女も出るし、唄い女うたもあるくし、夜明けまで酔っぱらいの声があった。それが今では、みんな御法度ごはつと、商あきないまで宵かぎりでびたりと木戸を閉めてしまう」

法師は唇を舐なめあげて、聴衆の上をねめまわしている。巧みに領民の弱点について、織田家の施政を暗そしに誹そしろうとする口うらが窺うかがえる。

過去の、何もかも放漫にまかせていた齋藤家時代の爛らんじゆく熟ただけを称たたえて——それがゆ

えに、その斎藤家は三族までも滅び、城下の民も共に、外敵の侵攻と兵火のくるしみをあの如くうけて、今もなお、その創痕が癒えきれないであるのだ——とは強いて歪曲していわないのであつた。

「殿。……殿」

勝家はそつと、信長のたもとを引いた。

耳へ口をよせて、

「一向僧ですぞ、敵のまわし者にちがいありません」

あたりの群集にさとられぬよう眼をくばりながら囁いた。

「うム。むむ」

信長はうなづく。そのあいだも人輪の肩ごしに、眸は、演舌している法師のすがたへ射向けていた。

さつき市の雑沓のなかで、博勞にどなられたのは、信長だった。従者は柴田勝家である。もちろん微行で、その偽装にも細心な気をくばっている。

領民が踊り遊ぶ日は、自分も領民のなかへ出て踊る信長だった。少年期からの素行にみても、こういうことはさして意表に出た行動とは、家臣たちも思わない。

ただ時節がら、危険だけが案じられる。で、勝家として、重大な任を負っているわけだった。信長はまた、少しもそんな点は意に介していかないらしい。

ここしばらく軍旅のこともないので、彼はもっぱら内政と外交に心をいれていた。殊に、戦えばいつも岐阜ぎふを出るので、治下の民心の如何は、彼自身の健康ほど、常々細心にころを労つかっていた。

「——断つておくが、わたしはこの通り、僧門の身。わたしの眸ひとみは弥陀みだの眸だ。あの国とこの国、西と東、東と南、諸処方々で戦っているらしいが、仏者には敵味方はない。ただ気のどくなおまえ方に慈悲の手を垂れよと、弥陀みだ如来の仰せをうけているまでだ」

法師は、喋しゃべ舌りぬいている。さすが敵地にはいつて民心を攪かき乱みだそうとするほどの者だけあつて、不敵な面つらだましいと雄弁きべんを持つている。——ともすれば、聞き入っている民衆は、その詭弁きべんを、ほんとうのものと、魅せられかけているふうだった。

「このぶんで行くと、ことしも合戦、来年も合戦、未来無限、戦は熄やむまい。わたしは予言する。この夏なつごろは、大疫だいやく病びょうが流行はやる。秋は飢饉ききんとなろう。さあおまえ方、どうして生きる」

背なか合わせに、演者の三方にわかれて、人なかを見張っている同行の僧は、演者の法

師が、自己の弁に酔つて、次第に露骨な煽動せんどうを放つて来たので、時折、うしろを振り向き、

「どうか、みな衆に、ありがたいお札ふだをあげてください。疫病除よけのおまもりを、ここに寄つた仏縁の方々に、お頒わけしてあげてください」

と、数珠ずずをあげて催促した。

「では。——今、お札を頒わけてあげるが、静かに、われがちにならないで、順に待つておいでるがいい」

演者の法師が、そういつて石を降りると、ほかの三名が、

「これを、屋の内に貼ふつて、朝夕一向に念仏すれば、疫病はまぬがれる。そして七月か八月頃、自然のお札ふだ焼が始まるから、その時は、疫病焼のお手つだいに、おまえ方も集まつて来い。風をつよい夜、岐阜の諸処から火の手があがる。それがお報しらせじゃ。疫病焼がすんでの後は、齋藤家時代よりは、もつと安楽な御政治が布しかれよう」

おまもりと称する小さい紙きれを、群集のひとりひとりに渡すたび執しこくいつて聞かせたのだつた。忽ち雪の撒まかれたように、多勢の手に一枚一枚持ち去られてゆく。

「わしにも」

うばい合う肩と肩のあいだから、勝家も手をつき出した。

ほかの僧と一緒に、札配りをやり出した雄弁法師が、何気なく、その手へも一枚つかませると、勝家の手は、咄嗟とつさに彼の腕くびを捕えて、

「売僧まいすツ」

ずるずると人ごみの中から引きずり出し、勢いを与えておいて、いやという程、大地にたたきつけた。

「あツ、今の坊さんが」

「捕まったツ。まわし者だ」

驚いた群集は、こけ転まろんで、逃げちりながら、各の手にもらった物を、魔符まふのように、おぞ毛をふるって捨ててしまった。

演舌しゅげしていた首魁しゅかい者しやらしい僧は、勝家の手に縛くりあげられ、逸いちやく逃げたほかの三名も、そこそこで捕まった。

「や。あのお武家は？」

と、市さわに躁さわいでいた庶民が、信長のすがたを信長と知ったのは、勝家が捕えた法師を、町なかの寺院の門前まで引つ立てて行つたからであった。

そこには、騎馬の家臣七、八名に、なお多くの徒歩かちの家来が、ひそやかに、信長の帰りを待ちもうけていた。

万一のため、市の附近に、あちこち立っていた御小人おこびとたちも集まると、かなりな人数になり、縄目の法師四人を、列の後しりえにつれて、やがて稲葉山の城門へかかれて行つた。

一刻ほど後。

信長は湯殿からあがつて、さわやかな顔を、岐阜城の一室に見せていた。

「蘭丸らんまる、笄こうがいをかせ」

濡髪ぬれがみのほつれへ手をやりながらいうと、小姓の蘭丸は、うしろへすり寄つて、

「おなでいたしましょうか」

「む、む」

と、頭つむりをまかせ、信長は、やや上気した面おもてを、燭に上げていた。

侍臣がつたえたとみえて、頃をはかっていた勝家が、それへ、

「取調べてまいりました」

と、報告に来る。

懐紙をとつて、そつと、額ひたいの汗へあてがいながら、信長はうしろへ、

「もうよい」

と、いつてすぐ、

「どうだった。坊主どもの申し立ては」

「なかなか実を吐きませんので、手をやきました」

「さもあるうず。寺籍はどこに属する者か」

「ひとりは長嶋の長円寺」

「やはりそうか」

「二名は、性懲りもない、叡山の僧であります。もう一名は、三好の残党で、法体

はしておりましたが、僧ではありません」

「より集まりか。——類と類だな」

「首魁の長円寺の坊主は、さすがにいかにかに叩いても、そら嘯いて口をあかず、三好の残党も、泥を吐きませんので、叡山の二名を、べつにして、拷問してみましたところ、すべてを白状いたしました」

「そうか。ふふム……おもしろいな、同じ坊主でも、そうちがうか」

「この初夏を期し、かねて領民をまどわしておいて、御城下の各所に火を放ち、一揆を煽

動うごしておいて、北からは浅井、朝倉の兵を呼び、南からは長嶋の一向宗徒を糾きゆう合ごうし、石山本願寺の門徒兵や、叡山や、また畿内きないの三好、その他の残党もあつめ、一挙に、岐阜を葬らんとする企謀たくらみをめぐらしておるとのことにございます」

「なるほど。——この信長を憎しとする敗者、競争者、旧弊の擁護ようご者が、みな自分らの末期をさとって、くさいもの同士、団結してきたな」

「いずれも、亡び去るものの様相には違いはございませんが、軽視はできません」

「もとよりのこと」

「坊主の自白によりますと、なおこの一連の密盟には、甲州の武田殿まで加わっておるやに思われます。その武田家と、京都の將軍のあいだに、近ごろ繁よく、密使の交わされていくこと、双方の肚はらの中など、思いめぐらせば、御当家は今やまったく、四面楚歌しめんそかの中にあるかと考えられます。寸刻とて、御油断はなりません」

信長は、默然もくねん、燭しよくを見つめていたが、やや疲れたように、

「勝家、また明日あした聞きこう。法師どもは獄に下げて、しばらく生かしておけ」

と、いった。そして蘭丸をつれて休息の間へかくれた。

伏龍悶動ふくりゆうもんどう

「よくもいった、四面楚歌しめんそかの中とは。——信長がこの居城、見まわせば、八方敵ならぬ境はない」

ひとり居いとなると、彼は手枕をして横になつた。

まだ寝所にはいるには惜しい気もする四月末のよい氣候であつた。

城下の蒸し暑い夜も、この山上の本丸は、爽そうりよう涼りようだつた。

「四圍しいの敵ばかりではない」

彼は、反省してみる。自分の領下にある施政しせいがどうか。自分が果たして、領民の心をつかんでゐるか否か。

岐阜ぎふの領は、親ゆずりの遺産ではない。自己の実力で新たに版図はんとに加えたものである。領民はついきのうまで、斎藤家を領主と仰いでいたものだ。それだけに困難が多いのである。

「ひと眼でも知れている敵の謀ちようじや者きへんの詭弁ぎへんに、すぐに動かされるような領民では」

信長は、心をいためた。誰のせいでもない、信長自身の施政と徳のいたらぬためと考え

るからである。

どうしたら民心を？——と、瞑目めいもくして苦念する。

信長を信じろ。

と、令してみたところで、民心が自分の思うままに向くわけもない。

領民の本義にもとるやつは縛しばるぞ。

と、圧力を加えてみたらどうなるか。

これも覚つかない。

心の形ぎようたい体はどのようにでも取れる。法令を布しくはやすいが、法令に心服させるのは難しい。

いや民心には、法令と聞くと、内容を汲くまないうちに、先に厭いとうような性格さえある。かつての遠い時代の暴圧が民層のなかに深くしみこんで、生理的にさえなっている。

では、法令と被治者、これはいつも溶とけあわない片恋か。

「——で、あつてはならない。ふたつが離反すれば、必ひつじよう定、国は亡ぶ。……国主の任とは」

信長は思う。

むすぶことだ。

喜んで民心よろこがうけとるような法令でなくてはならない。

そんなことをしていたら国政は成り立つまい。——こう自問自答してみながら、

「そうでない」

と、信念した。

民衆はもとより生活の豊かと安心を渴かつごう仰しているが、といつて、放恣ほうしな快樂とか安易な自由とか、そんなものにのみ甘やかされて喜んでいゝほど愚ぐなものでもあるまい。

一個の人生にしたところで、余り気まま暮しな人間や、物に困らないものが、却かえつて、幸福でない例を見ても、総括そうかつした民心というものにも、艱難する時代と、共榮謳歌きやうえいおうかする時代と、こもごもの起伏があつていい。なければ却かえつて、民心は倦うむ。

「まちがっていた」

信長は、そこに思い至つて、ひそかに悔くいた。

祖先以来の受領地、尾張にあつては、ずいぶん艱苦を領民に強いたが、岐阜の占領地へ来ては、前の斎藤家が、放漫な施政をしていたので、華美自墮落かびじだらくに馴なれている新領土の民には、きようまで、信長としては極めて生ぬるなまい政策をとつて、徐々に馴ならして行こうと

いう方針でいたのである。

「まずい。民心を知らないものだ。かえって領民は、前の領主のやり方と、似て非なる信長のやり口を疑っていたらう。信じないはずだ」

自堕落な領主の下に、自堕落に生きて、滅亡を告げ果てた歴史を眼で見ている領民である。彼らが今求めているのは、斎藤家のそれとはちがったものであるにちがいない。

自分だに、信念と徳を示せば、彼らはよろこんで、艱苦を享受するにちがいない。むしろ清新な希望をかかけ、民心に、艱苦せよということであった。

子に対する父の愛を、もつと宇宙大にもしたような、民心への大愛をもって。——しかも民心を打つことだ、鞭打つことだ。

蘭丸は、室のすみに、その小さいすがたと年齢のわりにしては、余りに行儀よく、ちよこねんと坐っている。

が——いかに彼が伶俐でも、信長の心のなかの慘憺たる経営はわからない。

「うたた寝を遊ばしては」

などと、彼の手枕の顔を、遠くから案じていた。

山の若葉を漉してくる夜風が冷たくなつた。蘭丸は立って、

「まだ御寝所へ入らせられませぬか」

と、信長の顔へそつといった。

「もう少しこうしていよう」

ほそく開いた主君の眼には、睡そうな気はすこしも見えない。蘭丸は、信長の背へまわって。

「おつかれ遊ばしたのでしよう。すこしお体でもさすりましょう」

と、肩へ手をあてがった。

無用とも、せよともいわない。しかし蘭丸は、信長がよく背が凝るといふのを聞いてるので、揉むところを知っていた。揉めば信長は、なすままに、体をまかせている。

「……むりもない、民心がこの信長に、頼りきらぬもむりではない」

彼はなお思いつづけている。

「いま信長の味方といえ、三河の徳川家があるばかり。それとて、近ごろは武田家との抗争で、力とは恃み難い。その徳川家をのぞいたら、この信長を、父とも思うといった將軍家義昭をはじめ、遠くは西国の毛利家にいたるまで、みなわが敵であらぬはない。――領民の眼から見たら、この城も、危うく見えよう、儂く見えるも尤もである」

どうして、そういう民心の信望をつなぐか。この人でなければと、領民が一心一体となつてくるか。信長にはこうしか考えられなかった。

「まだやり足りないのだ。身をもつてやり通そうと誓つてやって来た年来の実行も、まだ人眼ひとめから見れば、やり足りていなかった。——そうだ、これからも、身をもつて信念を実行に示してゆく。それしか、民心を得る途みちもなく、また信長の生きる途もない」

むくと、彼はふいに起きた。

晏あんじよ如と、身を横にしていられないような衝動が、唐突に、意識を度外して、からだを起させたのである。

蘭丸は、驚いて、

「どうかなさいましたか」

「いや。……いま何なんどき刻ときだな」

「亥いこくの刻ときごろかと思ひます。お時計番にたしかめて参りましょうか」

「それには及ばぬ」

と、支ささえてふと、蘭丸の腫はれぼつたい瞼まぶたに眼をとめ、

「なにを泣いていた？」

「はい」

「眠とうて、奉公が辛うなつたか」

「そんなことはございませぬ」

「では、なんで泣いた」

「どうしたのか、わかりませんが……」

と、蘭丸は両方の眼を肱でかくしながら――

「殿のおからだをさすつておりましたら、討死した父のことが、急に胸にせまって来て、ひとりで涙が出てしまいました。おゆるし下さいまし」

「三左衛門可成のことを思い出してというか」

「……はい」

「そちの父可成は、去年、叡山をかこむ前、朝倉の大軍と僧兵につつまれ、宇佐山城と共に相果てた。あとに遺つたそちもまだ少年、悲しむは無理もないが、嘆いては、父のいさぎよい討死も、可惜、何もならないものとなろうぞ。泣くな。可成は死んではいない」

「えッ、父は死んだのではございませんか」

びつくりしたように蘭丸は顔から血をはなした。信長は坐り直して、

「生きている」

強くうなずいて見せた。

「どこに……どこに父は、生きておりますか」

蘭丸は手をつけて、顫わなきながら、主君の唇くちもとを見つめた。

信長は、自分の胸へ、手をあてながら、

「ここにだ。信長の胸にだ。——生きてると言うたのは、そちの父の形ではない。討死しても、可成の忠ちゆうこん魂たまは、信長の胸に生きていと申すのだ」

「ど、どうしてですか」

「可成ばかりではない。信長の軍について、今日まで、諸処の合戦で死んだ者も、みな信長の胸むねに合祀ごうししてある。それが信長の心となって、艱苦にぶつかるたびに、信長を勇気づけてくれる。怯ひるむ心や惑まどう心のうごくたび、わしが幼年の頃、わしを忠ちゆうかん諫かんして自害した平手政秀をはじめ、そのほかたくさん忠魂ちゆうこんが、わしを叱咤し、わしを善に善にと導いてくれる。そちの父三左衛門可成も、そのひとりじゃ。そちが悲しむと、信長の心もかなしむ。——見よ、わしはなお、無数のよい将士を死なすだろう。かなしんでいては出来な

いのだ」

「^か嘸んでふくめるようなことばになる。生来、利発な蘭丸は、^{ぎようぜん}凝然と坐りなおしていた。」

「……だが、信長はそちにも誓う。信長はかならず乱脈と暗黒に沈んでいる日本全土の人々を^{よみが}甦えらせてみせる。大君の御ところを安んじ奉る日を迎え取ってみせる。なお百世の後の代までも、信長のなしたことが、かならず日本によいことであつたという事実を地上にのこしてみせる。……これだけのことを信長がしたら、信長の^{きか}麾下に討死した白骨どもも、むだに死んだとは悔い^{なげ}嘆くまい」

「殿。……殿。……よくわかりました。蘭丸も決して嘆きません」

山上の闇の森に、ほととぎすが啼^なきぬいている。幼い者や弱い者には心情をみだされやすい。信長も眼のまへの蘭丸のすがたに、日頃の彼らしくもなくふと感傷にとらわれたが、それは長いあいだではなかつた。

「蘭丸。料紙と^{すずりばこ}硯^{すずりばこ}を」

「はいッ。……これに置きます」

「墨をすれ」

筆をとつて、信長は一書を認めた。横山城にある木下藤吉郎へ宛てて。

文面はかなりつぶさである。秘封して宿直の者をよび、

「すぐ早打ちをもつて」

と、使番へ下げる。

その後また筆を取りあげて、家臣の重なる人々の名を列記していた。城中に住んでいる者と、城下にある者とに限っている。

「これを、勝家の部屋へとどけて参れ。明朝卯の刻までに、これに誌してある者ども一同、評定の間に集まるようにと申し添えて」

宿直にそれを渡すと、信長は間もなく寝所にはいった。

卯の刻といえは早暁だった。召しをうけた人々は、何事かと暗いうちに起き出て来た。ここ久しく軍議もなかった。主君の胸に、そも何事か、機も熟せりと神算が立ったのだろうか。

出揃った朝の顔は、天井のたかい大広間に居ながれていた。柴田、佐久間の首席をはじめ、氏家卜全、安藤伊賀守、武井夕菴、明智十兵衛などの顔もあった。

信長が着座した。

軍議は、実にみじかい時間で終わった。一決して、すぐ各 席を立つ。外へ出てみれば、まだ朝の大きき水々しい。

「朝飯前に決つたな」

「左様さ。御評議のみか、駈け向うところも、この意気では、朝飯前で片づいてしまふじやろ」

廻廊をながれて退る諸將のすがたには、もう明らかに戦気が立っていた。——その朝、信長が諸將に諮つたのは、

「まず、長嶋ながしまの門徒一揆いっきから平らげて、四敵八塞してきはつそくの象かたちにある岐阜の位置を、一角から打開してゆこうと思うが如何に」

と、いう議であつた。

大坂の石山本願寺、京の叡山えいざん、尾張、伊勢境の長嶋門徒。

なお江州ごうしゅうや各地に、僧徒の勢力は、根ぶかく散在しているが、以上三つが、反信長聯盟の三本山ほんざんとして、歴然たる抗争の旗をひるがえしているものだった。

信長にとつて、およそ始末のわるい相手は、はつきり領土を持たないで、しかも諸国の民心にふかく蝕くいこんでいるこの末期的僧団であつた。その煽動力であつた。

五月にはいつてすぐ。

岐阜城下に、信長の大軍は、勢ぞろいした。

重なる人々のほか、その日まで発向を知らなかったので、

「どこへ。どこに戦いが？」

と、城下の者は、眼をみはつたが、その出陣の血まつりに、先頃、八日の市で捕まった四人の間諜僧が首を刎ねられたので、

「さては、長嶋か」

と、初めて知った。

「あのまわし者の僧に、疫病除けの守り札をもらつて家に貼っておいた者は、剥がしておくがよいぞ」

領民のなかにも動揺が見えた。彼らはあわてていろいろな物を湮滅した。

夏ともなれば、強風のふく夜が来れば、疫病焼の火の手があがる。それに手伝うものは、生きては安楽なくらしに会い、死しては仏果を得るなどと囁かれたことを、よほど盲信していたらしいのである。

中にはまた、その夜、用いよといわれて、正直に蔵して持っていた一揆の旗を、こっそ

り焼きすてた者などあつた。

その旗というのは、白木綿に梵字ほんじをしるし、下に、

退一步たいほだじこく墮地獄

進一步しんほしようこくらく生極樂

と、書いてあつた。

長嶋には今しもこの旗が林立りゅうりつしていた。一揆いぎの僧俗そうぞくは七万をこえ、なお、一向僧いこうそうの煽せ動どうにのつて、鋏くわをすて、商あきないを抛なげうつて、自暴自滅じぼうじめつの騒乱そうらんへ身を投なげるものが日に増しふえるばかりだつた。

(——男たるものは一步も退くな。女たるものは一言も悔くやむな)

一揆いぎに加わると、そういう誓詞ちかごころを立てさせる。また宗祖しゅうそ親鸞しんらんのことは、

如来大悲の恩徳は

身を粉こにしても報はらずべし

師主智識の恩徳も

骨を粉こにして謝あやますべし

……………

難行なんぎよう 雑修ぞうしゆう 自力じりきのこころを捨て

一心ごしやう 後生ごしやうにたすけたまえと

弥陀みだをたのむべし

と、あるような聖者の文章を、人間への光明と安心には役立てないで、破壊と騷擾そうじやうを意図とする咀呪そしゆの歌として称えさせた。

信長の軍は、絶滅を期して、長嶋へ詰めよせた。

去年には。

この地方の、小木江おきえノ城じやうの城主であつた信長の弟、三七のぶ信興おきは殺され、城は一揆の者に奪われていた。

「弟三七のとむらい合戦」

とは、口にこそ出さないが、信長の胸にはあろう。全軍の将士は、もとよりそれを誓つていた。

だが。

長嶋は容易に破れなかつた。

むしろ攻めれば攻めるほど強くなつた。一心一向の称えそのままに凝り固まつて戦う。

矢も鉄砲も槍もつき通らない抵抗を示すのであった。

「誤った。蛇をころすには頭をこそ打てだ。蛇尾を叩いて、日を過しているまに、わが大事は去ろうも知れぬ」

信長は、長嶋の要害や地勢を、自身視てあるいた日、そう悟って、にわかにならぬ全軍へ総退却の命をくださった。

その伝令をうけて、各陣地にある諸將は、

「やツ？ 何ゆえに」

と、信長のところを疑って、ひとしく意外な愕きに打たれた。

孫子も訓えている。

攻進は易く、退くは難いと。

その難事を、信長は、喰いかけていた飯茶碗でも、思い直して置くように、

「退け」

と、総軍へ命じたのである。

当然、全軍は大混乱を起した。今が今まで、攻略一方で、退くなどということは、考えでもいかなかった人々である。——なぜか？ 何故の退却か？ 部將たちの頭からして混乱

を呈していた。

「各はそも、何を疑い惑うのか。退けとの御命令である。主命は絶対ではないか。理由などは、後で問え。ともあれ、退くのだ」

殿軍をいつかつた柴田勝家や氏家ト全などは、なお退くことをいさぎよしとしない部隊を駈けまわって、退却をうながした。

急速度な転回は、そうして寄手の一角から徐々に開始された。その日まで、広い地域をかこんでいた大兵が、にわか引揚げ始めたのをながめて、

「すわ、信長の後方に、何か、突発的な大事が起つたにちがいない」

と、観て、急に門徒の大兵団は、長嶋を出て、追撃に移った。

追撃にかかった僧兵の一隊は、川を遡って先に廻り、やがて潰走して来る見込みで、敵を待っていた。

殿軍の柴田軍は、堰を切つて出た門徒勢のため、さんざんに撃破された。彼の作戦どおり、逃げ走つて行つたが、そこには、待ち伏せていた新手の敵があつた。鉄砲、乱箭を浴びせられたあげく、全部隊の半分は、僧兵のために殺された。

柴田勝家自身も、左の股に一弾の銃瘡と、肩のあたりに一矢の矢痕をうけていた。

そればかりか、中軍に持っていた金幣きんぺいの馬標うまじるしまで、敵手に奪われてしまい、主従、ちりぢりになって逃げ走った。

「殿！ 殿！ もう私は、お別れします。お供もこれまでです」

彼の小姓のうちに、当年十七歳になる水野采女みずのうねめという少年がいた。突然、勝家の駒のそばを離れて、後へもどろうとする様子に、

「采女うねめ、どこへ行く」

と、勝家が叱った。

すると采女は、

「恃たのみに足らぬ細腕と思し召しまししょうが、馳せもどつて、殿軍しんがりの殿軍をいたします。わたくし如きは、お見捨て下さつて、すこしも早くお退きなされますように」

と、いうたかと思うと、もう身を翻かえして、敵の中へ駆けて行った。

死を決して奮進した采女うねめは、奪われた味方の馬標うまじるしを敵の手から奪とりかえし、しかも後日、身をもつて危地から遁のがれてかえつた。

この引揚げが、いかに至難であつたかは、勝家と共に殿軍しんがりした氏家ぼくせんト全が戦死し、安藤伊賀守も潰つぶえ、将士の戦死八百余人、負傷二千余名と数えられたことを見ても、その

犠牲のほども想像されよう。

——が、信長は、ようやく岐阜へ近づくと、

「まず、よかつた」

と、つぶやいた。そして乗れる愛馬の平首ひらくびを叩いて、

「もう一年の辛抱だ。ほんとに汝の駿足しゅんそくを労すことは、一年の後にある」

と、独り云つた。

一死ただこれ君命あるのみと、敵中へ馳せもどつて、金幣きんぺいの馬標うまじるしをとりかえして来た少年水野の如きは、退却に際しても、何の理窟もこねなかつたが、諸将のうちには、岐阜帰着後も、こんどの引揚げと、その犠牲に対して、信長への批判や懷疑がひそかに絶えなかつた。

それに対して、信長は一日、群臣あろひのいるところでこういった。

「わしには——わが織田軍には、前途多くの任務が横たわっている。彼処かしこの敵も捨ておき難いが、長嶋はまだ一地方の敵、この信長を仆さんとする敵の根元ではない。——火事を消すに火元を措おいて、他の壁に映っている幻影に水をそそいでいたら人は啜わらう。しかも、そこで大切な時と軍馬を費やしてしまうなど、愚のいたりではないか。……まあしばらく

やすめ。百日がほど、休養して、どこが根本の火元か、そち達も、ひろく天下をながめて見定めておくがよい」

毘沙門堂主
毘沙門堂主

甘糟三平は、甲斐の名将として聞えのたかい甘糟備中守が一族の子であるが、特殊な才能のあるために、かえって低い役目におかれたまま、十年も働いていた。

「——人間、あまり重宝がられるのもよし悪しだよ。むしろ鈍物に生れて、生涯一度か二度という時に、一生の働きをいちどにして、あとは不器用者といわれていたほうがいい」
近ごろ四十にも近くなると、甘糟三平も、時々そんな愚痴をこぼした。

けれど、彼はまだ依然として、持ちまえの才能をもって、敵国と甲州のあいだを、まるで韋駄天か天馬のように、のべつ往来していた。

三平の所属は、武田家の乱波組（隠密）であった。敵国攪乱、諜報、聯絡、流言浮説の撒布など、あらゆる実戦以外の戦闘に跳躍しているひとりであった。

その三平は、若い時から敏捷と健脚で仲間のうちでも鳴っていた。どんな山道でも

一日に二十里から三十里は歩くという脛すねを持っていった。

——が、いくら彼でも、そんな速度を毎日には続けきれないのであろう。遠隔から急いで来る時は、馬の使える地帯では馬を用い、嶮路けんろにかかると、自身の脛で飛ぶことにしているらしかった。

そのために、彼は常に往来する要処要処に、「馬継うまつぎ」をする小屋をもっている。多くは獵師りょうしの小屋か、木挽こびき小屋などであつた。

「おーいッ、炭焼。——この小屋の親爺おいぼれはおらんか」

三平は今、その馬継らしい炭焼小屋のまえで、馬を降りていた。彼も大汗をかいていたが、彼にも負けないほど、馬も汗にぬれていた。

五月の末である。

山にはいると、まだ緑も浅いが、里のほうはもう、草いきれや蟬せみの声であつた。

「いないのかッ」

面倒になつたとみえ、破れ戸やどの腰を膝で蹴つた。小屋の戸はすぐ外はずれる。

三平は、ここへ預けるつもりつもりの馬を、小屋のなかに曳ひき込んで、くくりつけると、土間の奥へはいつて、勝手に飯櫃めしびつや漬物づけものや土瓶どびんなどを持ち出した。

そして腹いっぱい喰べ終ると、

「どれ……」

と、すぐ腰をあげかけたが、矢立の筆をぬくと、鼻紙へこう書いて、それを御飯つづでお櫃ひつのふたへ貼つておいた。

狐狸こりのわざにはあらず。空からにしたものは三なりぺい也。うま、留守からばんにあずけおく。こんど通過の折まで、よく草を喰わせて肥こやしおくべし。

三平が出て行こうとすると、馬は別れを惜しんで、ばたばたと羽目板を蹴つた。

無情な飼主は、ふりむきもしない。その蹄ひづめの音へ、がたツと戸を閉め、こんどは持ち前の両りょう脛すねで、飛ぶが如く——というのも大げさだが、何しても身軽はやあしそうな迅足はやあしで、南みなみ巨摩なみこまの山地へいそいで行つた。

もとより彼のさしてゆく方向は甲府であつた。駿すんえん遠えん方面から本国へもどつて来たものであることもいうまでもない。日ごろの健脚に一倍風をきつて行く様子から見ると、何かよほど急を要する情報たずさでも携たずさえているらしく思われる。

次の日の朝には、早くも彼のすがたは幾山をこえて、脚下に富士川の水を見ていた。山やま峽まかいのあいだに見える屋根は鰯かじかさわ沢さわの町だつた。

「まず、午過ぎひるすまでには」

と、そこで甲府に着くまでの時間と歩速に、すっかり見込みがついたらしく、ひと休みして、甲斐盆地にも訪れている夏の日をながめていた。

「どこへ行つても、いくら山国の不便や損はあつても、やっぱり己れの国ほどいいところはないなあ」

つぶやきながら、膝をかかえていると、夥おびただしい馬の列が、背に漆うるし桶おけをつけて、何十頭か数も知れないほど、麓ふもとから追われてのぼつて来た。

「はてな。どこへ？」

甘糟あまかす三平は腰をあげて降りて行つた。山の中腹で、下から来る百駄の輸送隊と出会つた。

「やあ」

馬上の先頭の人は、武田家の荷駄頭がしら、佐奈田源太左衛門さなだだつた。

もとより相識のあいだから、三平はすぐたずねた。

「夥おびただしい漆うるしではありませぬか。かように大量な漆桶を馬にのせて、いったい何処へ輸送するのですか」

「岐阜へじやよ」

源太左衛門は答えて、彼の不審そうな顔いろに、説明をつけ加えた。

「一昨年、織田家から注文のあつた漆が、ようやく、その量に達したので、岐阜まで送つてまいるところじや」

「なに、織田へ」

眉をしかめて、三平は、それは御苦労至極など、笑いも作れないような顔をした。

「——ずいぶんお気をつけておいでなされ。路次はなかなか物騒ぶつそうですよ」

「長嶋の門徒も、よく戦うそうだよ。織田軍の戦況はどうじやな」

「主君に御報告せぬうちは、口外はなりません」

「そうそう、そちは今、その方面から帰つて来た途中であつたな。では、立話も憚りはばかあり。

……おさらばおさらば」

百駄に近い荷駄と、源太左衛門のすがたは、峠をこえて、西へ去つた。

三平は、見送つて、

「山国はやはり山国。世の情勢が伝わることもどうしても遅い。兵馬は強くて、大将はお偉くても、これは何割の損かわからない」

彼は、自分の任務の重いことを一しお感じた。

岩いわ燕つばめのように、麓まで駈け降りた。

鰯かじかさわ沢かじかさわの町で、また馬を求め、それからは一鞭ひとむちで、甲府へはいった。

盆地の甲府はむし暑い。

信玄の居城、躑躅つづじヶ崎さきの館たちは、常になくきびしく固められていた。

よほどな大問題か、軍議の折でもなければ、平常めつたに通らない顔が、ぞくぞくと城門へはいったので、

「何事かあるな？——」を、門の士卒でも予感していた。

戦国のいま、事があるといえは戦いくさときまつているようなものである。それかあらぬか、今朝から城内へ通った人々では、一族の孫まご六ご入ろく道にゅう道どう遥しょう軒ようをはじめ、穴山あなやま梅雪ばいせつ、仁科にしなの信盛のぶもり、山県ましかげ三郎兵衛昌景まさかげ、内藤しゆり修理昌豊まさとよ、小幡おばた信定のぶさだ、小山田おやまだ備中守などの譜代などがあつた。

「御軍議だろうか」

「いうまでもない」

「出軍とすれば、どこへであろう」

「さあ、どこへだか」

「川中島か、善光寺平だいらの西か」

「上杉家とは、和議が成っておるはずだが」

「わかるものか。和睦と開戦は、天気のようなもので、急に風雨になった、こんな約束ではないといつても、その時はもう人間のせいにはならない。天を嘆いてみても始まらない」
城門の士卒たちには、そんな臆測おくそくを交わし合ってみるしか、明日のことは分らなかつた。

城の奥は、若葉のみどりにつつまれて、時折、初蟬はつせみの音がするほか、寂じやくとしている。しかもなお今朝から登城した諸将で退さがつて来るものは一名もなかった。

そこへ。甘糟あまかす三平は駈けついた。

濠ほりの外で、馬をすて、その馬の手綱をつかんで、駈け足で橋をわたつて来た。

「何者だツ」

と、鉄扉てつびの横から番兵の眼と槍が光る。三平は、馬を柳にくくつて、

「それがしだ」

左右の兵に、自分の顔を示し、すたすたと城内へはいつて行つた。彼の顔は、通り手形である。何の某なにがしと詳しく知らぬ者はあつても、その顔と役目を知らぬ兵はなかつた。

躑躅つづじヶ崎さきの城館しろたちのうちに一字いちじゆうの伽藍がらんがある。毘沙門堂びしゃもんどうといつて、信玄入道の禪室でもあり、政務所でもあり、時には軍議の場所ともなつた。

信玄は、今その廻廊に立つていた。庭の泉石から室を吹きとおしてくる風に、彼のからだは緋牡丹ひぼたんの花が炎のように揺れた。彼は、具足のうえに、大僧正だいそうじやうの緋衣ひいを着ていた。

ことし五十一歳。

かた肥りに肉の緊しまつたからだをしている。背は並である。どこか異相にはちがいないが、彼に謁えつしたことのないう者がよく、どんな怖ろしいお方かなどというが、そんな近づき難いひとではない。むしろ温容のほうであろう。——ただ見るからに重厚な風をそなえ、眉とよい手脚といい、多毛質で不屈な面つらがまえではあるが、これは山国甲斐の人の共通な特色で、ひとり信玄いちじるに著しいわけではない。

「ではお暇を」

「退らせて戴きます」

伽藍のうちから次々に席を立て退出してゆく人々は、階を降りて、もういつペン廻廊にある彼のすがたへ、挨拶してゆくか、黙礼をして散って行つた。

朝からの軍議だつた。——軍議といへば、彼は具足を下に着、緋衣をうえに纏つて、陣中にあるとおりの装いをしていた。

さすがにきよさの暑さと長座にはややつかれたものとみえ、今しがたそれが終ると、一同から退出の会釈をうけて、すぐ廻廊の外に立ち出ていたのである。

小幡、内藤、山県などの譜代をはじめ、逍遙軒孫六、伊奈四郎勝頼、武田上野介などという一族にいたるまで、およそきよさの軍議に列した者は、踵をついで歸つて行つた。——それがみな云い合わせたように、どこか沈重な眉と、決意をもつた唇と、倉皇と先をいそぐ足どりをして行つた。

人は去つて、人気ない毘沙門堂は、風に光る金壁と、しずかな蝉の声だけになった。

「……ことしの夏は？」

信玄は、この国を繞る山々の影を、遠く見まわすような眼をした。

十六歳の海野平の初陣から、彼の想い出ふかい経歴は、ほとんどみな、夏から秋にわ

たることが多かつた。

冬となれば、引籠つて、内に力を養つておくしかない山国である。自然、生理的にも、春が来、夏ともなれば、

——さあ、出て戦え。

と、おのずから満身の血は、限られた区域から外へ向つて逸り止まないものであつた。

それもひとり信玄ばかりでなく、甲斐武士には共通な心理であつた。町家や農田の人々まで、勃然と、

——時こそ来れ。

という太陽を夏には感じるのであつた。

殊に、信玄自身は。

ことし五十を一つこえて、痛切に或る悔いと、生涯に期する焦躁を抱いていた。

「……余りにも、戦のための戦ばかりやりすぎて来た」

と、いうことである。

「今にして、越後の謙信も、そう覺つておることだろうに」

と、多年の好敵手を考えれば、敵のためにも、同様な苦笑を禁じ得ない。

しかしこの苦笑は、五十一にもなってみると、深刻に胸を蝕う。これから何年を生きられるか、当然、人間の天寿というものをいつも考えるからである。

一年のうち、三分の一は雪に閉じられる国である。田も生産もその間は遅れ、文化には遠く、新しい武器なども入手するに困難な領土にありながら、人間のもっとも精神的な中年期のほとんどを、可惜、あたら越後の謙信と、十幾年も戦いつぶしてしまった。

「思えば。……今にして思えば、この信玄を、ひとは老巧というが、むしろ岐阜の信長や三河の家康などに、まんまと、あざむ欺かれていたにひとしい。あの小国の若輩じゃくはいどもに」
陽は強く若葉の陰は濃い。そのせいかな、彼の面にも、おもて彫ったような悔いがあらわれていった。

信玄は、多年、

(関東第一の兵家)

をもつてみずから任じて来た。

土馬精鋭と、その特有な国内の経済政策などは、天下のひとも認めているところである。——にも^{かか}関わらず、いつのまにか、甲斐は天下の大勢から^{けんがい}圏外におかれかかっている。信長が、いちど京都に出て、その存在をにわかには大きくし始めた去年あたりから、信玄

自身も、

「甲州の位置は」

と、あらためて眼界から自身を見直し、そして愕然と、気づいたのであった。

武田家は今も、関東第一の兵家にはちがいない。

しかし、天下の重鎮ではない。

経済力も、精鋭な士馬も、ひるがえって視ると、中心のうごきや天下の大勢とは、甚だ遠い感があった。——余りに小さく規格されすぎた武田家の経済施政、武田家の士馬精鋭でありすぎた。

さればといつて。

彼ほどな大腹中が、甲斐近国の伐り奪りを、生涯の理想にしていたのでは決していない。

彼にも中原の志は、早くからあったのである。信長や家康が洩をたらしていた頃か

ら、すでに次の時代に野心をかけ、

(この山国は仮住居)

と、京の使臣にも洩らしたことがある程だし、越後との長期にわたる合戦も、実に、それへ発足するための一部戦として端を開いたものだった。

ところが、川中島その他、あらかたは、対謙信との戦いで、国力の消費と、貴重な年月を、過してしまった。

年齢の五十が、信玄に、大きな警告を与えたことはいうまでもない。——が、そう覺つた時すでに武田家の位置は、信玄がつねに、

尾張の小せがれ、とか。

岡崎の童、とか。

眼の中にもなかつた信長や家康よりも、時代の大勢からは、はるかに、縁遠いところにおかれている自身を見出したのである。

「あれも謀られたようなもの。……これも今思えば、大失策」

悔いはかぎりもない。戦にかけてだけは、彼は悔いを知らなかつたが、外交的にふりかえる時、われながら、

「まづかつた」

と、思うことが幾つかあつた。

今川家滅亡の時、なぜ東南へ出なかつたか。また、家康から質子をとって、なぜ彼が駿遠へ領土をひろげてくるのを黙視していたか。

それよりも大きな過誤は、信長から歡心を迎えられて、彼と姻戚をむすんだことである。

ために信長は、やすやすと西隣、南隣の国々と戦つて、一気に、中原へ足をかけてしまった。家康の質子はまた、機を窺つて逃げてしまい、信長と家康が、その緊密な同盟のもとに謀り合つてしたものであるという外交的效果が、今では余りにも明らかにされていた。

「——が、いつまでその策はくわぬ。姻戚以外、甲斐に武田信玄あることを、思い知らせてやらねばならぬ。家康の質子は出奔した。これ、家康から義を絶つもの。もう何の仮借を要そう」

きよようの軍議で、彼はそう宣言したのであつた。

折ふし信長は、長嶋へ出陣して、苦戦のもようと聞えたので、機逸すべからずとなし、にわかはこの動議となつたものであることは、機を見るに敏な兵家のこと、いうまでもないことである。

甘糟三平は、側衆まで取次ぎを申し出て、控えて湯など飲んでいたが、いつまでも沙汰がないので、

「てまえが帰着のこと、お耳へとどいたであらうか。もう一度、御催促ねがいたい」

と、再度の取次ぎを仰いだ。

側衆からの返辞は、

「今しがた、御評議が終つたのみで、ややおつかれの体にお見うけされるゆえ、もうしばらく相待つように」

とのことだった。三平はかさねて、

「その御評議なればこそ、てまえの用向きも、よけい火急を要しますわけで。恐れながら即刻」

と、請求した。

すると、側衆から信玄へ達したとみえて、すぐ通れとのことだった。毘沙門堂へ行く中門まで表の武士が附いて来る。そこから奥の武士へ引き継がれて、彼は、信玄の身近へ歩いて行つた。

「三平か」

信玄は、毘沙門堂の縁に、床几をおかせて腰かけていた。幹の大きな若楓が、そのすがたに燦々と日光の斑をそよがせていた。

「——余事は措きまして、取りいそぎ、急の御報告までを申しあげます」

「ウム。うむ。……余事などは措け。何事が起ったか」

「さきに、早馬をもつて、伊勢からお知らせ申した儀は、情勢、まったく一変いたしましたし、たゆえ、万一のおうごきもどうかと、自分、夜を日について、駆け参りました」

「なに。長嶋の様子が一変したと？ ……。それはいかなるわけじや」

「一時はほとんど岐阜表を空にして、総がかりに長嶋へ攻めかかるやに見えましたところ——信長が長嶋の戦場に着いたかと思うと、即日、総引揚げを命じ、かなりの犠牲をも払いながら、潮のごとく、ひつ返してしまいました」

「ええ、引揚げた……とか？」

「織田の麾下、意外であつたらしく、味方と味方のあいだにすら、信長の意中が解せぬと、すくなからず狼狽の者もありましたが」

「……喰えぬやつ哉！」

信玄は舌をならして、しばしは唇を噛んでいたが、

「織田が、長嶋から手を引いては、虚をついて、この信玄が、三遠の平野に家康をよび出して討ち懲らそうとしたのも画餅となつた。——危うし危うし」

つぶやいて、急に、

「信房、信房」

と、あわてて堂房どうぼうの一間へ向つて呼びたてた。そして、きよようの軍議によつて決定した出陣のことはにわかに取り止めるという旨を、すぐ家中へ沙汰せよといいつけた。

老臣らうしんの馬場信房ばばのぶふささえ、その理由を問う間もなかつた。まして、つい今しがた、ここを退出したばかりの諸將は、

「はて、今を措おいては、徳川家を切りくずす好機はあるまいに」と、思いまどつた。

だが、その機会を逸したと知ると、信玄は釈しゃく然ぜんとして、もうそれにこだわつてなどいなかつた。はやくも次の対策と、次の機を得るもののように、物の具を解いてから、あらためて三平を禅房の一間に召し入れ、人を払つて、詳細ぎふに岐阜、伊勢、岡崎、浜松あたりの情勢を聞きとつていた。

その後で、こんどは三平のほうから、ひとつの不審を、信玄にただした。

「夥おびただしい漆うるしの輸送を、途中で見かけ申しましたが、織田徳川は一体の国。なんで織田家へ、漆などをお送りになられますので？」

「約束は約束。……それにまた織田のこころも鈍ろうし、あの荷駄が、先に徳川領を通つ

てゆけば、徳川家でも油断しておろうにと。——さように奇略を試みたのじやが、それもむだとなった。いや、むだでもない。時は、明日にもまた来ようも知れぬ」

彼は、自嘲じちようをもらして、どこか淋しげに意中を語った。

かりつばめ
雁と燕

甲軍の精銳は、一時、出動見あわせとなつて、むなしく夏を送つたが、秋九月というと、ふたたび西山東岳のあなたに、

(機会は、今！)

と、世の物音が聞えだした。

信玄の耳は、秋風ならぬ時代のあしおと登音あしおとにそばだつて来た。

その中を、彼は一日、笛吹川のほとりへ駒をたてていた。従者もわずかで、気がるに秋の日を浴びてゆくすがたは、自身の領下の完全な治政を、みずから誇っているかのようにあつた。

けんとくざん
乾徳山

と、山門の額に見える。

信玄の帰依きえしている快川かいせん国師こくしが住む惠林寺えりんじであった。

あらかじめ通じてあつたものとみえ、迎えをうけて、信玄は庭園に通つた。ほんの立ち寄るといふ程度で、わざと伽藍がらんにははいらなかつたのである。

そこに、わずか二間ふたまの茶屋がある。小さい水屋が附いているのみで、青苔あおこけの匂うばかりふかい泉石に、銀杏いちようの黄色な落葉が、笥かけひの下に溜たまつていた。

「和尚わじょう。きようは当分のおわかれに参つた」

信玄のことばに、快川かいせんはうなずいた。

「いよいよ、御決心かの」

「されば、機の到るを、ずいぶん根気よく待ち申したゆえ、この秋こそは、どうやら信玄にも、やや時運がひらけて来たようにぞんずる」

「この九月にはいつて、織田の衆は、またも大挙して西へうごき、叡山を掃滅そうめつするとて、去年にもました大軍を催しておるそうな」

「そこでおざる。待てば日和ひより。——かねて京都の將軍家からも、この信玄へ、しきりと御内書を通かわされて、織田のうしろを衝つかば、浅井、朝倉も同時に立つ、叡山、長嶋もともとど

も手伝う、三河の家康ごときは——蹴いっしゅうして、はやはや京地まで上洛あれと——御催促も再三ではなかつたが、いかようと岐阜が難所——今川義元が二の舞はしたくないので、機を計つておぎつたが、その岐阜の手薄に乗じて、雷らいはつ発一迅じん、三遠尾濃の諸州を一走りに、都までのぼりゆく心底でおぎる。——さればことしの年越しは洛中にあつて、正月も都で迎えることになるうとぞんずる。和尚わじょうにも、御健固ごけんこにおすごしあるよう……」

「左様かの……」

快川かいせんは、浮かない返辞へんじだつた。

兵事、政事、何事も和尚にただして、ふかく信頼している信玄は、その顔いろを観みるに敏さとかつた。

「和尚には、信玄の思慮に、なんぞ危惧きぐをお抱きであろうか」

「……いや」

快川は、面おもてをあげて、

「あなたの生涯の御大志じや、何で不同意なはずはない。……じやが、おもしろくないのは、將軍義昭よしあきの小策である。頻りとあなたへ催促して来たような内書を、あなたのみならず、越後の謙信へもさし向けていると聞く。また、この夏六月、死去されたが、中国の

毛利元就もととなりへも、同様、出兵をうながしておつたらしい」

「その辺のこと、信玄も知らぬではございませぬ。胸中の大策を天下に布しくには、なんと
いつても、上洛せねば行われませぬ」

「可あた惜、あなた程の人物を、甲斐の盆地に埋もれ果てさせてよいとは、わしとしても思
きれぬ。ゆくゆく御難儀は多かろうと思うが、御旗みはた楯たて無なしのすすむところ、敗れた例ための
ないあなたの塵下きかだ。ただおからだのみは御自身のものだから、天寿に仕えて素直にお持
ちあるように。——それ以外、お餞はなむけ別のことばとておざらぬ。お大事にお出ましあれ」

その時。

茶を煮るため、奥の清泉を汲くみに行った一僧が突然、手桶なげうを抛なげ、何か大声をあげな
がら、木の間を駈はけだしていた。

鹿はしの駛はるような物音が寺園の奥に響いた。その蹙あえ音を追いまわしていた一僧は、やがて
息を喘あえぎながら茶屋の庭面にわもへ駈はけて来て、

「はやくお手配下さいませ、怪しい者をただ今、とり逃がしました」
と、告げた。

この寺内に、怪しげな者などいるわけではないが——と、快川がたずねると、その一寺僧

は、こう云い足した。

「まだ和尚のお耳には入れてございませんでしたが、実はその者は……昨夜おそく門をたたいて、わたくしどもの房へ泊めておいた旅僧でございます。——それも時節がら見知らぬ僧なれば、もちろん泊めもいたしません、顔を見ると、以前、お館の乱波組におりまして、御家中の方々と、寺へもよく来たことのある渡辺天蔵どなので、仔細はあるまいと、同房の衆とも計らつて、一泊をゆるしましたところ」

「待て、待て。……それはなお不審ではないか。もう数年も前に、織田方のさぐりに行つて消息も絶え果てていた乱波組の者が、ふいに夜中、しかも僧形して、門を叩いて一泊を乞うなど。……なぜよく糺してみなかつたのじゃ」

「その儀は、何とも、手ぬかりでございました。——が、彼のいうには、織田家の領に入りこんで、探りを働いておるうち、甲州の諜者と露顕して、獄に投げこまれ、幾年かを牢中で送つていたところ、幸いに、よい折があつて、一命をひろい、姿を変えて歸つて来たど、真しやかに申すのでございました。——そして明日は、甲府に出て、組頭の甘糟と、三平どのをお訪ねするつもりなども云いますので、すつかり真にうけておりましたところ、今し方、てまえが水屋から手桶をさげて出ると、お茶屋の北窓の下に、その天蔵め

が、やもりのように貼りついて、立ち聞きいたしておるではございませんか」

「なに。……ここでの、お館やかたのおはなしを、物蔭でぬすみ聞きしておったとか」

「はい。——蹙音に、てまえの方を振り向くと、さすがに愕おどろいた態ていで、すたすたと庭の奥へ歩いて行きますゆえ、これ、天蔵どの、これ待たんかと、声をかけましたが、まるで耳もない顔して、そそくさと、足を早め出しました。——で、わたくしが突然、曲くせもの者ものツ、と一声どなりますと、恐ろしい眼を振り向けて睨にらみつけました」

「もう逃げ失なせたか」

「大声で、呼ばりましたが、お供方は、ご中ちゆうじきちゆう食じ中ちゆう、どなたも出合わず、残念ながら、私の手にはおえぬ相手でございましたため——」

信玄は、その僧へ、見向きも与えず、さつきから黙然と横耳で聞いていたが、快かい川せんの眼まなざしに会うと、

「供の中に、甘糟三平を召し連れおります。彼に、追わせましょう。これへお呼び下さらぬか」

と、静かに云った。

和尚わじょうから旨をうけて、寺僧はすぐ山門のほうへ走って行った。やがて三平は、茶屋庭

に平伏して、何事かと床しょうじょう上の信玄を仰いだ。

「そちの組下に、数年前、渡辺天蔵という者がおつたであろうが」

信玄にきかれて、三平はすこし考えていたが、

「思い出しました。尾州蜂須賀村びしゅうはちすかの生れで、叔父の小六が堺鍛冶さかいかじに作らせたとかいう

新しい鉄砲を持って御領地へ逃げこんで来、それをお館へ献じた功に依つて、数年、お扶ふ持ちを下しおかれた者ではございませんか」

「その鉄砲のことで、信玄も覚えておるのだが、尾張者はやはり尾張者、今では、織田家の側わきに従したがって働いておるらしい。そちが追いかけて、首にして来い」

「追いかけてとは？」

「仔細は、そこにおる寺僧に聞いて行け。早速に追わねばとり逃がすぞ」

三平は、畏かしこまってそこを退さがり、やがて恵林寺えりんじの門前から一頭の駒を解いて、どこへともなく鞭むちを打つて行つた。

韮崎にらさきから西へ、駒ヶ岳こまたけや仙丈せんじょうなどの裾すそを縫ぬつて、伊那の高遠たかとおへ越えて行く山道がある。

「おおウーいッ」

と、この山間にめずらしく人間の声が出た。ひとりの旅僧はふと立ちどまって振り向いたが、それきりこたま訝もしないので、また峠路とうげじを先へいそいでいた。

「オオーイ、旅の御坊」

二度目の声はなお近くした。それに御坊とよぶ声も明らかだったので、僧は笠に手をかけて、ややしばしたたず佇んでいた。程なく、喘あえぎ登つて来た男は、近づくとまず、皮肉な一笑を相手に投げて、

「めずらしいのう、渡辺天蔵。いつ甲州へ来ておったか」
と、いった。

旅僧はぎよつとした容ようす子であったが、すぐ平静に立ちかえると、クツクツと笠のうちで、髪切虫のような笑い声をもらした。

「ほう。誰かと思つたら、甘糟三平どのだったか。いや、お久しぶりでござる。——いつもお達者で」

皮肉へ返すに、皮肉をもつてした。お互いに敵地へはいつて味方のために機密を探るのを職分とする者同士である。これくらいな凶太さと沈着がなければ勤まるものではない——

―と、教えているような態度である。

「御挨拶だな」

と、三平も至つて洒然しゃぜんとしたものであつた。自国の中に敵国の密偵を見出したからといつて、にわかには物々しく立ち騒ぐなどは、平常、注意のない常人のことで、泥棒の眼で見れば、世間に昼間も泥棒はあるいているので、あながち驚異するにもあたらないことだつた。

「おとといの晩、恵林寺へ泊つて、きのう同所で、快川和尚わじょうとお館の密談を盗み聞きして、寺僧に見つけられ、それから一目散にお立ち退きだつたな。……そうだろう天蔵」

「そのとおり。貴公もあそこへ来ておつたのか」

「生憎あいにくとな」

「知らなかつた。それだけは」

「おぬしに取つては不運だ」

「そうかしらて」――と、天蔵は、ひと事のように空そらうそぶいて、

「武田の間諜、甘糟三平は、まだ伊勢境か岐阜あたりで、織田家の虚きよを嗅かぎあるいていると思つていたが……いつのまに帰国したか。さすがは三平、お迅はやいことだ、賞ほめておこう」

「むだな追従ついでしやう、いくら賞めても、おれの眼にとまったからには、生かして帰すわけにはゆかん。——この国境を生きてもどる気か」

「まだ自分には死ぬ気など少しもない。……だが、そういうえば三平、おぬしの顔にも死相がただよつておるぞ。まさか、死にたくて俺を追いかけて来たわけでもあるまいが」

「主命によつて、首をもらいに来た。申しうけるからそう思え」

「たれの首を」

「その首をだ!」

三平が太刀を引き抜くと、渡辺天蔵もぱツと杖を向けて身構えた。杖の先と刀の先とは、かなりな距離をおいてである。だが、凝ぎようぜん然ぜんと長い睨ねめ合あいがつづくうちに、どつちの呼吸もあらくなつて、さながら死に瀕してゆくような蒼白が二人の面おもてにみなぎつて来た。

すると、なに思ったか、三平は刀を引いて、

「天蔵。杖をひけ」

と、いった。

「怯ひるんだか」

「いや、怯みはせぬが、お互いに同じ職分ではないか。役目の上で死ぬのはよいが、斬り

合つて相討ちしてもつまらん。……どうだ、その着ている法衣ころもを脱ぎ捨ててゆかぬか。さすればそれを持ち帰つて、討取つたと披露しておくが」

乱波らつぱの者——と、呼ばれている、いわゆる戦国の密偵仲間はは、ほかの武士にはない特殊な信念を持つていた。それは職分の相違から自然に持たれてきた生命観のちがいであつた。

——君の馬前で死ぬ。また、主君のためにはいのちを鴻毛こうもうより軽んじる。しかも華やかにいさぎよ潔く。

それがふつうの武士の信条だつたが、乱波らつぱの者の考えは反対だつた。

いのちは惜しめ。どんな恥や苦痛をしのんでも、いのちは持つて帰れ。

たとえ敵国へはいつて、どんな貴重な情報をさぐり得ても、生きて本領へ帰つて来なかつたら何の益にもならない。だから乱波者が敵国において死ぬのは、それがどんなに華々しい死に方でも、犬死である。たとえ、その者一人には武士道らしくあつても、帰るところ、主君のためには無益な死であり、犬死である。

故に、乱波者は、生きて犬侍と呼ばれても、生き通して、必ずその任を完まつしななければいけない。窮地となつても、意地きた穢きたなく、小心狡智こうち、あらゆる非武士的な行為にみずから辱はしても、飽くまで生きて帰るところへ帰ることをもつて、乱波組に働く者の本旨とする。

——そういう特殊な職分の中にあつて、骨の髄まで信念にしている三平、天蔵の二人であつた。で、いま一方の甘糟三平が、

(お互いに同じ職分。ここで相打ちしてもつまらないではないか)

と、刃をひいて、相手の理性に訴えると、天蔵も直ちに得物を引いて、

「もとよりこつちも好むことではないが、首を賭けようというから相手をしたままでのこと。この法衣の端ですむと申すなら置いて行こう」

と、あつさり身にまどつている法衣の片袖を破つて、三平の足下へ抛り出した。

三平は、拾い取つて、

「これでいい。これを証に持ち帰つて渡辺天蔵は討つたりと披露しておかばすもう。名だたる敵の侍なら知らず、多寡が乱波の者ひとり、首を御実見なさろうとは仰つしやるまい」
 「そう話がわかれば、双方の祝着、では甘糟三平どの、お別れとしよう。……いずれまたと申したいが、会えば最後、もう生涯二度と会わないようにお互いに祈ろう」

云い捨てると、渡辺天蔵のほうも、急に相手が恐くなつて来たとも見え、生命びろいでもしたように、足を迅めて立ち去つた。

その姿が峠の降り坂へかかった頃だつた。三平は、その前に、草むらへ隠しておいた鉄

砲と火繩を持ち直して、天蔵のあとを追いかけていた。

やがて、鉄砲の音がした。——つづいて鉄砲を投げすてて、倒れた敵へ止刀とどめを刺しにゆく彼のすがたが跳ぶ鹿のように彼方かなたの坂に見えた。

杣道そまみちの草むらに、渡辺天蔵は仰向けに倒れていた。——が、三平が踏み跨またがって、その胸いたへ、刃の先を向けたせつな、天蔵はふいに起つて、敵の諸足もろあしへ両手で抱きついて行つた。

「——あッ」

三平は仰向けに倒れる。天蔵の石あたまは、いやというほど、その鳩尾みずおちへ打ぶつかつて逆立さかだちする。

「ごまを見やがれ」

蜂須賀村の産、野武士小六の甥おい——である天蔵の野性は遺憾いかんなく発揮された。相手の喉のどをしめつけて、狼のように立ちあがると、傍らの石を両手に振り上げて、三平の面部にたたきつけた。

ぐしやツと、柘榴ざくろの割れるような音がした。天蔵の影は、もうその傍にいなかった。

権化ごんげ

信長が長嶋ながしまから引きあげた後も、横山城の藤吉郎は、江州ごうしゅうの各地を転戦していた。始末の悪い一揆いっきの火である。

ここを消せば、かしこに燃えあがり、そこを馳せ向えば、後方がまた再燃している。

あの信長でさえ、自身、長嶋征伐おもむに赴いて、現地の実情を知ると、直ちに兵を引返して、

（——これを攻めるのは愚だ。火事の火元をつきとめずに、火事の映っている遠い壁や堀に水をそそいでいるようなもの——）

と、嘆じて、以来、各地の一揆に対して、いちいち虱しらみつぶしに出る戦法はやめてしまった。

で、藤吉郎の方へも同様な指令が来た。藤吉郎は、信長のところを察して、

「さすがは御賢慮ごけんりよあつたとみえる。このひと夏は、悠々、昼寝でもしておれとの仰せだろう」

忽ち、横山城へ馳せもどつて、将士をねぎらい、夏を江北の山城にせずしげに送つてい

た。

が、武人の休養は、戦場より苦しいと兵などという。毎日、鍛錬たんれんは怠らない。その休養のあいだが約百日ほどつづいた。

九月にはいると、

「出陣！」

の令が下つて、山城の門はひらかれた。横山を降りて、湖岸に出るまで、兵たちはどこへ戦いに行くのか知らなかった。

湖畔には大船が、三艘そうもついていた。馬も人もどかどかとそれに乗ってから、士卒たちは初めて、

「石山か。叡山えいざんか」

と、こんどの戦場の方角を知ったくらいであった。

兵船はすべて新造の木の香を放っていた。ことしの正月以来、丹羽長秀にわながひでが奉行となつて、孜孜ししと造船していたものである。

大湖の秋を渡つて、対岸の坂本についてみると、すでに信長以下の——佐々ささ、柴田、佐久間、明智、丹羽などの諸大將はさきに寄せていた。叡山のふもとは眼のとどく限り、織

田軍の旗だった。

「いつのまに？」

と、味方ですら眼をみはったほど迅速な行動だったのである。去年の冬、この囲みを解いて、岐阜へ引きあげた時から丹羽五郎左衛門に命じて、いつ何時でも湖を押し渡れる大船の準備を命じておいた信長の遠謀を、今になって、人々は思いあわせるのであった。

思い出されることといえば、長嶋の攻撃を中止して帰った折の信長のことばも胸に呼び起された。——信長の眼から諸処の一揆や騒乱の火をながめる時、その地方地方の火の手はみな壁に映っている火事であつて、禍根の火もとはまさにここ叡山のうえにあり——と、見さだめたものに違いない。

今日、ふたたび大挙して、この山を取りまいた信長の眉には、実に、かつてのいかなる時にも見られなかった、決意と勇猛な気がただよっていた。

そのせいか今、中軍の幕のうちには、彼のいつにない激越な声が營外へまで聞えていた。さながら敵の中で叱咤するような声で、

「なに、攻め上るに、火を放つては、山上の伽藍を焼くおそれがあるから、火計は用いたくないと申すのかッ。……ば、ばかなことを。戦とはどんなものか、なんのためにするか。

そちたち、各 一方の將たりながら、まだそれすら弁えずに、今日まで戦つて来たかつ」と、洩れ聞えてくる。

内を窺うと。

その信長の床几を繞つて、佐久間右衛門、武井夕菴、明智十兵衛などの驍將が、頭を垂れて居ならんでいた。——ちようど、親たちが息子に意見されてでもいるように。

いかに主君とはいえ余りな極言である。——佐久間信盛も武井夕菴も、また十兵衛光秀も、そう思つて恨めしげに面をあげた。

「……………」

そして信長のひとみを、敢えて正視した。

なんのための戦いか。それを思えばこそ、憂えればこそ、面を冒して、自分たちは、諫めに出たものである。

「情けないことを御意あそばします。われわれとても、それくらいなことは、弁えぬではございませぬ。……が、数百年このかた、国家鎮護の靈域とあがめられている叡山を焼き払えなどという乱暴な御命令には、臣として——いや臣なればこそです——なおもつて、仰せに従うわけにはまいりません」

信盛のぶもりはもう決死の氣を眉にも見せていた。すぐにも、従容しやうようと死を受けとる覺悟でなければ、今の信長の顔を見て、これだけのことはいえないはずであった。

常日頃でも、この君には、なかなか直言のし難いところがあるのに、きようのその人は、さながら斬魔ざんまの劍か、狂う烈火か——と、疑われるような姿に仰がれる。果たして。

「だまれツ、だまれツ」

信長は、彼のことばにつづいて、夕菴せきあんや光秀が、つづいて自分へ口を開こうとしたので、頭からそれを抑えつけて云った。

「そちたちは、常に諸国の僧徒が、教化きやうげの道を誤つて、衆民を煽動せんどうし、財をあつめては武器を蓄え、門を出ては流言るげんを放ち、いたずらに政道を紛糾ぶんきゆうさせ、宗門末派を利用しては私権をむすぶなど——手におえぬ醜状しゆうじやうや、また蜂起ほうきする一揆いっきをながめて、日頃、何と憤慨ふんがいしていたか」

「それは、眼にあまるものでございます。われらとても、その悪弊をお懲こらしあるに、なんの異存を抱くものでもございませぬ。けれど、諸人の信仰をあつめ、特殊な権能をゆるされておる教団の改革は、そう一朝にはまいりかねましよう」

「そんなことは誰もいう常識というものだ。八百年来、その常識がさまたげて来たればこそ、夙つとに、山門の腐敗墮落は嘆かれながら——何人もそれを革あらためることができずに今日へ来てしまったのだ。——畏れ多くも、白河法皇の御ことばにさえ——朕ちんの心のままにならぬものは、双すしろうく六さいの賽と賀茂川の水——とある。山法師どもが、日吉の御輿みこしを奉じて来る時は、朝廷の御威厳すら、光もなかったと史書にも見える。源平の騒乱に、またその後の乱世、この山が、どこに国家の鎮護たるつとめをして来たか。衆民の心に安心と力を与えて来たか」

信長は、突然、右の手を、いっばいに横へ振った。

「——今の世の通りだ。数百年来どんな国家の大患たいかんという時でも、彼らは、自分たちの特権を汲きゆう々きゆうと守ることしか知らぬ。愚民から献じさせた財をもつて、城廓ごうのような石垣や山門を築き、内に銃槍を蓄えて——しかも、日ごろの行状に至つては、荒淫かういん腥食せいしょく、心ある人間には、できないような生活も平然とやっておる。法燈修学の頽たい廢はいなど、いうもおろか、破戒乱行の末世と申すも過言でない。——左様なものを焼き払うのになんの惜しみがあるうぞ。色をなして諫いさめだてするそちたちの心がむしろ信長には解げせぬ。止めるな、信長は断じてやる」

「仰せは、いちいち御尤もですが、われわれ三名も、断じて、お止めいたします。死すとも、この座は起ちませぬ」

信盛、夕菴せきあん、光秀の三人は、同時にまた両手をつけて、あたかも諫言かんげんの砦とりでのように主君の前をうごかなかつた。

叡山は天台てんだい、石山は門徒もんと、宗派はちがうが、仏徒であることに変りはない。

その仏徒の団結は、教義のうえでは、他宗とよび合っているが、信長に対抗することだけには、完全に一致し、完全に同じ性格をあらわしている。

浅井、朝倉と通じたり、將軍家を利用したり、各地の残党に利便を与えたり、越後や甲州へまで密使を送つたり——また信長の領土を中心として、気ままな野火のように、一揆を蜂起させて、信長を奔命につからせてしまおうと謀はかつたり——すべては靈山の大堂に住む僧形そうぎようの策や指命であつた。

この特殊な世界——不可抗力とされている、法城の清掃を措おいて——織田軍の行動はなし得ないし、信長の理想の行えないことは、三人の臣も、充分に知っていた。

だが、信長がここへ着陣してからの命令というのは、

（——金山を取り詰め、山王二十一社を初め奉り、山上の中堂も、坊舎堂塔ぼうしゃどうとう、すべて

の伽藍がらんも経きよう巻かんも靈仏も、ことごとく焼き払え)

と、いう余りにも過激なもので、しかもその焼討ちにかかったら、

(有智無智うちむちの僧たるを問わず、貴僧と堂衆のけじめなく、僧形たれば一人ものがすな。児童、美女とて仮借かじやくするな。俗体といえ、この山にかくれ、火を見ておどり出る者は今日

までの害物と見てさしつかえない。みなごろしとして址あとを人氣ひとけもなき焼け山としてしまえ)

と、いうのである。

羅刹らせつといえどそんなことのできるものではない。命に接した諸將は実に戦慄したのだつた。

(気でも狂わせられたか——)

と、武井夕菴せきあんがつぶやいたのを聞いて、佐久間信盛も、明智光秀も——そのほかの将にもなお多くの反対者はいたが——ともあれ三名だけが君前に出て、御意見をしよう。——われわれが御意にさからつて割腹したら、次々に罷まかり出て君公の前に死骸をつみあげても、無謀極まる焼討ちなどをおさせしてはならないぞ——と、そう誓って、直言に出た三人であった。

攻めるもよい。

叡山えいざんを占領するも当然である。

が、焼討ちだの、そんな殺戮さつりくをする必要がどこにあるう。

そんな暴挙を敢えてしたら、せつかくの人心は、信長を離れてしまおう。

天下にみちている反信長の陣営では、よろこんで、それをあらゆる機会に悪用せんぶし宣布するにちがいない。

古来、何百年、何人なんびとも恐れてうけなかつた悪名をこうむるのみである。

(——君をあやまる左様な戦いくさにわたくしどもは戦えません)

それが諸将を代表しての三名のことばであった。

もちろんそれを告げるには、臣下として、声涙ともに下るばかりな真心を披瀝ひれきしてであつたが——信長の肚はぐわんと決まっついて、さつきから三名の縷々るる数百言にも、

(もいちど考えてみよう)

と、いう容子ようすも見えなかつた。

いや、むしろ彼の強固な意志を一そう打ちかためてしまったような傾きさえあつた。

「……………」

「……退れ。もういわん。もう聞く要もない。そち達が、命をうけぬとあれば、他へ命じ

る。他の将士も従わねば、信長一人をもつてもやる。やらねばならないのだ」

「この山一つ、攻めとるのに、何で仰せのよう暴虐ぼうぎやくをする要がありませんか。むしろ血も見ずに陥おとしすのが、まことの大將、まことの軍いくさとぞんじますか」

「利巧そうな常識のみをならべるな。八百年來の大敷おおやぶだ。根こそぎ焼き払わねば、新しい若草の芽は萌もえ出でぬ。……この山一つとそち達はいうが、信長は、叡山ひとつの処置に逆上しておるのではない。この全山を焼き払うことは、諸山の仏閣を救うことであり、この一山の僧俗をみなごろしとするも、諸国の不心得者が眼をさませば、未然に、それだけの助けはするわけだ。——眼前の阿鼻あび叫喚きょうかんなど、信長の眼にも耳にも、何もものでもない。この信長ならで、誰がこれをなしきろう。天は今日信長をこの土に生ませて、やれとお命じになつておるのだ」

信長の英才や経略、すべて彼の偉大さは、誰よりも知っているつもりの三名にも、いま彼自身、

(——この信長ならで、誰が、これをやりきろうぞ)

と、いったのには、これはもうただ事でない、天魔にでも魅入られたかと、悲しまずにいられなかつた。

信盛につづいて、武井夕菴たけいせきあんも、主君の床しょうぎ凡の間近へ身をかがめて、

「いや、なんと仰せありましようとも、われわれどもは、臣として、御諫止ごかんしいたすしかございませぬ。——勿体なくも、桓武天皇このかた、伝教でんぎょう以来の靈跡れいせきを、灰燼かいじんにしてしまえの、また……」

「うるさいッ。——黙らぬか。——信長は、この心に、桓武天皇の勅を奉じて焼き払うのだ。——胸に、伝教大師の大慈大悲をもつて殺戮さつりくの命を汝らに下すのだ。わからぬか」

「わかりませぬ」

「わからねば去りおろうッ。邪さまたげするな」

「お手討ちあるまでは、御諫言を申しつづけけまする」

「亡者めッ。立て」

「何で立ちましようや。生きてわが殿の狂気沙汰を見、君家の滅亡に会うよりは、死をもつてお邪さまたげ仕ります。——古来、入道清盛をはじめ、幾多の例をみても、仏舎ぶつしゃ靈れい閣かくを業火ごうかとして、僧徒を殺戮さつりくした者に、よい終りをとげた者はありません」

「清盛のは私の怒気だ。彼一門の擁護にすぎぬ。——信長はちがう。そんな儂はかない痴人ちじんの夢を、この地上に描くため、夥おびただしい血と兵燹へいせんを弄もてあそぶものではない。——信長は信長のため

に戦はせぬ。わしの戦は、わしをして旧弊のあらゆる邪魔ものを破壊させ、また、わしをして生々たる新しい世を打建てよと命じる——神か、民か、時か——何かは知らぬが、うけたる使命によつて戦うのみだ。そちたちは気が小さい、眼がせまい。そちたちの嘆きは、小人のかなしみだ。そち達の説く利害は、信長一個を出ておらぬ。叡山のごときを、灰としようが、無辺の国土と、かぎりない衆民を擁してゆく世々の末までを思えば、何ほどのことがあるう」

「御理想はそうありましようとも、これが民心に映るものは、悪鬼の所業と見えましよう。得て、小愛の仁は、衆民によるこばれますが、余りな苛烈や峻厳は、うけ容れられません。たとえそれが、わが殿の大愛から出たものでありましようとも」

「右を顧み、左を眊して、今この時、なにができようぞ。——古来の英雄どももみな、一時の人心を恐れて、禍根を末代にのこして来たが、信長はその根をぬいてみせる。やるからには、徹してやる。さもなくば今日、弓矢をとつて中原に出る意義はない」

怒濤にも、間断がある。

信長の声もすこし穏やかに返つて来た。三名の臣が、ほとんどそれに抗弁する辞もつき、首を垂れてしまったからであらうも知れぬ。

——藤吉郎は、折ふし、その日の午ひるごろ、湖を渡ってここに着いたが、着陣のあいさつのため、中軍に来てみると、この有様なので、さつきから外たはずに佇たんでいたが、その陣幕の割れ目から顔を出して、

「よろしゅうござるか。木下藤吉郎ですが……はいつでもよろしいでござろうか」
と、中へたずねた。

ふと、ふり向いた。

そこに藤吉郎の顔を見出すと、さながら炎そのものの形ぎようそう 相あだった信長も、氷の如く張はりつめて、死を決していた三名も、

「……お。お」

救われたように、ほつと眉まゆを和なませた。

「ただ今、船が着きました。——湖上の秋は、また格別、竹生島ちくぶしまなど、はや紅葉もみじしておりました。何やら、戦場へ向うようなこちもせず、船中ふねで下手な歌など作つくってまいりましたが……いずれ戦いくさの終はつたあとで御披露ごひろうに及びましょう」

そこへはいって来ると、藤吉郎は、ひとりで好きなことを喋しゃべり出した。彼の顔には、どこをさがしても、ここにいる主従しゅじゆうのような陰かげもないし、また屈くつ託たくらしいものさえなか

った。

「……どうなされたのです？」

なお、凝然ぎょうぜんたるまま、ものもいわない君臣を見くらべながら、彼のみは独り春風のように、

「——ははあ、ただ今、陣幕の外で聞いていましたが、そのことで御沈黙でござるか。臣下は、君を思うの余り、死を決して、諫言かんげんし、御主君には、臣下の衷情ちゆうじやうを知るも、斬りすてても、思うことをなさろうとするほどな暴君でもおわさぬために。……なるほど、困ったものですか。これは、いづれを是ぜ、いづれを非ひともいえぬし」

信長は、きつと、向きをかえて、

「藤吉郎」

「はッ」

「よい折に見えた。あらましを聞いていたとあれば、余が胸中も、三名の申すところも、分つておろう」

「分つております」

「そちは、信長の命めいを、うくるかどうか。信長の命を非と思うか」

「思いませぬ。つつしんでおうけいたします。——いや、お待ちください。その御命令の本旨は、元々この藤吉郎が、書をもって、殿のお手許へ献策いたしたことで、殿の御決断は、それがしのおすすめに依るものでござりましょう」

「な、なにを。……いつそちが左様な献策を」

「いや、そうです。お忘れかも存じませぬが、すでにもうこの春頃でしたかな。——あいや明智殿、武井、佐久間の御両所にも、先ほどからの御忠諫ごちゆうかん、うるわしき臣道の真心、

藤吉郎も蔭にあつて、涙をもよおしましたが……しかし、各の第一にお案じあるところも要するに、叡山を焼討ちになどいたしたら、世の人心が君公から離反するにちがいない、故に君公のおんためには、死をもつても、お諫めいさせねばならぬという御決心でござろうが」

「もとよりのこと。仰せのごとき暴をなせば、上下しやうかの怨嗟えんさをうけ、諸方の敵方に乗ぜられ、末代、殿の悪名は拭ぬぐうべくもおざるまい」

「いや、そこが、ちと違いますよう。……叡山へお手入れのうえは、断じて、徹するまでやるべしとは、この藤吉郎が献策で、実は殿の御発意ごほつゐではござらぬ。さすれば、いかなる悪あく名みやうも呪詛じゆそも、藤吉郎が負うべきで——また自身、そう決意いたしておりますので」

「僭越せんえつでおざろう。何で一木下ごときを、世人がとがめよう。織田軍として行うたこと

は、すべて殿の御名おんなに帰してくる」

「もちろんです。——が、各もなぜ藤吉郎に御加勢きこくださらぬか。あなた方三将と藤吉郎とが、殿の御命令以上、騎虎きこの勢いで徹底的に——つい、やり過ぎたのだと——世間に触れたらよいわけではござらぬか。忠の大なるものは、諫言かんげんして死処に迫らざるにあり——とかいいますが、藤吉郎にいわせれば、忠諫して死んでもなお、真の忠臣には忠義がし足りないであろうと思われる。——むしろ生きて、悪名あくみょう、罵詈ばり、迫害、失脚、何でも殿に代つて、身にひきうけんと藤吉郎は所存いたすが……各にはまた、お考えがちがいますようか」

うなずきもせず、否定もせず、信長はだまつて聞いていた。

するとやがて、武井夕菴せきあんがまず云つた。

「木下。お身のことばに同意いたす。……わしは同意いたすが？」

彼が顧みると、明智、佐久間のふたりも、異存のない旨を、共にちかつた。

——信長の命令を命令以上、勝手に超えて行動したものととして、徹底的に叡山焼討ちの挙に出ようというものである。

それなら信長の決心もつらぬけるし、死をもつて忠諫に出た三名の臣道もとどこうとい

う藤吉郎の提案である。

「名策である」

夕菴は、嘆声に似た声で、こう彼の機智を賞めたたえたが、信長はすこしも歡ばない顔していた。むしろ、よけいな斟酌しんしゃくなど要らぬことである——と、いわぬばかりだった。それに似た色が、ちらと光秀の面おもてにも見えた。

光秀も、心のうちでは、正直に、藤吉郎の説に感じていたが、何か自分たちの真実をもつてした忠諫まで、彼の一言に、その功を奪われてしまったような嫉そねみが、胸のどこかで滲にじみ出していたのだった。

けれど聡明な彼はすぐ、この際のそんな私心をみずから恥じた。そして、
 (死をもつて君を忠諫しに出た身が、かりそめにも、何たる浅ましい考えを)
 と、ふかく内省して、みずから誠いましめていた。

三名の得心はそれでついたが、信長はいつかな藤吉郎のことばなどを、恃たのみともしないふうだし、それによつて初志をうごかす気色けしきもない。

——誰を呼べ。彼を呼べ。

と、続々と口をついで諸部隊の将校を床しょうぎ几ぎの前に呼び、

「今夕、本陣の貝を合図に、いつせいに山へ攻めかかれ」

と、さきに三名に下した嚴命と同じ令をもって、自身から伝えた。

諸將のうちには、武井、明智、佐久間の三將と共に、焼討ち反対のものも多くいたらしいが、すでにその三人も、命に服しているのので、みな二言もなく領受して去った。

陣地の遠い部隊へは、中軍の使番が、伝令をおびて駒をとばした——伝令はその以後も、次々に前線の山麓へ放たれた。後からのそれは、作戦行動の指令であった。四明ヶ嶽のうしろに、夕雲の燦爛をとどめて、陽は落ちかけていた。——湖上にも虹のような光芒が大きく走って、水面は波騒を起こしていた。

「……見よ」

信長は丘に立つて、叡山の上を——さらにその上の団々たる雲を仰いで——あたりの者にいった。

「天意も、信長の意思を、励ましたもうている。——風がつよくなって来た。焼討ちをかけるには上乘な空あいであるぞ」

そういう間にも、颯々と、秋の夕風の冷やかに、そして次第に烈しく、人々の陣羽織をふいて来た。

ほんの五、六名しか、彼のまわりにはいなかったが、その時、夕風を孕はらんでふくらんでいる彼方かなたの陣幕の辺に、ひとりの味方が、誰か探しているように覗のぞきまわっていた。

武井夕菴せきあんが、大声で、

「何用だツ。殿には、これにお立ち遊ばしておられる」

と、注意すると、その武士は駈け寄つて、遠くへひざまずき、

「いや、殿へのお伝えではございませぬ。木下殿がおられまじょうかと、いった。

藤吉郎が、人影の中から進んで、何用かとたずねると、取次の武士は、

「ただ今、御家中の渡辺天蔵と仰せられる僧そうぎよう形の者が、甲州の旅より立ち帰つて来た

ばかりとかで、すぐお眼にかかりたいと、丘の下に待つております。——何か、火急を

要する大事とかで、しきりと急いでおりますが、まだ御帰陣には間がございしまするか」

と、彼の都合をたずねた。

やや離れていたが、信長はふと聞きとがめて、彼を振り向いた。

「藤吉郎。甲州から立ち帰つて来た者とは、そちの家中の者か」

「殿にも御存じかとぞんじますが、蜂須賀彦右衛門の甥おい、渡辺天蔵のことでございします」

「……むむ、あの天蔵か。さてはなにか耳新しいことが聞けよう。ここへ呼べ、信長も共に聞こう」

丘の下へ、一武者が取次に駈けてゆくと、やがてひとりの旅僧が伴われて来た。それが天蔵であった。

天蔵は、そこへ来て、主人の藤吉郎と信長へ、甲州の見聞をつぶさに告げた。そのなかでも重要な事柄は、彼が恵林寺えりんじにしのんで直接、耳ぶくろに入れて来た甲軍の出兵に関する機密だった。

「……ふーム」

信長はうめいた。こうしていても背後の不安はもちろんある。去年の叡山攻めの時からくらべて、その危険と不安は、すこしも良好になつてはいない。むしろ、武田家との関係も、長嶋方面の状態も、悪くなっている。

ただ、去年の陣には、叡山のうえに、浅井、朝倉の大軍がのぼって協力していたが、こんどはその違を敵に与えなかつたので、当面の勢力はさして彪大ぼうだいではない。ただ背後の危険が常にあるのみである。

「叡山へも、はやこのことは、武田家から早打ちされておるであろう。……坊主どもは、

またしても、信長がいそいで軍を返すものと樂觀しておるにちがいない」

彼は、天蔵の労をねぎらつて、丘の下へ退らせた。

「これも天の御加勢だの」

藤吉郎や夕菴せきあんをかえりみて、信長は会心かいしんの笑みをうかべた。

「甲山をこえて、尾濃へ迫る武田勢が早いか、叡山を粉碎して京、摂津せつを席卷して還る織田勢が早いか、われらに、競きそいと励みを与え、なお必死の信念を加えてくれるようなもの……各もはや部署につけ。夕星ゆうせいが見えはじめたぞ」

信長は陣幕のうちにかくれた。——丘のうえ、丘の下。また叡山の裾をめぐる諸処の陣所に、兵糧を炊ぐ煙があがつていた。

夜に入ると、風はなお烈しくなった。常に聞く三井寺の鐘も鳴らなかつた。——が、やがていんいんとして中軍の丘に貝が鳴る。諸処の陣所からは鬨ときの聲があがつた。

その晩から九月の十三日の暁にかけての大修羅だいしゆらであつた。

中腹、山上にかけて、十数カ所の嶮けんに防寨ぼうさいをかまえていた山徒の守りを突破して、全山を翔かけまわつた織田軍の兵は、火を放つて、烈風に喊かんせい声を嗶からした。

黒煙は谷をうずめ、火焰は満山に狂い、ふもとから仰ぐと、大きな火の柱が、叡山の各

所からあがっていた。

湖まで赤かった。

その巨大な火の柱の位置から察すると、根本中堂も焼けている、山王七社も焼けている。また、山上の大講堂から、鐘しょうろう楼、法蔵、諸院の坊舎、宝塔、高塔、峰々谷々の末院坊舎にいたるまで、残された伽藍がらんというものは一つもなかった。

（——心に桓武天皇の勅を奉じ、胸に開山伝教大師のゆるしをうけて我は焼くのだ！）
そら恐ろしいばかりな炎を仰ぐたびに、諸將は、信長のいったことばを、胸によび起して、自分を励ました。

將の信念は、兵にのりうつる。炎をこぐり、黒煙のなかを駈けて、寄手の兵は、信長の信念をそのまま遂行した。

八千の僧はみなごろしにされた。阿鼻叫喚あびきょうかんは飢こだました。谷間へ這い下り、洞あなにかくれ、木へ逃げ登りなどした山徒も、稲の害虫をころすように狩りつくされた。

自分の大英断と、部下の大猛烈と、ふたつの合致からここに現出された未曾有みぞうな光景を、その夜、夜半頃には、信長も自身、山上へのぼって来て、まざまざと眼に見ていた。

叡山側は、誤算していた。

かれらはその夕方まで、信長の大軍をふもとに見ても、

「物々しき虚勢ではある」

と、多寡たかをくくつていた。

そしてまた、

「いまに慌あわてふためいて、総勢、退軍しはじめるから、そこを追い討ちすればよい」

と、晏如あんじよとしていた。

そういう心理にはどうしてなったかといえ、山から遠くない京都から、かれらを安心させるような情報ひんびんが頻々と、山徒の本陣へ来ていたからであった。

京都といえ、いうまでもなく、そこにいる將軍義昭よしあきの府のことである。叡山は諸国の僧侶や信徒にとつて、もつとも顕著な反信長の本山であるが、その叡山に、裏から兵糧を送り、武器を与え、間断なく、煽動と督戦とくせんに努めているものは、義昭そのものであった。

その將軍家の府には、もう逸いぢはやく、甲州から早打ちが来ていて、

（——信玄うごく！）

という大きな期待を抱き、その意向が、叡山にも伝わっているので、山徒も当然、

「今に、甲州の軍勢が、信長の背後を衝く。——さすれば信長は、またぞろ、長嶋の二の舞だろう」

と、観察をくだして、ひたすら一面の雲ゆきばかり空^{そらだの}恃みにしていたわけだった。それと、もう一つは。

かれらが八百年來安住して來た特権の下に、いまもなお、時代の変遷^{へんせん}を見くびつていた錯誤^{さくご}も大きい。かれら自身が、自身で法の靈場^{のり}を世間以上に俗化したり、国家からうけた特別な待遇を腐敗させたり、また世人の魂の燈^ひを踏み消してしまいがら——なお金色の大日^{だいにち}如来^にの像^{かたち}だけにすがつて、この特権と信仰^との壘^{とりで}に対しては、どんな猛勇な兵も、そうやすやす、駈^かけあがつて來ることはできまい——宝塔伽藍^{がらん}を蹂躪^{じゅうりん}するまでのことはなし得まい——と、そう充分に恃^{たの}んでいたふうもあつた。

ところが。

信長の果斷は、まったくかれらの想像外に出て來た。全山の焼討ちと、僧俗すべての大^だ殺戮^{いさつりく}が無言の答えとして敢行された。この世ながらの地獄が半夜のうちに天^{てん}飈^{びょう}のごとく全山をつつんだ。

それに対して。

遅いにも程があるが、猛火のさかんな真夜半頃まよなかとなつて、恐怖と狼狽の底に捲き墮おとされ
た叡山の代表者は、信長の陣へ使いをたてて、

「いかなる莫大な償金なりともさし出します。また、いかなる条件にもきつと服します
れば」

と、和議をいつて来たが、信長は一笑を見せただけで、

「答えには及ばん。その僧どもも斬りすてろ」

と、鷹へ投餌なげえをやるように、左右の者へ云い放った。

僧徒の使いは、二度も来た。二度目の使いは、信長のすがたを拜んで、

「……お慈悲に」

と、まで叫びながら合掌したが、信長は、

「ならん！」

首を振った。

そして即座にまた、使いの僧を斬らせてしまった。

夜が明けた。

叡山は、余煙と、灰と、黒い枯木と、峰谷々まで、さまざまな断末のすがたをした死骸

で埋^{うづ}まっていた。

「——このなかには、一世の碩^{せき}学^{がく}も、大智識も、未来ある若僧もいたろうに」

ゆうべ殺戮の先鋒となつた明智光秀も、今朝は余煙のなかに立って、面^{おもて}をおおい、胸のいたみを覚えた。

その光秀は、その日、

「志賀一郡はそちにあずける。以後、ふもとの坂本城に住め」

と、いう信長の恩命に接した。

信長は、一日措^おくとすぐ山を降つて、京都へはいつた。

その日もまだ叡山は黒煙をあげていた。おとといからの余焰である。

かれの大虐殺の手をのがれて、京都へかくれこんだ僧俗もかなりあるらしい。その者たちの口から信長の名は、

「生ける魔王」

だとか、

「地獄の使者」

だとか、また、

「暴^{ぼう}戻^{れい}な破壊者」

だのと、極端な恐怖の象徴に擬^ぎせられ伝わっていた。

眼に、比叡^{ひえい}や四明^{しめい}の大紅蓮^{だいぐれん}を見、耳に当夜の惨状を聞かされていた京^{きょう}洛^{らく}の人々は、
信長が兵をひいて下山して来ると聞くと、

「こんどは京都か」

と、震えあがつて、

「室町將軍の館^{やかた}は焼討ちをまぬがれまいぞ」

などと、昼ながら戸を閉めたり、荷をからげて逃げ支度する者も多かった。

しかし信長の兵は、加茂川べりに屯^{たむろ}して、市街に入るを禁じられた。

禁じた者は、それを統率しているおとといの魔王である。

かれは少数な部将だけをつれて一寺院にはいった。そこで甲^か冑^{ちゆう}をぬぎ、湯漬を喰べ
終ると、これはまた優雅^{みやび}な衣冠にすつかり着かえて出て来た。

駒も派手な鞍をおいた月毛に乗り換え、わずかな部将だけは甲冑のままであったが、そ
れらの十四、五名を従えて、ゆるやかに大路を通って行った。

魔王のすがたは余りにも平和であった。かれの面や眼ざしはその日、わけても市民たち

をニコやかに見まわしているふうだった。

「何事もないらしいが？」

市民たちは辻々にあふれ出て、信長を拝した。ほっとした安心がもりあがる歓呼となつて、わあツというどよめきの波になった。

するとその歓呼の辻から、ふいに一発の鉄砲が鳴りとどろいた。弾丸は信長の身をかすめたが、信長はけろりとしたのみで、音のした方を振り向いただけだった。

当然――

まわりにいた部将たちは、馬をとび降りて、曲くせもの者を捕えにどつと駆けたが、かれらよりは、市民たちのほうが勃ぼっぜん然と一致して、

「ばか者を捕えろ」

と、怒った。

市民は自分たちの味方だと考えていた曲者は、案に相違したので逃げ場をうしない、忽ち抑えられてしまった。山門第一の勇僧といわれていた法師で、捕まってもまだ、

「仏敵め、魔王め」

と、信長を罵ののっていた。

信長は、眼のなかにチリがはいったような顔もしていない。予定どおりかれは道をすすんで、やがて皇居に近づくと下馬した。

神泉で手をきよめ、しずかに御所の門前へあゆみ寄つて、そこに坐つた。

「一昨夜来の猛火、さだめし内裏だいりにおかれても、お愕おどろきのことと拝おします。御宸襟ごしんきんをなやまし奉りました罪、おゆるしおかれますように」

胸のうちでそう詫び入っているかのように、かれは長く拜跪はいきしていたが、やがて御所の新しい門や塙かきをながめあげて、

「皇居の御普請ごふしんも、あらまし竣しゅん工こうしたな」

と、満足そうに、左右の諸将を顧みた。

起つて、御門脇に整列し、古式のとおり奏文そうもんの伝奏を仰いで、しずかにまた、引つ返して来た。

家業を離るる者大罪たり

蜚語流言ひごりゆうげんを放つもの即死罪そくしぎい

総じてきのうの如くあるべし

法三章、市中各所にそれを立てさせると、信長は岐阜へひきあげた。——ひと頃は生きたそらもなく、濠を深め、鉄砲を持ちこみ、焼討ちを覚悟していた將軍義昭には、とうとう会わずに帰ってしまった。ほつとはしたが、室町御所では、無気味にかれを見送っていた。

時々刻々

兵燹のけむりは叡山だけに濃かつたのではない。

三河の西部地方から、天龍川に沿う諸部落、また美濃の一端までも、野火の飛火のように、けむりが挙っていた。

甲州の連峰をこえて、武田信玄の精銳は、南へなだれ降りて来たのである。

「すわ！ 足長の信玄めが」

浜松を本拠とする徳川家康の部下たちは、まなじりをあげて、それに立ちむかった。かれらの意気は、信玄の上洛をくいとめるにある。

「西へ通すな」

と、するのである。

それは同盟国の織田家のためにはない。甲州と三遠とは、宿命的に隣接している。武田勢に突きやぶられたら、徳川家の存立はあり得ないからである。

その家康は、ことし三十の男ざかりである。その家中の三河武士は、貧乏と体面と、あらゆる困苦欠乏をここ二十年來もしのんで来た者どもである。ようやく成人した主君をいただいて、信長と隣交をむすぶ一方、今川家の領をすこしずつ蚕食さんしょくして、

「これからだ！」

と、老臣も若い臣も、その家族たちも、百姓町人も、草も木も、立ちあがって奮ふるい立っているというような、興隆の希望と進出の勇氣にみちみちている領土なのである。

「信玄何者ぞ」

であった。——その装備、物資においては、もとより彼には及ばない若い国であったが、意気においては、すこしも劣る気はもっていない。

その三河武士が、信玄をさして「足長あしなが、足長」とあだ名しているのは、どういうわけかという、かつて信長から主人に來た書状のなかに、そういう警句けいごが書いてあったのを、

家康が見て、

「うまいことをいわれるものだ」

と、家中へはなしたのが伝わったのであった。

きのう北国の上杉勢をむかえて甲信の境に戦っているかと思えば、きようは上州や相州に出て北条家をおびやかし、また忽ち転じては、三州遠州美濃までも兵火を放つて駿々しんしんとやってくる。しかもその陣にはかならず信玄自身が指揮にあたっていた。だから世間はかれには七人の影武者がいるなどといっているが、事實は、どこの戦いにも自分で臨まなければ気のすまない信玄であるらしかつた。とにかくそういうふうに山国にいながら足が長い——そこを信長が諧かいぎやく諛うそしたのである。

けれど、信玄が足長なら、信長は足早といえよう。

信長は、叡山へかかる前に、使いを送つて家康に、

「いま甲州の鋭鋒へは余りむきになつて相手になられぬがよい。事迫る場合は、浜松から岡崎へ退ひいても、堅けん忍にん持じ久きゆうされておられるように望む。——時は他日に待つとも遅くはなからうから」

と、わざわざ云い遣やつたが、家康は、その使者のまえで、近臣を顧みながら、

「この城を退くほどなら、弓矢をふみ折って、武門を捨てたほうがましである」と、いった。

信長にとれば、家康は国防の一線だったが、家康にとっては、絶対的な三河であり遠州であった。ここの土を措いて他国に骨を埋める地はないのである。

信長は、使いの返事をうけて、

「困った逸り者」

と、つぶやいたが、そのためか、叡山の事が終ると、例の足早で、疾風のごとく、岐阜へ帰っていた。

その早さには、信玄もまた舌打ちをもらしたろう。さすがに彼も機を見ることは敏であるから、

「また時もある」

と、甲山の彼方へ旗をひそめてしまった。

こういう険悪な空あいのうちに年は暮れて、元龜三年の春は迎えられた。

その春。

熱田神宮では、本殿そのほか、大修理の工事にかかっていた。

応仁の乱このかた、めずらしい鑿のの音だった。

地方民も豪族も、長いあいだの不安と暗黒に漂つて来て、各が自分たちの營いみにだけ追われていたかたちだった。

荒れきつた神宮の森に、この春、鑿の音を聞くと、かれらは、耳をそばだてて、

「どなた様の御寄進であろう。さても御奇特な」

と、にわかもったいにその勿もったい体もったいなさに眼をみはつた。

「——年の暮、熱田の祠官しかん岡部又右衛門どのを岐阜へお召しになって、信長様が、私財をもつて、お命じなされたものだそうな」

こう実相が伝わると、

「あの、信長様がか？」

と、諸人はまた意外な思いに打たれた。

叡山の堂塔どうとう伽藍がらんから坊ぼう舎しゃ楼ろう門もんのすべてと山王七社までを一夜に焼き払つたという信長が——と、信長のところを、どう解といていかわからないような顔をしたものである。

だが近頃、街道を往来する旅人のうわさなどから、上方や諸国の評を聞くと、

「——叡山を焼いたのは、叡山自身じやとみないうている。神仏は焼こうとて焼けるもの

ではないぐらいなことは、信長様も知らぬはずはないさ」

と、いう者が多かった。

いや、むしろ彼は人いちばいな敬神家でさえある。熱田の修築が実証している。また、仏教に対しても、憎悪をもっているわけはない。若年の頃、自分を忠諫して死んだ一老臣のために、政秀寺せいしゅうじを建立こんりゆうして供養くようしているではないか。

また毎年。

一月の元旦といえ、衣冠いかんをただして、遠く皇居を拝し、次に、祖先の廟びやうにぬかずいて、父母のみたまに一年の報告をすることを例としているというはなしもある。

桶狭間おけはざまへ出陣の明け方、

——人間五十年、化転けてんのうちをくらぶれば。

と、舞い唄ったあの唄のころと、明らかに、仏教から来ている生命観である。それをあの場合あの人があつたつていからこそ、武士道になつてい、その源泉にじは、濁にごらない仏教の精神もせせらいで流れているといつてよからう。

こんなふう、つぶさに彼の心にはいつて、彼を批評する者もあつた。

いずれにしろ、近頃、世相のうゑに、非常に濃くあらわれて来た現象は、

信長びいきと。

信長ぎらいと。

こう二者の分れ方であった。

叡山焼討ちという曠世こうせいの大猛断をやったことが、その是々非々、ふたつに分れて、暴風のような批判を天下にまき起した結果であることはいうまでもない。

「きらい」のほうでは依然、かれを悪魔視して、いよいよ反感をつのらせたが、「ひいき」側の一部では、はやくも、

「天下はやがてあのお方に」

と、予想するものもあらわれて来たりした。

いやたとえ信長を敵とするものでも、具眼の大將は、彼のやり口を見て、いよいよ恐るべきものと観みて来たにちがいない。

信玄などは明らかに、

「一日おくれれば一年の難事となる」

と、上洛じょうらくという多年の宿望に対して、いまは一日も急ぐ気もちになっていた。ために、あらゆる外交策が内々、急がれていた。

北条家との修交は、それによって功を奏したが、上杉家とは、依然、交渉がはかばかしくない。

ぜひなく彼は、その年の十月を待つて、甲府を発した。——甲越のさかいは早、雪にさまたげられて来るから、謙信へ対する憂いは、まず大丈夫と見てである。

総軍約三万は——かれの領する甲斐、信濃、駿河、遠州の北部、三河東部、上野の西部、飛驒の一部、越中の南にまでわたる、およそ百三十万石の地から徴せられた将兵であった。

「守るに如くはない」

「織田どこの援軍がいたるまでは」

一面、浜松城のうちには、こういう守勢論もあつた。

徳川家の兵力は、その全土のものをあげても、一万四千に足りないのである。

武田方の半分だ。むりもなかつたが、若い家康は、

「なんの。——織田どこの援軍などは待つほどのこともない」

と、出軍を令した。

家臣はみな、この際、当然な義務として——過ぐる姉川の役に徳川家が助力した義理か

らでも——織田から大兵の来援があるものと期待していた。

その空気に対して、家康は努めて、あてにしない顔をしていた。今こそ、危急存亡の時であることを覚悟させると共に、真に恃むものは自力以外にないことを悟らせようとした。

「——退くも滅亡、進むも滅亡ならば、突きすすんで、乾坤一擲のなかから、もののふの名と、死に華を、両手につかみ取つて死のうではないか」

と、かれは家臣たちへ静かにいうのである。

この君は幼少から実にみじめな苦勞にもまれながら、こせつかず才走らず、どこことなくぬうと成人されている。

いま、こんな際になつて、浜松の城中はかなえの沸くような殺氣だが、そこに坐つて、しかも誰よりも烈しい主戦論を口にしながら、その語気はほとんど平常と変りがなかつた。

だから家臣のうちには、

「あんなお気色で」

と、そのことばと内容の差をあやぶむ者すらあつた。

けれど家康は、櫛の齒をひくような物見の者の報告を、いちいちうけとりながら、着々と出陣の用意をすすめていた。

その間にも。

敗報はもう頻りであった。

信玄の大軍は、すでに遠州を冒おかして来たという。只来ただき、飯田の二城は、敵へ降伏を余儀なくされたとある。

袋井、掛川、木原地方の村落は、一として甲州勢に踏みしかれない所はない。——わけでも、味方から偵察に行つた本多、大久保、内藤の三千ばかりの先鋒が、天龍川附近の一言坂ことざかで武田勢に発見され、全滅に近い打撃を与えられて、池田村から浜松へ潰走かいそうして来たという報告のはいつた時には——城中みな色をうしなつて動揺した。

だが家康は、黙々と軍事を見ている。交通路の確保にはもつとも注意し、十月の末近くまでに、その方面の守備をととのえ、また天龍川の二一保城ふたまたじょうの抑えに、援軍と軍器食糧などを増派しておいて、

「いざ、立たん」

と、浜松城を出た。

そして、天龍川の岸、神増村かんましむらまで軍をすすめたが、甲州二万七千余の大軍が、各部に整肅な陣をはり、その陣地陣地が、信玄の中軍から車軸と車の齒のように、完全に統一さ

れているのをながめて、

「ああ、さすがは」

と、家康も、丘に立つて、しばらく拱きょうしゆ手てしたまま、嘆称たんしょうしていたということである。

信玄の中軍には、はるかから眺めても、四語の旗が立っていた。近づけば、その文字も

鮮やかに読めよう。敵も味方も知る有名な孫子そんしの語がかいてあつた。

そのはやくことかぜのごとし
其疾如風

そのしずかなることはやしのごとし
其徐如林

おかしがるやひのごとし
侵掠如火

うごかざることやまのごとし
不動如山

うごかざること山のごとし——その文字のとおり、幾日かを、信玄もうごかず、家康もうごかず、天龍川を挟んで対陣したまま冬も十一月にかかっていた。

みかた はら
三方ヶ原

家康に過ぎたるものが

ふたつあり

唐からかしらの頭ほんだに本多平八。

占領した一言坂ひとことざかのうえに、誰かがこんな落首を立てた。

勿論、武田方の中の者である。

陣地を捨てて敗走はしたが、負けぶりがいい——とは、後で勝ち誇った武田軍の衆評だった。

大久保忠世ただよ、内藤信成のぶなりなどの武者ぶりもよかったが、とりわけ本多平八郎の退ひきは見事——徳川家にもさむらいはいるぞと、歌ったのであろう。

「敵として、不足のない敵。このたびの合戦こそは、全甲州の実力と、全徳川の実力とが、真正面にぶつかって、のるかそるかの乾けん坤こん一擲てきとなるだろう」

ひとりでに身ぶるいの出るような張合いが、甲軍全体の士気をいやが上にも高くしていた。

こういう余裕をもつて。

信玄はその本陣を江台島えだいしまにうつし、一方、伊奈四郎勝頼いな、穴山梅雪あなやまばいせつなどの一手を、
二一俣城ふたまたじょうへ向けて、

「手間どるな」

と、厳命した。

それに対して、家康は、

「味方には、大事な防禦ぼうぎよの線。敵が奪とれば、攻め入るに有利な一拠地きよち。——守将、中根正照を苦戦におちいらすな」

と、すぐ援軍を送り、自身も後詰に向つて、督戦とくせんしていたが、変幻極まりない武田軍の陣容は、たちまち変貌へんぼうして、左右に迫り、へたをすれば、うしろ巻きしている家康自身みづかみの陣地が、浜松と遮断しゃだんされそうな形になった。

しかも、その間に。

城は水の手の動脈を断たたれてしまった。

二俣城のもつとも痛い弱点を、敵の詭計きけいに突かれたのだ。この城の一方が天龍川に臨んでいるので、飲料その他、城兵の生命とする水は、城壁の一端から懸出かけだしてある井楼せいろうに車をかけ、井戸水を汲むように川から上げていたものである。

それへ向つて、武田方は、上流から筏いかだをぶつけ、櫓やぐらの脚を破壊する策に出た。

奇策は成功した。城兵はその日から水に困った。視野のかぎり流れる大河を前に、炊かしぎ

の水にも困りだした。

十二月十九日の夜。

守将以下の城兵のすべては、力尽きて、闇のなかを退却して行つた。

開城を知ると、信玄は、

「依田よだのぶもり信守、そこにおれ。そして佐野、豊田、磐田いわたの諸郡と、よく聯絡をたもち、敵の掛川、浜松方面の退路に備えよ」

と、いいつけた。

かれの布陣とその前進とは、名人の碁ごの一石一石を見るように慎重であつた。

こうして着々と、まつ黒に、地を這う雲かのような甲軍二万七千余の兵は、押太鼓おしだいこを

天地にとどろかせながら、祝田いわいた、刑部おさかべ、引佐川いなさがわと迫つて来た。

——そこから。

信玄の中軍は、井伊谷いいたにをこえ、三河の東部へ出ようとしていた。

二十一日の昼である。

鼻も耳も削そがれるばかり寒い。弱い冬陽をかすめて、三方ヶ原みかたはらの方面に、赤い土ほこりが舞っている。久しく雨がなかつたので、空気は乾ききっている。

「井伊谷へ。井伊谷へ」

と、中軍の使番が、各部隊に信玄の令をつたえると、諸將のうちから異論がおこった。「井伊谷へとあらば、浜松城をお取り囲みの御決意と思われるが、それで違算はあるまいか？」

人々が、そう危ぶんだのは、織田の援軍が、もう続々と、浜松へ着いたし、なお後続中のその兵量は、どれほどか分らないものであるという諜報を——その日の朝からチラチラ耳にしていたからだった。

敵の真相というものは、敵に迫れば迫るほど、分らなくなってくる。

情報もまた同じであった。目前の敵地から、頻々ひんぴんと、敵の動静は報じられてくるが、その偵察がみな血走った眼まなざしと、余りに鋭い耳を持ちすぎていて、却って、大勢を見誤りやすい。

行くゆく沿道の村落で聞く風説などにも、ずいぶん戒心かいしんを要するものがある。その中には多分に、敵の流言も混まじっているからだった。——けれど、織田の救援軍が、続々と南下して、浜松に合しているというその日の風説は、どうもほんとうしかなかった。

「もし信長が、大兵をもって、浜松の後詰をして参れば、ここは慎重に、御考慮を要する

ところでございますまいか」

信玄きか麾下の諸將は、ひとしく中軍に伺候して、各から献言した。

「浜松一城へかかつて年を越えることにでもなりませんと、お味方は当然冬期の長陣となり、日夜敵の奇襲をうけ、兵糧不足と病人の続出にも、疲労困憊こんばいしてまいるかと案じられまするし……」

「また、一面には、海道その他の退路を遮断しやだんされるおそれもあり」

「なお、織田の後詰に後詰のかさなる時は、お味方は狭隘きやうあいな敵地に立って、にわか
の勢もままなりません」

「かくては、御西上の宿望もさまたげられ、むなしく血路をひらいて引揚げることがようやくの儀となりましょう。そも、このたびの御出軍は、浜松一城の御攻略にあらず、初めから御上洛のことこそ大目的にもござりますれば——」

信玄は、中央の床几しょうぎにあつて、そういう口々の諫言かんげんへ、針のように細い半眼をもつていちいちうなずいていたが、やおら口をひらいて一同へ答えを与えた。

「みな意見、至極もつともと思う。しかし、織田の援軍とて、たかだか三千か四千の小勢に過ぎまいとは、この信玄の胸づもりである——なぜといえ、もし岐阜ぎふの大半など浜

松へさし向ければ、かねて、信玄より申しやつてある浅井、朝倉が必然、江北からうしろを衝こうし、また洛中の將軍家よりも、各地の門徒、殘党どもへ一斉に激励の教書を発せらるるはず。……まずもつて織田の懸念は大してない」

と、いちど語を切つてから、また静かに、

「もとより上洛の目標は一途に志すところではあるが、家康にかぎつては、路傍の邪魔石と、ただ避けて通るわけには参らぬ。やがて行く手の岐阜へ迫れば、当然、家康めは、手兵をひっさげて、わがうしろを塞ぎ、織田を救けるに相違なからう。さすれば、織田の充分に加勢のなし得ぬいま、直ちに、浜松城をふみつぶして通るが上策ではあるまいか」

諸将はそれに服すしかなかった。主君の言であるばかりでなく、戦術にかけても大先輩たる人の信念である。

だが、各々が隊へ帰つてゆく中で、ひとり山県昌景は、行軍のうえに薄ら寒く曇つている冬の陽を仰ぎながら、口のうちでこう嘆じていた。

「……実に天性、戦がおすきであられる。武将としては、稀な御器量ではあるが……」

一方。

浜松城へ、甲軍の方向急転がつたえられて来たのは、二十一日の夜だった。

信長からの援軍としては。

滝川一益かずます、平手汎秀ひらてのりひで、佐久間信盛などを武将として、三千ばかりが城下に着いてい

た。

「思いのほかな少数」

と、失望の声もあつたが、家康はさして歎びも不平の色も見せなかつた。そして次々と情報の来るあいだに、軍議をひらき、城将の多くも、また織田方の部将のすべても、

「ひとまず岡崎へ退いて」

と、自重を望む中で、かれのみは依然、

「敵に城地をふまれながら、一矢も酬むくわずに退ひけようか」

と、主戦論をとつて動かなかつた。

浜松から北へおよそ十町。横二里、縦三里に余る高原に出会う。

三方ヶ原みかたはらであつた。

高原を二つに割つて縦走している断層がある。深さ十八尺もあろう崖をのぞく、清冽せいれつな水がながれている。そこを犀ヶ崖さいたにという。

二十二日の未明、浜松を出た家康の軍は、犀ヶ崖の北に陣をしいて、武田勢がさしかかるのを待つていた。

「いかながなされたのやら。……こんどの御陣に限つて」

軍目附いんくさめつけの鳥居忠広とりいただひろは、陣地で出会つた石川数正をとらえて、痛嘆していた。

「何をお憂いなされておるか。御合戦のさきにあたつて」

「いや、常には、われわれの血氣をお叱りなるとも、先へ逸はやるようなことはない殿が、こんどばかりは、初めから誰よりも烈しく攻勢を主張しておられる。……何となく、すでに御心中、玉碎をお覚悟されているように思われている」

「む、む。……だが、この期ごになつては、名を惜しむか、恥を負うかだ。殿が名を惜しまれての御決意はさすがではある。わしたちはよい主君を持つた。そう思われぬか」

「常々、そうありがたく思えばこそ、おたがい永ながの困苦をも困苦とせず、艱難かんなんを楽しみとして、これまでお家を護り合つて来た。それを一朝いちちようにと思つと残念でならぬ」

「軍目附いんくさめつけたるおん身からして、そう負目ひけめにお考えでは困る。たとえ武田の二万七千に對して、お味方は一万に足らぬ小勢といえ、われら三河武士の骨ぶしが、甲州者にやわ劣ろうか。ひとりひとりが敵の三人に当れば足りる」

「各に憂いはない。だが、それがしの眼で、全陣地を見るところ、殿の御本陣を中心に、鶴翼（横隊陣）の右翼にすこしも戦気がない。その弱点が気がかりではある」

「右翼は、援軍の織田勢の三千人か」

「左様。……察するに、佐久間、滝川などの部将たちは、信長から援けに赴いても、兵を損するな、好んで戦うなど、内々いいふくめられて来たものと思われる」

「それもあてにはすまい。殿御自身からして、曖にもそれにはお触れにならぬところを見ても、悲壮なお覚悟のほどが窺われる。われらも共々、殿と同じ心であればよい」

ゆうべから垂れこめている低い雲は、朝焼けして赤かった。今朝、あらためてその天地を見、またわが身というものの、露よりも脆い生命を考えたものは、忠広や数正だけではなかった。

右翼の織田軍をのぞく徳川家の全将士は、もう明らかに主将家康の決心をうつして、そのまま自己の決心としていた。

ゆうべの軍議までには、まだ異論も聞えたが、ここへ来ては、もう夢にも、退くなどという考えはなかった。

いつでも、跳びつけるような姿勢と、光る眼と、重厚にむすんだ唇とが、兜の眉びさし

の下から、前方を睨めあっているだけであつた。

陽がのぼる。陽がかける。

草みな枯れ伏している高原のひろい空を、鳥影が一羽、しずかに横切つてゆく。

たまたま、その鳥影のようなものが、枯れ草を這つてまた、走り帰ってくる。——物見の兵である。

そういう偵察は、もちろん武田軍のほうにも行われていた。

今朝、野部を立つた信玄の大兵は、天龍川をわたり大菩薩を経て、なおその行軍態勢をつづけながら、午下がりの頃、犀ヶ崖の前面へかかつて来た。

「止まれ」

の令が全軍へとどいた。

信玄のそばへ、小山田信茂やその他の將が、もうすぐ前方にある敵軍の状況をもたらして集まつていた。

しばらく凝議してしたが、信玄は一部隊を残してそれへの抑えとし、本軍以下の大部隊は、予定どおり三方ヶ原を横ぎつて進軍をつづけた。

祝部の部落は近い。

行軍の先鋒は、もうそこにはいったかもしれない。何しろ、蜿蜒えんえんとつづく二万何千騎の中軍からでは、馬の背にのび上がっても、味方の最前列は見えなかった。

「やりおるぞ」

信玄は馬上から左のほうを振り向いて前後の旗本たちにいった。

「才才。なにさま」

人々も眼を凝こらした。

はるかに黄色い土けむりが立ち始めていた。抑えに残してきた一部隊が、敵から小勢と見くびられて、やにわに猛襲をうけているらしい。

「あ……。つつまれたな」

「あの小勢だ。つつまれたら一ひとたまりもあるまい」

「二、三千ほど、駈けつけてやらいでは」

長途の馬は首をさげて、歩足ものたのたと行くほうへ歩いている——だが諸将はみな、彼方かなたの埃ほこりの下を思いやって、手綱たづなの手もかたく握りしめられ、気が気ではないような眼まなざしをそろえていた。

「……………」

信玄は、黙々として、誰にも答えを与えない。

みすみすこうしている間にも、彼方の土つむじの下では、もう味方の幾人かが、覚悟のまえとはいえ、将棋倒しに討たれているのである。

某の子も、某の親も、某の兄弟たちも、その部隊には混じっているのだ。信玄のまわりにいる旗本や諸大將ばかりではない。長い行軍の列のすべてが——足輕のはしまでがみな横を向いていた。眼を彼方へ凝らしながら行軍していた。

——と、その列に沿って、大物見の小山田信茂が、信玄のそばへ駈けて行つた。信茂の声はいつになく弾みあがつていたし、馬上のままなのであたりへもよく聞えた。

「お館、お館ツ。敵の一万を捕捉して、みなごろしにする機は、いまを措いてありません。ただ今、味方の抑えに向つて攻めかかる陣容を物見してまいりましたところ、各隊一段備えに、鶴翼のかたちを展げ、一見、大兵と見えますが、二陣、三陣とも奥行はうすく、家康の中軍とても、たかの知れた小勢で守られているに過ぎません。——のみならず旗幟甚だとのわず、わけて援軍の織田勢には、戦意のないこと明らかです。機はずさずお懸りあれば、勝算は歴々」

ことばのうちに信玄はうしろを見て、

「物見番。見とどけて来い」

語氣を聞いて信茂はすこし駒をさげ、そのままひかえていた。

物見番の室賀信俊と上原能登守が、ただ二騎で駆けて行つた。——敵は味方の何分の一しかない小勢と知れていながら、念に念を入れて、かりそめにもうごかない信玄の落着きかたを、信茂は充分敬服はしていたが、やはり、

「兵機は電瞬の間、いまを逸しては」

と、悍馬が前脚で土を搔くような焦躁をどうしようもなかつた。

室賀、上原のふたりは、駒を躍らして帰つて来た。そして、

「小山田の物見も、われわれの偵察も、お答えは同様にござりまする。天機は今まさにめつたにない幸いを、お味方へさずけておるように存ぜられます」

と、復命した。

「ウム、そうか」

太い声が出る。信玄のかぶとの白毛が、しきりと前後に振りうごき、次々と、その太い声から左右の将に命令が発しられた。

——貝が鳴る。

二万数千の先鋒から末端までその貝の音がきこえ渡ると、たちまちそれまでの行軍序列はドドドドと地鳴りしてくずれ立ち——くずれたかと思えるまにまた、魚鱗ぎょりんを組んで、いっせいに押太鼓を打ちながら徳川陣の側へ迫って行った。

これは合戦後の余談に属することではあるが。

その時の迅速じんそくな陣替じんがえばかりでなく、総じて甲州勢の大兵が、信玄の指揮ひとつで、実にあざやかに動くのを見て、家康はあとで、敵ながら実に見事であったと嘆賞して、

(自分も兵家に生れた名みょうもん間に、信玄ほどな年になったら、いちどは信玄のように大兵を自由にうごかしてみたいものだ。——あの総帥そうすいぶりを見ては、たとえ今、信玄を毒をもつてなら殺せるといわれても、鳩毒ちんどくでは殺したくない)

と、ひとに語ったそうである。

それほどに、信玄の采配さいはいは、敵の大將をさえ感銘させる神変をもっていた。かれの戦争はかれの芸術であった。その麾下きかの勇将猛卒も、それぞれ武器馬具旗さし物などに、死出の派手はでを凝こらして、数万の鷹が、餌えきをめがけて、いちどに信玄のこぶしから、それと放たれたかの如く、声の怒濤を作つて、

——うわあッ……ッ。

と、敵の顔が見えるほど近くまで一気に駈けだした。

龐大な人数の輪が車形に旋るように、徳川勢も鶴翼の陣形をそのまま向きをかえて、敵のまえに人間の堤をきずいた。

敵のあげる埃、味方の埃、双方で蹴だてる埃に、一瞬は晦くなった。夕陽に光る槍ばかりが——晦いなかにキラキラしている。

甲州方も槍隊を前に押しすすめ、徳川勢も槍隊を前面に曝して対いあったのである。

「うわあツ」

と、彼方で武者吠えをあげると、うわあツと、こちらも咄をかえした。

塵煙がうすれると、敵の顔やすがたはよく見えるが、距離はまだずいぶん遠く距てているのである。そしてその槍の列からは、容易に一步でも踏み出すものはなかった。

この場合は。

実に百鍊の武者でも、齒の根がわななき、眼はつりあがり、平常のことばでいえば、総毛だつばかり誰も恐いのであった。

恐いといつても、日頃のそれとはまるで違う。意識がふるえるのでなく、五体がひとりで、がたがたと、常時の生態から戦闘生態へ変ろうとするのである。

それは、一瞬の迅^{はや}さで行われるので、肌は鳥肌になり、皮膚のいろは鶏^{とり}のときかのよう
に紫ばむ。

髪の毛から爪の先まで——睫毛^{まつげ}の一本一本にいたるまで、その生態を怒らせて、敵へか
かろうとしないものはない。

一兵の生態を、戦っている一国として見るなら、鍬^{くわ}をもつ民も機^{はた}を織る民も、一本の髪
の毛なり一指^{いっし}の爪にひとしい役は各持つ。主体が亡べば当然自分もないからである。に
もかかわらず国土の興亡をよそに、この生態をとらない惰民^{だみん}がいるとすれば、それは人体
にたかつていても睫毛^{まつげ}の一本にも値^{あた}しない垢^{あか}のごときものだといえよう。

限りがない、余事は措^おいて、とにかく敵と顔を見合つたせつなは、恐いものだと言語
でいつておく。昼ながら天地は晦^{かい}冥^{めい}となり、耳に聞えるのは何か、眼に見えるのは何か、
一瞬は分らなくさえなつて、前にも出ず、後にも退^ひかず、ただ槍先ばかりそろえて、わあ
わあ揉^もみあつているこの線を——実にこの一步の線を——他人^{ひと}より先に出た勇氣の者に、

一番槍

の誉れはあとで称^{たた}えられるのであつた。

後になれば、何でもないこと。

しかしその刹那には千軍万馬の士でも容易に行えないこと。

一番槍は、そこに値うちがある。大きな意義もある。武士最大の機会はいま、何千という両軍の武士のまえに平等に与えられていた。けれどその一步を——たった一步を、誰も容易に踏み出し得なかつた。

すると、ひとり、

「徳川家の、かつ、加藤ツ九郎次ツ、一番槍ツ」

と、どなつて、向う側の列から、砲弾のように、駈け出した者があつた。

具足の粗末。名も聞いたことはない。加藤九郎次、たぶん徳川家の一平ひらぎむらい侍むらいにすぎないものであろう。

だが、九郎次の一番槍に、あと何千がいちどに、どどどと、数歩すすみ寄つた。

と。その中からまた、

「九郎次の弟、加藤源四郎ツ。——二番槍ツ！」

つんぎくような声が出た。

さては先に出たのは、兄だつたとみえる。その兄なる九郎次は、武田勢の前まで近づかぬうち、さつと突き出して来た敵がわの列に吞まれて、乱戟らんげきのなかに姿も没していた。

「二番槍はおれだツ。加藤九郎次の弟なるぞ。——みろツ、甲州とんぼめ」
その武者と武者とのかたまりを、源四郎は槍で四、五振りなぐった。

振り向いた甲州兵の一兵が、

「小癩こしやくなツ」

と、突いて来た。

源四郎は、仰向けにひっくり返ったが、よろいの胴を刎はねすべった敵の槍をつかんで、

「くそツ」

と、一度は起きかけた。

ところが、その時もう味方はいちどに押し出していた。甲州勢も出足をそろえてぶつかつて来た。怒濤と怒濤が噛かみあい狂いあうあのがたを、血と槍と甲かちちゆう胃いがえがき出していた。

「あツ、兄上ツ」

味方の兵や馬蹄ばていの下にふみつけられながら、源四郎はさげんでいた。しかし手と脚で這いながら、甲州兵の足をひっ掴んで倒し、首を搔かいて横へ抛ほうり出した。

それきり彼のすがたは誰も見とどけていた者はない。

ここは全くの乱軍とはなった。

だがなお、徳川勢の右翼と、武田方の左翼との衝突は、ここほどの接戦にはなっていない。

一町余もひらいていた。

砂けむりのなかに、押太鼓おしだいこのとどろきや貝の音がもの凄まじく聞える。どうやら信玄の旗本がそのうしろに在あるようだった。両軍とも、鉄砲組を前に立てるとまもなかったので、甲州勢は、その最前線に「水俣みずまたの者もの」とよぶ軽士隊を出し、さかんに石つぶてを抛ほうらせていた。

石とはいえ、まるで雨のように飛んでくる。こここの前線は酒井忠次ただつぐの一陣、二陣以下、織田家の援軍えんぐんだった。

「ちいッ」

忠次は馬上で舌打ちしていた。

甲軍の前列から投げってくる砂礫されきが馬にあたるので、馬が狂って仕方がないのだった。自分の駒ばかりでなく、待機している槍組のうしろにいる騎馬の者のそれがすべて竿立ちさおだちとなつて荒れるので、さなきだに陣形は動揺する。

槍組の諸士は、忠次の号令を待つていた。忠次が声をからして全軍に、

「出るなッ。この采配が、風を切るまでは」

と、抑えていたからである。

石を投げている敵の前列は、甲州方の進撃路をきり拓いて来た工兵である。だからその水俣の者の隊は怖ろしくないが、一側後ろに精銳が手に唾して機を計っている。

強い甲軍のうちでも強いと音に聞えている山県隊、内藤隊、小山田隊。なお内藤昌豊よや小幡信定おぼたのぶさだなどの旗じるしも見えた。

「水俣みずまたの者ものにあしらわせて、わざとこつちの怒りを誘おうとする策であろう」

そう敵の計を見ぬいている忠次であったが、すでに左翼の戦鬪は乱軍の状態にあるのに、かくては、二陣の織田家の将士のでまえもある。また本陣の御大将も何と見ておられるやも知れないという気がして——遂に、

「かッ、かかれッ」

と、兜の緒かぶとも切れそうなほど、大きな口をあいて、突貫を命じた。

知りながら敵の策に乗って出るといふ、序戦からして不利な位置を取らざるを得なかったのである。果たして、全軍におよぼす負け口はここから生じた。

石の雨が、ばたとやむ。

同時に、石礫いしつぶてを抛ほうつていた七、八百の水俣の者が、隊を左右に割つて、一線からさつと退ひいた。

「しまった」

と、敵の二陣が、酒井忠次の眼にみえた時は、もう遅かった。

水俣の者と、次の陣の騎兵のあいだに、もう一列、鉄砲隊が潜伏していたのである。みな腹這いになって身をしずめ、銃身を左手ゆんでと顔の横に当てがって――。

ド、ド、ドツと、つるべ撃ちの弾たまけむりが草から燃え立った。弾道の低いため突貫して来た酒井隊の多くは足を撃たれた。刎はねあがった馬は、腹に弾たまをうけたものであろう。倒れぬうちに鞍を離れて、歩卒と共に、突進して来る将もある。戦友の屍かばねをこえて、槍をふりしごいて来る勇兵もある。

「――退ひけいッ」

武田方の鉄砲組へかけられた命令であった。わき眼もふらず迫つて来た槍組に接触されたら鉄砲組は一たまりもない。かれらは、うしろにいる味方の騎兵隊を繰り出すために、できるだけな速さで散つた。

どつと、馬の鼻づら揃えて、一番に甲軍随一の山県隊、二番に小幡隊と、重厚な備えで奔出してきた。酒井忠次ただつぐの手勢は、ためにさんざんに駈けくずされた。

「くずれ立ったぞ」

勝ちほこる声か、甲軍にあがる。——と見るや小山田隊は、迂回うかいして、徳川方の二の備え、織田勢の側面へ馬けむりをあげて来た。

見るまに、甲軍の大兵によつて、鉄の輪のような囲みができてくる。織田兵も、酒井、本多、小笠原などの旗じるしも、すべてその中に揉み揺ゆられていた。

中軍の小高い陣場に、味方の全線をながめていた家康は、

「——ウム！ 負けたッ」

と、はつきり呻うめいた。

「……ぜひも、ごさいませぬ」

凝視して、同じように、側に立っていた軍目附いくさめつけの鳥居忠広は、ちと、無念そうに、唇くちをかんだ。

きょうの戦いばかりは、どれほど諫いさめたことか。

——勝目はありません！

断言して、家康に、手出しを止め、こよい敵が祝田に野營するところを放火して奇襲するようすすめたのであったが、老獪な敵の信玄は、わざと、小人数の抑えをのこして家康の手出しに「放し餌の戦法」を掛けたのであった。

「はや、手の下しようはありません。この上は、味方をおまとめあそばして、一時浜松へ」
「……………」

「お引揚げが、一瞬早ければ、一瞬の利があります」

「……………」

「殿。……殿ツ」

「うるさいッ」

家康は、忠広の顔も見ない。——陽は沈んで、刻々、三方ヶ原の野末には、白い夕靄と夜の闇とが、二三条に濃くわかれていた。

冬風に乗って、使番の旗は、頻々と……悲報をそこへつたえた。

「織田家のお身内、佐久間信盛どものには、まっ先に潰え、滝川一益どものにも逃げくずれ、平手長政（汎秀）どのはお討死。酒井どの、ひとり御苦戦にございます」

「敵、武田勝頼の勢、山県隊と力をあわせて、お味方の左翼をかこみ、石川数正どものには、

傷を負われ、中根正照まさてるどの、青木広次どのなど、次々に御戦死です」

「松平康純やすずみどの、敵のなかへ駈け入ったまま、斬死なされました」

「本多忠真ただまさどの、成瀬正義なるせまさよしどの始め、その手勢八百余人の将士、信玄の旗本めがけて深入りされ、数千の重囲におちて、生き還ったもの幾名もございませぬ」

次の声、また次の声と、敗報は悲調をおびてくるばかりだった。

「御免ツ」

なに思ったか、鳥居忠広は、やにわに家康のからだを引つ抱えて、部下と共に、かれの駒のうえに押上げた。

「——逃げろ！」

それは、馬の尻を打って、馬にどなったのである。家康をのせて馬が飛ぶと、忠広その他の旗本もあとを追って駈け出した。

まんじ
出

雪となつて来た。——陽ひが沈みきるのを待っていたように。

雪かぜは霏々と、敗軍の旗を兵馬を吹きまくして、一層、抛るところを失わせた。

「殿は。殿はいずこに」

「御本陣はどこへ」

「おれの隊は？」

路頭に迷った逃げ足のかたまりへ向つて、甲軍の銃隊は、けむる雪の中から、鉄砲を撃ちあびせた。

「おひき揚げだ」

「退軍の貝が鳴っている」

「さては、もはや御本陣をひき払われたか」

敗軍の鯨波は、まっ黒に北へなだれ、西へまよい、その間にもなお多くの死傷者を出しながら、やがて南のほうへ一路潰走しはじめた。

さきに、鳥居忠広と一緒に、危地を脱して行つた家康は、うしろに続く、人々を顧みて、
「旗を立てい」

と、急に駒をとめ、

「——旗をたてて、味方の者どもを、ひとつに呼びあつめろ」

と、命じた。

夜の闇はせまり、雪はふり増してくるばかりである。家康をまん中にして、旗本たちは貝をならし、馬じるしを振りまわしては叫んでいた。

「おうういッ」

「オオーイ」

追々と、敗軍の士卒は、そこへ集まつてきた。どれもこれも血にそんでない姿はない。だが忽ち。

敵の中軍がそこにあると知った甲州の馬場美濃みの、小幡上総おばたかすさぎの二隊が、一面から弓、一面から鉄砲を撃ち放ちながら詰めてきた。——そうして早くも退路を断たたんとするかに見えた。

「ここも危ない。各には殿を守って、早々お立ち退きのあるがよい。それがしは一手の人数を頂戴して、敵のなかへ、体当りにぶつかって行きますから」

大勢のうちから伸び上がって、悲壮な声で家康とその旗本たちへ最後の袂別べいべつを告げた者がある。

水野左近であった。

左近はあたりの部下へ。

「われこそお身がわりにならんとするものは、おれに続け」

と、云いながら、続くものがあるうとなかうと、それは意にもかけず、驀しぐらに敵のなかへ駈けこんで行った。

——が、そのあとからすぐ三、四十人ばかりの兵は、彼と共に死ぬべく続いて行つた。

たちまち、敵軍の一角で、わめく声、吠えあう声、噛みつくような声が、劍槍のひびきと共に、雪唸りを交せて、渦巻きはじめた。

「左近を死なすな」

家康はもうまったく平常の家康でないようだった。侍臣が止めるつもりでかれの轡を阻めたが、ふり飛ばされて、あつと、起きあがってみた時は、もう主君のすがたは、白と黒の正のなかに、魔人のような馳駆を見せていた。

「わが殿うツ。……わが殿ツ」

その日。浜松城の留守居にあつた夏目次郎左衛門は、味方の敗亡と聞くと、手勢わずか三十騎ばかりひいて、家康の安危を見とどけようものと、これへ駈けつけて来た。

そして今、これへ来て、家康の勇戦しているすがたを見ると、駒をとび降り、槍を左に

持ちかえて駈け寄るなり、

「な、なんたることですツ。常のあなたにも似げない御粗暴。おかえりなさいツ。早、お退きなされい、お城のうちへ」

と、駒の口輪をつかんで、ぎりぎりと後へ廻した。

「離せツ、次郎左でないか。敵軍のまつただ中で、邪さまたげするたわけがあるかツ」

「てまえがたわけなら、あなたは大馬鹿者でいらっしやる。こんな所で討死なさるほどなら、きょうまでの御苦労などせぬ方がよい。日頃の云いがいもない馬鹿大将ではある。功をたてたいなら後日天下の大事にむかってお立てなさいツ！」

眼に涙をため、口を耳まで裂いて主君をどなりつけると、次郎左は、持っている槍で家康の馬をいやというほど撲なぐりつけた。

譜代ふだいの臣や、近習の誰彼のうちにも、ゆうべここを立って、こよいはもう見えない顔がたくさんある。将士の戦死者、三百余、手負いは数も知れなかった。

「無念、無念」

「畜生」

惨たる敗軍の名を負って、われとわが身へ怒るような顔が、宵から夜半にかけて、続々と、雪の城下へなだれ帰って来る。

空は赤かった。

木戸の口々の^{かがり}篝のせいである。

が、大地の雪の^{くれない}紅は、駈けまわる武者のこぼした血しおに違いない。

「——殿はどう召された？」

半ば、人々は発狂している——泣いている。

もう先に家康は、浜松の城内へ帰っているものと思つて引きあげて来たところ——

「まだ、御帰城はない」

という留守衆のことばに、さてはまだ敵の重圍のうちにおありか、或いは、御戦死か、いずれにせよ、殿より先に逃げて来たといわれては、浜松の住民に対しても、面目ないと、城にもはいらず地だんだ踏んでいるのだつた。

その混雑のところへ、

ドドドドツと、すぐ西の木戸のあなたで鉄砲の音がした。

敵軍だ。最期は迫つた。もうここまで甲州勢が来るようでは、殿の運命もおぼつかない。

徳川家の人々は、

「これまで」

「このうえは！」

と、絶望の眼^{まな}じりをあげて、わつと、鉄砲の音へむかつて、討死を果しに駈けだした。すると、木戸のあたりに押しもんでいた味方のかたまりを衝きやぶって、吹雪と共に、どつと駈けこんで来た騎馬の面々がある。

思いがけなく味方の将たちであったから、兵は悲壮なさげびを、歓呼にかえて、太刀をふりあげ、槍をさしあげて、迎え入れた。

——その影の、一騎、二騎、五騎、七騎とつづいて来る第八番目に、家康が、鎧^{よろい}の片^{かたそ}袖^でもちぎられ、雪や朱^{あけ}にまみれた姿で、駈けつづいて来た。

見るやいな、木戸の将士は、

「殿下ッ、殿下ッ」

「御無事だったぞうッ——」

伝えあい伝え合い、われを忘れて、躍りあがった。声かぎり歓声をあげた。

それのみか。

すがたこそ、さんたん惨憺には見えるが、思いのほか、家康がにこにこしているのをながめて、半狂乱になっていた将兵たちも、ひどく安心して、その後はおのずから秩序づいた。

家康主従二十騎ほどは、城下の辻に、駒を立てて、まだ後から続いて来るらしい部下を待っていた。

追いかけて来た甲州のやまがたぜい山県勢へ小返りして、さんざんに打ち戦い、もうよい頃と、ひと足あとから城下へはいつて来たのは、一隊四十人の槍組だった。

その四十人は、二十七人に討ち滅へらされていた。中のひとり高木九助が、槍のさきに、敵の坊主首ぼうずくびをさし貫いて帰って来たのを、家康は遠くから見て、

「九助、九助」

と、さしまねいた。

何事かと、九助が駈けよって行くと、家康は顔を寄せんばかり鞍のうえから身をかかめて、

「……、……。よいか、九助、あらん限りの大音にて、存分に大言を吐け」

と、何か策をさずけた。

心得て候う——とばかり高木九助は勇躍して城のほうへ走り出した。そして雪を蹴たて

つつ、

「聞けや、味方の衆。——今日の乱軍にて、武田晴はるのぶ信入道信玄の首を、高木九助が討ちとつたぞ。——眼にも見よ、耳にも聞け、俺だぞツ、信玄の首、打ちとつたのはかくいう九助だぞツ」

城の唐橋を駈渡りながら、狭間はざま狭間に案じている留守の将士に、ひとり残らず聞えわたるような大声をあげて行つた。

「なに、信玄を討つたと？」

「信玄の首をだと？ ほんとか」

「あの声は高木九助であろう。坊主首を槍さきにさして、氣狂きちがいみたいに触れまわっている」

城兵はみななどよめき立つた。そのどよめきは絶望から希望へ一変した。

非常などん底には、非常識も通用する。善くも悪くも通用する。

しかもまた、いちどは生死さえ案じられていた家康が、その中へ無事、にこやかな面おもてをもって生還して来たのであるから、一時は、まったく敵将信玄の死をみな信じた。

城門にはいって、留守の将士の出迎えにかこまれ、駒の背から降りると、さすがの家康

も、ほつと、満身で吐息をついた。

「水を。——水をひと口くらい」

そういつて、家臣を見まわし、ひとりが柄杓ひしやくのまま汲んでさし出す水を、がぶがぶ飲み干していた。

と、その前へ。

黒革くろかわの鎧具足よろいにがっしり身をかためた四十がらみの武者が、部下の中から走り出してひざまずいた。

「殿。お久しゅう存じまする」

家康は、柄杓の残り水を切つて、小姓へ渡しながら、

「誰だ？ ……其方そちは」

「石川善助めにございまする」

「なに、石川善助と？」

「——四年前、酒の上で朋友と不埒ふらちな争いを仕りまして、御当家をお暇いとまとなり、やむなく他国へ立退のきましたお厩組うまやくみの善助です。はやお忘れてございませうか」

「忘れはせぬが、その善助が何しに参つた。——そちは当家では三十貫の扶持ふちしておつた

が、その後、他家へ仕えて三百貫の高禄にありつき、近ごろは至極よき身分と聞いていたが」

「前田殿のおなさけで、身にあまる扶持をうけておりましたが、常に、故主の御恩は忘じ難く、折ふしまたこのたびは、甲州軍の乱入にて、天龍川その他の要所は次々と撃破され、御当家の危急存亡は今に迫ると遥かにうけたまわるにつけ、矢もたてもたまらず、意中を前田殿に訴え、三百貫の禄をお返しいたし、召抱えの者八十ほどひきつれて、御加勢の端にもと、夜を日について馳せつけて参りました。……何とぞ、先の不行状はおゆるしあつて、以前のごとく、厩組の端くれになど、お抱えおき下さいますように……。おねがいのござりまする」

善助は、家康の足もとに、額を伏して縷々といつた。

かれの義と忠誠を、かれの面にも見た人々は、いずれも大きな感動に打たれていたが、家康の容子には、さほどな歓びも見えなかつた。

「要らざる業を」

と、むしろ不興げに、

「その方などが加勢をうけずとも、戦に事を欠くわが徳川勢ではない。せつかく前田殿の

下された高禄をば打ち捨てて参るなぞ、勿体ないことではある。——が、すでに馳せ参ったからには、ぜひもない、戦の終るまで、どこへなと陣場をもつて働いておるがいい」

そういう間にも、敗軍の味方は後から後からと、城内へひきあげて来た。

武者溜りも、狭間堀の陰も、大玄関の廂の下も、負傷者のうめき声でいっぱいになった。家康は、不愠らしい眼もくれず、その中を押し通つて、本丸へはいつて行つたが、ふと傍らの旗本たちをかえりみて、

「善助には是非とも、充分に働ける陣場をくれてつかわせよ。……ああは申したものの、近ごろ欣しい男ではある」

と、心から洩らした。

櫓やぐらに立つてながめ下ろすと、雪は小やみになったが、甲州の大軍は潮うしおのように、はや城外の近くへまで迫っていた。——その先鋒隊の襲来であろう、城下の木戸から町屋へわたつて焰えん々と焼き立てられていた。

てんぼうむもん
天放無門

「ひさ野。ひさ野ッ」

本丸の広間に突ツ立つと、家康はこう大声で呼んだ。

まだ戦場にいるような声しか出ない。肺臓も声帯も、異常になつたまま平常に返らないのである。

「はいッ」

ひさ野という侍女は、小走りに寄つて、そこへ手をつかえた。

彼女のたもとの風に揺れた短たんけい髷けいが、家康の半顔に明滅していた。その頬に血しおが光っている。惨として、髪の毛がほつれている。

「櫛くしをもて」

どっかと坐る。

ひさ野に髪をあげさせながら、

「空腹だ。……湯漬を」

と、あとの用を命じる。

湯漬ぜんの膳ぜんや飯めし櫃びつが前へ運ばれてくると、すぐ箸はしをとりかけたが、その箸で、
「縁障えんしょうじ子をみな開け放せ」

と、いった。

燭しよくはゆれても、開けひろげたほうが、室内まで明るいほどな雪だった。縁には、武者たち
ちが、ここかしこ黒々とかたまつて休息していた。

湯漬を搔きこみながら、家康はそのこのひとりへ、

「三五郎、怪我けがをしたか」

と、たずねた。

布を嚙かんで、肱ひじの槍痕やりきずを巻いていた野中三五郎という若い近習きんじゆが、

「いえ、些細さいさいです」

と、そのまま答える。

「これへ来い——」

と、さしまねいて、家康は彼に杯をとらせた。杯の底に三日月の蒔絵まきえがしてあった。

押しただいて、飲みほした後、三五郎は、

「これを拝領しておいてもよろしいでしょうか」

と、杯の底を見ていた。

「何にするのか？」

「身の誉れですから、この三日月を、家紋にして伝えたいと思います」

家康は、うなずいて、湯漬の箸をおいた。

なお距離はだいぶあるが、敵軍の銃声はさかんに聞えて来るし、庭さきの雪なども、城兵の右往左往に、忽ち泥土と変つてゆく。

雪はやんで、大^{おおびさし}廂^{おびさし}ごしに見える夜空は、冴^さえかけてさえた。それにまた、城下の町屋の焼けさかる火の粉がいちめんに舞っている。人に悲壮な感傷と、地に敗軍の呻^{うめ}きがなければ、麗^{うるわ}しいともいえる空だった。

「松井左近はおるや？」

「おりまする」

「もつと寄れ。きょう引揚げる途中、よくいたしました。家康に明日の命はないかもしれぬ。こよいのうち褒めておくぞ」

そのほか、きょうの戦場で、家臣たちのなしたあらゆる働きに対して、彼は洩れることなく、感謝と、賞のことばを与えた。

「——あんな中で、どうしてあんなことがお眼にとまっていたらうか？」
と、怪しまれるくらい、彼は細事まで見ていた。

野中三五郎が、特に三日月の杯を頂いたのは、こよい家康が落ちて来る途中、七、八騎の甲州武者が先へ迫つて道をふさいだのを、よく奮戦して、血路をひらいたのみか、そのうちの敵の剛勇、長弥九郎の首を打ちとつた功によるものだった。

その長弥九郎は、もと徳川家にいて、甲州へ奉公替えした男なので、家康も明らかに記憶していたとみえ、

「この長め、この長め」

家康自身、刃に対つてどなつたほど、憎い敵であつたから、その首は一倍値うちがあつたのである。

松井左近の功は。

きよようの乱軍のなかで、甲州の孕石忠弥はらみいしちゆうやという剛の者が、家康にせまつて、家康の乗っている馬の尻尾しほをつかまえた。——家康は竿立ちさおだになつた馬の背から、太刀をうしろへ振つて、馬の尻尾を切り離した。ために孕石忠弥は仰向けに倒れたが、なお起きあがつて槍をつけようとしたせつなを、松井左近が、跳びかかつて、討つたのであつた。この首も、首帳の三、四番目に値するものだった。

大敗は喫したが、総じて、きよようの戦に遺憾いかんはなかつた。足輕の末までも、よく苦戦に

耐えてくれた。

家康は満足だった。取りあえず左右の者の功を賞したのも、政治ではない、心からな満足の溢れであつた。

湯漬を喰べ終るや否、彼は本丸を出て、諸所の防備を見まわり、天野康景と植村正勝のふたりに惣懸り口の防ぎを命じ、鳥居、内藤、水野、酒井の諸將を配して、大手から玄関口までの守りに当らせた。

諸將は、死守を誓つて、

「たとえ甲州の大軍が、その全力をかたむけて、これに襲せ参りましようとも、御武威を示して、石垣の一つだに、取りつかせることではございません」

と、口をそろえて壮語した。強いてでも、家康を安心せしめ、家康を励まそうとしたことばだった。

「うむ！」

家康は、その意気を受けとつて大きく頷いたが、諸將がすぐ部署へ駆け向おうとすると、呼びとめてこう注意した。

「大手の城門、多門、玄関まで、すべて閉じてはならんぞ。城門はみな開けひろげておけ

い。——よいか！」

「えッ？ ……何と仰せられましたか」

諸将はみな疑った。

自分たちの意志とはまるで反対な命令だからである。

すでに城門は大手といわずどこも鉄扉てつびを閉めてある。味方の総くずれを追迫して、敵の大軍はもう城下間近まで来ているのである。海嘯つなみの襲来をまえにしながら、何でみずから堤防の口を開けておけと命じるのか——人々には家康の気もちが分らなかつた。

「いや、それまでには及ぶまいかと存じます。後から引揚げてくる味方には、その都度、門を開けて、入れてつかわせばすむことです。特にそのため御城門を、八文字に開いておらずとも——」

鳥居元忠が云いかけると、家康は笑つて、彼の思いちがいを諭さとした。

「帰り遅れた味方のためではない。かならず勝ち誇つて、これへ潮のごとく襲よせ来るであろう甲州勢に対する備えだ。——ただ城門を開けおくばかりでなく、大手の門外五、六カ所に、焔こうこう々と、大おお篝かきを焚たかせい。また城内には燎火にわびを旺さかんに焼かせるがよい。——ただし防禦は厳に、部署は整然と、鳴りをしずめ、敵の懸りようを見まもっておれ」

この場合、何という放胆な対策だろう。諸将は余りにも剛愎ごうぷくな彼のことに、遲疑ちぎをいだくまでもなく、はつと服命して、各の持場へ駈け競った。

城門の鉄扉は、家康の胸のごとく、大きく開け放された。

まつ赤な篝かがりが、濠ほりの外から玄関まで、煌々と雪明りに燃えだした。

家康はそれを眺めながら、ふたたび本丸のほうへ歩を移していた。主なる部将は心得ていたろうが、城兵のあらかたは高木九助が喧伝した「信玄の首」を信じて、ここへ襲よせてくるものは、首将を失った敵の敗残軍にすぎないと考えているらしい。

「ひさ野、つかれた。わしも酒を一盞いっさんまいろう。ひとつ酌ついでくれい」

家康は、最前の広間へもどつて、一杯の冷酒をのみほすと、そのまま身を横たえて、侍女のかける衾ふすまをひき被かぐなり、いびきをかいて眠つてしまった。

それから間もなく。

殺到して、濠ほりのまぢかまで、まつ黒に襲よせて来たのは、甲軍の馬場美濃守みののかみの隊、山やまが景たまさかげの隊など、気負い立った精鋭だった。

——が、美濃守も昌景も、浜松の城門を真ん前に見ると、

「や、や？ ……。待てッ」

にわかに駒足を抑え、逸りきつた味方の奔勢を、全軍にわたって制止した。
 「美濃どの。どう思う」

山県昌景は、彼のそばへ馬を寄せて行きながら訊ねた。いかにも解けない謎につき当たつたようにである。

「……?」

美濃守も、凝然と、かぶとの眉廂から、敵方の城門を見つめたままであった。

その面も遠くから焦かんばかりに、城門の内外には、篝火がどかどか燃えさかっている。そしてその鉄扉は八文字に開放たれてあるではないか。

門なきも、門あり。

門あるも、門なし。

これをいかに見るやと、質問を出して、こちらを計っているように、濠の水は黒く、満城の雪は白く、寂として、物音ひとつ聞えないのである。

もし耳をすませば。

バチバチとはぜる篝の薪の音が遠く聞えて来たろう。またもつと心耳を凝らせば、本丸のうちに、無門の胸襟をそのまま手枕の一夢をむさぼって、

（——妄動何かせん。観ずれば死生は一瞬の風裡。悠久は天にあり、死を帰すも天、生を托すも天）

としている敗軍の将家康の鬨声も聞えて来たかも知れないのである。

けれどそれは、心耳なくては聞えないものだった。昌景は云った。

「味方の追撃があまり早かったので、敵は狼狽のあまり、城門を閉じるいとまもなく、鳴りをひそめてしまったものと思われる。いぎ、攻め入ろう」

「いや、待ちたまえ」

馬場信房はさえぎった。

美濃守信房といえ、信玄麾下のうちでも有数の武将であり兵学の巧者であった。

智者は智を修めて智に溺る——

かれは断じてその不可なことを昌景にむかつて説いた。

「この場合、競つて、門を固めるのは、敗北の自然な心理である。諸所に籌を焚くいとまをもちながら、門扉をひらいておくのは、彼に怯気なく、沈着のある証拠といえよう。

——思うに、充分勝計を信じて、一城一心に、われの不要意に攻めかかる機を待っているに相違ない。危うい哉——相手は若将ながら徳川家康、うかつに踏み入って甲軍の武名

をけがし、後のもの笑いになつてはなるまい」

遂に。——そこまで迫りながら二将とも、軍をめぐらして引返してしまった。

それと、近侍の声を、寝耳に聞くや否、家康はがばと匆ね起きて、

「我なお死なず！」

と、雀躍こわどりした。

そして即座に、鳥居とりい元忠、渡辺もりつな守綱の二臣に、手勢をさずけて、追い討ちをかけた。

山県、馬場の二隊は、さすがに狼狽なぐりもせず、抗戦しながら、名栗附近に放火して、あざ

やかに交かわし去つたが、一方、城内からはなお、間道づたいに、天野康景やすかげや大久保忠世ただよ

の奇襲隊が潜行して、信玄の本陣地、犀ヶ崖さいたに附近の敵へ鉄砲を撃ちこんで帰つて来た。

雪にすべこつて、犀ヶ崖へ落ち、寒流に溺死した甲州兵が何十人かあつたという。

大敗はうけたが、徳川勢としては、なお骨ぶしの程を示して、最後に万丈の気を吐いたものといえる。

のみならず信玄をして、まとも上洛を断念させて、空しく甲山へ引揚げることを余儀なくさせてしまった。

犠牲は多かつた。甲軍の四百九人に対して、徳川方の死傷は実に千百八十人にのぼつた。

意外なのは、戦意もなく上手に立ちまわっていた織田家の援軍に、思いのほか死傷が多かったことである。総勢三千のうちから二百余名という十分の一に近い死傷を出していた。要するに戦場の危険率は、誰へも平等であつて、勇者にのみ危険が多いとは限らないものとみえる。

田園の悲母

小閑しょうかんを楽しむというのは、まだ閑のある人のことである。戦国に生れ、ことし三十

二、しかもなお逆境の小君主、家康に閑日などはない。

「——けれど、それでもいいけません」

老臣らうしんは諫めていう。

「弓も弦つるを懸けたままでおくと、そのまま弛ゆるんでまいります。大山たいざんへ坐るには大悠たいゆうなれという通り、時には、御放心も必要でしょう。——稀には殿御自身、忙を離れて、気をお養いあそばさなければいけません。家中一般も、ほっと息をつき、領民が仰げば、何かしら安泰あんたいを感じて、国中が寛ひろやかな心になりましょう」

家康はうなずいて、

「もつともな言だ。ひとつ鷹でも放しにまいるか」

「よかろうと存じます」

甲州の足長殿あしながは一時退ひいたが、三方ヶ原以来、なお多事多端に明けた翌年の天正元年

——春もまだ浅い頃だった。

季節とすれば、狩には遅い。だが放鷹ほうようが目的ではない。君臣十騎ばかり徒士かち一隊をつれて、一日、山野を駈けあつた。

帰途——

祝部いわいべの村落までかかると日が暮れた。村民は戸ごとに篝火かがりたを焚いて領主の通路を照らした。そして軒端軒端の下にみな土下座していた。

「待て。前の者」

前駆ぜんくの家臣をよびとめて、家康は駒を止めた。

道のかたわらに、一戸の旧家らしい軒が見える。夜目にも白髪はくはつのわかるほどな老婆が顔をあげていた。何か、粗相そそうでもあつたのかと、村の人々は眼をそばだてた。

「……何か？」

と、家臣たちも怪しんだ。見れば家康は鞍くらを降りて、その軒先へ歩み出していたからである。

「老婆。——そもじは今、わしのすがたを見て、嗚咽おえつしたのであろう。にわかに泣きじやくつた声が、ふと、わしに聞えた。……なぜ泣いたか、わけを聞かせい」

近習の者があとから寄つてゆくと、家康は、腰をかがめて、せむしのように平伏している老婆へ、やさしく訊ねているのだつた。

「……………」

老婆は顔をあげ得ない。いつまでも答えないのである。——で、家臣のひとりが、
「殿のおたずねじゃ。直じきじき々々でも苦しゆうない。お答えせい」

と、注意した。

家康は、老婆に眼をあつめている近臣たちを、あなたへ遠ざけて、ただひとりになって訊ね直した。

「恐れることはない。ただ、そもじの洩むせらした咽むせび泣きが、ふとわしの心へ食い入るようであつたから問うてみるまでじゃ。何ゆえ、わしを見て泣いたか」

老婆はようやく面おもてをあげて答えた。

「田舎者の婆は、巧みにものを申すことができませぬ。正直にもうしますんで、お怒りくださいませな。——殿のおすがたを見ましたれば、急にお恨めしゆうなつて、つい愚痴なむせび泣きが出てしもうたので」

「わしが、恨めしいとな。してそもじは誰の妻か」

「加藤政次という郷土の後家でござりまする」

「では、浜松の家中にあつて、先頃三方ヶ原で最期をとげた、加藤九郎次、源四郎、ふたりの母にあたるものか」

「おお。……殿さまには、あんな侍の端くれにも足らぬ若者でも、お忘れなく、お覚えおきくださいましたか」

「さては、ふたりの子を、戦場で死なせた悲しさが、この家康を見たとたん、胸へこみあげてきたのじゃな」

「ありようは、それに違いございませぬ。ふたりとも、ひと一倍、孝行ものでございましてたゆえ……」

偽りなく老母はいつてまた咽び泣いた。家康は肺腑をえぐられる思いに迫られたが、同じ悲嘆を抱くもの、この老母以外にも無数にあることを知ると、彼は、なんと答えるべき

か、慰めるべきか、襟えりを正して、自分もまた、偽りなき心を告げなければすまない気もちになった。

「老婆、そもじには、ほかに子はないのか」

「先ごろの戦いくさで死んだ二人のほか、子も孫もございませぬ」

「縁者は」

「何かとおりまする」

「では、縁者の子を養い、家督かどくをつがせるがよかろう。いずれ家康が、その子は取立てて得させる」

「ありがたいおことば……」

老婆は、頭かしらをさげたが、さして欣うれしそうでもない。気のせいか、家康は、自分を仰ぐ彼女の眼に、なお何ものか含んでいるように思えてならなかった。

「そちの子の九郎次、源四郎の兩名は、三方ヶ原で共に一番槍二番槍をつけて、もののふの華はなと散つた殊勲しゅくん者、ほまれは末代まで伝えられよう。恩賞の沙汰とも疾く達してあるはずだが、なおなんぞ望みはないか」

そう慰めると、老婆はあわててかぶりを振り、いとど恨めしげに家康を見あげて、

「御領主さま。おこころのほどは身に沁みて忝かたじけのうござりますが、子をふたりまでも戦いくぜのにわに死なせた母の身には恩賞のお沙汰など耳にははいりませぬ。……この母は、この母はただ……」

急に、ここでもまた、よよと咽むせび伏したところを見ると、老婆が、家康に向つて、何か云いたいとする真実もこのことばの先にあるらしく思われた。

で、家康がなお、ねんごろに質ただすと、老婆はこういった。

「あれも、さむらいの子。わしじやとて、さむらいの子の母でござりまする。討死を、なんでめめしゆう嘆きましよう。……けれどただあなた様、徳川家のお栄えだけを旨としておいで遊ばすのでは、わしらが子の討死は、なんのためになつたやら、なんの誉れといえようやら——迷わずにはいられませぬ」

こう云い出すと、老婆はもう泣いてもいない。老いさきのない命はそこにさし出しているというふうにはすら見える。

「わしらを初め、村々の者は、代々この土に住み着いて百姓しておりますが、いづれも遠い大祖おおおやは、伊勢の大神おおかみさまにしたごうて諸国にわかれた御先祖がたの裔すえでござりまする。いまとても天朝さまの百姓おおみたらに相違ございませぬ。——源平のころ、建武けんむの後、

また応仁のみだれなど、長い幾世のあいだにかけて、ここらあたりも、御領主さまは遷り
變つてまいりましたが、わしらにおさずけ下されている田や畑の土ばかりは変りませぬ。

——それを耕すにも、安穩に暮してゆけるのも、それは御支配のお守りがあればこそで、
御領主さまの恩はよく弁えておりますが、さればとて、その御領主がみな善いわけではご
ざいませぬ。天朝さまの百姓を——あだに死なせる御領主もないことではございませ
んでした」

「老婆。そもじは、この家康が、そういう領主と申うておるか」

「そんな武将ではおわさぬと、せがれどもも、お慕いしておりましたればこそ、足輕奉公
に出、やがて浜松で、侍のはしにまで、お取立ていただいたのでございませぬ。……けれ
ど、ありよう申しあげれば、戦のため、年々年貢のおとりたては高まり、若い働きては召
し出され、麦秋や収穫時といえ、他国の兵に荒らされたり……それはもうことばにも
尽せぬほど、村は困窮しております。冬になれば、飢えるもの、薬も求められぬもの、
妊娠つても産めぬものなどが、いっぱいでございます。……これが伊勢の大神さまに侍
いたものの御裔かと、正直、日頃そう嘆かれますので、折ふしきよう、御領主さまのお通
りを拝んだら、急に、胸がふさがつてまいりました。——せがれどもの生命二つが、わし

らへ下さる恩賞に代つて、もつとこの村のうえに、ひろい御仁慈ごしんじとなつてくだされたらと。
 ……はい、それやこれ、せがれどもの捨てた生命に、つい慾の涙を掻きこぼしたわけでご
 ざりまする」

家臣たちは、案じて、

「夜もおそくなりますますゆえ、なお老婆へおたずねの儀もあれば、他日お城へ召されてのこ
 とになされては如何で」

と、家康の帰城をうながした。

なにか、夢からでもさめたように、家康もつぶやいた。

「おお、留守の者も、案じておろう……」

老婆へは、近日、あらためて沙汰しようと約束して、彼は黙々と、そこを去つたのであ
 った。

前後の騎馬に守られながら、彼はまた暗い夜道を、浜松のほうへ駒を向けていた。

「田野のなかにも、無智な田夫でんぶばかりはいない。真実をわきまえている怖ろしい民もいる。
 ……世はみだれても、やはりかわらぬ皇国みくに、その土に生きる民くさ、明国みんこくや朝鮮とは
 ちがう」

彼の若い烈しい弓矢の精神も、きようばかりは棒打ちされたこちで、あの一老婆に、まったく頭かしらがあがらなかつた。——が、その自責は確かに、老婆とひとつな民くさの心が、彼にもある証拠だつた。

「あツ、いかん……。後日を待つては」

途中、よほど来てから、家康は、急に、鞍のうえから振り向いて、なに思ひだしたか、家臣のひとりへいつけた。

「駈け戻つて、いまの老婆を、すぐ城とのへ伴ともうて来い。自害せぬよう、眼をはなたず、やさしく、よう宥いたわつて」

「はッ」

と、二騎ほど後へ引つ返して行つた。——けれど家康が浜松の城門にかかる頃、その二騎はまた忽ち歸つて来て、

「真に御賢察のほど、おそれ入りました。あれから急いで老婆の家へもどつてみましたところ、果たして仏間を閉め、見事に自害しております」

と、告げた。

「間にあわなかつたか」

家康はここでもまた、なにか心を痛打された。しかし侍臣には何も洩らさなかつた。後に、一老臣が、

「どうしてあの折、加藤兄弟の老母が、自害すると、お予見がつかしましたか」

と、訊ねたのに対して、彼は初めてこう述懐した。

「領主たるわしにむかつて、あれほどなことのいえる者は、おそらく譜代の家臣にもないであろう。即座にも、死を決していたからこそ、あの老婆は、思うままを、わしへ訴えられたのだ。——しかも家康は、乱世の武門として、これから行くべき弓矢の大義を訓えられた。くれぐれも老婆の死後はねんごろにいたしてやれ」

彼はまた、家中一統を集めて、こういう諭告を発した。

「近ごろ、伊勢境は鎮まり、織田家とは同盟し、今川氏真はわれに屈して、いささか領土も拡まり、日常、家中一般の生計も、むかしのような窮乏もなくなつてから、自然、おのおのの衣食は美をこのみ奢侈にかたむき、氣風一変のきざしが見ゆる。……省みるに、家康自身も、知らず識らずそうだった。自分は六歳から他国の人質となつて、一衣一飯にも、つぶさに辛苦をなめて来たが、それにもまさる貧苦困乏の味を知っている譜代の家中すら、みなこう變つて来たかと思うと、恐るべきものを感じる。——まだまだ、今ぐら

いな小功で心を驕おごるなど、早すぎる。家康もまず改めようほどに、各も、もういちど以前の窮乏時代に立ち回かえった気になって欲しい」

次に、彼は、軍事経済の諸奉行と老臣をあつめて、

「農民たちの税をかるくし、いつそう軍備には資材を増強するように、藩政一変の策を考えてもらいたい」

と、求めた。

彼自身が、まっ先に、実践じっせんするので、全藩一致、それぞれの施政は忽ち実行された。

農民の疲弊ひへいは甦よみがえってきた。

家中は、以前にまさるほど、質素剛直ごうちよくになった。

しかも武備はいよいよ強化され——ここに徳川家なる一国は、小国ながらも、領民と領主と、人と物と、さながら一体の強みを確乎かつこと顕あきかにして来た。

くんしんしゅんぶう
君臣春風

もとの稲葉山、いまの岐阜。

その高い山上のお城から、ヒラ、ヒラ、と紅いもの白いものが、城下の町屋根に降ってくる。

「御本丸の梅ばやしも、もう散りかけているそうな……」

人々はそう想像する。

かれらは一年ましに、城主に信頼をたかめている。その信頼は生活の安心から来ていた。どこに住むよりも、ここにいる幸福を事実知って来たからである。

法令は厳だったが、この国主は空言を吐かない。領民の生活に約束したことは必ず行う。実利じつりをもって示してみせる。

戦いくさにはきつと勝つ、安心しろ。そういえば必ず勝ち、勝てばよろこびを領民にわかす。三日ぐらいぶつ通しに、飲め、踊れ、歌え、遊べ——を奨励する。

人生五十ねん

化転けてんのうちをくらぶれば

夢まぼろしの如くなり

酔えばうたう彼のおはこは、領民にまで知られている。しかし室町頃の、世を儂はかなみ世を無常とのみ観じていた、隠遁僧いんとんそうのうけ取っていた解釈と、信長の気もちとは、同じ歌うた

謡でも、たいへんな隔たりがある。

——死のうは 一定

この一節が彼のいちばん好きなところで、いつもそこになると、声をはりあげる。思うに、彼の生命観は、そこにあるものとみえる。

いのちを深く考えない人のいのちは、完全に生かされていない。

やがて死ぬ——いのちを知っている彼であつた。

人生の四十。まだ先は長いとしていない。

そのみじかい間に、かれの抱負は途方もなく大きかつた。無限な理想があつた。それに向い、その障難を克服してゆく、一日一日のたまらない愉快な日があつた。——しかるに人間の天寿がある。かれは惜しまずにいられないのである。

「於蘭、つづみを打て」

きょうも彼は舞わんとしていた。伊勢の使者を饗応して、使者が帰つても、まだ興じて、ひとり杯をあげていた昼だつた。

蘭丸は、つぎへ退つて、つづみを抱いて来たが、信長のまえに寄つて、

「ただ今、横山の木下藤吉郎どのが、御着城になりましたが」

と、取次のことばを、また取次いだ。

ひと頃、浅井も朝倉も、三方ヶ原の結果によつては、大いに為す^なあらんとしていたらしく、しきりに蠢^{しゅんどう}動しかけていたが、信玄が退いてからは、ぴたと自領の限界にすくみこんで、国境の保守に汲^{きゆうきゆう}々々としていた。

——まず、このぶんでは。

と、当座の平穩を見こして、藤吉郎はひそかに横山城を出、畿内^{きない}から京地をすこしばかり巡遊していた。

どこの城将でも、またいかに戦乱でも、榮螺^{さざえ}のように、そうのべつ城のなかにとじ籠っているわけもない。

留守とみせて実は居たり、居るとみせかけて居なかつたり、兵家の生活は虚実の影をつかいわけている。もちろん藤吉郎のこんどの小旅行も、すがたをかえた微行^{びこう}で、この岐阜城へも、そういうわけから突然やつて来たものにちがいはあるまい。

「やあ、藤吉郎か」

信長は、彼を別間に待たせておいて、やがて非常なきげんで上座にすわった。

藤吉郎は、ふつうの旅行者とことならない極めて素朴な身なりで平伏していたが、面^{おもて}を

あげると、

「お愕おどろきでしょう」

と、笑いながらいった。

解げせぬ顔して、

「——何が？」

「唐突の参上で」

「なにをばかな。そちが半月前より、横山におらぬことぐらいは知れておる」

「でもてまえが、今日これへ推参いたそうとは、御意外でございましたらう」

「ははは。そちは信長を盲めくらと思つてゐるな。京では京の浮かれ女めとあそび呆ほうけ、近江路おうみじへ

来ては、長浜のさる豪家ごうかまで、そつと於おゆうを呼んでおいて、密ひそかに会つて来たであらう」

「ははあ……」

「なにが、ははあじゃ。……どうじゃそちこそ愕おどろいたであらう」

「これは愕おどろき入りました。さすがに御主君、なにもかもお分りですか」

「この山は高いから十州も見とおしである。だが、信長よりは、もつとそちの行動にくわしいものがある。たれか知つておるか」

「そのような 謀 者がそれがしを尾けておりましようか」

「そちの家内じゃ」

「お戯れを。……ちときようは御微酔の御容子で」

「酔うてはおるが、申すことにまちがいはあるまい。そちの妻は、洲股すのまたに住居しておるが、遠いと思うと、甚だ相違であるぞ」

「いや、どうも、悪い折に伺いましたな。……どうぞもうおゆるしを」

「はははは、遊びはとがめん。ひそかに、たまたまの桜狩など、大いによかろう。……しかし長浜で落ち合うてやるほどなら、なぜ、寧子ねねを呼んで会ってやらぬか」

「はい」

「もうだいぶ夫婦の対面もしておるまい」

「なにか……愚妻から、殿へつまらぬ書状でも、さしあげて参ったのではございませぬか」

「案じるな、そういうことはないが、信長の思いやりである。——そちのみならず、誰の妻も彼の家内も、戦陣となれば、長い留守となるものを、せっかく少しでも暇いとまを得たら、せめて無事な顔ぐらいは、たれより先に妻に見せてやるべきが……」

「御意ですが、ちと」

「異存があるか」

「ごぞいまする。——ここ数カ月は、四辺あたりも無事でございますが、それがし自身の気もち
は、まだ寸毫すんごうも、戦陣から解とかれてはおりません」

「口くちがしこ賢いやつ、またいらざる弁をふるうか」

「やめましよう、このへんで旗を巻いて」

主従は哄こうしやう笑する。そしてやがて、杯をとり合うと、小姓の蘭丸らんまるまでしりぞけて、
酒間のはなしは、却つてまじめに、また小声になつていた。

「——して、近ごろ、京都の情勢はどうか。たえず村井民部より使いは通うてまいるが、
そちの観たところを聞きたい」

信長は、期待している。

藤吉郎のいおうとするのも、そこにあるらしい容子ようすであつた。

「ちと、座が遠とほございます。殿がお寄りくださるか、てまえが進みましようか、もすこ
し間近になりたいもので」

「わしが寄ろう」

と、信長は、銚子ちやうしや杯と共に上座を降りてすすみ、

「次の間のふすまも閉めい」

と、いいつけた。

藤吉郎が立つてそこを閉めかけると、ふと蘭丸の白い顔が見えた。

「はや、日も暮れてまいりましたから、燭しよくをこれまで持参しておきました」
 すぐ、退さがつてゆく。

明りを内に入れ、あとを閉めて、藤吉郎は信長のすぐ前に坐り直した。

「情勢は相かわらずです。ただこのところ、信玄入京のあてがはずれたため、室町むろまちの
 館やかたは、失望のいろ濃く見えますが、公方家くぼうけの依然たる策謀は、いよいよ露骨で、あくまで
 信長ぎらいで一貫しております」

「いや、そうだろう。せつかく信玄が、三方ヶ原までまいりながら、引つ返したと聞いて
 はな。……義昭よしあきの顔が眼に見えるようだ」

「しかしなかなか政治家でいらつしやる。洛中の市民に、こせこせ恩恵をほどこしたり、
 暗に、信長政治を怖ろしがらせたり、叡山えいざんの焼討ちなどは、殿そしを誹る好材料とし、いよ
 いよ諸山の僧団を焚たきつけておるようで」

「ふうむ……始末のわるい」

「——が、御懸念にはおよびません。さすが僧門陣も、叡山の結果を見ては、しんから胆きもを寒うしたらしゆうございます。あれは徹底しております。あれだけは、御不成功ではございませぬ」

「洛中に逗留中、藤孝には会わなかつたか」

「細川どのは、遂に、公方どのに忌み厭われ、どこか田舎へ蟄居されたそうです」

「義昭將軍に退けられたか」

「どうかして、織田家とのあいだをむすび、また両家の円満な提携こそ、室町將軍家の命脈をたもつためにも、万全の計と信じておられた細川どこのことゆえ、面をおかして、幾たびか義昭公を忠諫されたものかと考えられます」

「たれの言も、義昭の耳にははいらぬとみえる……。ちと、狂態だな」

「いやなおまだ、室町將軍家なるきのうの遺物を、過大視しておられるのでしよう。およそ時代のさかいに、過去のもの将来のものと、二つに分け去られる大濤おおなみにのつて、あぶあぶ溺れてゆくものは、ほとんどが、旧態の威力や、その遺物の未練に、世の推移をケタ違いに見ちがえておる人々です。——その大濤からちよつと上がって、平然と見ていれば分りきっていることでも、將軍職とか、一国とか、小城や小財力など持っている、それ

が重荷で、時勢の濤なみから這いあがってみることもできません。思えば、あわれなもので
 「さしずめ、うごきは、そんな程度かな」

「いや、大變事があります。——申しおくれましたが……」

「なに、大變事が」

「さればです。……これはまだ世間に洩れておりませんが、例の手飼てがいの乱波らっぱ、渡辺天藏の
 早耳ですから、おそらく信をおいてよいかと思ひますが」

「何事か……?」

「惜しむべし、甲州の巨星は遂に隕おちたようです」

「……え。信玄がか?」

「この二月、刑部おさかべから三州へ攻めに出て、野田城をとりつめておるうち、一夜、鉄砲で
 撃たれたと聞きました」

「……?」

しばらくは、ひとみを澄ましている信長であつた。藤吉郎の唇くちもとを見つめて。

信玄の死。

もしそれが事実ならば、たちまち天下の象かたちが變る。

それほど、信玄の存在はたしかに大きい。

わけて信長には、直接的な影響をもつ。彼は、大きな衝動をうけた。なにか忽然と、うしろの虎が消え失せたこころだ。

信じたいが、信じられない気もちもわく。むしろ不気味を感じ出す——なぜならば、そう聞くうちにも、

(彼なくば——)

と、すぐ背後の安心がおこるからである。彼は、名状しようのない歓びをも味わいながら、ほど経てから、

「そうか！ ……それが真まこととすれば、古今、稀まれなどいえる、惜しむべき将が、世を去つたものだ。——これからという時代を、われらの手に委まかして」

と、嘆息をもらして云つた。

藤吉郎は、それを告げるにも、彼ほど複雑な面おももちではない。食事の席について、順におはちがまわつて来たぐらいな感情しか出していなかった。

「——その鉄砲傷がですな、どこにあつたものか、即死か、怪我けがの程度か、そのへんの儀はまだ仔細にわかりません。……が、にわかには野田城のかこみを解き、甲州へひきあげ

た武田の士気しきせいしよく旌色というものはなかつたと申しまする」

「そうであろう。甲山の将士いかに猛たげしといつても……信玄を亡うしなつては」

「旅の途中、この報を、ひそかに渡辺天蔵からうけましたので、ふたたび天蔵を、すぐ甲州領へ放ちました。追ツつけ、もすこし具体的に、事実をさぐって帰り着こうとぞんじますが」

「諸国にはまだ聞えわたらぬふうか」

「なんの気けぶりも見えません。おそらく甲府一門としては、かりに信玄亡きあとも、しばらくは厳秘に附して、なお信玄健在なりとしておるでしょう。——ですからもし甲州領において、何かわざとらしき積極政策や、信玄の名を謳うたうような兆しるしあれば、まず十中の八、九まで、信玄の死は事実か、かろくとも重態と見てよろしいでしょう」

「ム、ウム……」

信長は二度もうなずいた。強しいてでも肯定したいかのように。

ふと彼は、冷たい杯を手にして、人生五十年、化け転てんのうちを……思いうかべていた。しかし、舞いたい気もちは、わき上がらない。

自己の死を観るよりも、彼はひとの死を観るほうが大きく心をうごかさされた。そして複

雑になった。

「そちの放った天蔵は、いつ頃もどるか」

「三日のまに帰りましょう」

「横山城へか」

「いや、ここへと、申しふくませておきました」

「では、それまで、そちもこれにとまりゆ逗留しておるがいい」

「そのつもりでございしますが……願わくば、旅舎は御城下にとって、お召しを待ちたいとぞんじます」

「なぜか」

「べつ儀もございせんが」

「では、城内に泊つてはどうか。久々の対面」

「それほどごぶさたとも存じません」

「はりあいのない男。信長のそばは窮屈か」

「いえ、実は」

「実は、なんじや」

「その……城下の旅舎に、連れを待たせておりますので、それが淋しかろうし、こよいは、戻ると約束してまいりましたので」

「連れとは、女子か」

信長が呆れていう。信玄の死を聞いて囚われている彼の感傷と、藤吉郎の心配とは、これほどの距離があつた。

「つかれもしたであろう。こよいは旅舎へ退るがよいが、明日は連れの者をも伴れて、登城いたせよ」

—— 帰りがけに、信長からいわれたことばである。

藤吉郎は、途中で、

「釘をお打ちになつたな」

叱られたような気もしたが、また粹な御主君とも思う。

釘のあたまが気にならぬよう、ほどよく美術的な釘隠しで包んでいる。

で、あくる日、於ゆうを連れて登城するにも、そう恐縮には及ばなかつた。

きのうと違う書院で、信長もきようは酒氣をふくまず、藤吉郎と於ゆうをならべて、上座から見た。

「竹中半兵衛の妹とか聞いていたが、左様か」

親しげである。

於ゆうは、はじめての御見ぎよけん、それに藤吉郎となので、消えも入りたげに、面おもてをふせていたが、

「……はい。お見しりおきくださいませ。兄重治しげはるへも、お眼かけていただきました。妹のゆうと申しまする」

かすかな声ほど美しい。

信長は、ながめ入って、感心していた。

その意味を、藤吉郎にすこし擲揄やゆしてやりたいような気もちがうごいたが、罪な気がして、

「半兵衛は、その後、健在かの」

と、まじめになる。

「久しく、兄とは会いませぬ。戦陣のせわしさに……便りのみは折々にございますが」

「今、そなたは、どこに身を置いておるか」

「すこしばかり所縁の者がおりますので、不破ふわの長亭軒ちやうていけんのお城に身をよせております」

「そうか、なるほど、あれには樋口三郎兵衛が今もおったな」
 なるほど——と、いつて、特に藤吉郎の顔を見る。彼のその方の才を称揚しょうようしている
 微笑だった。

藤吉郎は、すこしてれて、

「時にまだ、渡辺天蔵は、もどりませぬかな」

わざと、とんちんかんをいう。これが曲者くせものである。信長はその手はくわない。

「なにをいう、うろたえて。天蔵の帰りは、三日目ぐらいと、昨夜、自分でいうたばかり
 でないか」

「なにさま」

藤吉郎の面おもてがひどく赤くなる。信長は、これで気がすんだらしい。——彼が羞恥はにかんで困
 るのをさつきから見たかったのである。

「ゆう。遊んでゆけ、ゆるりと……」

女性には当りのいい信長である。藤吉郎はうれしくもあり、時々気ももめる。終日ひねもす、
 いろいろに、春を暮らした。

夜に入ると、

「わしの小舞を見たことはなからう。藤吉郎はたびたびじゃが」

と、夜の酒もりにも彼女を交まじえた。そこには、奥の侍こしもと女、家族の老ろうにやく若、重臣たちも共になる。いかにも、春の夜らしい人々であった。

「……泊つてゆくがよい」

と、いわれたが、ゆうはお暇いとまをねがった。

信長は、強しいもせず、

「では、藤吉郎も帰れ」

と、彼にはにべなくいった。

人々に、囃はやされながら、ふたりはお城を辞した。けれど、間もなく藤吉郎ひとり、あわただしく帰つて来て、

「殿は」

と、もとの酒席のおつきへ来て、小姓にたずねた。

「ただいま、御寝所のほうへ、おひきとりになられたばかりでございます」

聞くと、藤吉郎は、いつになく忙せわしげに、またそこへ行つて、侍臣に取次を仰いだ。

「どうしても、こよいのうちに、まいちどお目通りをねがいたい儀がございまして——」

と。

旧閣瓦解きゆうかくがかい

寢所にはいったが、信長はまだ衾ふすまに就いていなかった。

藤吉郎は、人ばらいを乞い、宿直とのいが遠く退さがつても、なお注意ぶかく見まわしていた。

「何事じや……藤吉郎」

「はッ。……おつぎの隅にまだもう一名、たれかいるようですが」

「心配なものではない。蘭丸らんまるじや、少年じや、さしつかえあるまい」

「さしつかえありません。恐れ入りますが」

「いけないのか」

「はい」

「——蘭丸、そちも退れ」

ふり向いて、つきへいうと、そこから默然もくねんと礼儀をして、蘭丸は立って行った。

「もう、よかろう。……何か」

「実は、ただいまお暇をいただいて、麓^{ふもと}までもどりますと、はからずも天蔵に出あいました」

「なに、渡辺天蔵が立ち帰ってまいったか」

「昼夜もわかつたず、山越えで来たと申します。——そして、信玄の死は、うごかぬ事実のことでした」

「……やはり……そうか」

「細かくは申しあげませんが、甲府の内輪には、さあらぬ表面のかけに、歴然たる憂色がうかがわれる由です。——はや、まちがいのないことと、お認めあつてよかろうかと存ぜられます」

「まだ、喪^もはかたく、外部に秘しておるのだな」

「もちろんです」

「——と、他国は知らんな」

「いまのうちなれば……」

「そうだ、今のうちだ。……天蔵にはかたく口どめしておいたろうな」

「御念には及びません」

「したが、乱波者らっぱものなどには、心のいやしい者もある。まちがいはないか」

「かれは蜂須賀彦右衛門はちすかの甥おいですし、いささか義に感じて、わたくしに仕えおるもの、そのへの儀は」

「でも、万一があつてはなるまい。賞はとらずが、体はこの城内にとめおいて、事のすむまで、監禁しておいたがよからう」

「いけません」

「なぜ」

「そういう人使いをいたしますと、次の大事の機会には、もうこんどのように、死に身になつて働こうという気が出なくなりませす。——また、かれの人間は信じぬが、功によつて、賞は与えるというような扱いをすると、何かの折、敵から莫大ばくだいな利を喰らわせると、それに心がうごくようになりませす」

「では、どこへ留めおいたか」

「さいわい、ゆうも戻るところでしたから、於ゆうの女駕籠おんなかごを守つてまいれといいつけ、長亭軒ちやうていけんの城のほうへ送りつかわしました」

「夜を日についで、甲州より帰つて来たとおれば命がけ。その者に、そちはすぐ、自分の

おんなの送りをいつつけたのか。——それで天蔵は、そちを恨まぬのか」

「よろこんで附いて参りました。おろかな主人でも、私というものを、よく知っていてくれますから」

「そちの人づかいは、ちと信長とちがうようだな」

「なお、安心なことは、女子ながら、ゆうの側におけば、もし天蔵がひとへ機密をもらすが如き気ぶりでも見えれば、すぐ刺し交えてでも守りましょう。よく云いふくめておきましたから」

「自慢はよせ」

「おそれ入りました。つい」

「そんなどころでない。——甲山の猛虎もうちこが斃たおれたからは、猶予ゆうよもならぬ。世上に信玄の死が知れわたらぬうちこそじゃ。——藤吉郎、そちはこよいのうち発足して、横山へいそいで帰れ」

「もとよりすぐ、そのつもりでしたから、ゆうも長亭軒のほうへ戻しましたので」

「余事を申すな。……わしも眠るいとまはあるまい。夜の明け次第に出陣する」

信長の思うところは、そのまま、藤吉郎の考えていることだった。

平常に窺^{うかが}っていた機会——かねての宿題を仕果す時は今だという直感である。その宿題とは。

いうまでもなく、旧態の公方家^{くぼうけ}という厄介ものを始末するにある。室町幕府なる複雑怪奇な存在によつて起るさまざまな煩^{わづら}いを、一挙に解決して、中央の明朗化をはかるにある。いうまでもなく、それに代らんとする新時代の登場者として、信長の進出は急速に実現され、翌三月二十二日、勃^{ぼつぜん}然とうごいて、大軍いちどに岐阜城から雷発した。

湖岸までですすんで、軍はふたつに分れた。

右するは信長を中心として、丹羽長秀^{にわながひで}の迎えと合し、大船数隻にのつて、一路湖上を西へ向つてゆくもの。

また、陸路左へさして、湖南をすすんで行ったのは、柴田、明智、蜂屋^{はちや}などの諸部隊である。これは堅田^{かただ}から石山あたりに、いまなお蠢^{しゆんどう}動している僧門内の、反信長勢力を駆逐^{くわく}し、途中の諸処に構築中の木戸防寨^{ぼうさい}などを撃^{げき}碎^{さい}してゆくものだった。

「疾風^{はやて}が来た」

「すわ、信長」

洛中のさわぎ、わけて二条御所と称^とえている義昭^{よしあき}の館^{やかた}は、色を失つて、

「抗戦か」

「和を乞うか」

を、にわかには評議しはじめた。

二条の公方くぼうがたでも、大きな宿題をもっていた。

それはことし天正元年の正月早々、信長から正面をきって、義昭にぶつけてよこした十七カ条の諫書かんしょ——つまり意見書に対する明瞭な返辞をまだしていないことである。

十七カ条の諫書には、冒頭、
条々、

として以下、ひとつ何々、ひとつ何々の事というふうには、信長が日ごろ義昭にいだいて
いる不満、苦情、鬱うつかい懷かいなどのかずかずを、箇条書として、痛烈に弾劾だんがいしたものであつた。

まず義昭が、二条へ入館以後も、旧態依然として、皇室にたいし奉つてすこしも勤王の
ところざしがないこと。

その不忠節は、前代義輝よしてる將軍も同様であつたが、わけても当今至尊しそんにつかえまつる念
がうすく、幕臣どもみな王事を閑かんきやく却くしているふうがある。

——これは何事か。

と、詰問的に責めているのを第一条として、そのほか十六条にわたって、義昭の不信、悪政、陰謀、公事訴訟の依怙えこから、金銀の横領などにわたる私的行為の不徳までを、綿々、烈々、辞句にかぎりもなく認めて突きつけた弾劾だんがい文であつたのである。

それに対して、

「僭越せんえつだ」

義昭は充分に怒つた。

「——自分は將軍である」

落魄らくはく流寓りゅうう時代のひがみもある。信長に庇護ひごされて二条に立つたという、日ごろの気がねも勃然ぼつぜんと反撥する。——怯者きやうしやの怒りは、時によると、盲目的に、すて鉢をあらわすものである。

「たれが、信長ごとき、一地方の領主に、屈しようぞ。義昭から彼にたいして、服従をちかう理由はない」

諫書かんしょは、ふるえる手から、一擲いってぎされて、かえりみられなかつた。

信長のほうから、朝山あさやま日乗にちじよう、島田所之助とこのすけ、村井長門守などが、こもごも和談のあ

つかいに来たが、退けて会わなかった。

そして、その返辞のように、堅田かただや石山方面の——京にはいる通路へ木戸や防寨ぼうさいを築いていたものである。

信長が待つていた「時」も、藤吉郎が計つていた「時」も、そこを押し通つて、義昭に十七カ条の返答を面詰めんきつする適当な時節であつた。そしてその時節は、ふたりの予想していた以上早く来た。信玄の死が、それを急に与えたのであつた。

いつの時代でも、亡ぶ者が、かならず抱いている滑稽こっけいな信念は、

(おれは亡ぶ者でない)

という錯覚さつかくである。

義昭將軍などは、その過あやまちを、もつともよく身にあらわして、盲動派の傀儡かいらいとなるに都合のよい、位置と性格の人だつた。

また信長の眼からも、べつな意味で、

(あれもつかえる道具の一つ)

として見られ、尊とうとまざる貴重扱いを、日頃うけているのであつた。

しかしこの時代価値のない將軍家は、自分の値ねぶみを知らないし、何を思惟しゐするにも、

知識的で、その知識がまた室町文化からすこしも出ていないのである。せまい京都だけの文化面を、日本の様態とながめて、依然たる小策をたのみ、その恃みたのを本願寺の僧団や、諸国の信長の敵なる群雄に依存していた。

信玄の死を、彼はまだ知らなかったらしい。

だから強がった。

「予は將軍家だ。武家の棟梁とうりよう。叡山えいざんとはちがう。もし信長が二条へ弓をひくならば、信長は求めて、反逆の名を負うものだ。諸国の武門がゆるすまい」

一戦も辞さぬ態度を示して、近畿の兵家に檄げきをとばし、もちろん浅井、朝倉、越後の上杉、甲州の武田家などの遠方にも、急使を送って、ものものしげな防備にかかった。

信長は、情報を聞くと、

「公方どのの顔がみたいな」

一笑を、洛中に向けて、そこへは一日も軍を停めず、大坂へ出てしまった。

ふいを衝かれたのは石山本願寺である。にわかには信長の軍を迎えて、なすところを知らなかった。

しかし、信長は、

「いつでも叩くぞ」

と、いう陣容だけを示すにとどめている。兵力の消費は彼のいまもつとも避けようとしているところだった。そしてこの間に、使者はたびたび京都へ出向いている。

この正月、信長よりさしあげた十七カ条の意見書にたいするお答えは如何いかが？——であった。

またそれには、強硬な最後通牒つうちょうの意味もある。

義昭よしあきとしては、將軍家という司権者の立場から、自分の諸政にたいする信長の意見書などに、耳をかす気もなかつた。けれどただ十七カ条のうち二箇条だけは、強硬きやうこうに迫られると、困る問題だった。

それは第一条の、

——武門棟梁とうりやうの職にあつて、王城のもとに館居しながら、朝廷に参内もせず、王事をかえりみぬ不臣の罪。

と、第二条の、

——天下の泰平をはかり治安民福を任とする位置にありながら、諸国へ密使を通わせ、みずから乱をつくるなど大政輔弼ほひつの身にあるまじき狂態。

とをさした二つだった。

「むだです。ただ文書や使者をもつてなさる詰問きつもんでは、到底、うけつけますまい」

摂津せつで信長を迎えた荒木村重むらしげはそういつた。また、義昭を去つて、姿をかくしている

細川藤孝も、陣見舞に来て、

「おそらく御自分の最後の日を、眼に見ぬうちは、將軍家の覚醒かくせいなど、望み得ないこと
でしょう」

と、嘆いた。

信長はうなずいた。よく分つているらしい。けれど叡山でやった果斷かだん猛行もうこうを、ここ
は用いる必要もないし、また二度も同じ手法をくりかえすほど策の乏しい彼でもない。

「京都へ返せ」

四月四日、信長は発令したが、それは単に、大兵の行列を庶民に示す運動にすぎなかつ
た。

「それ見い。長陣はゆるさぬ。信長がまた例のごとく、岐阜ぎふに不安をおぼえ、あわてて兵
を退ひいて行くことを」

義昭は、左右へ云つて、得意であつた。

けれど情報の次々とはいるに従つて、顔色を変じはじめた。

こんども洛外を通過し去るものと多寡たかをくくつていると、大坂からの沿道、示威運動をかねて、悠悠と流れてきた織田の大兵は、そのまま洛中へはいって来た。

そして、鬨ときの声もあげず、演習よりもしずかに、いつのまにか義昭の二条ていの第ていをとりかこんでしまった。

「皇居にお近いから、ふと内裏をお愕おどろかせ申してもならぬ。肅しゆくとして、馬蹄ばてい喊声かんせいをつつしみ、ただ横着公方くぼうの罪を責めればそれで足る——」

と、いう信長の命令が、よく足輕のはしにまでゆき届いていた結果である。

鉄砲もひびかない。弓鳴りゆなもしない。不気味なことは、かえって喧騒けんそう震撼しんかんするよりも甚だしい。

「大和やまと。どうする気だろうな？ 信長はわしを」

義昭のつぶやきに三淵大和守みづちは、

「情けないお覚悟、この期ごになつても、まだ信長の心がおわかりになりませぬか。信長はあきらかに、あなたを攻めに参つたのです」

「でも、わしは將軍であるぞ」

「乱世です、そのような御自尊がなんの恃たのみになりましょう。御決戦のお肚はらをすえるか、和をお講じになるしかごぞいますまい」

侍臣三淵大和守は、そう云いながら涙を溜ためた。

細川藤孝ふじたかとともに、義昭が落魄らくはくしていた頃から側を離れずにいた功臣であった。藤孝が、諫言かんげんいれられず、身をかくして後も、大和守はつねに左右に仕えていた。

（この辛抱は、榮譽のためでもない。保身の策でもない。明日どうなるかもわかつていない。——それだけに、この暗愚な將軍家を、どうして見捨てられよう）

大和守は或る折、鹿苑寺ろくおんじの一僧に、しみじみとそう述懐したことがあったという。——たしかに彼は、救うべからざる義昭の性情と、時代の行くところを知りながら、じつと、いまの二条の第ていにふみとどまっているらしい眉根まゆねをしていた。年はもう五十を半ばもこえた武將だった。

「和を乞う？ ……將軍のわしから、信長ずれに和を乞わねばならぬ理由があるのか」

「一にも二にも、將軍家なる名分に囚とらわれておいであっては、このまま御自滅のほかありません」

「勝てまいか、戦って」

「勝つわけにはゆきません。勝つと思し召して、この第ていに、防禦をなされたのなら、笑止千万です」

「では、な、なんのために、そちをはじめ、武将どもは、物々しゆうかつちゆう甲冑おぼつかをしたか」
「せめては、死に花をかざらんものと思ひまして。……二条の第に、覚束おぼつかなくも、鉄砲をならば、楯たてをかこみましたのも、足利あしかが御代々のいまや終ろうとする墳墓ふんぼに、多少のさむらいはあるぞと、花を立てておるに過ぎません」

「……待て。撃たすな、へたに鉄砲などを」

義昭は奥にかくれて、日野、高岡などという誼よしみのある公卿くげと、額ひたいをあつめて、凝議ぎようぎしていた。

午ひるすぎ、日野参議から、ひそかに城外へ使いを出した。つづいて、信長方から、京都奉行の村井民部が来、夕方ちかくなつて、公式に信長の使者として、織田おだ大隅守おおすみのかみ信広が見えた。

十七カ条の諫書に対して、

「以後は、条々、慎んで守るであろう」

義昭は、本心にはないことばを、信長の使者へほろ苦い顔して誓った。やむなくその日、

和を乞うたのである。

信長の兵は、退くもまた静かに、岐阜へ帰って行つた。

けれど、それからわずか百日とたたないまに、改めて、その軍はまた、二条をかこんだ。——もちろん理由がある。四月の和談以後も、義昭のやり口は、ひとつとして反省されていなかったのである。

去りゆく人々

二条妙覚寺の大屋根は、初秋七月の長雨に、蕭条と打ちたたかかれていた。

信長の本営である。

こんどの出陣には、琵琶湖を例の大船で渡つて来るときから、ひどい雨と風だった。

将士の戦意はそれがためむしろ莊重を加えている。雨と泥にまみれた軍隊が、足利家の第を厚ぼったく取り巻いて、

「いつでも」

と、命令一下を待機している形だった。

首にするも、捕虜にするも、將軍義昭の運命は、完全にもう味方にある。信長の将士は、やがて屠殺にかかると高貴な猛獸を、しばし檻の外から見て感じる感じだった。

「どうなさる思し召しですか」

「いまさらどうもこうもない。このたびはゆるさん。断乎、世に代つて、彼に最期をつきつけるまでのこと」

「——が、將軍職です、あいての公方どのは」

「知れきつたことを」

「なお、ここでもうひとつ、御分別の余地がありませんか？」

「ない。——もはや断じてない」

信長の声と、藤吉郎の声がもれる。

外はきょうも雨に暮れかけているうす暗い寺院の一室だった。まだ七月の残暑にこの長雨なので、金泥の仏体にも墨絵の襖絵にもカビが生えそうな蒸しあつきである。

「御分別を願うのは、御短慮なりとお諫め申す次第ではありません。——將軍の職は、朝廷の御任命によるもの、その官職にたいし、畏れあるやに思われるのです。それと、世上の反信長党に、將軍弑逆という絶好な旗じるしを与え、正義を唱えさすなども、下策

でないかと考えられますが」

「……ム。それもあるな」

「さいわいなことに、義昭將軍はあの柔弱ですから、もはやのがれ難い窮地とわかりきつていながら、まだ自刃もせず決戦にも出ず、この霖雨りんうに濠ほりの水嵩みずかさがふえたのを、いささかの恃たのみに、館門をとじております」

「——で、どうせいというのか。そちの策は」

「わざと一方の囲みを解いて、將軍の逃げ途にみちを設けてやるのです。他国へ落ちて行かれるように」

「将来の厄介ものになりはせぬか。またぞろ、地方の武力や野心の徒に利用されると」

「いや人心は次第に義昭という人物へ、あいそをつかして行くでしょう。それが自然に分つてまいれば、將軍家が中央から追われたのも、やむを得ない成り行きと納得し、信長の処置も、正しかったのであると得心いたしましょう」

——その夕方からである。

包囲軍は、囲みの一方を解いて兵の手薄を見せた。

第てい内ないの公方軍は、

(計略だろうか?)

と、疑っているらしく、夜半までなんの行動にも出て来なかったが、雨の小やみになった明けがた近く、突忽として、一隊の兵馬が、濠橋を渡って、洛外に逃げていった。

「たしかにその中に、將軍家が混じっていたようです」

報告があると、信長は、

「そうか、空家になったか。空家を攻めても効はないが、歴世十何代、足利義昭にいたつて、將軍家はみずから職を抛つて遁亡した。室町幕府はここに終りを告げた。一攻め押しして、鬨の声をあげろ。足利十五代の悪政のあとを弔うてやれ」

と、暁の陣前へ出て云つた。

二条の第は、一押しに踏みつぶされた。館中の旧臣は、あらかた降伏した。日野、高岡の二卿も出て、信長に詫びを入れた。

ひとり三洲大和守は、子飼の郎党六十余人と共に、最後まで屈せずに戦つた。ひとりも逃げず、ひとりも降伏せず、彼以下の六十余体は、武士の華となつて、きれいに枕をならべて討死した。

腐敗しきつた数百年の濠水の底にも、なお一脈の真清水は涵れていなかった。

義昭は京都を落ちて、宇治の槇島まきしまへたて籠こもったが、もとより無謀、それに敗残の寡兵ひとさきである。やがて信長の追撃が、平等院の川下、川上から押しわたると、一ひと支さきえもなく、捕ほ捉とくされてしまった。

「床しょうぎ几ぎをさしあげい」

捕とわれて来た義昭のすがたを見て、信長は左右の将に云った。

うつ向いたまま、義昭が、与えられた床几しょうぎへ力なく腰かけると、

「みな幕外さかに退され」

ただふたりとなつて、容かたちを正し、正視して義昭に云った。

「お忘れはあるまいが、かつてあなた様は、この信長を父とも思うと、仰おほつしやつたことがある。——二条の新館にすわられて、ひとたびは瓦滅がめつした室町御所を、からくも再興さいきやうなされた欣よろこびの日であつた」

「……………」

「お覚えか」

「岐阜ぎふどの、忘れはせん、なんであの時のことを。また、いまでも」

「御卑怯ごひせつである。信長は、あなたのお生命いのちなど、こうなつても戴たいこうとしておるのではな

い。——なぜ、虚言きよげんをかまえられるか」

「……ゆるせ。わるかった」

「その御一言を聞けばよい。したが、さてさてあなたという者は、困ったお方ではある。身、將軍の職をつぐ位置にお生れありながら」

「……死にたい。岐阜どの、わしは、わしを、か、介かいしやく錯さくして」

「はははは。およしなさい。失礼ながら、お腹を召す作法も御存じはなからう。信長は決して、あなたを心から憎む気にもなれぬ。ただあなたの火悪ひいたずら戯ごは、あなたと信長のあいだに止まらず、国々へ飛び火する。庶民を苦しめます。——いや、何よりも、御宸襟ごしんきんをやまし奉る。その罪の大を、ちとお考えあられたがよい」

「よく、わかった」

「では、何処へなど、しばし身をお慎みあつたがよからう。若公わかぎみのおん身は、信長の手もとに止めおいて、行く末、お案じなきよう御養育申しあげよう」

義昭は、彼の陣所から、放たれた。——何処へでも自由にと。——つまり追放である。

義昭の一子は、藤吉郎が警固して、河内かわちの若江わかえの城へ送った。これも、恨みを恩で酬むくわられたというものの、ひがみきつている義昭から見ると、

「ていよく、人質ひとじちに取った」

と、いう気持しかなかった。

若江城には、三好義継よしつぐがいる。義昭も一時そこへ身をよせたが、

「ここにおいであつては、御身辺のほど、何とも、危のうぞんじます。信長は、ああ申しても、いつ心が変わつて、あなたに殺意を生じるかしれませぬ」

と、強しいて不安がらせた。

厄介な敗亡の貴人を、家に置きたくないからである。

義昭は、またあたふたと、紀州方面へ遁走とんそうした。そして、熊野の僧や、雑賀さいかの徒を、しきりと煽動せんどうして、

「信長を討ちさえすれば、こうしてやる。ああしてやる」

などと、なお將軍の名と権威をふりまわして、いたずらに世人ちやうしやうの嘲笑ちやうしやうを買つてあるいた。

紀州にも、長くはいず、やがて備前のほうへ渡つて、浮田家に居候いそうろうしているなどとうわさされたが——以後しばらく、ようとして、その消息はたえた。

時代はここに一変した。

室町幕府の抹殺は、密雲にとぎされていた天に、突として、青空の肌の一部が、穴のあいたように見えはじめたともいえるものだった。

久しい、実に久しい、それまでの日本のすがたは、どうだったか。

あつてもないようなものの存在が、国家の枢要なところに、名だけをもっている時代ほど、怖ろしいものはない。

下剋上があらわれる。室町幕府の弱体は、余りにも、久しい前から、見すかされていた。

幕府はあつたが、統一されたためしはない。武門は武門で、各地にあつて、私権をふりまわし、僧団は僧団で、財力を山にあつめて、教権にたてこもる。そうなると、公卿もまた公卿で、廟堂の鼠と化し、きのうは武家をたのみ、きようは僧団をおだてて、政治を自分たちの擁護に濫用する。

僧国、武国、廟国、幕府、これがみな、ばらばらに、べつべつに、日本をわすれて私闘して来たのである。田も畑もたまつたものではない。

いたましくも、豊葦原瑞穂ノ国は、こういういなごみたいな害虫の蝕みにまかせて、荒れ放題に国土を荒して来たといつても、そう過言ではない。すくなくも応仁の乱この

かたの日本の乱れは。

そういう末期の人として、足利義昭などは、まだまだ人のよいほうといえよう。けれども捨てておけば、なお彼が、しがみついているようにとした幕府、將軍職などというものの存在は、有害無益にちがいがなかった。一日放置して置けば一日国家のみだれが長びく。

「やったな！ 遂に」

天下の衆目は、信長の行動へ、ひとしく眼をみはった。

あおぞら 蒼空を見たのだ。

けれど、密雲はまだ濃い。

「このあとをどうする？」

たれも、保証できなかつた。一角の密雲がくずれると、一天すべて激変の相を呈しだすのが天象てんしょうのつねであり、地上の自然均等きんとうである。

いや天地のうごきは、激変のようで、実はまた、極めて徐々と推移しているようでもある。

ここ二、三年のまに、過去となつた重要な人だけでも、指を折るとかなりある。

西国の巨藩、毛利元就もつりもととなりの死んだおとしの同じ年に、東海の雄、北条氏康うじやすが世を去

っている。

しかし信長にとっては、ことしの武田信玄の死と、義昭の退場ほど、大きな意味を含むものはない。

わけて、たえず北の後ろをおびやかされていた信玄の死は、もう彼にとって、全力を注ぐほうへ注ぎ得る強味となった。

思うに、これからの将来は、一そう戦乱が激化するだろう。

——われこそ中^{ちゆうげん}原へ。

と、室町幕府のないあとへ、旗を打ちたてて、諸国の武門が、競^{きそ}い出てくるにちがいない。

その前提として、

「叡^{えいざん}山を焼打ちし、將軍家を逐^おつた暴逆、信長を倒せ」

と、風当りを強めて来ることも疑いない。

信長は、そう観^みる。

そしてその機先を制し、かれらに何の聯^{れんけい}携もつかないうちに、びしびしと叩いてしま
うべきだと考えた。

「藤吉郎、そちはまず、身軽に先へいそいで帰れ。——いずれ信長も、近日のうちに、そちの横山城へ臨むであらうから」

信長のささやきに、

「では、お越しを、待ちあげまする」

と、それだけで、以後の方針はのみこんでいるらしく、藤吉郎は義昭の子を、若江の城へとどけるとすぐ、兵一小隊をつれて、まっ先に、近畿の戦場から北近江きたおうみの横山へひつ返していた。

信長が岐阜へ帰つたのは、七月の末。

月をこえるとすぐ、横山から早打はやうちで、

——機は熟しました。いざ。

と、出馬の催促さいそくじょう状が、藤吉郎のまづい自筆で届いて来た。

北越の山ざかいを越え、雲の峰のくずるような大軍が、残暑の七月、梁ヶ瀬やなせから田たがみ神山やまを経、余吾よご、木ノ本のあたりへ濛々もうもうと陣地を構築していた。

越前兵。

いうまでもなく一乗ヶ谷から出てきた朝倉義景よしかげの大軍だった。

この七月末。

北近江の聯盟国、小谷おたにの浅井久政、長政父子から、一鞭いちべんの飛信があつて、

「——織田の大軍が、続々北上して来る。いそいで援軍あれ。もし救援がおそいと、当城のささえもおぼつかない」

と、あつたので、

「よもや？」

と、評議では疑うものもあつたが、何せよ盟約のてまえ、

「それゆけ」

と、急遽、一万の兵を先発し、その先発が田神山までゆくとすでに、

——織田の江こうほく北攻めは事実。

と知れたので、たちまち二万余の後続軍が発向され、主将朝倉義景も、このたびこそ大事と——その陣に加わつたのであつた。

なぜこうまで、越前の朝倉が、江北の戦いに大きな震しんが駭がいをうけるかといえば、いうまでもなく、越前にとつて浅井の北近江は、自家の国防の第一線といえる地勢にあるからだった。

宿命の地、小谷城にいる浅井父子は、それまでにも、すぐ近くの地にある横山城（約三里のあいだ）に、木下藤吉郎というものが、信長のために、たて籠って、常に凝視のやじりを向けているので、手も脚も出ない苦境にあつたのである。

その藤吉郎が、室町幕府最後の始末がすむかすまないうちに、疾風のごとく畿内の戦場からひつ返し、また直ちに、岐阜へむかつて、

「——もう頃あい」

と、戦機の熟したことを報じて、信長の大軍をよび迎えたものである。

その間、実に、半月というまもない迅速さだった。

八月初旬。

信長はもう浅井攻めにとりかかつていた。

藤吉郎の案内で、かれは虎御前山の高所へのぼって、作戦をねりあつた。

「あれが八相山、宮部ノ郷、小谷から横山まで三里のあいだを、鹿垣、柵をもって遮断すれば、敵の出ずる道はもう一方しかありません」

藤吉郎はつぶさに説明する。さながら自分の庭園の設計を説くようにである。

幅三間の軍用道路が横山まで通つた。城へ迫つて五十余町のあいだ高い牆壁を作つ

てしまった。そして溪流の水をせき入れて、道路の安全をはかる一方——持久戦の腰を示した。もろもろの防寨ぼうさいなどもすべて、半永久的に築いたのである。

こうしたら敵も決戦に出てくるに相違ない。

と、計つたのである。

だが、智者のはかりも外れるはずことがある。自己の廉恥れんちと気もちでひとを考えた時である。浅井父子は、いよいよ朝倉の外援をたのむのみで、自身から討つて出ることはしなかった。

しかし信長は、それ一策を恃たのんではいかなかった。兵家にはかならず変通がある。かれは、俄然がぜん、鉾ほこを転じて、木ノ本きもとを衝ついた。——越前軍へ急襲したのである。

八月十三日、その日、織田軍の手にあげた首級だけでも、二千八百余級。

十四日、十五日も、逃げくずれる敵を追つて、梁ヶ瀬やなせから田神たがみ、田部たべ、引田ひきたなどという部落部落を、残暑に乾ききつている夏草の野を、血しおで黒くするほど駈まけ捲まくした。

「こうも弱いか。越前は」

越前の心ある将士は、味方のふがいなさに哭ないた。

けれど、そういう猛将や勇士は、かならず取つ返しては討死した。なんのための弱さか、なんのゆえに織田軍に当りきれないか、ふしぎというほかはない脆もろさであった。

亡ぶものは亡ぶ素因そいんを多分に持つて、当然な崩壊ほうかいの一瞬に来るのであるが、その瞬間には、自他共に、

——あれほどな大厦たいかが。

と意外に思う。

しかしあらゆる興亡の現象には、すべて当然があるのみで、奇蹟や不思議はすこしもない。朝倉勢の弱さなども、主将義景よしかげの行動を見るだけでも、その理由がわかる。

潰走かいそうする味方にまじつて、梁ヶ瀬から逃げて来る途中、すでに義景は、織田軍の猛烈な追撃に度を失つて、

「だめだ！ 逃げきれん！ もう馬もわしも疲れた。美作みまさか美作みまさか、山へ」

と、反撃を試みようとする策もなければ気力もない。ただ身一つを考えて、急に馬をすてて山中へ隠れようとしたほどだった。

託問たくま美作みまさかという重臣は、

「そんなことでどうしますか」

と、哭なかんばかり叱咤して、彼の太刀帯たちおびをつかんで引き戻し、無理に馬へ騎のせて、越前の方へ落した。

そして自分は、義景を逃がすためにふみとどまり、千余の手兵をもつて、驀進して来る織田軍を、幾刻かそこで支えていた。もちろん美作以下、枕をならべて、惨憺たる全滅をこうむつたことはいまでもない。

そういう忠誠な臣下を犠牲にしながら、義景は、本城一乗ヶ谷にこもつて、祖先の地を死守しようという気ももたなかつたのである。

城へもどると、妻子一族をひきつれて、大野郡の東雲寺へ深くかくれこんでしまった。城池の中にと万一の際、遁れる道もないからだった。

主将がその有様なので、そのほかの将卒もみな思い思いに分散した。

ひとり本城に残つた桑山清左衛門という一将は、あまりのふがいなさに、声をあげて哭いたという。

「藩祖教景公このかたここに五代、越前の名門庶流、あわせて三十七同族、世々恩顧のさむらいを養うことも何十万、それがいま、祖先の地を敵兵に蹂躪され、本城も墜ちんとするのに、ただひとり共に死のうとする者もないとは！ さむらいの廃れか、君の御不徳か！」

清左衛門は、わずかな郎党とちかつて、寄手と一戦をまじえ、これまでと観念してひつ

返すと、城内一乗ヶ谷にある歴代の藩主の墓前で、腹を切つて麗うるわしい鮮血のなかに身を伏せた。

この父にはまた、この父の子らしい娘があつた。名は伝わらぬが、芳紀ほうきその時十八であつたという。

彼女は夙つとに美人のきこえがあつた。美人が多いといわれる越路こしじの花のうちでも、藩中第一の美人だろうと日頃からいわれていた。

けなげにも父を援たすけて城内にいたが、父の清左衛門をさがしているまに敵兵に捕まつてしまつた。

寄手の兵は気が立つている。仮借かしゃくもなく引つ立ててどこかへ拉らっして行こうとした。彼女は死にもものぐるいに一時は反抗していたが、やがて、

「もうおてむかいはしませんから筆と懐紙を持たせてください。乳母へ一言書きのこせば、どこへでも神妙にまいますから」

と、哀訴あいそした。

前後をとり囲んだまま、兵が筆紙を持たせてやると、彼女は走り書きに何か書いて、それを下へおいたかと思うせつな、守り刀をぬいて、あつとまわりの者がさげぶまに、自害

して果ててしまった。

懷紙は、点々、紅梅をちらしたように染まっていたが、なお鮮らかに乾かぬ墨の痕が読まれた。

世を経なば

よしなき雲も

おほひなむ

いざ入りてまし

山の端の月

難攻不落も、腐る時は腐る。幾万の将兵も、その根幹に精髓をうしなえば、また片々たる落葉の脆さに似てしまふ。

越前三十七門の本城はいま最期の炎をあげたが、そのなかに一輪、名もない越路の花だけが薫々たる気を吐いた。

義景の最期は、浅ましいものだった。

信長の兵が、やがて亥山を囲んだので、彼は、東雲寺にも居たたまれず、山田の六坊へ奔り、その堅松寺に潜伏した。

「もはや遁れるすべもござりませぬ。あなた様は越前三十七門の御惣領、たとえ降伏して擒人となられても、信長が、お命を助けおくわけはありません。さる生き恥をさらさんよりは……」

と、一族の魚住景賢と朝倉景雅のふたりが迫つて、とうとう義景に対して、自決をすすめるまでの窮地となつた。

もう堅松寺を遠巻きにして、海鳴りのような兵馬の音が、刻々、耳ちかく聞えていたのである。

「……だめか」

と、一言つぶやいて、義景はまツ蒼な慄えを顔に走らせたが、自分に死をすすめる二人の親族も共に死ぬものと思つて、山門の方でバリバリツツという凄まじい震動のきこえた刹那、急に屠腹して、俯伏した。

「お。——お果てなされた」

それを見ると、景賢、景雅のふたりは、あわてて立ち去ろうとした。

騙したのである。

しかもこの悪臣の二名は、それより前に信長へ降伏を申し入れ、義景のありかへ敵を導

いていた者だった。

「おのれツ、どこへ去る？」

と、近習の鳥居某なにがし、加藤景政、小姓の高橋甚三郎などが、怒り立って、ふたりを本堂の外へと追いかけたが、時すでに遅しであった。信長の兵は、怒濤どとうのごとく寺内へあふれこんでいた。

越前一国はここに亡んだ。

かなしい哉かな、義景もまだ若かった。四十一の男ざかりだったのである。——しかも歴世の国富を擁ようし、名門に生れ、天嶮てんけんと沃地よくちをもち、そしてまたとない時代に遭あいながら、その生命を、実に勿体ないほど、つまらなく終ってしまった。

彼にも、足利公方あしかがくぼうの義昭と、どこか共通している錯誤さくごと性格があつたのである。時代の奔激ほんげきをあくまで甘く見て来た顕門けんもんのお坊ツちゃん——こうして次々に溺れてゆくしかなかった。

彼の死や、足利公方の亡滅にくらべると、天下の器うつわとはいえないかもしれぬが、信玄の死などはもつと深く惜まれる。

一時甲州では、ふかく喪もを秘していたが、この秋、隠れもなく知れわたって、甲州の武

田信玄の在世は、もう誰も信じるものはなくなっていた。

信玄に死なれて、一時に気を落とし、甲山峡こうざんきょうすい水の勇猛も、すっかりせいぎ旌旗の色が褪あせたようだ——といわれただけでも、信玄の存在はやはり大きかった。またその為ひととなり人も平時の心がけも、義昭や義景などという修養のない若輩とは比較にならなかつた。

国持大名が侍を召し抱えるのに、いわゆる武勇一徹や行儀者ばかりを尊重する風をわらつて、

「おのれの好みによつて、同じ型の人物ばかり揃え、人間を一いちりつ律にみることに信玄は大嫌いである。——春は桜の色めき、秋は紅葉もみじのいさぎよき、夏の清涼淡々たる、冬の黙々と鈍重なる、みな人間にもある特質で、いづれを是ぜ、いづれを非ともいえない。要は、用うる者が天体のごとく、それらの人々を自然大にうごかせば、万ばんしやう象みな有能でないものはない」

と、語っている如きは、彼の人間観や、また家士を養う心がけの窺うかがえることばである。

また、彼はつねに、分別ということをよく云つた。小才や機智を嫌つて、

「遠慮——すなわち遠おも慮んばりを常にもつて、日々の近きを処してゆくのが、百難の道をあゆむ法ぞ」

と、近親に訓えたが、その折に、

「――が、ただ人間の寿命だけは、遠い慮りでは及びがたい」

と、云いたして、呵々かかたいししょう大笑だいたうしたことがあったという。

その及び難いところへ、彼も遂に逝いってしまった。そして地上の圏外からこの地上の争そ覇うはを、今は永遠の傍観者として、脾肉ひにくの嘆きもなく、公平に観みていることであろう。さだめし自嘲をおぼえていることであろう。

お市いちの方かた

秋もさかりである。八月の末、二十五、六日の頃には、信長はもう北近江きたおうみの小谷おだにをか

こむ虎御前山とらごぜんやまの陣地へ、帰っていた。

ここへ来てからの信長は、

「小谷の城は落ちるのを待て」

と、いったふうには、至極おつとり構えていた。

電光石火でんこうせっかの陷滅かんめつを与えた越前の戦後の経営も、彼は、一乗ヶ谷の余煙がまだのぼつ

ているうちに、体だけを、急速にここへ引返して、ここから何くれとなく指令を出していたほどだった。

越前の降将、前波吉継を、豊原の城へおき、同じく朝倉景鏡に、大野城の守護を命じ、富田弥六郎に府中の城を——と、いったふうには、旧領の事情に精通している旧将を多く用い、その目附として明智十兵衛光秀だけを抑えに残して来たのである。

ここには、光秀以上、適任なものはあるまい。かつて浪々の不遇時代に、朝倉家の家臣となり、一乗ヶ谷の城下にも住んでいたことのある光秀は——そして当時家中の人々から冷眼視されて、ここでも世間へ泛かび出せなかつた過去を持つ光秀は——いま、まったく反対な立場になつて、旧朝倉の一族を監視した。多少の得意とさまざまな感慨が、光秀の胸を往來したことであろう。

それに、光秀の才識は、事ごとにみとめられて、いまや彼は、信長の寵臣のひとりだった。

人を見るに人いちばい明敏な彼は、ここ数年の戦や、日々の奉公によつて、信長というひとの性格もよくのみこんでいた。信長の顔いろ、片言、気色など、鏡にうつして見るように、遠くにいてもわかつていた。

彼は、越前から日に数度の早馬を立てた。かりそめにも、わたくしな専断をせず、いちいち信長のさしずを仰いだ。

その文書や書簡などを、信長は、虎御前山とらごぜんやまの陣所で、毎日、うららかに見ては、裁決を与えていた。

「戦いくさも、こんな戦ばかりだと、のん気なものだな」

「ばかをいえ。その心があぶない。今夜にも、どんな御命令が出るかわからん。——敵の浅井一族といつても、あの堅めをみると、存外、手強てごわそうだぞ」

「守りきる覚悟かしら」

「もとよりだろう。北近江六郡きたおうみ、あわせて三十九万石の本城支城が、そう将棋だま仕しに陥ちるはずはない」

陣外ものどかである。哨兵しょうへいたちが雑談していた。雲もない一碧いっぺきの空に、かさなり合っている山々の秋しゅう色しよく、その裾に見える湖の明るさ、ふとすると、禽とりの音ねに、欠伸あくびを誘われそうだった。

「あ。……木下様が来る」

横山城から、すぐ山むこうまで陣地をすすめている藤吉郎であった。四、五人の郎党を

つれて、大股に彼方かなたの沢を下りてくる。何か、従者と笑いあっている。秋あきの陽ひに、齒が白
い。

たちまち近づいて来ると、

「やあ。……やあ」

右へいう。左へ会えしやく釈くする。

洲股すのまたの城を築き、横山城をあづけられ、その任も位置も、いつのまにか、織田軍の将
校中では、嶄ざんぜん然ぜん重きをなしてきた彼であつたが、まことに相変らずである。

(彼は少し軽々しいよ)

と、部将のうちでは、自分たちの重々しきにくらべて、軽けいこつ忽こつと評するものもあるけれ
ど、また一部からは、

(いや、彼は、位くらいま負まけしないのだ。一躍ろくだか禄だか高かが上がつても、きのうの彼と変らないし、
御小人おこびとから士さむらいになり、また忽ち一城のうえに坐つても、あのとおりだ。まだ相当なところ
まで禄こを漕こぎつけるだろう。——とにかくいいところがあるよ、あの男は)

と、いう評もあつた。

まずこの辺の理解者は、彼にたいして、最大な好感をもっているほうで、その数はもと

より百人にひとりくらいなものだった。

ぶらりと、藤吉郎が、本陣に顔を見せたと思うと、いつのまにか、至極、簡単に信長を誘いだして、山のほうへ登って行ったものである。

「怪しからぬやつだ」

柴田勝家、佐久間信盛などは、營外まで出て来て、

「あれだから憎まれずともよいのに人に憎まれるのだ。どうも小才を弄すやつほど不快なものはない」

と、唾しながら、彼方の沢を、信長に従って縫ってゆく藤吉郎の影を見送っていた。

「われわれに、何の目的も告げず……。諮らぬもせず」

「第一、危険至極ではないか。いくら白昼でも、ひろい山地には、敵の忍びもいる。もし遠くから狙撃でもされたらどうするか」

「殿も殿。ちと……」

「いや。木下がいかん。多勢してお附添いしては、眼につくななど、殿に阿って」

勝家や信盛以外の幕将たちも、決して快くなかった。

いずれどこか、山の高所へお供して、藤吉郎が例の智弁で、なにか作戦上の献策でもす

るつもりだろうとは察しられたが——そもそもそのこと自体が不快でならなかった。その不快は、

「われわれ帷幕いばくの謀將を、無視しておる」

と、いうところにあるらしい。

そういう人間の機微きびは分らないのか、無関心なのか、藤吉郎はまるで遊山ゆざんにでもゆくよ
うな笑い声を、時々、山あいの静寂しじまに発しながら、信長の先頭に立ってゆく。

彼の郎党と信長の従者と、あわせてわずか二、三十人の小隊でしかない。

「汗ばみますな、山を登ると。——殿、お手を引きましようか」

「たわけたことを」

「もうわずかです」

「登り足らんな。もつと高い山はないか」

「生憎あいにくとこの辺には。……やあ、しかしだいぶ高い」

汗をふいて見まわした。

信長もそこに立った。——立ってふと、附近の谷間や沢を上から見下ろすと、いたるところに、藤吉郎の手勢らしいのが、ふかく木の間にひそんで、万一を厳しく警戒している

ことが分つた。

「お供の衆、各は、しばらくこれに休んでおられい。これから先は、大勢ではちと工合がわるい」

藤吉郎はそういつて、信長とただ二人きりで、南の山鼻のほうへ、数十歩あるいて行つた。

そこらはすべて樹木がない。飼糧かいらょうによさそうな柔らかい穂や芝草がいちめんめんに山肌をつつんでいる。

萱かやのあいだに、ちらと戦ぐせよのを見ると、桔梗きぎようの花だった。太刀の帯草おびくさに絡むからのを見ると、女郎花おみなえしや葛くずの花であつた。

一步一步、ふたりは、無言ですすんだ。海へのぞんでいるように、少しさきは何もなかつた。

「殿……。お屈かがみください」

「ごうか」

「なるべく、草の穂に、お身を紛まぎらわせて」

そして、這うが如く、なお断崖のへりまで行くと、眼の下の盆地に、忽然こつぜんと、鮮あきらか

な城じょうかく廓かくが望のぞまれた。

「……小谷おたにの城じょうです」

声を低ひめて、藤吉郎は、指さした。

信長はうなずいた。

無言むげんのまま。

そのひとみに、何かふかい感情かんじがつつまれている。単ただに、敵の本城ほんじょうに接あしただけのものでない。

自分の大軍たいぐんをもって包圍ほうゐしているこの城中じょうちゆうには、わが妹のお市いちの方が、城主じゆうしゆの妻つまとなつてから、もう四人の子こまで生なして、いまも暮くしているのだった。

主従しゆじゆうは、坐まつた。

秋草あきくさの花はなや穂ほが、ふたりの肩かたまでつつむ。

眼まなこの下の城廓じょうかくを、あかず見みつめていた信長は、その眼まなこを、藤吉郎の面おもてへ向むけた。

「……さぞ妹は、兄あにを恨にくんでいよう。我意がいきもいわず、浅井家あさいけへ嫁よめがせたのは、この信長であつた。——国くにを保たもつたためには是非せいひもない。わが家の犠牲ぎせいになれといふくめられて、泣なく泣なく輿こしにかくれて行いつたお市のすがたが……。藤吉郎、いまも信長は眼まなこに見えるよう

なここちがする」

「それがしも、よく覚えております。^{おびただ}夥しいお荷物、美々しいお輿。飾り馬だのお供の人々にかこまれて、湖北へ嫁がれた日の御盛事を」

「お市は、まだ十五の、何もしらぬ^{おとめ}処女だった」

「小さくて、お可愛らしい花嫁すがたは、^{おうしやくん}王昭君のようでした」

「……藤吉郎」

「はい」

「そちにはわかるであろう、信長の苦痛が」

「それゆえにこそ、てまえも苦慮しておりまする」

「この城ひとつ——」

と、信長は、顎^{あご}でさして、

「踏みつぶすだんには、なんの造作もないが、お市の身を、^{けが}怪我なく外に救い出そうと思うと……これは、一国の戦と、信長の^{ほんのう}煩惱と、ふたつにかかる難事となる。——というて、凡夫信長、そのいずれも捨てかねておる」

「ご無理はありません」

藤吉郎は、頭かしらを垂れた。彼も情痴の所有者である。信長の感情に富むところと、彼のそれとは、理解しあうことができた。

「先頃から——いちど小谷の地形が見たい、案内せよという御内意のあつた時も、また、ここを措おいて、さきに越前の攻略をお果しなされたのも、そのお悩みによることとは、疾とくから拝察しておりました。——口幅くちはばたい申し方ですが、てまえから忌憚きたんなくいわせていただくなら、その煩惱こそ、殿のよいところと、人間の至情、何をか、臣下へ御遠慮がありませんよう。失礼ながら藤吉郎は、一ひとしおわが殿の御美点を、もひとつ見出したようなここちにござりまする」

「そちだけだ」

信長は、舌打ちして、

「ここへ陣して、旬日をむなしくわしが過しておるを見て——柴田、佐久間、そのほか帷い幕ぼくの者どもも、解げしかねる顔のみしておる。わけて勝家などは、わしが愚かを危ぶみもし、ひそかに嗤わろうてもおるようだ」

「殿御自身が、まだ、いずれにしたものかと、お迷いになっておられるからです」

「迷わずにおれぬ。このまま小谷の外城から、ひとつひとつ粉碎して敵の死命をにわか

制せば、浅井長政父子のものは、かならずお市を監視して、炎の底まで、ひき連れてゆくであろう」

「まず、そうなりましょう」

「藤吉郎。そちは最前から信長の心に同意とは云いおるが、至極平然と聞いておる。……なにかそちに策でもあるのか」

「ないわけでもありません」

「では、なぜ早く、信長の意をやすめてくれぬか」

「近ごろ、献策はあまりせぬことに、みずから慎んでおるものですから」

「なぜか」

「帷幕いぼくには、他に人も多うございますゆえ」

「余人よじんの嫉みねたを惧おそれておるか。それもうるさいことだ。しかし要は信長のところ一つにある。まっすぐに、所存をいうてみい。……いや、よい策があらば、聞かせてくれい」

「篤とく、御覧なさいませ」

藤吉郎は指さした。

眼下の——小谷城全廓ぜんかくを、その一指にさしているのである。

「この城の特質は、三つの曲輪くるわがふつうの城よりも、劃かく然ぜんと、各 独立しておるように分れていることです。すなわち一の曲輪には、大殿とよばれる浅井久政が住み、三の曲輪には、子息の長政どのと、御内室お市の方様やお子たちが住まわれております」

「むむ……。あれにか」

「そうです。そして一の曲輪と三の曲輪との中間に見える一廓かくは——あの二の曲輪は、俗に京極曲輪きよごくくるわとよび、そこは老職の浅井玄蕃あさいげんぼ、三田村右衛門大夫、大野木土佐の三臣が固めておるのです。——ですから、この小谷を抜くには、尾を叩くよりも、頭かしらを打つよりも、あの京極曲輪をさきにお手に入れてしまえば、両曲輪は中断され、ふたつとも孤立無援のわびしいものと相成りましょう」

「そうか。……そちのいう意味は、中の京極曲輪だけを攻め陥おとし、そのうえで計はかりをなせと申すわけだの」

「いや、それも力をもつて、無碍むげに攻め陥おとそうとすれば、当然、一と三の両曲輪からも援けを出し、お味方は挟撃きょうげきをうけて、勢い全体の激戦と化さざるを得ません。……さある時には、一挙にふみ潰つぶすか、退いて弛ゆるめるか。いずれにせよ、御城内にあるお市の方様のお生命いのちなど、どうなるか分らなくりまする」

「それでは、どうするがよいと申すのか」

「やはり、お使いを立てて、浅井御父子に、よく利害を説いて降し、城も無事に、お市の方様のお身も無事に、すべて難なくお手に入れることが、戦術の第一策にまちがいございません」

「それはすでに、二度まで繰り返しておること、そちも存じておる筈じゃ。安藤伊賀守を予の使いとして城中へつかわし、降伏なせば、小谷の旧領は、そのまま与えようと申し遣り、また、恃みとする越前も、信長の手に収められたことなど、篤、云いつかわしてみたが、浅井父子の頑迷、すこしも顧みようとはせぬ。依然、強がっておるのみなのだ。…その強がり是要するに、信長の骨肉を、城中に抑えておるゆえ、よも無二無三には攻め得まいと、お市の生命を、楯としていう強気に過ぎまいが……」

「いや、それだけでもありません。ここ一、二年、横山城にあつて、自分がじつと観ておりますに、長政どのには、さすがに英気もあり意地もあります。ただその意地が小さいだけですが、足利公方や越前の義景どのなどの比ではありません。……で、一朝、この攻略となった場合には、どうするが最善の策かと日頃から工夫をめぐらしておりましたので、いささかそれが今日に役立ち、もはやあの京極曲輪だけは、この藤吉郎の手に一兵

も損せず、墜おとし入れてありまする」

「なに？ ……何と申したか」

信長は、耳を疑った。

藤吉郎は、繰り返して、

「あれに見えます、二の曲輪です——。あの一廓かくだけは、もうお味方に収めてございますゆえ、御安堵ごあんどあそばすようにと申しあげたのです」

「まことか。 ……それは」

「なんで殿に、この折、そのような戯たわむれを申しましょう」

「……が。信じきれぬ」

「ごもつともです。その真実はすぐお分りになりましょう。ただ今これへ、一名の僧と、一名の老将を呼び迎えますから、これにてお会い下さいましょうか」

「何者じゃ。そのふたりは」

「ひとりみやべせんしやうぼうは宮部善性坊というもの。もう一名は京極曲輪をあずかる老臣の一人、大野木土佐守ごぞいにございまする」

藤吉郎は手を振った。

彼方かなたからひとりの士卒が、草のなかを屈かがみ腰に駈けてくる。近くへ呼んで、何事かいいつけ、

「はやくせい」

と、すぐ追いやった。

そして信長に向い直して、

「ただ今、呼びにやりました。やがてこれへ連れて見えましょう」

と、いう。

信長は意外な面持おももちから解とかれなかつた。この男のこと——とは充分に信じてもいるが、なお、どうして浅井家の老臣などを、自由にこれへ拉らして来るか、ふしぎな念を消しきれなかつた。

だいぶ間がある——

そのあいだの座談として、藤吉郎は事もなげに、ふしぎでない理由を打ち明けた。

「横山の城を、殿から賜わつてから、間もない頃のこと——」

と、彼は云い出すのである。

信長はいささか愕おどろいた。まじまじとそういう彼の顔を見つめずにいられない。

横山城は、前線の要地なので、特に、浅井、朝倉の抑えとして、藤吉郎の隊を籠めさせたものである。暫定的な駐屯の意味で命じたおぼえはあるが、城地をやると約束した記憶はない。

いつのまにか、藤吉郎のほうでは、貫ったようなことをいつている。——だが、この際だし、あとの話に、心をひかれてある信長とて、ケチなことを糺してもいらなかった。

「その頃とは、叡山攻めのすぐ翌年、そちが岐阜へ年賀に見えた春さきのことか」

「さればで。——その途中、竹中半兵衛が、今浜のあたりで、発病したりなどいたし、予定がおくれて、横山へかかったのがもう夜にはいつておりました」

「長物語りは聞いている心地もせぬ。要をはやく申せ」

「それがしの留守と見、横山城は夜襲をうけていました。もとより直ちに撃退しましたが、その折、生擒った敵方の勇僧に、宮部善性坊なるものがおりました」

「生擒のものか」

「そうです。首にするところ、以来、ねんごろに養っておき、暇をみては、時勢の将来を諭し、武門の本義を訓えなどしておりますうちに、彼のほうから進んで、旧主大野木土佐守を説き、また土佐守から他の老臣を説かせ、まったく手前に帰伏しておる次第でございます

ます」

「まったくか」

「戦場に戯言はございません」

「うう……む」

感服という度をすこし超えて、彼の遠い要意と、またそのあいだ閃めいている狡さに、信長もあきれ顔であった。

戦場に戯言はない！

大言したとおり、間もなく、宮部善性坊と大野木土佐守は、藤吉郎の家来に導かれてそれへ来た。

遠く、草のなかに、ふたり平伏して、信長に調した。

信長は、なお、藤吉郎のことに相違ないか否か、二、三のことを土佐守に質した。

土佐守は、つつしんで、

「自分一存の降伏にはございませぬ。京極曲輪につめおる他の二老臣も、お敵対は愚、かえって、主家の滅亡を急がせ、領下の民をいたずらに苦しめるものと、ふかく反省いたして、木下殿まで、誓紙をさしあげてあるとおりに所存をかためております」

と、明らかに答えた。

「誓紙まで持つておるのか」

信長が、顧みて訊くと、

「もとより白紙のまままで殿のお耳へ入れる気づかいはございません」

笑つて彼は答えた。

まもなく信長は山を降り、藤吉郎と善性坊は横山の陣地へ。また大野木土佐守ひとり、小谷の二の曲輪へ、間道づたい、ひそかに帰つて行つた。

母の戦い

長政はまだ若い。

妻のお市の方とのあいだに、もう四人の子を生しているが、その妻もまた二十三、四。彼もまだ三十には一つ欠ける。

ひろい小谷の地を三分して、一劃ごとに一城を築き、長政はその三の曲輪にたて籠つていた。小谷城とは、三城あわせた総称である。

たそがれ頃まで、南の狭間はざまで小銃の音がかなり烈しく聞えていた。時折、格天井ごうてんじようもゆすれるような大鉄砲の音が交まじる。

「才オ……」

お市の方は、怯おびえたひとみを、思わずあげて、ひしと、ふところの児を抱きしめた。

まだ乳の離れない達姫たつひめであった。

風もないのに、煤すすみを吐いて、ゆらゆらと火色の変じる短檠たんけいのあかりを見て、

「……怖いッ」

「おかあ様」

と、右のたもとへ、次女の初姫がすがると、ひだりの膝へも、長女の茶々ちやちやが、だまつて、しがみついた。

さすがに、もうひとりには男だけに、まだ小さいが、母の膝へは来ない。側仕そばづかえの侍こしも女とをあいてに、棒などをふり廻していた。長政の嫡子ちやくし、万寿丸まんじゆまるだった。

「見せてよ。いくさを見せてえ」

万寿は、だだをこねていた。侍女を、鏃やじりのない矢柄やがらで打っているのだった。

「……万寿。なぜ召使を打ちますか。戦いくさは、お父さまがなされています。戦のあいだは、

おとなしゆうしているのが、よいお子ぞと、お父さまの仰つしやったことを、もうお忘れか。……郎党たちに笑われたら、大きくなつても、良い大将になれませぬぞ」

母のいう理も、すこしは分る年ごろである。默然と、聞いていたが、急に、
「戦を見たあい。いくさを見たあい」

大声で駄々泣きをはじめた。

侍役の者も、もてあましてただ眺めていた。そのあいだにも——だいぶ小駄みにはなつて来たが——ばちばちと、小銃の音はきこえてくる。

長女の茶々は、もう六歳か七歳ごろ。

父の苦境や、母のかなしみや、一城の将士のもっている敵愾心なども、女の子だけに、なんとはなく分っていた。

少女にしては、ませたことばで、

「万寿。わからないことをいうものではありませんよ。おかあ様がおいとおしいと思いませんか。お父さまが、敵と戦っているのがわからないんですか。……ねえ、おかあ様」

弟を、たしなめると、万寿はこつちを見て、

「なにを」

矢柄やがらをふりかざして駈けだして来た。茶々を、打とうとするのである。

「この、お茶ツぴーめ」

茶々は、袂たもとをかぶつて、

「あれツ……」

と、母のうしろへ隠れた。

「およしなさい」

なだめて、お市の方が、矢柄を取りあげ、静かにまた云い聞かせていた時である。

登音も荒々しく、

「なんじゃツ、織田ごときが！……。ついこの頃尾張の片田舎から時を得て、のさばり出た小侍にすぎないツ。信長風情ふせいに屈するわしか。浅井の家はすこしちがうぞツ」

聞えわたるような声を放ちながら、どやどやと、二、三の武将をしたがえてはいつて来た人がある。いうまでもなく、この深殿しんでんへ、そうして無断に来るひとは、浅井長政のほかにはない。

「……才オ、みなこれにいたか」

ほの暗い短檠たんけいのあかりにしては、洞然どうぜんと広すぎるこの一間に、無事な妻子のすが

たを見出すと、彼は、やはりどこかでほっとしたように、

「あ……少しくたびれた」

どかと、坐つて、すぐ鎧よろいの一部を脱ぎ、うしろの部将たちへ向つて、

「その方もも、すこし休め。……たそがれの様子では、こよいの夜半あたり、敵は夜襲に出て来るかもしれぬ。……今のうち休んでおくがよい」

と、息もあらあらしく云つた。

部将たちが立ち去ると、長政の心は、何かほつと息づいた。——戦いくさの中にも、ここでは家庭の父であり良人である自分を、ふと見出したからである。

「夫人おく。……怖ろしかったか。夕方の銃つと音は」

お市の方は、子たちに囲まれながら、白い顔を横にふつた。

「いいえ……。ここにおりますからにはなにも」

「万寿も、茶々も、泣き怯おびえはしなかつたか」

「お賞ほめくださいます。みなおとなでございました」

「……そうか」

強しいて笑顔を見せて、

「安心せい。執しつこく奇襲して来た敵も城中からのつるべ撃ちに麓のほうへ潰かい走そうした。…
…たとえこの後、幾十日、いや幾百日、織田の大軍が襲よせようとも、屈する長政ではない。
浅井一族ではない！ ……。信長ごときに」

唾つばするように罵ののつたが、急に口をつぐんだ。

短たん繁はんのあかりに反そむいて、お市の方が、ふところの乳のみへ顔を埋めたからである。

——信長の妹！

長政の感情が揺れた。どこやら信長に似ている面おもざし、肌き目のよい頸うなじから横顔の面長な線も、織田家の血液にある特質だった。

「夫人おく。泣いておるのか」

「いえ、泣いてなど、おりませぬ。 ……乳の出ぬせいとか、姫が焦じれては、時々、乳くびを
嘔おうみますので」

「乳が出ない？ ……」

「ええ。この頃になつて」

「ひと知れず、悲嘆を抱いておるせいだ。そなたの痩せが目だつて来た。——そなたは母
だぞ。母の戦いくさだぞ、そなたの役は」

「わ、わかつて……おりまする」

「むごい良人と思うであらうな」

憤然と、格天井ごうてんじょうを仰ぐと、彼女は、子たちを抱えたまま良人のそばへ身をすりよせた。

「……思いません！　なんでお恨みなどいたしましょう。……何もかも宿命と観じており
ますから」

「ただ宿命というだけでは、おたがい人間、諦めあきらまれるものでない。つるぎを呑むより辛
かろうが、武将の妻、もつとはつきり理解をもて。そのうえの覚悟でのうては、まことの
覚悟とはいえぬ」

「その理解を、持ちとうございまする。……けれど、女子おなのあたまでは、自分は母ぞ、と
思うのがいっぱい」

「無理もない。平常、世上の知識も、表むきのことも聞かせず、いきなり解わかれと申しても。
……今は話そう、はつきりと」

「……………」

「夫人おく。わしはそなたを娶めとる初めから、そなたを末長く契ちぎる妻とは思得なかつた。父久

政も、浅井の嫁とはゆるさなかつた」

「えッ……なんと仰つしやいましたか。いまの、いまの仰せは」

「かかる時こそ人は真実を吐くものだ。またとない折、長政はそなたに、心を打ち割つてみせるのじや。乱世の武人の表裏と詐謀さぼうのむずかしさ、また人間的な苦しき……。いま世の裏を教えるのじや。悲しまず、疑わず、落着いて聞け」

いまにもわつと泣き伏しそうな彼女の面おもてを見つめながら、長政はそう宥なだめて、

「信長が、そなたを、この長政に嫁とつがせたのは政略以外のなものでもない。読めていたのじや、初めから信長の心はの」

と、語を切つてすぐ、

「だが——それと知りつつ、わしとそなたのあいだには、もう何ものも断たてぬ愛が生じた。いつか四人の子が生れた。ここに至つて、そなたはもう信長の妹ではない。長政の妻だ、長政の子の母だ。……敵の信長に、なみだをもつことは許さん。なぜ、そのように痩せるか、子にあたえる乳を渴からすか」

今になってみると、あらゆる運命の結果は「政略」という呪符しゅふから始まっている。

政略の花嫁——お市の方を娶めとつた初めから、長政は同時に信長をも、

政略に富む男。

としか見られなかった。

政略も、もちろんあった。しかし信長は、心から妹婿むこの長政を愛した。初めから愛していた。

長政は、弱冠の十六歳に、もう将として陣頭きんづに立ち、度々、南近江の六角承禎ろっかくじょうていを破つてその領土を拡張し、信長がこの地方に驥足きそくをのばしてきた頃には、浅井家の領土は、愛知川えちがわを境とするほど、目ざましい進出を遂げていた時だった。

(浅井の息子には将来がある)

信長はこう観みた。

彼の武勇を見こんだのである。

で——妹をと、お市の方の縁談は、彼のほうから熱心に浅井家を説いて、成り立ったものだった。

しかし、その結婚には、初めから、無理があつた。

なぜならば、越前の朝倉家と浅井家の親密は、三代にもわたっている。単に、攻守同盟というだけではない、旧恩の關係もある、そのほか複雑な交誼こうぎも入りこんでいて、断きるに

断れない間からである。

ところが、その朝倉と織田は、年来の敵国だ。

信長が、岐阜の斎藤を攻略するにあたって、いかに邪魔したか、いかに斎藤方を援けたか。それだけでも、双方の感情はわかる。

(いや、そのことなら、何の御憂慮にも及ばぬ。信長が一札入れ申せばよろしかろう)と、縁組の妨げさまたに対して、信長は信長らしい解決を計った。

朝倉家へ一札、誓紙を入れたのである。ゆく末とも、朝倉領には兵を入れぬという約やく定ようだった。

朝倉義景は、それをとって置いて、ひそかに長政の父久政へも、彼へも、

(ゆめ、お心をゆるし給うな)

と、警戒を与え、つねに信長の野心と行動を、裏面から報じた。

若い長政は、新婚早々から、何も知らぬあどけない妻を、強しいてそう見るべく、父からも、旧恩のある朝倉家からも、のべつ励まされていたのである。

そのうちに、朝倉と足利公方くぼうとの、密盟がむすばれ、甲州の信玄とも、叡山とも、あらゆる反信長聯盟の構成のうちに、いつか長政もひきこまれていた。

その、のろしを揚げたのが、過ぐる年、信長が越前の金ヶ崎に攻め入った時である。

ふいに、うしろを衝いたのだ。遠征の信長の退路を断ち、朝倉家と呼応こおうして、かれの全滅を計ったその時に、

(政略の妻には惹ひかれぬ)

と、長政は、その態度を、信長へ明らかにしたのである。

信長は、その折、

(嘘うそだろう)

と、疑ったほどだった。

自分が、長政を愛している真情にたいして、ありえないこととしたのである。

以来――

信長が見こんで、妹をさえ嫁がせた長政の武勇と浅井の勢力は、かえって、足もとの火となり、鎖くさりとなっていた。

そして遂に今。

一挙、越前を屠ほぶったあとの小谷城は、もう火でも鎖くさりでもなくなった。どうするも、信長の胸ひとつにある。

けれど今なお、信長のほんとの胸には、長政を殺したくない気もちがあった。——もとより長政の武勇も惜しんではいるが、より以上妹にたいする愛情の悩みであることはいうまでもない。

ひとは不思議に思った。

叡^{えいざん}山の焼討ちでは、魔王と呼ばれることも辞さなかつたあの殿が……と。

まだ朝霧がふかい。

大きな太陽が、山の肩へ、のツと昇っているが、小谷の盆地からは、四山の山^{やま}襷^{ひだ}も霧で見えなかつた。

浅井が城は

小さいな、小さい城や

ああ、よい茶の子

ささ、朝^{あさ}茶^{ちや}の子

そう遠くはない。どこか霧のなかでする声だった。それも、ひとりふたりのものでなく、多勢の合唱と手^{てび}拍^{ぱう}子^しである。踊っているのかとも察しられる。

「どこだろ」

「なんである？」

子どもは早い朝起き。——寝所からとび出すと、大廊下を駈けめぐり、声をめあてに、茶々も万寿も跣足で庭へとび降りた。

そして、城廓のはずれまで行つて、北のほうを、眺めていた。

「いたいた。あんな所で踊っている、歌っている。たくさんに」

万寿はうれしかった。

姉の茶々も、

「どこに、どこに」

と、眼をつぶらにする。

北の山の中腹である。雲の断れ目のように、ぽかと、そこだけ霧がはれて、陽のあたっている所がある。

ちようど、大仏の膝のような阜だった。

明らかに、敵である。一小隊ほどな信長方の兵が、朗らかに、秋の朝を、囃しているのだった。

「やあーい。聞えぬかと、どなっている。

そしてまた、一斉に。

浅井が城は

小さいな、小さい城や

ああ、よい茶の子

ささ、朝茶の子

すると――

茶々と万寿のふたりの上で、いきなり小銃の音が、パンパンパンとつづげざまに響いた。
やぐらはぎまの狭間はさまから彼方かなたの嘲弄者ちやうろうしやの群れへむかつて、つるべ撃ちを喰わせたのである。

「――怖こわッ」

茶々は、うつ伏して、耳をふさいだ。万寿はさすがに男の児である。仰向いて白壁の狭間たまたに這う弾けむりを見あげていた。

歌の声はやんだ。

敵の影も、霧にかくれた。

「……いなくなっちゃった。つまらない」

万寿はまだ見ていた。うしろの方で、乳母と母の声が出た。

お市の方は、さつきから見あたらない二児をここに見出して、

「……まあ！」

と、さも胆きもを冷やしたように絶叫をもらし、

「あぶないッ。なんでこのような所へ」

彼女は、茶々をかかえ、乳母は万寿をひっぱって、半ば叱りながら本丸のほうへ連れもどった。

「なにしている」

良人の長政は、一群れの老臣や部将と共に、無念そうな唇くちをかんで突っ立っていた。

「御城外の歌声に、和子わこたちが釣られて、あの遠くに身を曝さらし、おもしろげに見ておりましたので……」

「……子どもだのう」

と、長政は苦笑して、

「奥へつれて行け」

「……はい」

「いや、待て待て。ほかの子も抱いて、その辺りから、見物しておるがよい、寄手のやつ輩も、長陣に倦むまいとして、戯れておるものを、鉄砲で返答するも、ちと狭量じゃ。……和子たち、いまよいものを見せてやるぞ」

長政は、雑兵をあつめて、敵方へ歌い返せといいつけた。籠城の退屈に、やや倦みかけていた城兵は、よろこび勇んで、

浅井が城を

茶の子と仰つしやる

赤飯茶の子

強茶の子

と、大声あげて歌い出した。

城兵が歌い囃すと、

「やりおるぞ。敵も」

と、寄手の兵は、また以前の山にすがたを現わして、

浅井が殿は

熟れ栗の実

棘とげのよろいに

可愛かわいのももの抱え

揺ゆるるも恐こわや

ああ、落ちかぬる

憂い身かな、憂き城かな

もとより即興——口まかせである。敵の一踊りがしずまると、城内方も負けずにやり返した。

信長どのは

橋の下の泥どろがめ亀

ひよいと出て、ひっ込み

ひよいと出て、ひっ込み

首うまわざの巧うまさよ

こんど出たら取ろ

茶せん首

どつと笑う。

彼方の山まで訝する。

それを機ツかけに、その日の小銃戦はまた始まった。いま歌っていた兵、いま踊っていた兵が朱にそまって、ばたばたと傷つき始める。

こういう毎日の生活のなかに、お市の方は、四人の子をかかえ、彼女は彼女の戦いを心のうちで血みどろにしていた。

谷間をわたる鶯の声に、秋は日ましにふかくなる。城草の露もしとど冷たい或る朝だった。

「——殿ツ、一大事ですぞ」

いつにない藤掛三河守のあわただしい声が出た。

子や妻の紙帳しちように近く、夜はやすんだが、長政は、具足も解いたことはない。

「三河。何事かツ」

すぐ寢所を出た彼の声も、あやしく息が弾んでいた。

朝討あさうち！ そう直感したのである。だが、三河守の告げた異変は、もっと重大であった。

「二の曲輪——あの京極曲輪きよごくくるわが、一夜のうちに、信長方の軍に占められております」

「な、なに？」

莫迦ばかな！——と、いわぬばかりである。

「お疑おいはまず措おかれて、櫓やぐらの上より篤とくと、殿にも」

「そ、そんなはずは、ありえない」

望楼ぼうろうをのぞんで、彼は駈かけのぼった。

真まつ暗くらな階段で、いくたびか躓つまずいたほどである。

櫓に立った。

京極曲輪とは、かなり距離があるが、ここに立てば、眼の下といてもいい。

見ると。彼方かなたの城頭へんべんには翩へん々と、いく条かの旗幟きしが流れている。

その一旒すしでも、浅井家の臣、大野木土佐や三田村右衛門や浅井玄蕃げんぱのものではなかった。

しかも。

燦さんとして、朝空あそらに誇うまじっている馬印うまじるしの一つは、明らかに、敵方の将校、木下藤吉郎の

陣地を証明しているものだった。

「裏切ったか。老臣どもは浅井家を去ったか。名を惜しまぬは去れ。勝手だツ。こうなつては、われをわれの思うままに生かすしかない。よしツ、見せてやろう。信長に。いや天あめ

が下の武門すべてに。……浅井長政の生き方を」
彼はもう微笑すらその面に持つことができた。

説客

——黙然と、長政は、三重櫓の暗い階段を下へ降りて行つた。

あとに続いてゆく臣たちの眼にも、なにやら、ふかい地の底へでも——こうして供に従つてゆくようなこちがした。

「な、なんたることだッ」

真つ暗な階段の途中で、ひとりの部将が、泣いているような声でさげんだ。

「——大野木土佐、浅井玄蕃、三田村右衛門など、三人もそろつて、お味方を裏切るとは」
すると、呻くように、また他の一名が、

「身、老職にありながら。……しかも重要な京極曲輪を、預けられておるご信望をも、むざと、ふみにじつて」

と、悲涙して咽ぶと、

「に、人非人めツ」

ひとしく、唇をかみ破つて、三老の不忠を罵つた。

長政が、うしろを向いて、

「やめい。……愚痴は」

と、いったとき、一同は階段を降りきつて、やや明るい、いちばん下の広い板敷の間に立っていた。

巨大な檻か、牢獄のような頑丈さである。ここにはたくさんな負傷者が、莖を敷いて呻いていた。

長政が通ると、仰臥していたさむらいも、起きあがって、両手をつかえた。

「犬死にはさせんぞ。——あだには死なせんぞ」

長政は、右へも左へも、そういつて通つた。

外へ出ると、かれの臉にも、泣いたららしい痕が見えた。

けれど、彼はかたく、部将たちへむかつて、愚痴を禁じた。

「敵に降るも、長政に殉じるも、去就は各が選むところで、いたずらに罵るべきでない。——この戦い、信長にも名分あり、長政にも名分がある。彼は、天下の改革をここ

ろざし、長政は、武門の名と義に拠つて戦うのだ。そちたちも、信長に降るがよしと思ふならば信長に奔れよ。敢えて、止めはせぬぞ」

そういつて、諸所の防備を見まわるため歩き出したが、その足数が、百歩とならぬうちに、またも彼にとつて、京極曲輪を失つた以上の大変が報じられて来た。

「殿ツ……と、殿ツ。……無、無念ですツ」

と、彼方から朱にまみれた姿で駈け転んで来た一部将の口からであつた。

「おうツ、休太郎ではないか。いかがいたした」

長政は、何か、不吉な予感に胸をうたれた。湧井休太郎は、三の曲輪の侍ではなく、父久政の侍臣だからである。

「たつた今、大殿には、御自害なされました。……こ、これまで、敵のあいだを斬りぬけて、お遺物かたみを持ち参りました」

と、休太郎は、べたと、ひざまずいた。そして苦しげな息の下から、久政の髻もとどりと、それを包んだ小袖とを取り出して、長政の手にささげた。

「やツ？ ……では、二の曲輪のみでなく、父上のおる一の曲輪もはや落城したか」

「まだ夜も明けぬうちでした。京極曲輪の間道から一隊の兵が城門の外まで参つて、大野

木土佐守の旗さし物を打ち振って、土佐守でござるが、火急に大殿へお目にかかりたい儀があつて罷りこした、門をひらかれよとの声に、味方とばかり信じて何気なく城門をあけますと、とたんに、多勢の兵が、ふいを衝いて、奥の丸まで斬り込んでまいりました」

「そ、それは……敵であつたのか」

「木下藤吉郎の手勢が大部分でしたが、道案内の者や、旗を振った者は、まぎれもなく裏切者の大野木が家来どもでした」

「ううム。そして、父上には」

「最期まで、よくお働きあそばして、自身、奥の丸に火を放け、御自害なさいましたが……そこへ躍りこんで来た木下勢が、忽ち、火を消し止めて、あくまで静かに、城中を掃蕩し尽しました」

「そのためか。……火の手も煙も見えなんだが」

「もし、一の曲輪に、火の手が揚つたら、三の曲輪の人数が、直ちに城門をひらいて加勢に出よう。——加勢はやむを得ないとしても、大殿の御最期と共に、あなた様以下、奥方さま、和子さま達までも、火をはなつて、炎のなかに御自害なさりはせぬか——それを敵は、いたく怖れての作戦かと考えられまする」

休太郎の氣息は、そこまでが、いっぱいであった。突然、大地に爪を立ててもう一声、
「お、おわかれ申しあげます」

と、いったのが終りで、がくと、手をついたまま地面へ顔をぶつけた。斬り死にしての戦死よりも多くの苦闘に剋^かつて死んだ。

「……一魂、また逝^ゆく、ああ壮烈な散る華^{はな}ではある」

誰か、長政のうしろで、つぶやく人があつた。そう嘆じて、また低く、

「——なむあみだぶつ」

数珠^{ずず}の音がした。

ふりむくと、木ノ本の雄山和尚^{ゆうざんおしょう}が、そこに佇^{たたず}んでいた。彼の浄信寺^{じょうしんじ}というのが先頃の兵燹^{へいせん}に会つたため、小谷の城中へ来て共に籠城していた。

「……大殿も今朝がたはや御最期あらせられたそうな、お察しもうしあげる」
雄山がいうと、

「和尚。おたのみがあるが」

長政はわりあい乱れずに云つた。ことば静かなほど、悲調はおおいようもないが、

「——次は長政の番でござる。ついては、生前のうちに、家中一統をあつめ、形ばかりで

も、葬儀を営んでおきたく思う。——この小谷の奥おくまが曲り谷に、かねて和尚からいただいたおいた戒かいみょう名なを刻んだ石碑が建つておる。あれを、ご苦労ながら、城中へお運びくださるまいか。僧のあなたが通るなら、敵もだまつて通すでござろう」

「承知いたしました」

和尚は、すぐ去つた。それとほとんど入れちがいに、

「ふわかわちのかみみつはる不破河内守光治」というものが、御城門の下まで参りましたが」

と、部将のひとりが、駈けて来て告げた。

「不破河内とは、何者だ」

「織田殿の直臣にござります」

「敵かッ」

と、唾つばするのように、

「追い返せッ。——信長の家臣などに、長政、用はもたぬ。帰らねば、城門のうえから、岩石でも、喰らわせてやれ」

長政の意を体して、城門のさむらいは、すぐ駈けもどつて行つたが、また、他の部将が来ては、

「なんといつても、敵方の使者は、城門の下に立って、帰りません。——戦は戦、交渉は交渉、一国を代表して来た使者にたいし、礼を執らぬ法やある——などと抗議を申し立ておるのみで」

長政は、聴く耳も持たぬと、いわぬばかりに、顔を振って、

「脅しつけて、追い払えというに、相手の抗議などを、何で取次ぐかと、罵つた。」

そこへまた、他の一将が来て、

「いや、ちよつとでも、会っておやりなされるが、戦陣の慣いかと思います。浅井長政は逆上して、敵国の使者を引見する余裕すら失った——などと取沙汰されては、必然、御不利かとぞんじられまするし」

彼の一徹を、諫めるような口吻であった。

「では、通せ。とにかく会ってだけやろう」

「はッ。では何処へ」

「あれへ誘え」

長政は、武者溜りの大床をさして、自分の身も、大股に運んで行った。

取次いだ部将やさむらい達は、反対なほうへ駈けて行つた。

そして、織田家の使者に、城門をひらいた。

その門から、平和のはいつて来ることを望んだのは、浅井家の城兵中、半分以上はあつた。

かれらとて決して、長政に心服してはいないではなかったが、長政の唱える義と、戦の意義は、まったく小乗的しょうじょうてきで、越前との関係とか、信長への単なる反感とか、それに絡からまる意地といったようなものが中心であるのに対して——とにかく信長の唱える志とその覇業はぎようとは、くらべものにならないほど、大きなものであることが分つていた。いわゆる大乘に立つか、小乗に拠よるか、を彼らも考えさせられたのである。

それも。

この小谷の城が、牢固ろうことして、不拔の強味を持つている今までならば格別だが、すでに一の曲輪くるわも、中の曲輪も墜おちて、孤塁落莫こるいらくぼくの一城にたて籠つて——どう勝目があるうか。死にがいがあるか。考えずにいられなかつた。

だから織田家の使者にたいして、彼らのあいだには、どことなく待つ者を迎えたような空気を示した。——通された使者の不破河内守ふわかわちのかみは、城内の大床の間で、長政と対した。

はり繞めぐらした陣幕のすそに沿って、露骨に敵意をあらわした眼や、頬骨や、ざんばら髪や、負傷した手を首に吊っている者やらが——恐い顔をそろえて、みな河内守を凝視していた。

河内守は、そのなかで、甚だ温厚な物ごしで告げた。これが武将かと疑われるほど、彼は、物やわらかな人からであった。

「主人信長の御意ごいを、そのままにお伝えいたします。——おそらく長政どのには、御無念でおわそうと、まず仰せられてござる」

「戦場だ、お見舞の世辞などに及び申さん。要用だけを聞きおこう」

「朝倉家に対する御義心のほど、さすがなお心根と、主君信長にも御敬服を払っておいでなされますが、それもこれも、朝倉家が存立しておればのこと。——今日、越前もすでに亡び、その越前と浅からぬ足利公方殿あしかがくぼうにも、京を去って遠く退去し、恩怨おんえんすべて過去となった今、何を好んで、織田浅井の御両家が、戦わねばならぬ理由があるか。……まして、あなた様からは義兄。信長様からは愛いとしい、妹婿たるあいだにありながら」

「せつかくだが、それは毎度のはなし。和議なれば、いくら手を換え品を代えても、断じて、おことわりする。無駄口をいわるるな」

「……でも、失礼ながら、もう御開城のほかはありますまい。これまでにお戦いあれば——武門の面目も立派におたてなされたというもの。いさぎよく、城地をお渡しあつて、あとのお栄えを講じられてはいかがですか。——そうなされば、信長様にも、決して粗末にはできぬ、大和やまと一國をあて行おこなうであろうとまで、心からお案じなされております」

長政は冷笑をもらした。

説せつきやく客のことが終るのを待つて、

「さような巧言にのる長政ではないと、織田殿へ伝えてくれい。この城を開けわたすぶんには疎略にいたすまいと。——当然じや。弾だんじ正しょう忠ちゆうどの（信長のこと）が案じておらるるの、この長政が身ではなく、肉親の妹可愛さにある」

「いや、それはおひがみです」

「いわばいえ。何とでも」

睡つぶするようにな——

「が、長政は、妻の縁につながつて、一命を助かろうなどは、みじんも考えておらぬ由を、立ち帰つてよく申したえよ。……それとだ。妻のお市も、いまは信長の妹のお市ではないことを、弾正忠どのへ、得とくしん心まいるよう、くれぐれはなして上げるがよい」

「では、どうありまして、この城と共に、御運命を決するおつもりでございますか」
「わし以上に……妻のお市も、そう覚悟しておる」

「……ぜひもございませぬ」

説客の不破河内守は、もうあとのことばもつけず、これまでと、帰ってしまった。

そのあとの城中には、絶望的な——というよりも一種べつな空虚が、陰気にみなきつていた。

和議の使者に、平和を期待した城将や兵の一部が、

(やぶれたか……)

と、気落ちをあらわしたのと、それまでは、死を決していたものにも、ふと、生きのびられはしまいかという気がさしたため、にわかに、前のような結束と決死にもどれない心理になったからであった。

城中が陰気になったのは、もうひとつ理由がある。それは戦時中だが、長政の父久政のかり仮の葬儀が営まれ、次の日にいたるまで、本丸の奥のほうで、どきよう読経の聲がもれていたからである。

お市の方以下、四人の子たちもその日からみな白絹の衣服をまとい、帯も、髪ひもの紐まで

も、黒い喪色もしよくを用いていた。

そのすがたは、もう生きながらこの世のものでないように、余りに浄きよらかで、当然、城を枕にと、覚悟している侍臣たちの眼にも、傷いたましく、冷たすぎて見えた。

そこへまた、このあいだ城外へ出て行った浄信寺じょうしんじの雄山ゆうざんが、曲まがり谷だにの奥から、わざわざ人夫せきとらに石塔せきとうを負わせて、帰つて来た。

石塔には、長政の戒名——いわゆる生前の戒名が刻んである。

徳勝寺殿とくしょうじでんでん天英宗清大居士てんえいそうせいだいこじ

それを——

明ければ八月二十七日という前の夜、城中の大広間にすえて、香炉しきり、櫛しきみの花など供え、生前の葬式とというものを執り行つた。

「当城の御城主、浅井長政どのには、武門の名を惜しんで、あつぱれ、華はなとちるごとき、御最期をとげられた。——よつて、累代るいだい恩顧おんこの諸士には、つつしんでこの世のお別れを告げられるがよい」

と、雄山が、導師どうしとして、将士一同へそういった。

長政は、石塔のうしろに、ほんとにもう死せる人のように、坐っていた。

諸侍は、はじめのうち、腑ふに落ちない顔をしていた。

(何もこんなことをしないでも)

と、多少、変な空気が騒さわめいていた。

けれど、お市の方や、まだ幼い子たちが、次々に焼香して、一族のものどもが、順々にそれにならってゆくうち——誰からともなく、すすり泣きの声ながれていた。水を打つたように、広間いっぱいの甲かつちゆう 冑ゆうの男が、みな首をたれ、瞼まぶたを抑えて、面おもてをあげているものはひとりもなかった。

式が終ると、

「いぎ、夜の明けぬうち、お石碑せきひを沈めに行け」

と、雄山和尚を先に立てて数名の侍が、ふたたびそれを負って、城外へ出て行つた。こんどは麓ふもとのほうへ降りて、湖岸から小舟をこぎ出し、竹生島ちくぶしまから八町ほど東のあたりで、ざんぶと湖底へ投げこんで帰つた。

「生前の葬式もすんだ。かくと見ては、城中の将兵も、いまはわしの決意をさとり、みな討死を覚悟したろう。……来れ、最期の日！ いつなりと」

長政は、自分へ迫る死へたいして、敢然かんぜん、云い払っていた。

彼もさすがに凡将ではない。

和議に望みをつないでいた一部の士心の弛緩しかんを見のがしていなかった。

彼のやった生き葬式は、弛ゆるみかけた城中の空気には、果たして、効果があつた。

「すでに、殿御自身、あれほどまで、お討死と御決意を披露ひろうなされたからには」

と、みな討死のほかはない運命を、各も覚悟した。

「——これまでだ」

「死ぬのだ」

そこに一致した。

悲壮である、長政の決意はそのまま家臣に映じ、長政の施ほどこした士心振起ししんしんきの策は、たしかに奏効そうこうした。

けれど、彼は凡将ではなかったが、傑けつ出しゅつした将器でもなかった。なぜならば長政は、

それほどな将士に、死を歓よろこばせることを知らなかった。

兵法キョクノ極キョクハ、兵ヲシテ、歓ヨロコンデ死ナシムルニアリ

孫子のいつている用兵の極致にまで到っていない恨みがある。

彼の将士も、譜代ふだい足輕のべつを問わず、死ぬことはもう忌いとわなかつたにちがいない。け

れど、大きな死にがいを持ちたかつたことは疑いもないことであろう。

大きな死にがい。

歎んで死に得る戦い。

死のうとするさむらい達の望みはいまそれしか持ち得ない。またそれは人間の希望の最大なもので最後のものだ。どんなに熱望することであろうと思いやられる。だから古来の名将は、かならずその渴望かつぼうをむなしくしない。いや、戦うまえに、その意義と正義を旗のうえに持たなければ、戦わないのが兵法である。

その点、長政の家臣は、やや張合いが小さかつたろう。それもただく大将の意志でせひもないという、観念で臨むしかない最後となつた。

——寄手の総攻撃。

いまは、待ちかまえていた。するとその日も、寄手からは小銃ひとつ射って来ない。ともすれば、晩秋の山の美しさや雲のゆく空の碧あおさが、死の覚悟をにぶらせる。

「……来たッ」

午ひるごろである。城門の兵がどなつた。

附近の狭間はざまだの石垣のうえに見える鉄砲のかたまりが、すぐひしめいて、標的をさがし

た。

ところが、来たという敵は、たった一人だった。それも至つて暢気のんきな漫歩まんとほを彼方かなたからぶらぶら運んで来るのである。——使者ならば、尠あせなくも従者も連れ、騎馬きばぐらいな儀容は装つて来ようと、疑わしげに城兵たちは、彼の近づくのを見まもっていたが、そのうちに、

「やはり敵將だ。使者とも見えんし、不敵なやつ。一発、ぶつ放せ」

と、部將のひとりが、鉄砲の者へいった。

脅おそしに一発——というつもりで命じたのであったが、三、四人が一しよに、パン、パンと射つた。

すると、びつくりしたのか、彼方の男は立ちどまった。そして、金地きんじに日の丸の軍扇ぐんせんをひらいて、頭のうえに振りかざしながら、

「待て待て。雑兵ども。木下藤吉郎を鉄砲で射つやつがあるか。城主長政どのに、よく訊たずねてからにいたせ。それがしを射つたところで、浅井方の勝かち軍いくさになるわけでもあるまい。百年、悔いをあとにのこすな」

大声でいった。——いやいつているまに、駈け出して彼はもう城門のすぐ下まで来てい

た。

「……おうツ、なるほど、織田家の木下藤吉郎だ。なんで来たのか？」

のぞき下ろした浅井方の将は、彼の目的を疑って、彼ひとりへの殺意などは忘れていた。

藤吉郎は、城門を仰いで、

「奥の丸へ、お取次ねがいたい。どなたでもよい、御一族へお取次ねがいたい」

と、ことばを重ねて呶鳴った。

「……………」

どうしたものか？

評議しているらしい声かがやがや聞える。やがてそれが嘲笑を交ませてくると、城門のう
えに、浅井方の一将が顔を出して、

「無用無用。何で来たか知らぬが取次はできぬ。おそらくはまた信長どのの使いで、説客
に見えたのであろう。度々の徒勞とらう、むだなことだ、立ち帰れツ」

と、いった。

藤吉郎は、声を励まして、

「だまれツ、家臣の分際ぶんざいをもつて、主人の意向もうかがわずに主人の客を追いかえず法

やある。すでに落城したも同様なこの城を落すために、わざわざ手間暇かけて、説客に來たり詭謀をかまえる莫迦はない」

と、大言をはらい、

「それがしが参つたのは、信長様の代参として、長政どのお位牌へ焼香に來たのでござる。うけたまわれれば長政どには、はやお覚悟あつて、生きながら御自身の葬儀まで執り行い、さきごろその碑を、琵琶湖へしずめて水葬式をすまされたよし。——生前のよしみ、一片の御焼香ぐらいは、お互いにゆるさるべきであらう。……それとも、もはやそういう礼儀も情誼も交わしている余裕はないのでござるか。長政どの以下、各の覚悟とやらは、附け焼刃のいつわりか。虚勢かつ。臆病ものの強がりか」

恥じたのか、城門のうえの顔はいつのまにか引っこんでいる。そしてややしばし、返辭もして來なかつたが、やがて、城門の一方を少しひらいて、

「御老職の藤掛三河守どのでよろしければ、寸時、お眼にかかつてみようと思せられるが、それでよろしくば」

と、中へ促し、なおつけ加えて、

「御主君長政様には断じてお眼どおりかないませぬぞ」

と、念を押した。

藤吉郎は、うなずいて、

「もとよりのこと。長政どのにはすでに亡きお方とこの方も心得ておれば、強しいてとは申さん」

云いながら、左右も見ずにはいつて来た。こうも平気で敵のなかへ来られるものかと、浅井家の将士は、自分たちの努どめている恫喝どつきの顔つきや槍ぶすまに、張りあい抜けを感じ合っていた。

案内する将について、藤吉郎は、一の門から中門までのかなり長い坂道を、至極、無關心にのぼって行く。

大玄関まで来ると、長政の一族で、また老職の任にある藤掛三河守が、迎えに立っていた。

「やあ、しばらくでした」

平常のあいさつに異ことならない気がするさである。

相識そのあいだがらなので、三河守も、にこやかに、

「まことに、お久しいことでごさる。こんなことになって、かかるいでたちで、お眼にか

かろうとは、夢のようでござる」

と、会釈をかえした。さすがに城門にいる将士の血ばしつたまなじり眦とちがって、この老将の面には、おもてそうさし迫つたものも見えなかつた。

「三河どの。あなたとお眼にかからないことは、お市の方さまが、御当家へお輿こし入れになられた時からですな。ずいぶん久しいものだ」

「さよう。あれ以来かもしれぬ。……あの折は、嫁君のお輿をお迎えのため、それがしが奉行して、ぎふ岐阜まで参りましたから」

「……あの日のめでたさや、上下のよろこびにひきかえて、きようの御両家は」

「宿命とやらいうものでござろう。しかし、いにしへの治乱ちらん興亡こうぼうのあとをみれば、これも武門としては、めずらしいことでもありません。……まあ、こちらへおいで下さい。ゆるはおもてなしもできません、茶など一ぶくあげましょう」

三河守は、さきに立つて、彼を庭園の茶室のほうへみちびいた。——その白髪こしの将のうしろ姿には、さすがにもう生死をちやうだつ超脱ちやうだつしているなど、うなずけるだけの落着きが見えた。

珠たま

一棟むねの数寄屋すきやがある。

木の間の路地まを導かれて、その一室にすわると、ここにはまったくべつな天地がある。清楚せいそな自然と、幽寂ゆうじやくな茶室の規矩きくにかこまれて、主客共に、血なまぐさいたましいから、しばし洗われていた。

折ふし秋の末。

そこらの木々の葉は、数寄屋のうちまで舞ってくるが、炉ろのあたりにも、床ゆかにも、塵ちりひとつなかつた。

「織田どのの御家中でも、近ごろはみな、茶に御熱心と伺っておるが……」

などと和やかに雑談しながら、藤掛三河守は、釜に対して、柄杓ひしやくを把とっていた。

藤吉郎は、彼の作法を見て、あわてて断ことわっていた。

「主君信長はじめ、みなお嗜たしなみは深いが、それがしのみは、生来の無骨者、何も弁わきまえません。……ただ飲むは好きというだけのことです」

「結構じゃ」

三河守は、茶わんを置き茶せんをそそぎ、女性のような細心な点前てまえを静かにつづけている。もとよりいかめしい武装のままである。

が、その鎧具足よろいぐそくにかためている手や体が、すこしも窮屈きうくつそうに見えなかった。むしろさびた釜と茶碗としかないこの室にあっては、この老将の装束しょうぞくがひとつの華麗な道具にすら見える。

(よい者に会った……)

と、藤吉郎は心のうちで、茶よりも、それを歓よろこんでいた。

——どうしたら城中のお市の方を助け出せるか。

この信長の悩みにたいして、彼も悩みを共にした。ここまでの攻略作戦には、もっぱら彼の智謀が用いられて来ただけに、その問題にも責任を感じていた。

いつでも陥おとそうと思う日に陥し得られるこの城だが、目的の珠玉しゆぎよくを、焼けあとの灰のなかに掻き探すようなへたをしてはならない。

しかも城主長政は、もう内外に決死を宣言しているし、夫人も良人おつとじゆんに殉じる覚悟でいるという。

四人の子まであるその夫人だけを、つつがなく奪取して、戦の成果もあげようというこ

とは、信長がむりな望みというほかはないのであるが——藤吉郎はその任務をいまは一身に負ってこれへ来ているのだった。

「……お使者、不点前ふてまえでござるがどうぞ、お寛ぎくつろあつて」

三河守は、炉のまえから、茶わんをさし出した。

武者坐りのまま、藤吉郎は無造作にひきよせて、がぶがぶと、三口ほどに飲みほし、「ああ、うまい。……きょうほど茶をうまいと思つたことはござらん。お世辞でなく」

「如何ですか。もう一ぷく」

「いや、渴かつは医いえました。口中の渴は。……しかし心中の渴はどうしたら医いえましような。三河どの、あなたは話せそうだ。ひとつ、それがしの相談あいてになつてはくれまいか」

「この方は浅井家の臣、其許そのもとは織田方の使者。明らかな立場のうえで承ろう」

「長政どのに会わせてもらいたい。いかがであろう」

「その儀は、城門でお断りいたしてある筈。其許そのもともまた、長政どのに会いに参つたのではないと仰せあつたゆえ、お通し申したのじや。ここへ来ておことばを違たがえるなど、使者として醜みにくしい弄策ろうさく。かまえてお会わせいたすことはできぬ」

「いや、生ける長政どのに会おうとはいわん。長政どのの靈に、信長の代参として、一片

の礼拝を遂げもうしたい」

「詭弁きへんはやめられい。たとえお取次いたしたところで、長政様が会おうと仰しやる筈はない。この際、一ぱいの茶は、この方として最高な武門の礼を執とつたつもりじゃ。恥を知るなら其そこもと許きれいにここからお帰りなさい」

うごくまい。断じて。

藤吉郎は肚はらの底でそう独り誓っていた。

目的を達するまでは！と。

「……………」

で、彼は根気よく黙っていた。弁舌の雄も、説く相手による。——こう練ねれている老将に、ヘタな饒じょうぜつ舌は、策を得たものでない。

「……………さ。お立ちください。お帰りの御案内いたそう」

三河守は、促うながした。

藤吉郎は、むツつりと、あらぬほうへ眼をやつて、うもすも答えずにいるあいだ、自分で点たてた一碗の茶を、鷹揚おうようにひとり飲みほして、それらの道具なども、水屋みずやに退さげた後である。

「いや、勝手ながら、もう少々、ここへ置いておいて下さい」と、藤吉郎は初めて答えた。

うごかない。

いや、てこでも、うごくまい——と、する顔いろである。

すこし蔑むさげすように、藤掛三河守はいった。

「いつまでおいであつても、むだでござろうに」

「かならずしも、むだではございません」

「この方のいま申したことに二言はない。ここにいて、どうなさるか」

「釜の沸たぎる音を聴いております」

「釜の……。はははは、茶もわきまえぬといわれたお身が」

「いやいや、まったく茶道さどうもなにも弁わきまえはいたさんが……。どうにも、これは快こころよい音でござ

る。久しい長陣ながじんに、雄たけびや、馬のいななきのみ聞いていたせいか、甚だ、快こころよいかぎり

でござる。……。暫時ざんじ、ここに独坐とくをおゆるしく下さい。そのうちに、篤とくと考かんがえております

れば」

「どう御思案ごしあんあろうと、長政様へお会いさせ申すことは勿論、ここより先、御本丸ごほんまるのほう

へは、一步もお通しいたさぬぞ」

——それには答えず、

「……む、ウむ。どうもよい音のするものだ。この釜は」

と、藤吉郎は、炬べりへすこし膝をよせて、しきりと感服しながら、とつこうつ眺めていた。

蘆屋あしやであろうか、古天妙こてんみょうの作であろうか、そんなことは、彼の知識のほかである。彼がふと、おもしろく見たのは、古びた鉄肌かなはだに浮いている猿の地紋であった。人間か猿か、甚だあいまいな一個の小動物が、木の枝に四肢ししをささえて、天地のあいだに、傍若無ぼうじやくぶじ人んなその姿態と愛嬌を示しているのである。

——誰かに似ているぞ。

藤吉郎は、おのずからな微笑を禁じ得なかつた。松下嘉兵衛まつしたかへえのやしきを出て、食も宿もなく、山林を逍遙しょうようしていた時代の自分が——ふと思ひ出されてきた。

次の間にでもかくれて様子を窺うかがっているのか、もて余して、戸外そとへ出てしまったのか、三河守はもうそこになかつた。

「いや、おもしろい。おもしろいものだ」

釜と談合の恰好である。ひとりで首を振っていた。そうしながら飽くまでも、うごくま
いという算段を考えていた。

すると、どこかで、クツクツ笑うものがあつた。時には、嬉々ききと、べつな忍び笑いも洩
れる。

どっちの笑いかたも、明るくて無邪気だつた。藤吉郎の耳が聞きのがすはずはなかつた。
——じつと顔を数奇屋の囲いのほうへ向けた。

「……ほら。ほらネ。あんなに似てるだろ」

「ほんに、お猿のような」

「どこのお人だろ」

「きつと、日吉ひえのお使いさまでしょ」

ふたりの子どもの眼であつた。

計らざりき——藤吉郎が釜の地紋に友愛を感じていると、その藤吉郎の顔をのぞいて、
垣の外から興がつている幼い者たちがあつた。

「……おツ？」

怒つたのではない。藤吉郎は歡喜かんきに衝つかれた。

長政とお市の方とのあいだにありと聞く四人の和子。——そのうちの万寿と茶々にちがいないと直感したからである。

にこ……と、藤吉郎はそこから笑みを送った。
すると。

垣のすきから覗いていた万寿と茶々は、

「あら。笑つてるよ」

と、ささやいて、もう一倍、ひくい声で、

「……お猿さんが笑った」

と、ふたりのうちの、どつちかがいった。

藤吉郎は、それを小耳にはさむと、こんどは、

「……めッ」

と、にらむ真似をした。

これは、笑つて見せたよりも、効果があつた。

万寿と茶々は、このおじさんくみやすと易しとみて、垣のあいだから、ヒインと、馬がくちびるを剥くように、歯を出して見せた。

それでも、笑わずに、藤吉郎がにらまえているので、ふたりも睨みはじめた。睨めっこをしはじめたのである。

「やあい、笑ったぞ」

万寿も茶々もよろこんだ。藤吉郎は、あたまを搔いて、もつと、何かして遊ぼうという意味を、手真似てまねや顔つきで誘った。

「おもしろいおじさん……」

ふたりの子どもは、かれの手招きにつりこまれて、そつと柴折しおりを押してはいつて来た。

「なあに？ ……。なにをするの」

「おじさん、どこから来たの」

藤吉郎は、縁を下りて、武者わらじの緒おをむすんでいた。その彼をからかい半分に、万寿が手に持っていた芒すすきの穂ほで、彼の襟えりもとを擦くすくった。藤吉郎は、擦くすくったさを咏こらえて、両方の足の緒をむすんでしまった。

おそろしく敏感な子どもの神経は、彼が身を伸ばした途端の顔いろに何ものかを読み取ったとみえて、咄嗟とつさに、意味もなく、逃げ出そうとした。

「……あッ」

むしろ藤吉郎のほうが、不意を喰ったくらいである。

跳びかかるやいな、彼の片手は、万寿の襟がみをつかんだ。

なお、左の手で、茶々をつかみかけたが、茶々は、ありツたけな声を出して、

「——怖こわいッ」

泣きさけびながら走った。

捕まった万寿は、愕おどろきのあまり、声を出さなかつた。

藤吉郎のからだの下に、あお向けに倒されて、その人の顔を、大空といっしよに、逆しまに大地から見あげた時、初めて、

「きやッツ！……」

と、悲鳴を発した。

彼方かなたへ泣いてゆく茶々の声と、ここの絶叫を、誰よりもまつ先に聞いたのは、藤吉郎ひとり数を数寄屋にとり残して、路地の外へ出ていた藤掛三河守であつた。

——何事？　と思つたにちがいない。ここへ駈けつけて見てからさらに、

「や、やッ？」

仰ぎよつてん天してさけぶやいな、すぐに手は——ほとんど無意識に、

「おのれッ」

と、陣刀のつかをにぎっていた。

藤吉郎は、万寿のうえに、ふみ跨またがったまま、

「あぶない！」

と、却って、相手の注意をうながすような、制止の声をかけた。

すんでのこと。

いっせつ

一 颯の陣刀とともに、彼へぶつかろうとした三河守は、思わず足をすくめた。

藤吉郎の手もとを見たからであった。万寿の喉のどを一突きに刺して、その一命をとるに何の苦もない——彼の手もとと彼の眼にぎくとしたからである。

さすが沈勇な老将の顔も、鳥肌に変っていた。白い鬢びんぼう髪はそそけ立つばかりである。

「お、おのれ、幼い御嫡子ごちやくしを捕え奉って、な、なんとするぞ」

半ば、哭なくが如き声だった。三河守は、悔いと怒りにふるえながらつめ寄った。

三河守のつれていた郎党たちであろう、かくと知って、

「わッ、たッ、たいへん」

「みんな来ういッ」

「いで合え！ いで合え！」

声かぎり、絶叫し、手をふり、足を舞いして、急を告げた。

それと、また。

わんわん手放しで泣きながら逃げて行った茶々の告げ口からも、このことは、中門から奥の丸まで聞えて、

「すわ」

と、まつ黒な武者群が、いく組にもなつて、駈けつけて来た。

忽ちであつた。

万寿の喉のどに短刀を擬ぎしながら、あたりを睥へいげい睨いしている異様な敵人のまわりには——文字どおり 甲かつちゆう 冑ゆうの「鉄桶てつとう」ができて——それも藤吉郎の手もとと眼まなざしを恐れてか、甚だ遠巻きに——ただわいわい躁さわぐしか、なす術すべを知らなかつた。

「藤掛どの。三河どの」

藤吉郎は、そのなかの一つの顔へ呼びかけた。

「どうなされた、御返辞は。——甚だ暴ぼうな仕方でござるが、それがしとしてはかくするよりほか、主はすかしを辱めぬ方法が見出せないのでぜひもござらん。……はつきり、御返辞がなけ

れば、万寿どのを、刺しころしますぞ」

と、爛々らんらん、大きな眼をして、ずっと見まわしながら、ふたたび、

「藤掛どの、三河どの。あなたは何のために茶を嗜たしなんでおられるか。茶の真境は、ここにはあるまいか。ついただ今、あなたから学んだばかりだが、それがしはそう信じる……すでに、生きて還ろうとは思わぬこの方に、あたりの犇ひしめき合いは御無用である。はなしは茶室のつづき、おん身とそれがしのふたりで足ること。……お退ひかせなさい。そこらの武者どもを、みなお退かせなさいッ。そのうえで談合いたそう」

「……………」

「なお、御分別がつき難いか。さりとは遅いお悟りだ。それがしだけを殺して、御嫡子ごちやくしの一命を無事に救おうと召おとさることは、所詮しよせん、難事なんじでござろう。——それはちようど信長様が、この小谷城を陥おとして、お市の方様のお身だけは無難に助け出そうとなさっているのと同じでござる。……何とて何とて。万寿どのを無事におこうや。たとえ藤吉郎の身を鉄砲でお撃ちあろうと、せつなには、この刃が、御喉おんのどもとを貫いておるであらう」

さつきから舌をふるっているのは彼ひとりだった。しかも懸河けんがの弁べんである。舌ばかりでない、眼もよく働く。いや五体の端までが、その雄弁とともに、八方の敵へ

戦々と鋭敏な氣くばりを怠らないのであった。

「……………」

たれも手が出せなかつた。

わけて三河守は、自分の責めを重大を感じているし、彼の説くことにも、だいぶ耳を傾けて来た容子ようすだつた。一時の驚愕をとりもどして、茶室で見せた彼の落着きになりかけていた。

「一同の者」

ようやく、彼は身をゆるがした。手を遠くへ振つて、

「去れ、去れ。彼方へ退ひいておれ。——ここは三河守にまかせて。——三河守が一身にかえても、若君にお怪我けがはさせぬ。各ぶしよの部署にもどつておるがいい」

と、云つた。

そして、藤吉郎へ向つて、ことばを改めた。

「のぞみ通り、多勢おほぜいのものは退のけた。このうえは、万寿さまを、この方の手へおわたしなさい。左様な策はおたがいに避けて、信義と信義をもつておはなししよう」

「ならぬ！」

と、つよく頭かぶりを振つたが、藤吉郎は一転語氣をかえて、

「——それがしは今、こういえます。長政どのの掌中の珠たまを奪とったから。……しかし、信義と仰せあらば、何をか疑いましょう。若君はお返しする。しかし、長政どのへお返ししたい。長政どのの御夫妻にお眼通りの儀、かならず計らつてくれますか」

さきに退ひいた大勢の中に、長政も立ち交じていたのである。藤吉郎のことばを聞くと、子の愛ひに惹ひかれた彼は、自制を失つて、それへ駈ひけ寄つて来るなり罵のつた。

「長政はこれにおけるが、何も知らぬ幼おきなご児いのちの生命いのちを扼やくして、ものをいおうとは、卑劣ひれつないたし方。そちも織田家の一方の将、木下藤吉郎というほどの者ならば、さような奸かん策さくはみずからに恥はじたがいい。——ともあれ、万寿の身を、こなたへ渡したうえにて物を申せ」

「才。長政どの、おられましたか……」

藤吉郎は、あいての血相かかにも関かわらず、いんぎんに辞儀ほどこを施ほした。——といつても、依然、万寿のうえにまたがつて、それへ短剣の先をさし向けたままにである。

「木下殿。お離はなさい。かくの如く、殿御自身、おことばのある以上は、御不足もごござるまい。万寿さまの身を、それがしの手へ」

と、かたわらから藤掛三河守も声をふるわして云つた。

藤吉郎は、それを横耳に聞きながしたまま、浅井長政の方を見つめていた。長政の蒼白な血相と眸へじつと、正視を向けながら、やがて長嘆して云った。

「ああ。……あなたにもやはり肉親の情愛はあつたのか。……可憐なものにたいする不愼をご存じであつたのか。そうとは、藤吉郎、すこしも知らなかつたのでござる」

「渡さぬかつ、おのれ、その幼い者を、刺すつもりか」

「毛頭、さような意志はない。……だが、親御たるあなた様にも、なんらの情愛はおぼえぬと仰せあれば——」

「たわけたことを。親として、子を愛さぬものがあるうか」

「そうです、禽獸でも」

と、藤吉郎は、あいてのことはを裏書して、

「——さすれば、それがしの御主君信長が、お市さまを救い出したいばかりに、恋々、この小城ひとつを陥しかねているのも、愚かしい沙汰とは嗤えますまい。……また、お市さまの良人であらせられるあなた様はどうか。信長様の弱点を覚つて、強いて、母子数人の可憐しいものを、この城と運命を共にさせようとしておいでになるではないか。それはちようど、今こうして、それがしが、万寿どのを下に敷いて、御喉に匕首をつきつけな

がら、あなたへ談じつけているのと同じことだ。……藤吉郎の仕方を卑怯と仰せあるまえに、御自身の戦略を、卑劣でないか、残忍でないか、篤とく、お考えくださいませ」

云いながら藤吉郎は、万寿のうえから身を退けて、抱き起していた。——ほつと眉をひらいた長政の顔いろを見るなり彼はつと寄つて、その手へ、万寿をわたし、その足もとへ、両手をつかえた。

「心にもない先ほどからの狼藉ろうぜき、また非礼の罪、幾重にもおゆるしおき下されませ。——かような手段てだてをとりましたのも、何とかして、御主君の御みこころを慰め、ふたつには、武將の御最期として、すでに天晴あつぱれなお覚悟を示されながら、可惜あたら、浅井長政は血迷うて亡びたなどと、末までの汚名をおのこしあらぬようと……あなた様のおんためを考えていたしたことに相違ちがいませぬ。何とぞ、微衷びちゆうお酌しやくみとり賜たまわつて、お市の方かた様ならびにお子様のおん身は、この戦場の外へお放ちくださいますように……。あわれ、すぐれたる武將には、人いちばい強しとか聞く、大慈悲心にむかい申して、藤吉郎、かくのごとく、禱いのります。私心なく、ただ御不愆ごふびんなる女にょ性と、末長き御幼少おんかたの御方かたたちのために——良人たり父たるあなた様の大乗大愛を——かくのごとく禱いのります、お縫すがりいたしまする」

彼は、敵将長政へ訴える気もちをもたなかった。ひたぶるに、人のたましいへ向つて真情をのべた。彼が、胸に合掌して、長政のすがたを拜んだのも、決して、虚偽ではなかったのである。自然に双つの掌が合わさつたのであつた。

「……………」

黙然、長政は、眼をつむつて、聞いていた。

両腕を拱んで。

がっしりと、両の足を踏んで。

そのすがたは 甲 冑の仏像のようだつた。

藤吉郎は、合掌したまま、そのまえを立たなかつた。かれがこの城へはいつて来るとき公言したとおりに、生ける屍の長政の霊へ、一片の回向をしているかの如きすがたであつた。

一心祈念するものと、一心よく死のうとするものと、二者の心は、その寸間に触れ合つた。

敵とか、味方とか、そういう隔ても掻き消え、長政が信長にいだいていた感情やら反抗やら、あらゆる小さい妄念は、ふと、彼のすがたや心から古蒼した胡粉のように剥がれ

ていた。

「永勝ながかつ（三河守のこと）……」

「はッ」

「しばし木下殿を、どこぞに迎えて、もてなしておくがいい。——一刻ほどの別れを告げたい。……そのあいだな」

「お別れとは」

「夫人おくやら、子達と、この世のわかれをしたい。すでに、死を期して、生き葬式までした身ではあるが……生別は死別より辛いとか……。信長どのお使い、それはおゆるしあろうな」

「……えッ？」

愕がくと、顔をあげて、藤吉郎はそういう人の面おもてを見つめた。

「では、何と仰おしっしゃいます……。不肖ふしょう藤吉郎の言をおきき容れ下さいまして、お市の方さま、和子さま達のおん身を……」

「夫人おくも子たちも、みな死の腕に抱いて、城とともに、果て終らんとしたは……長政が小さい量りょうけん見であつた。すでに死んだ身と思ひ極めながら、なお浅ましい愛憎ぼんのうやら煩惱ぼんのう

だけはのこしていたのじや。……いま、そちにいわれて、思わず一笑をおぼえ、みずから恥じ入るものがある。——まだ若いお市、若い者たちの行く末、くれぐれもたのみ参らすぞ」

「……身にかえましても」

藤吉郎は、大地へ額ぬかすいた。

せつなに、かれの脳裡のうりには、信長のよろこぶ顔が見えていた。

小我な欲望は、とどきそうなことでも得手えてとどかないが、忠節からほとばしる真心なら、どんな至難と思われることでも貫けるものではある——ということを感じた。

「……では、後刻会おう」

長政はいい捨てる、本丸の奥のほうへ、大股にあゆみ去った。

つづいて三河守は、改めて、彼を信長の正使として、客殿のほうへ導こうとした。

藤吉郎は、起ち上がった。彼の眉にも、ほっとしたような明るさが見えた。そして、三河守へこういった。

「おそれいるが、暫時、城外の味方へ、合図をいたすまで、お待ちくださいさらぬか」

「……合図を」

三河守は怪しんだ。これは怪しむほうが無理でなかった。

が、藤吉郎は、当然のように、

「さればです。……御主君信長のおむねをうけてこれへ参る折、こうお約束をして来たのでござる。——もし藤吉郎が一命をすてても事のかなわぬ場合は、かならず城中より火気をあげて、破談はだんのあいずを仕つかまつれば、殿にもその上には、最後の御決心あつて、いちどに城へ攻めかかられますようにと。……また、首尾よく長政どのに会い得て事成るときは、携たずさえて参つた自分の小旗を、城中の高い樹に掲げます。いずれにせよ、それまでは兵をうごかさずに待機あそばすようにと——そう云い合せて参つたものですからな」

三河守はかれの周しゅうとう到とうな用意に驚いた面おももち持もちだった。いや、もっと驚いたのは、茶室の炉辺に、いつのまにか一個の狼煙のろしたま玉たまがおいてあつたことである。藤吉郎は、城外へのあいずをすまし、客殿へ通つてから、あとで笑いながら話した。

「もし、事成らずと見たときは、遮二無二、もういちど茶室までのがれて、あの狼煙のろしたま玉たまを炉のうちへ蹴こむつもりでした。いや、それこそ、とんだ茶の湯になるところでしたな。ははは」

さむらい集つど

ぽつねんと、藤吉郎はただひとり置かれていた。

五十畳もある広間である。

ここに通されて、藤掛三河守から、しばしお待ちを——といわれてからもう一刻半ときもたっている。

「……長いなあ」

退屈をおぼえざるを得ない。ひと気もない大広間の格天井ごうてんじょうには、もう夕暮のかけが濃こい。

ここの内は燈火ともしびも欲しい暗さなのに、外を見やると、城外の遠い山肌やまはだに、かッと、晩秋の落日あきのかげが、茜色あかねいろに匆はねかえっていた。

彼のまえにある高脚たかあしの菓子うっわの器うつわには、菓子はひとつもなくなって紙だけが残っていた。ようやく、人の躰音あしおとがした。

茶碗をさげに来た茶道衆の者である。

「籠城中のこととて、何もございませぬが、夜食をさしあげよとの、殿のおことばでござ

いますれば、ただ今、粗膳そぜんをさしあげまする」

茶道衆は、客をなぐさめて、二カ所ほどに、燭しょくをおいた。

「あいや、こういう中、夜食ごしんしゃくの御斟酌ごしんしゃくなどにはおよばん。それよりも、藤掛三河どのに顔を拝借はまかしたいと、憚りながら、これへお呼びください」

「かしこまりました」

茶道衆が立ち去るとすぐ、三河守が奥からすがたを見せた。ふた刻とたたない間に、十年も白髪を加えたように、その影には力がなく、臉まぶたには、泣いたような痕あとさえ見られた。

「いや、なんとも、失礼をいたした。ただおひとり、置きはなしたまま、つい長い時刻を……」

「なんの、平常のお礼儀などにはいささかもお気づかいに及ばぬが、長政どのには、如何いかがなされてあるか。また、奥方やお子たちのお別れは、はやおすましあられたか。……それが懸念けんねんでござる。日もはや暮れて参れば」

「ごもつともでござる。最前、殿にも潔いさぎよくあのように仰せられたものの、さて、御生別ごせいべつのことを、御妻子にお告げあるとなると……さすがにの……」

老将は、俯向うつむいて、指がしらで、臉まぶたを抑えた。

藤吉郎もふと眼を熱うして、その眼のやりばに困った。

「……わけても、奥方のお市の方様には、どうしても、良人のおそばは去らぬ、この城を出て、兄君信長の許へ帰るころはないと……綿々、御心情をおもらしあつて、いつお名残が尽きようとも見えませぬ」

「……むむ。さも……おざろうなあ」

「この三河へも、お訴えなさるのです。女子は嫁ぐときすでに、このお城を墓とさだめて嫁したものをと——。その母御のおなげきや父君のおことばを、幼心にも、もう茶々様などは、うすうす御理解あそばすので、共々、母君と泣き悲しまれて、なぜ、父君とわかれねばならぬのか、なぜ、父君は死ぬるか……藤、藤吉郎どの……おゆるしく下さい、尾籠のていをお眼にかけて」

三河守は、懐紙で面をつつんでしまった。そして咳き入りながら泣き伏した。

君臣の情、もつともなど、藤吉郎は思いやった。まして長政の心中やお市の方の悲嘆は察するにあまりがある。ひと一倍、涙もろい藤吉郎は、忽ち、顔じゆうを涙で汚らしくしてしまった。何度も涙をかんだり、天井をむいたりしていた。

——が、彼はここの一瞬に大事があることだけは忘れなかった。小さい愛情にひかれて

使命を誤つてはならないと戒めた。涙をはらつて、こう要求した。

「お待ち申すことは約束だが、際限なくこうしてはおられん。お名残の時刻を限っていた
だきたい。何刻まで——と」

「よろしゅうござる。……では、それがしの一存でござるが、こよい亥の刻（十時）まで
の御猶予をねがいたい。亥の刻ともなれば、かならず御母子の身は城外へお移し参らせま
する」

藤吉郎は否めなかつた。さりとして、そんな悠長な状況にないことはもちろんであつた。

城外にある味方の意志では、長政の返答次第で、きょうの日没前にも、小谷城の攻略はか
たづけてしまおうという予定をもち、全軍、満を引いて待機している際である。

その味方へは、昼のうち、城内から小旗をあげて、

（御救出のこと、成就せん）

と、あいずはしてあるが、それにしても、時間は経ちすぎる。

信長をはじめ諸将が、事の結果を、城外から知るよしもなく、さまざまに思いまどつて、
帷幕の異論や、行動に迷つて、紛々たる声にとりまかれて困惑している主君の顔が——
藤吉郎には、こうしている間も眼に見える気がするくらいだった。

「……いや、御無理もない。亥こくの刻まで、お待ち申そうほどに、ごゆるりと、お名残をつくされたがよい。それまでは、城内の御安穩は、藤吉郎がひきうけておりますれば」

彼の快い承諾になぐさめられて、藤掛三河守は、ふたたび奥へもどって行つた。その頃もう宵の色は深かつた。

小侍と茶道衆が、こもごも、彼のまえに来ては退さがつて行つた。戦場では見られない膳部や酒きょうが饗きょうされた。

「お身方もせわしかろう。独りのほうが勝手にござれば、銚ちょうし子、飯めしびつ櫃なども、ここへお退さがりください」

給仕の者を退けて、彼はひとりで酌くみはじめた。薄口な塗りの杯から全身に、秋の沁しみ入る気がした。

「……………」

酔い得ない酒だつた。寒々と、ほろ苦くばかりある。

「いやこの酒もうまく飲めねばならぬはずだ。こういう間も人間の修行になろう。死んでゆくもの、生きのこる者、その差はどれほどか。一瞬ともいえるだろう。……長い長い、幾千年の時の流れから大観すれば」

彼は、強いて、からからと打ち笑うような気を持つとうと努めた。

しかしふくむたびに、酒は心腸しんちように冷たく沁みる。

どこかで、しゆくしゆく、すすりなくのが、身にせまるような心地がする。

お市の方の泣き悲しむ様や、長政の面おもてや、幼児おきなごたちの無心なすがたや——どうも奥の様子が想像されてならなかった。

元来が、彼は多分に痴愚ちぐな男である。その痴愚が働きだすと、ひと事ながら、声をあげて泣きたい気もちがしてきた。

「……もし自分が、浅井長政の身であつたら」

などと、思い遣やつたりした。

ところが、そう考えてから、ひどく気がかりとして来た。つねに妻の寧子ねねにいい渡してある遺言を思い合わせたからである。

——もののふの常。

いつでもこの戦野で果てるかもわからない。

おれが、討死したら。

そなたは、他家へ嫁とつげ。そなたが三十まえであつたらば。

が。年三十をこえると、色香いろかはとぼしい。従つて良縁のさきも狭い。だが分別はできてくる。人間、人生の見さかさも備わつていよう。

だから年三十すぎていたら、そなたは、そなた自身の分別で、よい道をえらべ。嫁かせともいわぬ。嫁すなともいわぬ。

またもし。

そのあいだに、子をな生していたら、若くあろうと、年とつてからであろうと、子を主として将来の道をはかれ。女の綿めんめん々な愚痴にまような。何ごとも、母として考え、母として分別をとれよ。

「……そうだ、ひと身を思いやるほうが辛い。兵家に稀なことではない。お市の方は生きていてよいのだ。長政は当然、ここで死ぬこそ華はなであるう」

ひとり呟つぶやいて、また一杯、唇にふくんだ。その一杯から、ようやくふだんの味覚が感じられて来た。

いつか藤吉郎は眠つていた。といつても横になつてではない。坐つたまま——あたかも坐禅ざぜんでもくんでいるようにである。こくりこくり、時々あたまを低く垂れる。

彼は眠ることが、上手であつた。

人いちばい働くには、人いちばい有効で短い睡眠をとる必要がある。

逆境中、それを心がけていたのが、やがて戦陣生活でいよいよ鍛錬たんれんされ、いまでは眠ろうとすれば即座にどこでも眠れるし、その長短も、その場所も、随時随時に居眠る修養ができていた。

「……?」

そのうちに。

ばちと、彼の眼は、鼓つづみの音でさめてしまった。

膳部も酒も、いつのまにか退さげられてある。

燭しよくのみ白い。

「だいが寝たな……」

一洗いっせんされた頭のかろさと、疲れの去った肉体から、すぐそう分るのであった。

同時に、彼はなんとなく身をつつむ陽気を感じた。居眠るまえまでは、巨大な墓場のようだった城中の陰々滅いんいんめつめつ々々。な気が、一転して、鼓の音や、笑い声に変って、どこやらに和なやかな温かさすら漂ただよっている不思議を——急に発見したのであった。

「はてな」

狐につままれたような気がしないでもない。

しかし、はつきりと、眼がさめてからは、なおさら事実であった。鼓の音ばかりではない、謡うたうたう声もする。——もちろん遠くのほうで、微かにではあるが、どつと、笑うときなどは、はつきりと聞えて来た。

「奥の丸らしい」

彼は、人なつかしくなつて、大廊下へ出てみた。

ひろい中之庭をへだてた彼方かなたの大殿に、無数の明りと、たくさんな人影が見える。そよ風は、酒のおいを送つて来て、その風のまに、侍たちの手拍子が——

花は、くれない紅

梅は、におい

やなぎは、緑

ひとは、こころばえ

人のなかの人

さむらい、われら

花の中の花

さむらい、われら

と、同音に歌っていた。

人生はかくこそ送れ。楽しみなくして何の人生ぞや。よしあす知れぬまでも。いや、あす知れぬ身なればこそ。

藤吉郎の持論である。陰気ぎらいで陽気をこのむ彼は、何か、ほっとこの世の祝福を見出していた。そしてわれ知らず、歌の声につられて少しずつ陽気なほうへ歩いていたのである。

ばたばたと、忙しげに、侍たちが通る。多くは台所方の者らしい。大皿にもりあげた肴さかなだの、酒の瓶かめだのを、防塁の戦いみたいに懸命に運んでゆく。

いかにも陽気だ、どの顔にも、生命力が光っている。——いったいどうしたのだろうか？と疑われるくらいに。

「や。木下殿ではないか」

「才……三河殿で」

「広間にお見えなさらぬので、あちこち、探しておりました」

そういう藤掛三河守も、ぽっと酔を頬にもっている。ついさっきまでの憔悴しょうすいは姿に

もなかつた。

「どうしたわけでござる。奥の丸のあの賑わいは」

「いや、お約束いたした如く、亥いの刻こくまでが、家中一同にとつても、最後の最期。いづれは死ぬもの、死ぬなら華やかにと、殿長政をはじめ、将士すべて、すつぱりと気軽うなつて——さらば城内にある限りの酒さけ瓶がめをあけ、さむらい集つどいせばやと云い囃はやし、あのおりこの世の名残を酌み交わしているわけでござる」

「して——かんじんな御夫人おくがたと和子わこたちとのお別れは」

「それも、兼ねて……」

三河守の眼もとは、酔いながら、またふと涙にうるみかけた。

——さむらい集い。

どこの家中でも、平常によくある宴である。ふだんの階級や君臣の鉄則も、さむらい集いの座だけでは大まかにゆるされる。上下一体、暢のび々のびと、生命を樂しませて酔い歌う慣わしであつた。

「なるほど」

藤吉郎は大きくうなずいて、

「こよい限りの君臣の死別と、こよい限りの御妻子との生別と、ふたつを併せての、さむらい集いでござったか。——そこまでに、長政どのの御心境もきまった上は、いかがでござろう。それがしも、亥の刻まで、ぽつねんと、鼠に引かれそうに居るのは退屈。——ご宴の末席に加わりたいが——いけませんかな？」

「されば、そのため、お探ししていたところでござる。殿にも、そういう御意にござれば」
「なに長政どのも」

「御夫人やお子たちを、織田家に託せば、あとあと何かにつけて、お世話にもならねば相ならぬと……。わけて幼い和子さまたちの行く末をお思いなされて」

「お案じあるな！——と、そう直接申しあげたい。三河どの、ご案内たのむ」
「さ、こちらへ」

あとに従つて、藤吉郎は奥の大広間にはいった。

満座の眼が、すべて彼にそそがれた。

酒気、堂にみちている。

もとよりみな 甲 胃 のままだ。しかも、死を寸前に決している人たちである。ともに死ぬ仲間であればこそ、同じ覚悟をすえている戦友であればこそ、和気あいあい、散り際

の花のそよぐが如く、歡を尽しあつていたのであるが——咄嗟に、

「敵人！」

と、藤吉郎の顔にあつまつた眼というものは、たいがいな者ならば、身の竦んでしまうほど、鋭い血走つた眼ばかりであった。

「やあ、ごめんを——」

誰へともなく、藤吉郎は、こう大きくいつたものである。

そして、それを会釈に、つつつとすすんで、長政を中心に、浅井一族のぎつしりとかたまつている上座のまえへ出て平伏した。

「それがしにまで、お杯をくださるとの仰せ、ありがたく、まかり出できました。なお、御幼少なお嫡男、お三人の姫さまたちのお行く末については、藤吉郎、身にかえても、お護りいたす所存にございますれば……畏れながら、それについては、いささかのお心残りも遊ばさぬように」

ひと息に云つた。

もし、間を措いて、恟々などしていると、あたりの鋭い白眼が、たちまち酒気と敵愾心に駆られて、何をやり出すかも知れない——実に、間髪の危機といつてもいい、殺

気のなかに彼はいたからである。

「……たのむぞ、木下」

長政は、杯をとつて、じかに彼のほうへさし向けた。

「慥しかと、たのまれましたござります」

杯をうけて、それといっしよに彼はもう一度云つた。

「……御安心を」と。

「うむ」

長政は、満足そうだった。藤吉郎は、敢えて、お市の方と、信長の名には触れなかった。

その美しくて若い御方おんかたと、幼い姫たちは、かたわらに繞めぐらした金屏風きんびょうぶのうちに、可

憐あはれなかつたの花が、池の汀みぎわに群れ咲いているように、かたまり合っていた。

藤吉郎は、その銀燭ぎんしよくのまたたきをちらと、眼のすみから見た。

さすがに、正視に堪えなかつたのであろう。

つつしんで杯を長政の手へかえしてから、

「かかるあいだは、敵も味方もございますまい。さむらい集つどいの御酒をいただいたからに、

小舞をひとつ、お眼にかけとう存ずる。おゆるし下さいませしょうか」

「なに、舞うとか」

長政ばかりでない、人々みな眼をみはった。

胆斗たんとの如しごと——ということばもあるが、この男の、何と身なりも小さいくせにと、やや気をのまれたかたちであった。

雛鳥ひなどりを庇かばう母鳥のように、お市の方は、子たちをみな膝に抱えて、

「怖うない、怖がることはない。……母のそばにいやるからには」と、ささやいていた。

長政のゆるしを得た藤吉郎が、起つて、満座の中ほどへ、つつつと進み出し、小舞を舞おうとした時だった。

万寿と、茶々が、

「あれッ」

と、母の膝に、しがみついた。——昼の怖い小父おじさんの顔を、真正面まともに見たからである。藤吉郎は、足拍子をひとつ、とんと踏んだ。とたんに手からさツと日の丸扇子せんすが咲くと、

あまりの、徒然つれづれに

あまりの、つれづれに

門に瓢箪ひょうたん つるして

ながめ候えば

折ふし、そよ風の来て

あなたへ、ひよこり

こなたへ、ふらり

ひよこり、ふらり

ふらり、ひよこり

瓢箪ひょうたん つるして面白やの——

声も大きく、小舞歌をうたつて、他念なく舞い出した。

だが。その舞も終らぬうち。

ド、ド、ド、ドツと、城壁の一劃かくで、つるべ撃ちに銃砲が鳴った。パチ、パチと旺さかんに
応射おうしゃし出したのは近くの音である。城内と城外と、彼我一瞬に銃火を交わし始めたら
しい。

「——しまった！」

藤吉郎は、扇子を投げすてた。

亥の刻にはまだ至っていない。

けれど、それは城外の味方は知らないことである。

藤吉郎は、自分が二度目のあいずをしらない限りは、総攻撃にはかかるまいと、多分に安心していたのであるが——ついに味方の帷幕いばくにあつては、諸將しよしやうみなしびれをきらして、信長に、その悠長をなじり、また即座の行動を迫つて、とうとう総がかりに出てしまったものらしい。

しまった！

と、彼の投げた扇子せんすは、同時に、総立ちとなつた城將たちの足もとへ飛んで、それは、今まで忘れていた敵という觀念を、はつきり藤吉郎のすがたに思い起させた。

「すわつ、寄手よせてが」

「卑怯。虚を衝いたな」

満座の將士は、ふたつに分れた。一方はどつと外へ駆け出し、一部は藤吉郎のまわりを取りかこんで、忽ち、彼を無数の陣刀の下に斬りさいなんで、これから死に出る血まつりにしようとした。

「だれが命じたツ。斬るなツ——その者を殺してはならん」

咄嗟とつさ、長政のおどろくべき大喝だいかつを、彼の家臣たちは、むしろ意外として、

「寄手の総がかりは始まりましたぞ」

と、喰つてかかるような顔してみな叫んだ。

答えもせず、長政は、

「小川伝四郎ッ」

と、さむらい達の中へ呼んだ。

「はッ」

と、返辞を聞くとまた、

「中島左近ッ」

と、呼びたてた。

ふたりとも、平常、彼の嫡子ちやくしや姫たちに附いている傳役もりやくであつた。

ふたりが、前へ出て平伏すると、長政はいよいよ早口に、次には藤掛三河守を近く呼び、

「三名して、夫人おくと幼児おさなごたちの身をまもり、木下藤吉郎を案内として、疾とく、城外へ落

ちのびよ。すぐ行けッ」

と、いいつけた。

そして、屹ぎつと、藤吉郎のほうへ向つて、努めて、落着きを保ちながら、

「では。お頼み申すぞ」

と、いった。

その足もとへ、お市の方と、幼いものたちが、走りよつて、わツと泣きかけるのを振り払つて、すべての人々へ、

「おさらば」

云いすてるや否、長政はおおなぎなた大難刀を把とつて、吠ほえる闇夜の外へ、駈けだして行つた。

みらい未来の によしやう女性

城廓の一方に、大きな火の柱が、ぐわうツと立ちのぼつた。駈け向つて行つた長政は、思わず片手で顔を抑えた。何か、火焰かえんの翼をもつた木片が、熱風をつむじとともに、あやうく彼の顔をかすめ、うしろへ飛び去つたからである。

「殿ツ、殿ツ」

「お供つかまつりますツ」

小姓の浅井於菊、河瀬丹三、脇坂左介などがあとにつづいて来た。

「於菊、袈裟は持ったか」

「持ちました」

「よこせ」

長政はそれをとって、ひらと鎧の肩にかけた。

もうもうと濃い黒煙が地を這ってくる。もう眼前の事実だった。はや城内には、一番乗、二番乗、と名乗り続けて、われ先と争う敵の尖兵が入りこんでいるのである。

火は、本丸の館にも燃え移っていた。大廂の雨樋を奔る火の迅さといったららない。

長政は、そのあたりを潜つて来る一隊の鉄甲をみとめて、

「寄手だツ。いで」

と、ふいに横を襲った。

赤尾新兵衛、浅井石見、そのほかの側臣や一族も、彼と前後して、敵へ当った。

焰の下。黒煙の中。

甲冑は鳴った。槍と槍、刀と刀とは、噛みあい、喚きあつて、またたくまに死者と

傷負のみが、大地にのこる。

城兵の大半は、長政に従つてみな存分に戦い、それぞれ華やかな死をとげたという。あとの半数は、傷負ておいやら行方の知れぬものであつた。捕虜となつたものも、自分から降伏して出たのも、極めて少なかつたというのを見ても、小谷の城の最期は、越前の朝倉や、京都の公方家くぼうけのごときものではなかつた。——彼を妹智むちとして選んだ信長の最初の眼は、決して誤つてはいなかつたといえるのである。

——なお、その夜。

お市の方、また小さい子達を、戦火のなかから救出した藤吉郎と、藤掛三河守たちの苦心も、戦鬪以上であつた。

寄手が、もう一刻半いっときはんも、彼の出て来るのを待つていてくれたら、やすやすと、城外へ連れ出されたのであるが、何分にも、本丸の館たちを出る時から、もう城内は火となり接戦となつていたので、四人の幼児を、護つて出るだけでも、たいへんだつた。

乳のみ児の末の姫は、藤掛三河守がよろいの上に背負い、次女の初姫は、傳もりやく役の中島左近が背に負つた。そして万寿は同役の小川伝四郎がしかと背に結ゆいつけて立つたので、木下藤吉郎も、上の姫の茶ちやちや々に背をむけて、

「いざ、わたくしへ」

と、すすめたが、茶々はいやがつて、どうしても母のお市の方のそばを離れないのであった。

お市の方も、離しともないように、それを抱えて、うろうろしていた。藤吉郎は、ふたりをもぎ離して、

「お怪^{けが}我でもあつてはなりません。たのむぞと、それがしへ仰せあつた長政どのおことばにたいしても。……いぎ、わたくしの背へ、しつかりと」

やさしく宥^{いたわ}つてなどいられなかつた。彼のことは丁寧でも、彼の語気は怖かつた。お市の方は、茶々を抱いて、彼の背に託した。

「各、お支度はよいか。かならずこの木下のそばを離れぬようにして下さい。お市さま、お手を……」

藤吉郎は、背に茶々を負い、片手を出して、お市の方の手を引いて、まっ先にそこから走り出した。

お市の方も、転ばぬばかりに、つづいて出た。

けれど、藤吉郎に曳かれた手は、すぐ、無言のうちに、もぎ離していた。

そして、彼女は母らしく、あとやさきの子達に心をひかれながら、修羅^{しゆら}のなかを、半ば、

狂気したように急いでいた。

虎御前山とらごぜんやまの陣地から、北の上山田のほうまで本營をすすめて、信長は、一面おもてを焼くばかり近い小谷の落城の火を、じつと見まもっていた。

三面の山、谷間、みな赤い。

城は、巨大な熔鋳炉ようこうろのように、雄おたけびの沸たぎりをあげている。——その火花がやがて黒ずんで来て弱まる時、すべてのことは終るのかと思うと、信長は、

「……ばかなやつ」

と、妹の運命を、哭なかずにいられなかった。

比叡ひえい全山の伽藍がらん仏塔も、僧俗のおびただしい生命も、火中に見て、冷然たるものだった信長の眼に、いまは涙がある。

比叡の殺戮さつりくとは、くらべものにならない、たった一人の妹のために。

知性と本能と、ふたつを持つ人間には、だれにも矛盾むじゆんはある。

だが、信長とすれば、比叡の焼討ちには、大きな信念があった。あれだけの生命をころすには、あれ以上、無数な世の生命に、のちのちまでの幸福を誓いうるだけの信念を持っていたのである。要するに、大乘の精神をもつてしたので。

浅井長政にたいしては、なんらそういう大意義がなかった。長政が、小乗的な義理や感情で戦ったと同じように、信長の戦いも、小乗的にならざるを得なかった。長政さえ、小義をすてて、信長の大義を解してくれたらよかつたと、信長からはいえるのであろう。なぜならば、彼はおよそ長政にたいしては、最後まで、寛大と考慮の余裕を与えていたからである。

それも、程度がある。こよいはもう彼がゆるそうとしても、周囲の幕将たちがゆるさなかつた。甲州の信玄は死んだといつても、彼の諸将猛兵はなお健在である。しかも一子武田勝頼の俊英は、信玄以上という評さえある。

長嶋の門徒軍も決して、下火になつてゐるわけではない。ただ、信長の蹉跌さてつをうかがつてゐるものだ。——遠く越前をさえ一気に攻略しておきながら、こんな北近江きたおうみの一局部に、のめのめと長陣をすえているなど、実に、愚といわなければならぬ。

こういう諸將の論や諫言かんげんの出る軍議の席では、信長も、お市の方のことなどを、恋れんれ々と口には出せなかつた。

で、もつともよく、自分の愚かな一面も知つてゐる藤吉郎を、
(きょうかぎりの使いとして)

と、城内へさし向けたわけであったが、まだ明るい頃、吉報の合図があつたにかかわらず、黄昏^{たそが}れても、夜に入つても、それきり杳^{よう}として沙汰はなかつた。

「敵に計られたのだろう」

「殺害されたとみえる」

「この虚に、敵は何かきつと、策謀しているにちがいない」

寄手の諸将は、憤激した。また疑うのあまり、ひしひしと、城^{じょう} 壘^{ろう}へ迫つて、口合戦をし始めていたりした。およそ夕刻頃には、すでに一触即発の危機は醸^{かも}されていたのである。

——これまで。

と、信長も思いきつた。

そしてついに、総がかりの令を、発したのであつた。

だが、そう決したのちも、藤吉郎を犠牲にしたかと考えると、痛恨^{つうこん}にたえなかつた。

その痛恨は、併せて、お市の方のうえにかかった。——あれほど、出城の機会を与えてやったのにと、彼女の貞節を、彼の肉親的な感情では、どうしても称^{たた}えることができなかつた。

ところへ、黒おどしの具足をつけた一名の若者が、ひっ抱えている槍の穂さきが、ほとんど、信長の身に触れるくらい、向う見ずに駈けて来て、

「あッ。殿ッ」

と、急に立ちどまって、息を喘いだ。

「下におれッ」

「槍をうしろへ置かんかッ」

信長の周囲から睨めつけられて、若者は、べたッと大地に坐った。

「ただ今、主人藤吉郎が、ここへ参ります。おつつがなく、城中を出られて……」

「なに藤吉郎が、もどつて参つたと」

「はッ。はいッ」

「ひとりですか」

信長の訊ねようは急だった。

若者は、はじめて気がついたように、自分の口不足を、あわてて云い足した。

「城内から、お市の方様、また小さい和子様たち、お幾人も背にしばって、浅井家の傳

りびと
人三、四名の衆とごいっしよに……」

「えッ……」

信長は、身を揺すぶった。

「——相違ないか。見たのか、その方は」

「われわれどもの人数で、途中からお守り申しあげ、はや、焼け落ちる御城門を、慕まっしぐらに外まで駈け出しました。どなたも、いたくお疲れのていゆえ、安全なところで、しばしお水などさしあげておりまする」

「……ううむ、そうか」

「そのあいだ、寸刻たりとも、わが君におかれては、御痛念にちがいない、先へお触れ申しあげい——と、主人藤吉郎のいいつけによって、いそいで駈け参りました」

「そうか。ああ」

と、信長はなお口のうちでくりかえして——

「して、その方は、藤吉郎の家中で、なんとという者か」

「小姓こしょうがしら頭、堀尾茂助もすけにございまする」

「ゆき届いた使い、大儀であった。しばし休め」

「ありがとうございます、いまなお合戦のまつ最中、御用のすみました上は」

と、茂助はすぐあとへ取つて返し、遠い武者声のなかへ駈けこんで行つた。

「まったくの……天てん佑ゆうじゃ」

信長のわきで、誰か、ふとい息と一しよに呟つぶやいた。柴田勝家であつた。

丹羽にわ、蜂屋はちや、佐久間などの諸将も、

「はからずも、およろこびごと、御満足にござりましょう」

と、口々、祝福した。

そのなかに、一脈の感情も、ことばなくながれていた。藤吉郎の功をそねむものと、いちど信長に断念をすすめて、総攻撃の期を早めさせた人々だつた。

が、何しても、信長のよろこびは、蔽おほいようもない。彼の上機嫌はたちまち帷幕いばくを陽気にどよめかせた。如才ない柴田勝家は、賀を述べるに氣をとられて、誰もまだ氣のつかないうちに、

「その辺まで、お出迎えに参りましょう」

と、信長のゆるしを得、従者をつれて、駈け降りて行つた。——そこは石ころの多い沢の急きゆう坂はんにあたつている。

やがて、信長の待つ妹は、藤吉郎その他のものに護られて、坂の下から、彼の仮陣屋の

ある高地へのぼって来た。一小隊の兵が、前に立ち、松明をかざしてくる。

その後から、藤吉郎は、茶々を背負って、あえぎあえぎ歩いて来た。

信長は、何よりさきに、藤吉郎の額ひたいに光っている汗を、松明のあかりに見た。

次に、敵の老将の藤掛ふしかけ三河守みかわのかみと傳役もりやくの人々が、各の背に、和子をおぶって、上つて来た。

「……………」

信長は黙然、その子たちを、ひとりひとり眼に迎えていた。しかし何の感情も彼の面おもてにはまだうごき出さなかった。

——すこしとだえて、二十歩ほど間をおいてから、柴田勝家がのぼって来た。勝家の鎧よろいの肩に、白い手が懸かかっていた。お市の方の手であった。

彼女は、半ば喪そうしん、心こころしていた。

敵将の夫人とはいえ、主君のお妹なので、郎党の手をかりては非礼にあたる——と、勝家は敢えて周囲に断つて、彼女の腕かひなをわが肩にまわし、一步一步もいたわりながら、いちばん最後に登って来たのであった。

「御陣所です。……お市さま。御兄君は、もう眼のまえにおいで遊ばしますぞ」

勝家は、すぐ君前まであるいて来て、そつと彼女の腕かいなを、肩からはずした。意識かえが回ると、お市はそのまま嗚咽おえつしつづけた。

女性の泣きぬく声は、一瞬、戦陣の物音も奪つてしまった。あたりの諸将も、腸はらわたをかき撈むしられた。——が、信長のみは、どうしたのか急に苦にがりきっている。

あれほど愛して、実に、たつた今し方までも、案じぬいていた妹であるのに——と、諸将は、彼が狂喜して、お市どのを迎えてやらないのが、不審でならなかった。

(何が御気色ごきしきを損そこねたか?)

藤吉郎すら、ふと解げせなかつた。

信長の側臣が、つねに苦しむのは、主人のこうした気心の変り方である。その鋭感な顔いろを見ると、みな沈黙をまもり、沈黙の中に、ただはらはらばかりしているので、当人の信長も、容易にまた機嫌を直すことが出来かねてしまうのであった。

その機微きびを読んで、気むずかしく閉じられた信長の眉まゆをほぐす者は、侍臣のうちでもそう多勢はいなかつた。藤吉郎と、いまここにはいないが、お気に入りの明智光秀ぐらいなものだつた。

藤吉郎も、しばらく見ていたが、だれもこの場合を和なごめようとする者もないので、ず

いと、お市の方のそばへ寄つて、泣きあえぐ背へこう云つた。

「……さ、さ、御方^{おんかた}。お側へすすんで、過ぎこし方のおはなしやら、このたびのお礼をも仰せなされませ。ただ、欣し泣き^{うれ}にばかり暮れておいで遊ばさずと」

「……………」

「どう遊ばしたものです。御兄妹^{ごきょうだい}の御仲^{おんなか}ではありませぬか」

「……………」

——が。お市の方は、何としてもうごかなかつた。兄の信長に、顔をあげて見せなかつた。

明らかに、彼女はまだ、良人の長政を忘れかねていた。——長政を思うとき、信長は良人を滅ぼした敵将となり、身は、敵陣のなかに辱め^{はずかし}られている捕虜にひとしい心地がするのだった。

信長はひと眼見て、妹のところがすぐ分つた。そして、妹の安全に満足するとともに、兄の大愛を解さない愚痴な女ごころが、抑えようもない不満となつて、何か、面倒くさい気もちすらジリジリ起つて来たのである。

「藤吉郎」

「はいッ」

「抛ほうつておけ。要いらざることをいわんでもよい」

信長は、つと床しょうぎ几ぎを立つた。そして一方の陣幕を払って、

「……小谷も墜おちたな」

と、火の手をながめた。城を焼く火も、そのの喊かんせい声せいも、下火になって、峰や谷には、残月のひかり白く、夜の明けるのを待っていた。

ところへ、一手の将と部下が、勝からしき鬨しきをつつみながら駈け登って来た。そして信長のまえに、浅井長政以下の首を披露した。

お市の方は、身もだえして泣き声あげた。母にとりすがって、子たちも泣き出した。すると信長は大喝だいかつを発して、

「うるさいッ。幼い者たちを抱いて、あっちへ行け。勝家」

「はッ」

「そちにあずける。お市も、幼い者たちも。……はやく眼に見えぬところへ連れてゆけ」

彼は、なんの矛盾も感じることなく、そう大声でいって、そして次に藤吉郎を呼びたて、「浅井が城のあとは、そちに与える。あとの始末、施政、何かと心して守れよ」

彼は、落城を見とどけると、すぐにも岐阜へ帰るつもりらしい。

お市の方も、泣く泣く麓へ扶けられて行つた。やがて、この女性は、のちに勝家の室に嫁した。

もつと、ふしぎな将来を身にもつていたのは、その宿命の母とともに、戦火の山を降りた三人の幼い姫たちであつた。

すなわち長女の茶々は、のちに大坂城での淀君となり、初姫は京極高次の室となつた。そしていちばん末の姫は、二度嫁して、二度良人にわかれ、三度目に徳川二代将軍秀忠に嫁いで、家光を生み、東福門院を生む大幸にめぐり会つた。

母と妻

あくる年、天正二年の三月初めであつた。

寧子にうれしい便りが来た。いうまでもなく良人の藤吉郎からである。

折返し、母うえの御文、そもじの文、いつもくり返しくり返しよみもうし候

彼女や母から出した手紙にたいしての返辞とみえる。藤吉郎の手紙にはいつも妻や母を

よろこばそうとする意志があふれているが、こんどの便りは、わけても、文字どおりふたりを狂喜させることだった。

今^{いまはま}浜のふしん、まだあら壁も所々ながら、母うえにもおいそぎ、そもじにも久々にて会いたさ、待ちわびられ候えば、すぐ御したく、おうつりあるよう、そもじより母上へつたえ賜われかし、余^よの事、近々の御^{ぎよけん}見にゆずり、あらあら右まで

藤吉郎

これだけでは、何のことか想像もつきかねるが、この吉報が来るまでには、正月以来、幾たびか、良人と妻のあいだに、書簡の往復があつたものである。

——と、いうのは。

ここ久しく、藤吉郎は北^{きた}近^た江^{おうみ}の山間に陣して、転戦また転戦、やや小康を得た時でも、各地に奔命して、身に暇^{いとま}もなかつたが、こんど浅井、朝倉の平定を機として、信長は、

(そちの家族どもも、近江へ迎えてはどうか)

と、初めて、彼の領土に、その永住を認め、また家庭を移すことまですすめたのであつた。

小谷の攻略については、何といつても、彼の勲功は、冠絶していた。けれど、その功にたいして、これまではまだ一将校にすぎない藤吉郎へ、

(その城へ住め)

と云い、また、

(浅井の旧領のうち十八万石はそちに与えるであろう)

と、賞した信長の酬ゆるところも大きかった。

のみならず、信長は、

(以後、木下の姓をかえて、羽柴と名のれ。丹羽五郎左衛門の一字と、柴田修理勝家が

一字をとり、羽柴と申すがよい)

と、姓さえ与えた。

丹羽、柴田のふたりは、どっちも織田家の重臣中の首席だった。その人物も、信長や藤吉郎の観ている以上、世間では大きく評価している宿将である。

(ありがたい存じます。この後は羽柴筑前守秀吉と名のります)

彼にしても、不足のあるはずはない。筑前守に任ぜられたのも、この頃のことである。

一躍、大名の列に入り、所領二十二万石。——木下藤吉郎ではそれらしくない。そう

信長は思いやつて改姓させたものかも知れない。なにしても、秀吉の擡頭たいとうは、譜代ふだいの宿將しゆじやうとこの秋ときに肩を並べてしまった。

しかも彼は、小谷おたにの城に甘んじなかつた。

(この城は、保守的だ、退いて守るにはいいが、進出には不利な地である。なおなおこの上にも大志をいだく主君に仕えながら、かような所に、殻からをかぶつてはいられない)

彼は、三里ほど南の湖畔にある今いま浜はまこそ、わが住むところと眼をつけた。

岐阜ぎふのゆるしを乞うて、すぐ修築にとりかかり、白堊はくあの櫓やぐら、堅壁けんぺき鉄門てつもんは、もうこの春、でき上つていたのである。

(出来上つたら、すぐ今浜の地へ、家庭を移そう)

と、秀吉から疾とく便りしたので、彼の妻はもとより彼の母も、一日もはやくがよいと待ちわびて、幾たびか手紙で急せいでいたことが、ようやく、きようの返辞となつて、洲股すのまたの留守の家庭にとどいたのであつた。

洲股の城はそのまゑに、当然、信長へ返上してある。秀吉の母と妻の寧子ねねとは、廓内くわくうちの一邸やしきに住んでいたので、旅装もそう暇ひまどらなかつた。

数日ののち、今浜から蜂須賀はちすか彦右衛門の一行が着いた。迎えの役としてである。老母と

寧子ねねは塗駕籠ぬりかごに乗せられた。前後についてゆく将士の装いも平和である。百人にちかい行旅の列には、女人もあり童女もあり、沿道の畑からながめると実にきれいだつた。

「岐阜の御城下を通していただくことじや。そなたは秀吉の妻として、信長様にお目通りをねがい、日頃の御恩をよくお礼もうし上げねばなるまい」

前もつて、母からいわれていることである。寧子はそれがとても重任のこころがして、そのみが苦勞になつていた。——岐阜城へあがつて信長の前に出たら、身がふるえてなにもいえないのではなからうかと。

けれど。

その日が来て、母を旅舎にのこし、ひとり種々くさくさな土産みやげものを携たずえて、いざ、岐阜の殿中へあがつてみると、心がすわつたというものか、取り越し苦勞はわすれていた。

それに、初めて仰いだ主君が、想像のほかで、どんな話も気さくにするし、

「そもじも、筑前の長い留守をあずかり、老母への孝養やら、何かと、骨折りであつたらう。いや、それよりも、淋しみかつたであらう」

などと親しみぶかく云いかけられたので、彼女は、自分の家も、この君の端につながる一家族であつたことに気がついて、すっかり打ち解けた気もちになつた。

「めつそうもないおことば、ほかならぬ戦陣の留守、安穩あんのんで暮していられるさえ、朝夕もつたないこととぞんじておりますのに、さびしいなどと考へては、罰ばちがあたりましよう。ただお母かあ様には、はや御老年でございますから」

云いかけると、信長は笑い声にうち消して、

「いやいや、女ごころは女ごころ、包まいでもよい、さびしいのは当りまえじゃ。留守のさびしさを、慥しかと、噛みしめてこそ、持った良人のよいところも一ひとしお深く分るといふもの。誰やらの連歌れんがにも、下の句はわすれたが——

旅に出て妻ありがたし雪の宿

とやらあつたぞ。おそらく筑前も待ちわびておろう。それに今浜の城は新しい。戦陣の留守は長く辛かろうが、ふたたび家庭に会えば、また新妻新にいむこ聶の頃の思いを新たにすることができぬ。軍人いくさびとならでは味わい得ぬよろこびといえような」

「まあ、そのような……」

寧子は、襟もとまであか紅くして、両手をつかえていた。そぞろ、十六の年が、想い出されているにちがいない。——信長はそう見ながら微笑した。

食膳きしょうが饗あけされた。朱の杯も添えてある。信長からそれをうけて、ひと口、美しく飲んだ。

「寧子……」

笑いまじりに、信長はまた気がるにいう。

「はい」

何ごとかと、寧子はひとみをあげた。ようやく正視することが出来た頃おいである。すると信長がいきなり云った。

「ただ、りんき 愒気はすなよ」

「……はい」

何の気なく答えてしまったが、寧子はあとから、かあつと熱くなった。というのは、良人の秀吉がいつか、自分でない美しい女性をつれて、この岐阜城にあがったという噂をきき、ふと、ふだん口に出さないことを、誰やら側の者にもらした覚えがあつたからである。

「あれはな。筑前のことじゃ。——あれはちと、そのほうの行儀はよくないようだ。……

しかし、ちやわん 茶盃でも、あまり無疵むきずは風情ふぜいがない。たれにも一癖ひとくせはあるものよ。それも凡

物の大疵おおきずは困りものだが、藤吉郎ほどな男は、数ある男のうちでまず少ない器うつわだろう。

そもじはよくもあれを見つけたな。信長は平常から感じおつた。いったい、かような男を生涯の持ちものと選んだ女子おなごとはどんな女子であろうかと。——それをきょうここで出会

うて、なるほどと思うた。筑前も好いたはずなれとな。……よいか、愠気りんぎはすな、仲よく暮らせよ」

女性の心というものをこの殿はどうしてこうよくご存じなのだろうか。恐ろしい気もするし、また良人にとつても自分にとつても、頼もしい御主君ではあると、真実思われた。彼女は、うれしきや間まの悪さや、どうしていいか知れないような心地だった。

——ともあれ、こんなふうには、寧子の印象はよかったし、御前の首尾しゆびも上乗じょうじょうであった。

そして岐阜城を退さがる折には、とても身に持つてなど帰れないほど、莫大な賜わり物をもらった。

目録だけを先にいただいて、彼女は城下の旅舎へ帰った。そして待ちかねていた老母へいちばん多く語ったことは、

「信長様といえは、たれもみな震ふるい恐れるので、どんなお方やらと思つておりましたら、世にも尠ないほど優しい御主人でいらつしやいます。あんな優雅な殿が、馬上となれば、鬼おに神がみも恐れるようなお人になるのかと、思わず疑われました。お母様のことも、何かとごぞんじで、よい俵せがれをもち、日本一の幸せ者ぞと仰せ遊ばし、またわたくしへも、筑前ほ

どな男は、海内かいだい幾人もおるまい、よい良人を選び当て、そもじも眼が高いことよ——な
どとお戯れたわむも仰つしやいました」

と、いうようなことだった。

老母も眼をほそめて、

「そうか。そうかいの……」

と、さも欣うれしげに聞き入った。

およそ名将といわれるほどな人物は、麾下きかの将士の心服をうけているばかりでなく、個々の将士の家族たちからも、頼もしい親柱として慕われもし尊敬をうけていたようである。もつともそれくらいな景仰けいこうをあつめていなければ、それらの最愛な良人や、ふたりとな
い子を、自分の馬前で死を競わせることはできなかつたに違いない。それもただ華やかに
散るだけでなく、死ぬ者も、あとに残る者も、ともにそれを歎なげびとし、誇りとしたことを
見ても、将たる人の平素には、戦略や政治以外にも、なみならぬ心がけを要したであろう
と思いやられる。

民衆の杞憂きゆうを知らない、また世間や人間を知らない、いわゆるお大名とか殿様なるものは、まったく泰平の永きに狎なれた末期の子孫のことで、信長の時代、実力がすべてを決し

た戦国の世では、そんな特殊人の存在はゆるされなかった。義昭よしあきでも義景よしかげでも、また今川義元のごときでさえも、位置や名門に晏如あんじょとしていれば、たちまち時代の怒濤くつがえが覆して行つた。

だからこの時代に立つ一方の大將たる資格には、高い教養と位置と権力のほかに、庶民の実体がよく分つている者でなければならなかった。一面、文化人であるとともに、一面、野性人でもあることが必要だった。

旧態の頹廢たいはいを一掃するにも、生々と新たな建設へかかつてゆくにも、そう二つの機能が、絶対な力だった。純粹すぎる文化人でもいけないし、純然たる野性だけでも成就じょうじゆしないことだった。

信長はどうやらその資格に適合した大將であつたらしい。

とにかく、寧子ねねも秀吉の母も、それ以来は、一しひとお君恩をふかく感じて、夜も岐阜城のほうへ足を向けて寝ない——といったような心を真実にいだいて、それがまた母子のあいだでも、夫婦のあいだでも、自分が主人として家の子郎党をしつけるにも礼儀や情操の基本になつた。

甚だしい乱世にも、平和面の社会や家庭の内部までは、さまで乱脈にならずにいたのも、

個々の家庭や主従のうちに、そうした強固な情操と家風の美があったからであろう。

——さて、母子おやこの旅はつつがなく、不破ふわをこえて、春の湖を、やがて駕籠かごのまえに迎えた。

その日今浜の賑わいは、今浜が始まって以来のものであったという。いや、今浜という地名まで、秀吉が築いた新城とともに、長浜と改められた。町をあげての祝賀には、その意味もふくまれていた。

たの
楽しみここにあり

春あけぼの
の曙——。

湖水はほのかに、暁くれなの紅をうつつしてはいたが、まだ所々、かすみが深い、山は暗い。

「お目ざめ。——お目ざめですぞ。——お目ざめになりましたぞ」

まだ白壁も真新しい長浜の城内では、はやくも、この有明けありあを燈ともし灯びがうごき出している。

いま。

秀吉の寢室の次から、宿直とのいの部屋や小姓部屋へ、いちいち声をかけながら、大廊下を表まで触れて行ったのは、ゆうべ寝ずの番にあたっていた堀尾茂助もすけだった。

諸所の部屋部屋で、

「おはやいなあ」

「それッ」

と、起き出る気配がいちどにうごく。

虎之助も、起きていた。

七歳ななつの時、手をひかれて、初めて洲股すのまたの城へ母と共に頼ってゆき、小姓として仕えて

から九年、虎之助ももう十五になっていた。

ちか頃では、先輩の市松にも、なかなか負けてはいなかった。福島市松はすでに二十歳はたち

をこえていたが、今も、

「於市おいちどの。おいッ、於市どのッてば。——殿さまがもうお目ぎめだぞ」

と、年下の彼に起されていた。

市松は、むつくり身を起したが、春眠アカツキ暁ヲ覚エズ——といったように、渋そうな眼をこすりながら、

「まだ暗いではないか。雀みたいに、夜さえ明けると、よく躁ぐやつだ。あわてるな」
 「じゃあ、寝ていたらいかがですか。殿さまはもうお起きになって、きちんとしていらっしやるんだから」

「ほんとか」

いやおうなく、市松も衣服を着けて、

「どうして、今朝はこんなにお早いんだろう。見ろ、まだ有明けの月さえあるに」

「だつてきようは、すのまた洲股から御母堂さまや夫人おくがお着きになる日だろ」

「それにしたつて、長浜へお着きは、ひる午ごろというご予定ではないか」

「ご予定はそうでも、きつと、お心のうちで、待ち遠しくて、お寝やすみになれなかつたにちがいない」

「そんなことがあるものか。どんな戦場の中でも、御大將が寝なかつたことなどありはしない」

「それとこれとは、はなしが違うよ。於市どのなどは、親不孝だから、殿のお気もちなどは、分りっこない」

「こいつめ、また朝から生意気な」

睨みつけたが、この頃では、於虎にたいして、その睨みもあまり効きめがない。

秀吉は、風呂が好きだ。一面、無精ぶしょうで身のまわりをかまわなくせに、湯にはいることは好きである。

何かにつけ、一風呂浴びようという。戦場へ出ても、長陣の時などは、野原に坑あなを掘らせて、坑のなかに桐油紙とうゆしをしきつめ、それへ湯をいっぱい汲みこんで、浸ひたつたりした。

「この野天風呂の味はこたえられん。湯の中から青空を仰ぎ、飛ぶ鳥の腹を見ているのはいいものだ」

入浴ぎらいな者には、何がそんなにいいのか、気が知れなかった。思うに、彼の入浴好きは、お洒落しゃれや潔癖けつぺきからのものではなく、少年の頃、逆境と漂泊あかの垢あかにまみれて、ふた月も三月も、湯になど浴ゆみしなかつたことはままあつたので、その当時の慾望よぼうが、やがてあたり前に湯にも入れる身分になつてから、いつとなく満みされた上に「好き」というまでに習慣じゆんづけられて来たものではなかるうか。

今朝も起き出ると、もう風呂場だった。

ばしやばしやと、鶉うが浅瀬うで騒いでいるような音がする。好きなかわりに怖ろしく早湯

である。

「於福、おふく於福」

湯殿の中で呼びたてていた。

於福とは、例の茶わん屋の落ちぶれで、両三年前、湖畔の造船場で人夫をしていたのを、秀吉に救われて、以来、横山城の庭で、瀬戸物焼きなどしていた男である。

侍の仲間にはいつて、茶わんばかり焼いているのも能がなさすぎる。いちど戰場へ出て、拾い首でもして来いと、幾度か秀吉にいわれたが、

——戦争ばかりは。

と、ふるえ上がった。無理にも連れて行くとからかえば泣かんばかり謝るのである。

だから四十面しじゅうめんをさげながら小姓組おとらの於虎おとらや於市おとらなどからも、臆病者おびん臆病者と、のべつ擲や揶ゆされているふうなので、秀吉はつねに不愜ふびんに思い、庭から引き上げて、余りに接しないでよい湯殿番に召使つていたのであった。

「お呼びでしたか」

「於福か。着物、着物」

「いま、お剃かみそり刀ととのを調べておりますが」

「顔か……。いや、上がってから剃ろう。はやく衣服をよこせ」

「もうお上がりで」

於福はくるくる舞いして運んでゆく。生来が好人物のほうなのである。あわてて秀吉のうしろへ廻つて、背なかを拭き、足を拭き、爪先まで拭いて、杉戸をひらき、その傍らにうづくまる。

「やあ、明け放れたな。天気は快いぞ」

誰へいともなく秀吉は大声でいいながら外へ出た。

小姓の虎之助と市松のふたりが、彼の佩刀はかせをささげて、扉口とぐちのそとに畏まつていた。

「いま起きたのか」

「はッ。……ちと、寝坊いたしました」

「いや、けさは、わしが早かったのだ。髻ひげを剃そろう、市松、鏡を立てい」

「はい」

広い居間のすみに、鏡台をすえかけると、秀吉はみずから場所をさしずして、もつと明るい窓の下に置けという。

その書院窓には、旭あさひが紅あかく映さしていた。鏡をおくと鏡にもキラキラする。しかし彼は

眩まぶしさなどは意にもかけず、顔をしかめて、頬や顎あごを剃りはじめた。

彼は総体に毛深いほうであったが、顎などは、幾日おいても、鬚ひげが伸びなかった。——
 というよりは、まだ生え揃はわない感じである。精神的には急速に発達して来たが、肉体の
 発育は人なみより遅れている傾きがどうもあった。そのせいでもあろうか、時々彼は稚ち氣き
 を演じる。幾歳いくつになっても、どこかに、世のつねの大人らしくないところがある。

「さ、よいぞ。剃刀は下げてよい。こんどは髪だ、市松、うしろへ廻まわって、髪かみの根を締め
 てくれい、少々、鬚びんだらいの水をしめして」

「お笄こうがいを拝借いたします」

市松は、主人のうしろへ坐り、秀吉の脇差に挿してある金象嵌きんぞうがんの笄かみをかりた。

それを、鬚びんだらいの水にひたし、秀吉の髪を撫なであげてから、

「よろしゅうございますか」

「よし、よし」

「もすこし、お髪かみの根を、かたく締めましょうか」

「いや、そう固いと、眼めじりが吊つる。このくらいでいい」

「殿さま」

「なにか」

「きょうに限って、暗いうちにお目ざめ。そしていつにないおめかし。みな不審ふしんがってお
りまする」

「なにが不審。あたりまえではないか。日本一の恋人に会う日であるぞ」

「ははは。殿さまが、真顔をなすつて。あははは」

「市松、何を笑うか」

「でも。……いえ、そうお聞き遊ばしたなら、さだめし、夫人おくがたさまにも、およろこびなさ
いましょう」

「妻のことをいうたと思うているのか。寧子ねねは二番めじや」

「二番めという仰せは？」

「わしのいう第一の恋人とは、母者人ははじゃひとのことよ。わからんか」

「あ。左様でしたか」

「わしが窶やつれ顔などしていたら、苦労性な母者人はすぐ、せいでもよい思おもい遣やりを子にな
さろう。子の窶やつれを見て、そう思うたらもう、この新城の壮麗も結構も、女親の胸にはみ
な苦労のたねとなるのみで、ここに住もうて、心から楽しんで下さるまい」

「おそれ入りました、そういうお考えとも知らずに……」

市松は、両手をつけてから、秀吉のまへの鏡立を片よせて行った。けれど、その市松よりは、秀吉のかたわらに、佩刀はかせを持って、ちよこなんと坐っていた虎之助のほうで、いまの主人のことばを、じつと心から聞き入っていたふうであった。

ふと、秀吉は見て、

「於虎」

「はい」

「そちも会いたかろう。故郷ふるさとの母に」

「会いたくありません」

「なぜか」

「でも、私はまだ、殿さまのような手功てがらをたてておりませんから」

「ふん……ういことをいうやつ」

と、撫でてもやりたいように虎之助のすがたを見て、

「そうだ、この長浜の城下に、塚原小才治つかはらこさいじという兵学者がおると聞いておる。近日、塚

原の道場をたずねて、勉強に通え。精出して、修行しておけ」

と、いった。

虎之助は、欣うれしそうだった。そこへ近侍が、朝の茶を運んですすめた。秀吉は浴後の渴かつをおぼえていたらしく、すぐ飲みかけたが、何か、思い出したように、

「薄茶をくれい」

と、云いだした。

彼の家中にはまだ茶道衆さどうしゅうはいなかった。そういう閑人ひまじんは無用であると思ひこんで召し抱えずに来たものである。ところが小谷の城中で、あの戦時中、ふと、一茶室に坐つて、自分とよく似た猿の地紋のある釜などを眺め入ったときから、急に、これはいいものだ、大仰おおぎょうに感心しだしたらしい。そう感じるとまた遮二無二、熱くなるのが、彼の性情でもあつた。

「はッ……薄茶で。心得ました」

たれが点たてるのやら、その道の者はいないので、侍臣のうち、少々は茶筌ちやせんの持ち方ぐらい知つているのが、がちやがちやと掻きまわして来るにちがいない。

それでも、秀吉は、大満悦だいまんえつである。主君の信長などのすることは度々見ているので、茶わんを持つて、茶わんに礼をすることだけは知つている。

「ああ、うまい」

大まかに、彼は飲んで、掌てのうえの茶わんを、しばらく眺めていた。

「これは横山城の庭で、於福が焼いた茶ちやわん盃だな」

「左様でございます」

侍臣は答えた。

秀吉は、とつこうつ、茶盃の裏を返してみたり、また下に置いてその姿など見入りながら、

「……。何となく面白い。やはりあの男にはあの男の天分があるとみえる。於福を呼べ、於福を」

と、急に何か思いついたらしく、やがて湯殿番の於福が、恐る恐る前へ来て坐るとすぐ、「そちは今日から湯殿番はやめる。どうもそんな職分は、そちの天性でないらしい」と、いった。

於福は、小さな眼をみはって、秀吉の顔を仰いだ。

何か粗相そそでもして、役目を取りあげられたようにでも考えたらしい。気の弱い眼にすぐ涙をいっばい溜ためた。

「はて、おかしな男、何を悲しそうにするか。わしは叱言こごとをいったのではない。そちの天分をふと見つけたから、忘れぬうちに、そちに将来の行く途ゆみちを与えてやろうと考えたのだ。硯すずりを持って来い」

「はい」

小姓が立つて、すぐ前におくと、秀吉は懷紙をとりあげて、無造作に、さらさらと手紙をかけた。あやしげな当字あてじや仮名まじりで、書風も至つて稚拙ちせつであつた。

ついでに手文庫のうちから、なにがしかの金を取り出して、書簡とともに於福に与え、「これを持って、泉せんしゅう州しゅうの堺さかいへ行くがいい。かねは路用に。てがみは堺の千宗せん易そうえきと
いうものに宛ててあるから、その宗易に会つて、身のふりかたを計るがいい。そちの天分を生かすように考えてくれるだろう」

と、教えた。

「では、お暇いとまを下さいますので」

「そうだ。おまえのために」

「ぜひもごいません」

於福は、よろこばないのみか、手をつかえて、泣いている。天分天分としきりにいわれ

るけれど、彼自身、何のことか分らないのである。むしろ秀吉の温情から遠ざかることが、将来のことより、現実には悲しかった。

「ははは、わからんやつだ。立つ日はいつなど、気ままにせい。べつに急せきたてるのではないぞ。ただ忙せわしくなると、わしが忘れるから、にわかになつたまでだ……いや、うれし涙かしらぬが、涙など見せるな、きようはわしの歡びの日だ」

彼は風の子のようにぶいと庭へ出てしまった。朝陽あさひは土いちめんにごぼれている。すたと本丸の奥の丘へ上つてゆく。一ひとむら叢の林のなかに、古い神社がある。ほがらかな拍か手の音しわでがこだま響なる。

降りて来ながら、

「どうだ、きようの晴天は」

と、まるで自分が創作した天気のように、小姓や家来を顧みて誇った。

それから朝飯を食う。

箸はしをおくと、もうそこにいない。

武者溜だまりをのぞいて、若ざむらいたちへ、快活な声をかける。何か、冗談でもいったとみえる。若ざむらい達が旺さかんに笑う。

「おいおい、うまや厩うまやの者」

「はッ」

「馬はみんな元気か」

何十頭もいる馬までを、彼は家族のうちと心得ているらしい。厩方の侍は、両手をつかえて、その健在を答えた。

「きようは、どの馬に乗って、母者人のお迎えに出ようか。どれどれ。草履ぞうりを出せ」

厩方を案内にして、自身、乗馬をえらびに出かけた。

細長い厩舎きゆうしやには、悍気かんきのつよい軍馬がたくさん顔をそろえていた。これもみな戦陣の功労者である。秀吉の顔を見ると、わかるのか、怖るるのか、嘶いなないたり、蹄ひづめを鳴らしたり、躁さわがしいこと夥おびただしい。

「や? ……。なんだあの太鼓の音は」

秀吉は耳をたてた。馬が躁さわぐのもそのせいであろう。遠く城下町のほうで、太鼓や鉦かねの音がさか旺さかんに聞えはじめた。

「あの太鼓たいこ囃子ばやしはなにか?」

秀吉がいぶかると、厩衆うまやしゆうのひとりが答えた。

「城下の百姓町人たちが、きょうのお城入りを祝うとて、きのうから踊り囃子の稽古をしているのでございます」

「いつぞや見たあの踊りか。はてな、小谷から長浜へ移る折の、入城祭りはやったでないか」

「いえ。今日のは、御母堂さまと奥方さまの、お城入りをよろこんでござりまする」

「きょうのわしの歓び。それはわしの一私事としておるが、領民たちまで、そのように歓んでくれておるか」

「かたがた、旅路から着くおふた方の眼をおなぐさめ申さんと、道には砂をまき、戸ごとには花見幕やら軒飾りをして、それはそれは賑やかな由にございます」

「わしも、早く見たいな」

「まだお時刻までには」

「どうしてきょうは、こう午^{ひる}まえの日は長いのであろうか」

「暗いうちからお目ざめでしたものを」

「あ。そうか」

まだ母に会わないうちから、彼はそろそろ子どもツぼくなり始めている。母と妻の駕籠^{かご}

は、もう湖を見ているであろう、もうどの辺りへと、想像していた。

「——間もなく御城下はずれまでお見えでございます」

城門へ先触れの一騎が告げて来る。その頃、彼はもう城門内に駒を立て、家中の面々およそ二、三百人、徒歩もあり騎馬もあり、肅然と、隊伍を作つて待つていた。

城門が開いた。

正月のように塵一つない。幅のひろい道が城下町まで見とおしである。

貝の音につれて、燦々、肅々、秀吉につづく隊列は流れ出した。その日の秀吉の服装はいうもおろか、小姓、近習以下、列のすそに至るまで、さながら絵巻を繰るような美しさだった。

町中の往来には、犬の子も通つていない。金屏風や作り花の軒が両側に見え、家先には、家じゆうこそつて晴着をきて筵に平伏していた。そして秀吉のかてかした顔が行列のながれにつつまれて通ると、横町や裏辻のほうで太鼓ばやしと俗謡の節だけが聞えた。

てんてこてん……

おん大将のお装束には

金糸赤地きんしあかしのよろい召し

よろい召しよろい召しよろい召し

銀のかぶとの

赤糸あかしとしめさせ

朝日にかがやく

海山に海山に海山に

お馬の先の

のぼりのだしには

金のひょうたん

ぴかぴかぴかぴかぴかぴか

御馬のあしおと

たかく召されて

あつぱれ大将

おんたいししょう

御大将 御大将 御大将

いさみ進める

若武者ばらには

紫あやの母衣ほろかけて

母衣かけて母衣かけて母衣かけて

ご威勢たのもし

村々おさまり

五穀こくは成じょう就じゆ

大安心大安心大安心

平和の歌声はどよめいて、埃ほこりも瑞ずい氣きの虹に見えてくる。この俗謡は秀吉が小谷から居城を長浜にうつした時、領民がよろこびのあまりその入城の折に踊り狂ったもので、歌詞

はもとより俚翁りおうか文字のない市人の作で拙つたないが、領民の真情は、おのずからその張りあげる諸声もろこえのうちにもつている。

「この辺でお待ち申すのか」

秀吉は促うながされて駒を降りた。松並木の見通せる城下口の道の辺べである。そこに仮の休み茶屋が設けられていた。

「まだお見えなさらぬか」

彼はそこに憩いこいながら床几しょうぎに腰をすえているあいだも、いく度となく軒先へ出ては、並木道を眺めやっていた。

やがて午近ひるく——彼方かなたから一列の人馬や駕籠が見えて来た。陽は急に輝かしく、蝶の影のほか舞うものは塵もなかった。

「母上ははじやひとだな。母者人ははじやひとだな。……あの、前に参るお駕籠が」

伸びあがりつつ秀吉は待ちもうける。左右の家臣に何かいつている顔つきなど、まるで他愛よゆうすない容子ようすだった。でも慎んでいるのか、寧子のことはそう口に出さなかった。

「——大儀ようぎッ、大儀ようぎ」

彼が大声を発しながら足を前に踏み出したときは、行列は仮の茶屋のまえに停まり、先

驅の蜂須賀彦右衛門が駒を降りて、秀吉のほうへ一礼をしていた。

その彦右衛門以下、大勢の供の者に、秀吉は大声で、道中の労をねぎらったのである。そして自分はずぐ、二つの塗駕籠の側へすすみ、

「寧子、元氣か」

と、まず妻へよびかけ、彼女のニコとほほ笑む顔を、久しぶりに一目見ると、すぐ老母の駕籠わきへ寄つて、ひざまずいていた。

「藤吉郎でございます。お迎えに出ました。母上、すこしそこの茶屋でおやすみ遊ばしてはいかがですか」

老母もにこりと顔を見せた。やわらかい春の日は、この人の胸にこみあげている幸福感と感謝をあざやかに見せていた。それだけで秀吉はもういっばいな満足につつまれ、かつてのどんな楽しみも、この一瞬には及ばない気がした。人生の至上の楽しみは、今にあることを意識して胸に刻んでいた。

「秀吉どの、お手をおあげなさい。あなたはもう一国の主、あるじ路ばたの土に指をつかえることがありましようか」

むかしのように、膝へのせて、駕籠のうちへ抱え入れたいほどな母性の愛をその眸ひとみにあ

ふれるほど湛たえながら、老母はかえつて、こう躡ためるようにいった。そして、

「旅の道も、一里来ては休み、二里来ては憩いい、彦右衛門やその他の衆が、よういたわつてくれました程に、なんのつかれもおぼえてはおらぬ。すこしも早くそなたの新しい住居が見たい」

との希望だったので、秀吉は駒を招いて、馬上に身をうつし、老母の先駆をして、長浜の城へ導いた。

そのとき、城下町全体は、祭りのような賑わいに沸いていた。およそ貧しきも富めるも、老いたるも若いものも、城主の歓びを自分の歓びとし、秀吉の孝養を自分たちの親孝行のよう

に、「御母堂さまのお目にとまるのじや。お母堂さまのおなぐさみじや」

とばかり、辻々に花車だ屋台を押し出し、濠ほばたには踊りの輪を幾つも作つて、城門がそこに見えながら、城門のうちに入るまでには、半刻はんもかかったほどであった。

母と妻ともを伴つて、北曲輪きたの一廓かくに新たに造つた住居を秀吉は見せてあるいた。そこはうしろに伊吹連峰をのぞみ、前に大湖の春と四明ヶ嶽を見はらし、庭園の泉石せんには花木せきを配し、どこと一点のいうところもない殿造りだった。

けれど、老母は、ふとさびしげに、秀吉を顧みて云った。

「畑がないのう。……この御本丸には、わしが菜や豆など作る畑地がないの」

秀吉は母の顔を見ているきりで領うなずきもしなかった。領けば眼のなかの涙がこぼれ落ちそうだったからである。

また寧ね子ねは。

同じ本丸ながら遠いむこうの一廓に、べつな女性の住むらしい一屋根がなおあることを後に気づいていた。そして岐阜城へ立ち寄ったとき、主君信長がそれとなく云ったことばを思い出して、みずから深く戒いましめていた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（四）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年6月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第22刷発行

初出：「読売新聞」

1939（昭和14）年1月～1945（昭和20）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第四分冊

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>